

中央公論社

春城代醉錄

市島春城著



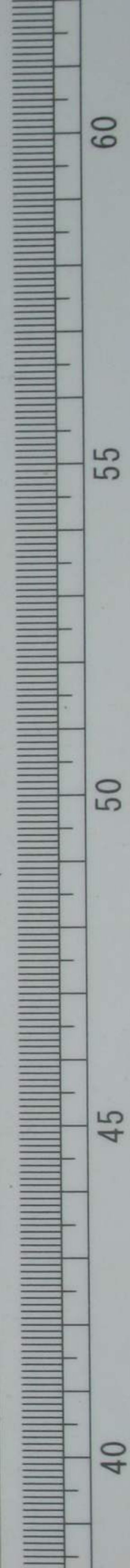
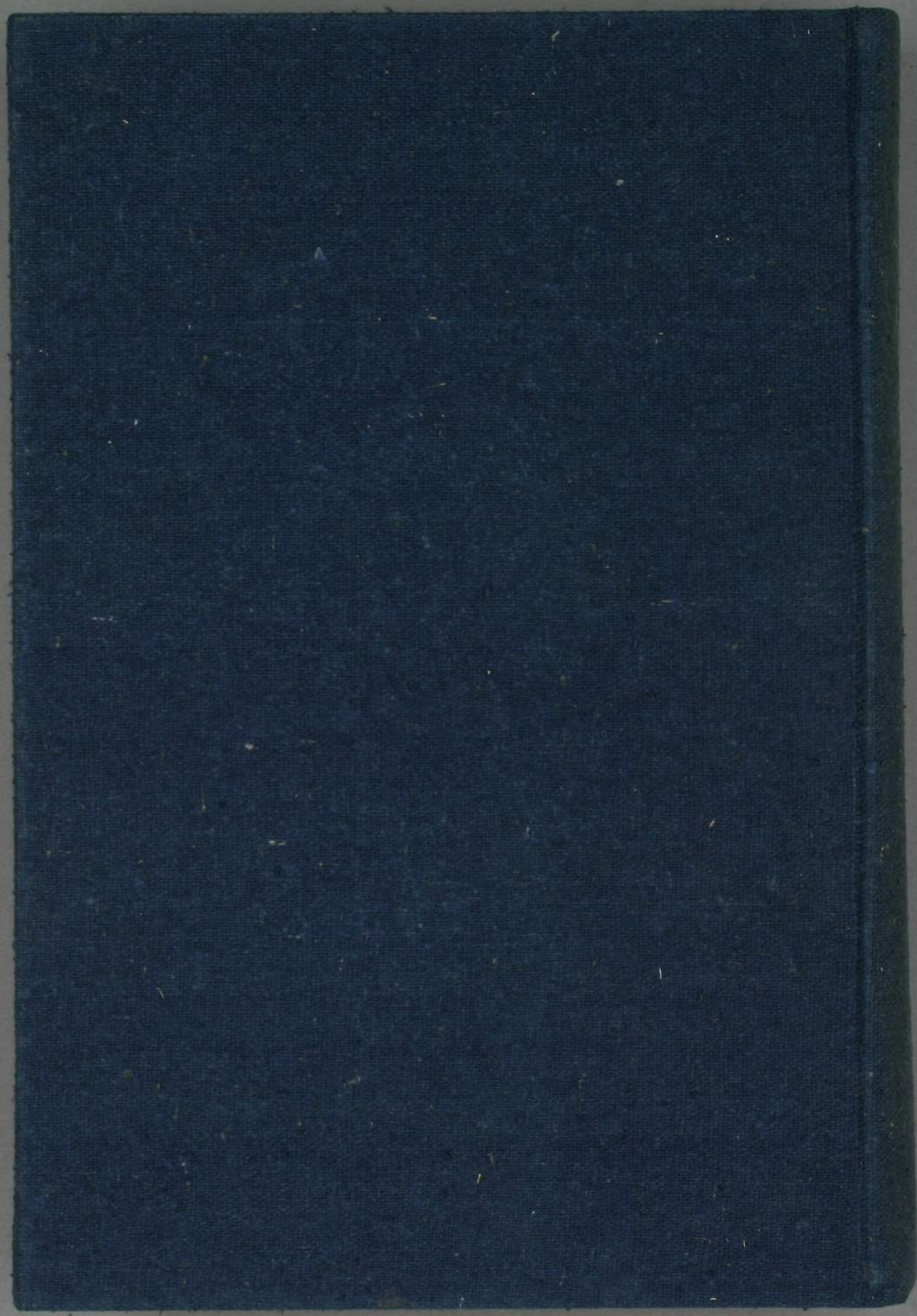
春城代醉錄

市島春城著

社論公央中

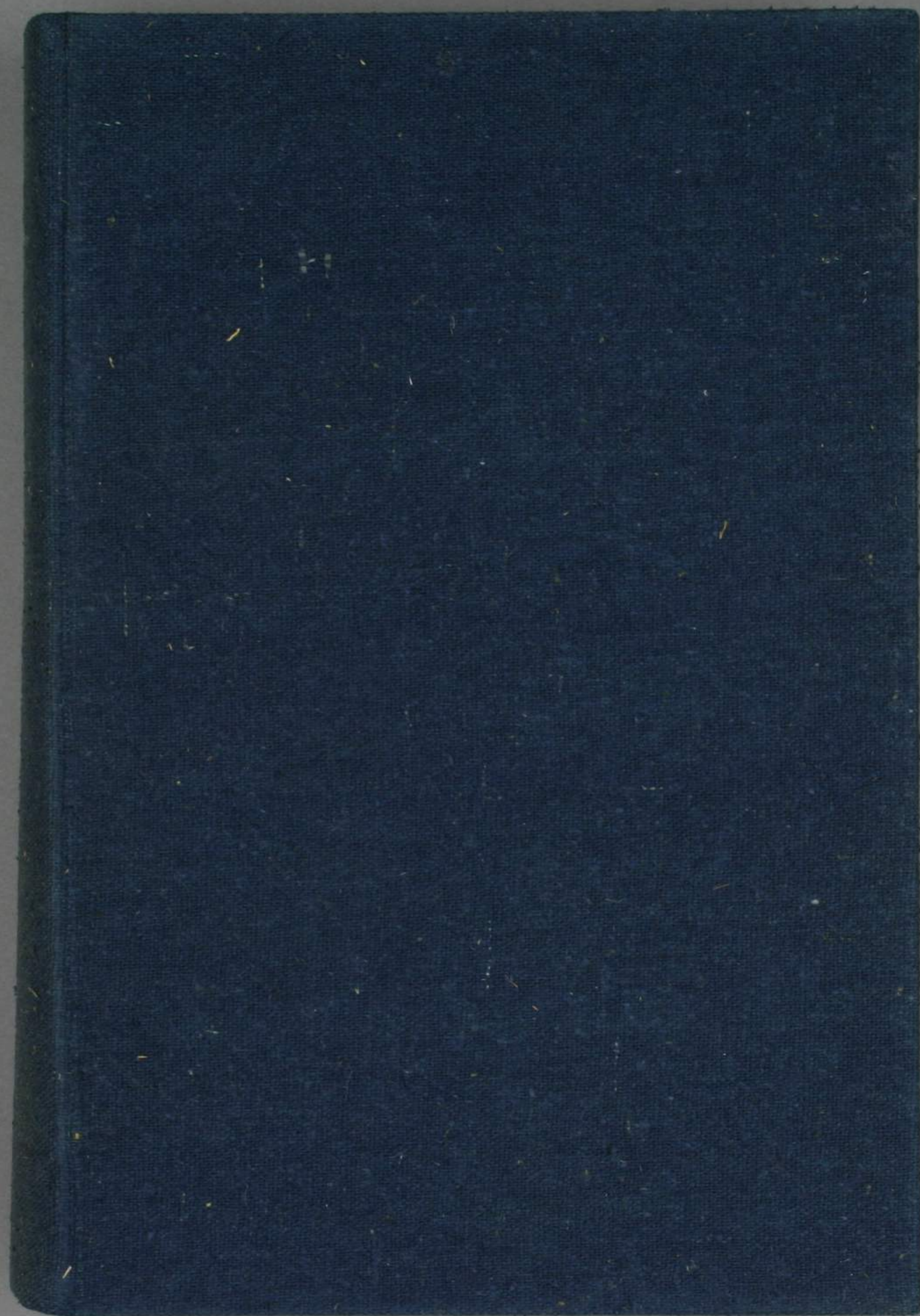


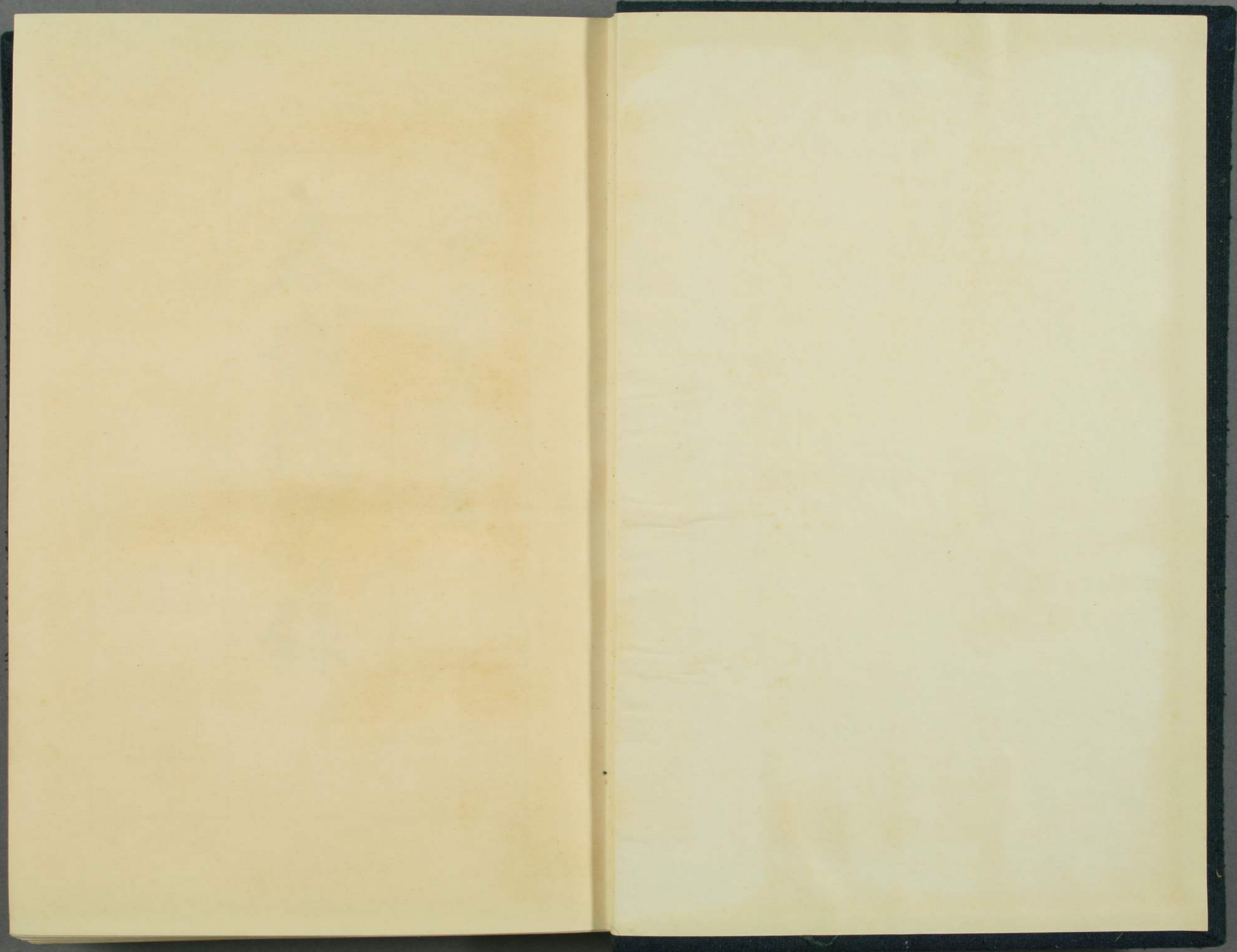
¥ 1.80



春城代醉錄

市島春城著

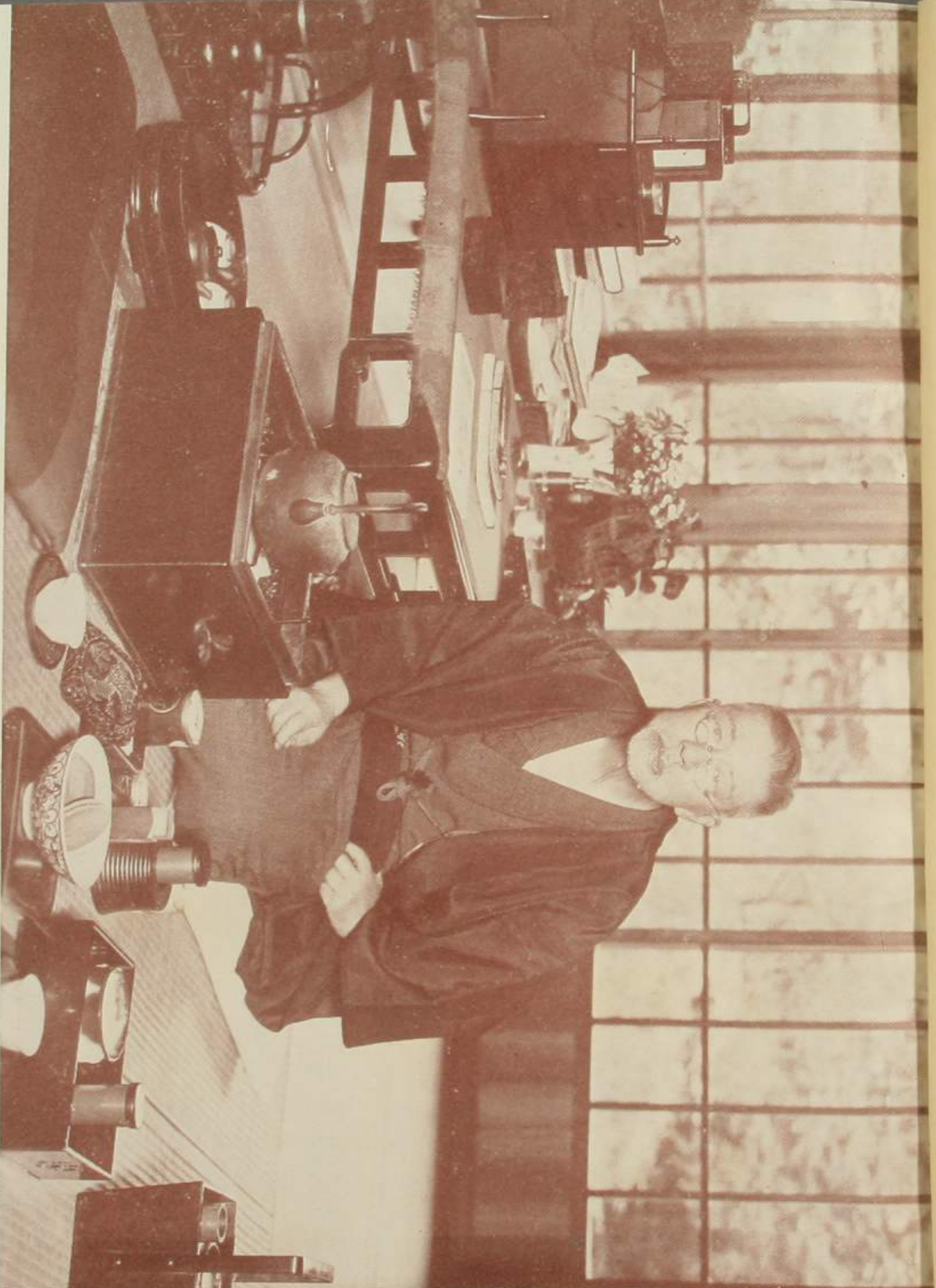




市島春城著

春城代醉錄





書齋に於ける著者の最近影

[Blank page with faint horizontal lines, likely a separator or endpaper.]

はしがき

私は一と頃、毎年一冊の隨筆を刊行するを例としたが、近年それを廢めた。思へらく、想淺く文拙く、世に問ふの價值がないと。然るに私の誕辰に同人の會合する春城會といふ小團がある。本年の誕辰二月の會に、同人から私に隨筆を書けと云ふ提議があつた。私はこれに就て一考した、多分私が老境に入り、多く俗事を辭したので、閑散に乘じ酒盃に親しむ機會が多くなり、或は爲めに健康を害しはせぬかとの老婆心より、仕事を作れと云ふ謎であらうと推量し、敢て辭することもなく即座に諾

したが、數月空しく過ぎて、漸く夏期に入り、徐々稿を起し、或は舊稿を検出して、編纂に約二ヶ月を費し、可なり困んだが、三伏の炎暑と闘ひつゝ、敢て轉地避暑の事もなく、酒杯に親しむ多くの暇もなくして、兎に角盛夏を過し得たのは、全く同人諸君の賜と謂はねばならぬ。書名を代醉録としたのも此間の消息を寓したに過ぎない。尙本書の發行に就ては中央公論の島中社長の好意を多とし、校正其他の事務には、同人中坂口獻吉、大石理圓氏を煩したことが少くない。爰に謝意を表すと云ふ。

昭和八年十一月

春城しるす

春城代醉録目次

はしがき	
閑耳目	
老境	一
外人に日本の女性を語る	四
農村隨筆	一二
橋の種々相	一九
石を語る	四一
諸侯の本艸道樂	四八

蟲と詩	五二
倭文の妙	五七
畫家の下職	六一
詩人の足跡	六九
逸事の流用	七二
たばこ	七五
させる	八三
逍遙翁に聽く案山子	八六
笑	八九
杖道樂	九二
漫談手拭と火燧	九六

墨江回顧

一〇一

書齋雜興

讀書萬能

一〇七

進獻本と獻題

一一四

徳川氏の藏書は如何に取扱はれたか

一二二

前田松雲公の集書事蹟

一三二

古本屋

一四三

モールス先生の「日本その日く」を読む

一四七

「異國叢書」に就て

一六七

本艸の素人觀

一七九

寫經と平曲	一八六
圖解現代百科辭典	一八九
女百話の序	一九三
藏書印の考察	一九五
書物の書入れ	二〇四
更に書畫の冒瀆	二〇七
柳亭種彦の手紙	二一〇
インテキ陳列	二一八
羣像片影	二二三
板垣伯	二二三

星亨氏	二三〇
犬養木堂	二三七
澁澤子	二四五
野口英世博士	二五一
中野武營氏	二五七
古河市兵衛翁	二六四
安田善次郎翁	二六七
津田仙氏	二七四
田口卯吉氏	二八六
佐久間貞一氏	二九一
朝吹英二氏	二九五

岩崎彌太郎氏	三一〇
吉川泰次郎氏	三二〇
久保扶桑氏	三二五
坪内逍遙翁	三三〇
頼氏山陽の遺事	三四九
山陽翁に就て	三六五
鶏肋百談	
日本は至幸の國	三七七
漢文教育の廢類	三八二
五十公野村の杉並木	三九〇
西園寺公と東條琴臺	三九二

關東州の地境	三三三
米國の禁酒解除	三三三
和田垣謙三の俳號	三四四
雲華の妾	三四四
將軍の御座船	三五五
青山無去時	三五七
醫學博士の賭事	三六七
池永道雲	三八八
日本のウアン・ダイク	三九九
食物の國際化	四〇〇
西郷の犬	四二二
納札狂	四三三
尺八	
旅の思ひ出	三九四
白石の俳句	四〇六
名僧の川柳	四〇七
睡菜	四〇八
星秋水	四一一
私の家の回漕業	四二三
妙な乞食	四二五
總選舉句評	四二六
内閣句評	四二八
讀書感興	四二九
假名新聞二種	四三三

大徳寺の焼香場	四三	舊惡全書	四六
八犬傳の漢文譯	四五	合理の怪談	四七
渡邊華山の借用證書	四六	匂ひ	四九
高村光雲翁と語る	四七	弄痛	四一
中林梧竹感心す	四九	家の鴨	四三
池田有親のアラスカ紀行	四九	狸の擧丸	四五
アラビヤ横斷	四〇	茶	四六
刀畔の印刻	四二	酒	四五〇
松平冠山侯の観音千寺巡禮記	四三	富士山の見える國に美人なし	四五六
指頭畫	四三	不具の三文人	四五七
雲華の書幅	四四	今	四五六
萬物一馬	四五	一閃のスパーク	四五九

那翁の母	四〇	茗荷の冤	四七二
母と姉	四六	蟹の冤	四七二
女の節操	四三	舍利の正體	四七三
梵鐘の聲	四三	樂屋に於ける團十郎	四七四
風景と人物	四四	廁の兩文人	四七五
萬年筆嫌ひ	四四	支那の犬	四七五
墨	四五	大量出版に對する戰慄	四七六
一茶の句漫涉	四六	麴包屋の演説	四七七
俳句川柳漫涉	四六	北澤樂天氏の漫畫	四七九
人を動かす和歌	四九	酒屋の招牌	四八〇
醫は稻荷	四七〇	染物屋の好色	四八一
芋掘坊主	四七一	香魚	四八二

坊録數則	四三	舉丸笑話	四九六
信書の祕密	四八五	糸の平内	四九六
賣笑の媚術	四八六	嵐雪梅	四九七
尖先生	四八七	座敷八景	四九八
東西相觸れて	四八八	露國人のゾボラ	四九八
銀座の柳	四八八	これでも自由國か	四九九
黙想	四九〇	英國の保守氣質	五〇一
杉田梅里と自由	四九〇	武士道の國	五〇二
夫婦共稼ぎ	四九二	かけ言葉	五〇二
世之助と孰れ	四九二	珊瑚	五〇三
野合	四九三	加賀友禪	五〇三
浪華市井の惡風習	四九五	字眼	五〇四

貧窮組	五〇五	ペルダン	五〇六
女子と柔術	五〇五		

附録

吹塵録

郷巽の沿革	五一一
新潟學校時代	五二二
郷國に於ける政争時代 附 記者時代	五五五
跋	

春城代醉録

市島春城著

閑耳目目

老境

老後何が楽しいかと問ふ人がある。自分はいつも何も楽しくないと即答する。實は問が餘りに茫漠としてゐて、答に困しむから無雜作に勿ねつけるのであるが、まさか生きてゐるからには、何も楽しくないとは云はれぬ筈だ。自分はそこで時々自問自答をやつて見るが、世の中のことも餘り分り過ぎると實は興味が無い。分つたやうで分らない、若い時の方が却て面白い。随分いろ／＼のことをやつて見た自分と云へば、さも多くの經驗をもつてゐるやうだが、實は喰ひ散して、何一つ特に言ひ立てをするほどの纏つたことは無い。しかしそれにしてもいろいろのこの凡その趣を知つてゐる自分としては、これから何をやつて見ようと云ふ意も動かな

い。實は老境の悲しさ、日暮れて道遠く、何をやらうと考へても所詮目的の達し難いことが知れ切つてゐるからでもある。斯様な譯だから老後樂みは無いと云ふ方が本當かも知れない。併し自分は案外頑健であり、視聽も確かであり、腸胃も割合に強い。日々相當の閑もあるが性來何もせず徒らに時を移すことが出来ない。何かヒマ潰しを工夫せねば毎日を暮し兼ねる。時事を憤慨したり世に不平を抱くのも一つの仕事であるけれども、そんな不愉快なことに觸れたくない。全く無主義無方針に氣の向くに任せて散歩をしたり、酒を飲んだり、本を読んだり、無駄書きをしたりしてゐる。それが楽しいかと聞かれれば、楽しいとも云ひ兼ねる。斯くせねば一日が暮せないからと云ふのが正直話である。本を集めたり、書畫を購つたり、骨董を求めたりすることなどは皆既往にやつたことで、今も兎もすると繰返すこともあるが、これとても日常の樂事と考へてゐるのではない。今まで讀まなかつた書物に就て何事か得る所があつたり、宿疑を抱いたことが氷解したりする程度の喜びと、骨董、書畫、圖書を獲た喜びも、これと似たやうなものである。何と云うても老境はさびしいものである。そのさびしさに打勝たんとする時には、知らず識らず若かりし時のことが胸臆に出没する。それは多く昨非今是で、無鐵砲

の事や無責任の事ややり損ひやらが續々出て來て、慙汗に堪へないことが多いけれども、若い時の氣分は、今考へて見ると興味が無いでもない。今の衰老の境遇から見ると、實に天壤雷ならざる相違があつて、どうして若い時はあんなに元氣が満ち、失敗しても氣にも留めないで済ましたものかと怪しむ位である。無鐵砲なことをして危道を踏んだことなどを思ふとヒヤ／＼する。青春は冀望が充ち満ちて前途洋々たるものがある。幾度蹉跎しても失望は無い。嗚呼青春、これだけは一たび去つて又來ない。いくら富んでゐてもこれを購ふことは出來ぬ。吾れの過した青春は吾れの羨むものである。青春の氣分、どうしてあんな時れ／＼とした愉快のものであるのか、何物を以ても比較することが出来ない。青春の追懷ほど愉快なものはない。ある時はこんな風にも考へた。草木は毎年青春期がある。人は何故に青春一たび去つて歸らないのだか。アナトール・フランスの口眞似をするでもないが、自然は人間に青春の興へ方が早過ぎはせないか。人間の青春の間は割合に短くて、あとは青春なくして日を送らねばならぬとは情けないことである。毎年草木の如く、何故青春を繰り返さないものであらうか。青春は人生の最高極致であるから、最後に來るのが本當であるかに思ふ。蟲にしても幼蟲や繭の時代を経て初

めて麗しい時代に入るではないか。人間も發達の最高最終の時が青春時代であらねばならぬ。何故に早く青春を人間のみに與へて、殘年を落寞に送らせるのであらうか。人間の最高發達の時が即ち死前である。嗚呼吾れは草木の青春に感なきを得ない。吾れも亦青春の境地に身心を置き、若返つて鋭を草木と争はん歟。

外人に日本の女性を語る

日本ほど立派な女性史をもつてゐる國は世界何れにもないのに、それが深い雲霧に鎖されて一向に發揮されない。曾てある外人に日本の女性を語れと言はれた時に、これほど答に苦しむものはないと感じた。外人は多く日本に誤解を抱いてゐるが、日本の女性に對しては最も多く誤解を有してゐる。彼等は、日本の女性と言へば、直ちに藝者のことを言ひ出して、さも藝者が日本女性の代表でもあるかの如く考へてゐる。

外人は一概に思へらく、日本の女性は久しく男子の壓迫を受け、屈辱其性をなし、無學、無

藝、無氣力で、ただこれ産兒の機械に過ぎないと。今日こそ婦女子が頭を擡げ出したから、いくらか實相が知れて來たやうだが、外人に本當のことのわかるまでには、まだ少からぬ年月を要する。

二三年前人見嬢が陸上競技で世界を壓倒したのを見て外人は驚異の目を見張つたが、兎もすると、それは偶發のことの如くに思はれてゐる。實は外人をのみ咎め立てする譯には行かぬ。日本人ですら日本の女性美をよく知つてゐぬといふのは、日本の女性は久しい間ネガティブの教育を受け、内を治めることがその任務とされ、表に現はれないことになつてゐる。どんな良妻賢母でも、内に潛んでゐては評のしやうがない。又潛んで出しゃばらず、己が長所などを外に現はさないことを以て高い婦徳とされてゐた。

長い間の釋教や儒教や武士教育などが、陶冶に陶冶を重ねて、一種固有の徳性を涵養したが、これが頗る複雑で、一寸説明に困るが、大體日本の女性の性格は西洋のと異つて、陽性でなく陰性であつた。ポジティブでなくてネガティブであつたから、一向に目立たない。日本の女性ほど損の立場に居たものはないのである。

しかし、隠れて當然の任務を盡すものは實に貴いものである。打算的でない所に神の如き尊さがある。日本婦人の如く、嫁した家を、己が生家より、より以上に大切にするものが何處にあるか。良人に對して清節を守り、舅姑に事へて従順であるものが何處にあるか。兒女を撫育するに全力を注ぐ極端の母性愛が何處にあるか。武家時代には良人を勵ますために自害した妻は少からずあつた。良人の變節を怨み一家の恥辱を慨して自殺した烈女も矢鱈にあつた。そして事に殉ずる婦人は名聞のためにするのでないから、家の名譽のためその事の現はるるを欲しなかつた。随つて書置一通でも傳はらないが、しかし、奥床しい貴い精神がそこにあるのだ。

以上のごときことは、日本の家庭組織や封建制度を知らない外人にいくら説いても到底解り兼ねた。私は外人の問に答へて日本婦人ほど勤勞に堪へるものはないと言つた。農村に稼ぐ男女の勞働ほど勤勉のものはないが、女子は勤勞に於て決して男子に譲らない。そしてある勞働には男子よりも女子の方が大なる役立ちをなしてゐる。其例としては海中に身を投じて魚介や海藻を捕獲することが女子に限られた作業であることを言つた。婦人と宗教に就ての問に對しては、中將姫を擧げた。あの純眞の妙齡の婦人は、風波の多い貴族の家に生長して、生さぬ母

に虐げられたが、それにも拘らず、佛の化身とまで言はるるほど美德を顯はした。この事蹟は支那にまで聞えて、繪巻物にその一代記が圖され、それにはこんなことが書かれてゐる。このやうな貴い婦人が支那に生れず、海を越えた向う岸に生れたことは實に羨ましいと、極度の讚辭を呈してゐる。耶蘇教の盛んであつたその昔——日本の女流が如何に殉教に壯烈であつたかを、いろ／＼の事實で語つたが、この點だけは外人も聊か心得てゐて直ちに首肯した。

更に文藝に就ては、昔の宮廷には優れた女流文藝家の多くゐたことを擧げた。これ等の女流はみな詩人で、咄嗟に和歌の應酬が出來、これ等作家の書いた、七八百年前の文藝書が不思議に多く存在してゐることを語つた。當時宮廷の書記は女流が司り、天子の仰せを蒙り、いはゆる女房消息を書いたものはこれ等の女流であることも言つた。殊に紫式部の「源氏物語」は大部の纏つた小説であるが、あれほどのものが同時代の世界の何處にあるかと誇つた。他の藝術方面では、女優が舞臺に上つたのは恐らく日本が始めであらうと言つた。それは足利氏の末にお國が初めて歌舞伎を演じたのが日本の演劇の始めであるが、世界の演劇史に於ても女優の舞臺に上つた嚆矢であらうと説いた。

果して私の説いたことが外人に理解されたか、實は甚だ覺束ない。一體東洋の女性は西洋のそれと全く異なる習俗に養はれたものだが、其内にも日本女性ほど複雑な薰化を受けてゐるものは無い。極めて其の大略を語るとしても實は容易でない。元來日本には固有の祖先教があつて、祖先を崇拜し、其の血統を貴び、家の名譽を何よりも重しとする風教がある。それに加へて儒教が入つてくる、佛教が入つてくる、それが祖先教と投合して一種複雑の風教をなしてゐるが、儒教は何を教へたかと云ふと、さまざまあるけれども、大體はネガティブの教育である。殊に女子婚嫁の後七去を説いたのも儒教の薰陶である。婦が貞節を破つたり、舅姑に孝を盡さなかつたりすると、皆離婚の理由とされてゐるが、甚しきは子なきものは去るとして、それも七去の一になつてゐる。一家和合の爲の「夫唱婦隨」を教へたのも儒教である。女子の經典「女大學」は、要するに儒教を女子に應用したものに過ぎぬ。

佛教は女子をどう見て居るか云ふと、女人を罪あるものとし、邪淫のものとし、不淨のものとし、三界に家無きものとしてゐる。斯く見るから寺域内に女子を入れなかつたこともある。高野山など、長く女人禁制であつたことは周知の事實である。女子は斯の如くして儒教にも佛

教にも壓迫されたごとくであるが、決してさうではなく、儒佛共に女人の惡徳を矯めることに共に效があつた。溫良恭儉、貞淑優雅の日本婦人の美德は斯うして養はれたのである。日本には、決して他の東洋諸國のやうに女子の自由を奪つたり、奴隸の如く驅使したりするとき風習はない。外人は一概に日本婦人は卑屈であるかに思ふけれども、それは他の東洋諸國のことであつて、日本の女性にはそれは無い。日本の女性は、剛健なる男子に反して、どこまでも女性らしい溫柔氣質に教訓されてゐる。較々委しく云へば、身體のたしなみが教へられ、羞恥が教へられ、謙讓從順が教へられ、優雅の振舞や、物の哀れを知ることが教へられてゐる。勿論嫉妬やおてんばは戒められ、どこまでも良妻賢母たらしめんとしたのが昔しの女子教育で、それが九十パーセント位は成功してゐる。しかるに戰國時代となると、或る階級には封建的武士教育が加はり、柔和たるべき女子は一面に犠牲的精神があらねばならぬとされ、良人を勵ますために自殺したり、主君を救ふために己が子を殺したり、どんなつらいことがあつても武士の配偶たる體面上堪へ忍ばねばならぬことが教へられた。即ち複雑の薰陶の上に更に一層の複雑を來したが、これが決して女性の品性を害せず、確かに一層美性を陶冶することになつた。日

本女性の、他の東洋諸邦の女性と異つて、卑屈に陥らないのは、一は此の封建的武士教育に據ると云はねばなるまい。武士は或る特殊階級であるが、士風は一般に及んだから、一般女子も同じ感化を受けたことは云ふまでもない。斯の如くして日本の女性は世界に稀れなる秀逸の婦徳を有するに至つた。

外國人が兎もすると日本女性が喜怒哀樂を露骨にあらはさぬのを不審に思ふのも無理はないが、實は以上の如き複雑の教養が然らしむるのである。西洋人は、至親と別るゝ場合は、停車場のブラットフォームで稠人の中でも互ひに相擁して接吻をやる。然るに同じ場合に日本人の冷淡に見えるのは何故かといふかるが、日本の女性とても哀別離苦の人情に變りはない。唯だ露骨でないだけのことだ。所謂泣かぬ螢が身を焦すと俗語にあるごとく、堪へ難い情を抑へる所に非常のつらみがある。全體日本女性は喜怒哀樂の情を露骨に現はすことを失體とされてゐる。殊に他人の面前に斯くすることを忌む。武士道に於て最も然りとする。忍は儒佛兩教から大切な倫理として訓へられてゐるが、武士道の教に於て更に一層強められてゐる。日本婦人殊に上流社會の婦人の面貌にエキスプレションを缺くのも此故である。進退舉止が、如何なる

感情激發の場合でも莊重婉雅を要し、情に激して舉措を亂すことが、女性の禮法に於て最も非とされるのも同根源から來たもので、「忍」の一字は一舉手一投足にも忘る可からざることとなつてゐる。随つて日本女性の舉措進退を見て遽かに其心情を忖度し難いことがある。兎角婉雅を要する女性には露骨の舉措は禁物で、日本女性の態度言説に餘韻があり、その態度が控へ目で、物を云うても總べてを説かず、多くは人の推測に任すが、そこに言ひ難い妙味がある。

要するに日本の女性は智徳共に優れて居る。唯だ久しい間常に鎖されて外部に立たなかつたから、種々の點に發育が抑制を受けたに相違ないが、今日の如く解放されて見れば、日本女性は外國女性に對して、何の點でも譲ることがないのみならず、外國の女性に全然缺けてゐる幾多の貴むべき特質を有してゐる。兎角我邦の短所として兩性とも自國を卑下し、外國の事とし言へば何でも摸倣する癖があるが、米國あたりでは、既に婦人の我儘や惡徳を持て餘してゐる今日、我傳統の女性美を閑却して彼れに趨るなどは沙汰の限りである。偶々外人に我女性を語り、聊か感ずる所を書きつく。

農村隨筆

神 僊 郷

鶏犬と牛馬は田園風景の大切なファクトルで、これを缺いては田園の風景は無い。田園をして神代ながらの風景あらしむるのは、鶏犬牛馬があるからの事だ。此等が無ければ田園は如何に寂寞であらうか。旅をして際限もない曠野を過ぎ、漸く人里に近づき、先づ聞くものは鶏犬の聲である。鶏犬の聲は村あることを知らせるサインである。村人が家族と隣人の外に親しむものは鶏犬と牛馬である。田園の家族は人間のみと思ふ母れ。鶏犬牛馬も家族である。鶏は晨を報ずる役をつとめる計りでなく、豆腐屋へ三里の不自由境に美なる食物を供するものは鶏である。犬は夜を守るのみでなく、日中家を擧げて田圃に稼ぐ、その留守を守るものは犬である。時には小兒の遊び仲間となり、時には家族に追隨して、どこまでも歩き、又時には車の前頭に綱を曳いて人力を助けることもある。牛馬に至つては、人と共に田畝に稼ぎ、或は山に薪

を採る時、或は草を刈る時、いつも其の收穫の運搬を司る。或は村童に背を假して笛を吹かしたり、或は足弱の老婦を助け乗せたりもする。彼等が農家の日々の大切な同伴であることは或は人間以上である。だから農家の此等を愛することも家族と擇ぶ所がなく、毎日の茶呑話に何が話題になるかと云ふと、牛馬の健康談や、犬の人情を解する美談や、鶏の雛子の生長談などで、夫婦喧嘩も往々此等無邪氣の談に打消さる。誰れやらの語に、人間と神仙の住居に格別の相違は無い、但だ神仙の居は人間の居に較べると笑ひ聲が多いとあるが、田園の無邪氣の茶呑話、甲問乙答、しきりに笑聲の洩るゝのは神仙に比すべきであらう。鶏犬圖書同一床と云ふはよく田園生活を形容した語で、鶏犬牛馬に對して些しも隔てがない。坐臥寢食彼等と與にし、夕方田圃より家に歸る時は、先づ牛馬を溪流に浴せしめて後已等も浴する。こゝに於て人獸一體である、豈唯同床のみならんやである。

夏時夕顔棚下の夕涼みに、半裸女性の肥えたる乳房は夕顔の瓢果と其豊を競はんとする、これも亦田園の一景である。彼等の歡樂とし云へば盆の踊りや村社の祭禮位なものだ。「盆の十三日が二度ありやよかる、鯀昆布卷今一度」、盆でなければ鯀の昆布卷すら口に上らぬ。彼等の境

遇は哀れなものだが、彼等自身は哀れとも思つてゐぬ。「盆にや踊ろし、正月にや寝よし、長の夏中草とろし」で、彼等は自家の運命を知つてゐる。そこに神仙に近い處がある。彼等の居村は蕪村が詠じた「こがらしや何に世渡る家五軒」「二村に質屋一軒冬木立」さながらであるが、彼等は貧なれども大きな火爐を有し、寒中ドン／＼柑を焚くさまは、ブルジョアをして羨ましむるものがある。爰に味噌汁が鍋にかけられたり、馬鈴薯が煮られたりして、家族が團欒し、村人が來ればそれも團欒に加へて澁茶を喫したり濁酒を酌むこともある。夢にも新聞などを見ることの出来ない僻陬の寒村、二三里隔たる地主や小學などから傳はる新聞の報道が時を経て漸く爐邊に達する時が、いつも非常時に會したごとく、それがいつも大切な話題となる。嘗て都會を知らない素朴の村人には、都會はさながら外國でもあるかの如く思はれて、恐るゝもあり、厭ふもあり、老若互ひに相戒めて都會へ足を入れてはならぬとなすのは、時勢に後れた村柄ではあるが、實は安全の村はこゝだ。こゝにはアカもなくグロもなく、失業もなければ破産もない。鶏犬牛馬を友とする田舎、純眞の人の住む田園、今如此きもの果して幾何かある。

雨笠風蓑

昔しから田園を詠じた句は少からずあるが、自分は大江丸の「稻刈りて天地にこわひものはなし」の一句を愛す。豪放の調、よく農家の心理を道破してゐる。抑々挿秧から始まつて、秋收冬藏に終る、農家一年、雨笠風蓑の苦辛は如何ばかりぞ。彼等は雨あるを喜び、又雨あるを厭ふ。彼等は旱天を喜び、又旱天を嫌ふ。天候は常に彼等が思ふまゝにならず、順氣と安心すれば忽ち暴風到り、僅かに肥料を施せば、一夜の豪雨之れを流して痕をとどめず。案山子で鳥を驅逐すれば虫害踵に到る。彼等の心境は何時も尖つて晝夜一刻も安息がない。曆を翻しては厄日の近きを案じ、天を仰いで氣候の變を惧る。彼等の頭腦にはいつも恐怖が満ちて居る。稻を刈り終つて、こゝに始めてこはいものがないのである。彼等の得意は此時であつて、之れを高調するのは此句である。肥前の靱摺唄に

唐臼廻れ／＼ヨウ、日和見て廻れヨウ。明日はヨイ／＼、前田の稻を刈アル。稻をかるなら、西を見て刈ラレ。西の暗いは雨となる。ア、ゴンスレ／＼

農家が如何に天候に憂き身をやつすかを見よ。

農園美

或る雑誌に農は美術なりやと云ふ問が出てゐたが、頗る漠然たる問ながら、これに答へて見たいと多少案じたことがある。日本の農業が世界に幾んど例の無い園藝的のものであることは豫て其専門家から聞いたこともある。如何にも日本の風土の關係から西洋の如き大農は行はれず、一家數口が一年中全力を盡して耕し得るだけの田圃を擁し、それをコクメイに挿秧から刈入れまで丹精に耕し、肥料を施すやら、雑草を除くやら、鳥を逐ひ蟲を去るなど、徹底的に行き届いた取扱ひをなすのは、正に園藝その者と毫も異なる所なく、専門家が目して園藝的の農耕と爲す所以である。此の見地からしても、少なくとも日本の農業は美術と全然縁の無いものとは云はれない。併し率然農園を見れば、如何にも汚穢むさくるしく、畦畔は一長一短、毫も規律がなく、溝渠の兩壁は崩れんとし、堆肥や糞壺は路頭に暴露されてゐるので、農に求めてどこに美があると言ひたくなるのも無理はないが、併し農園には先達の遺訓などがあつて、嚴

にそれを遵守せしめて、亂雑蕪穢を制してゐる所があり、又土性地質により農圃の體裁の甚だ整うてゐる所もあつて、確かに美を認め得る所もあるから一概に美なしと云ふことを得ない。

自分は往年二宮尊徳翁の遺訓を奉じつゝある遠州掛川邊の田圃を一覽したことがある。此邊は報徳講社に屬する村々で、すべて此の講中に屬する田畑は雑草一つなく、周圍が綺麗に掃除されて、如何にも行き届いてゐる。堆肥や糞壺なども適當の所に置かれ、必ず屋根があり、溝渠なども兩側が綺麗に切つ立てに削り立つて、崩れて居る所なども見えず、村落戸々の様子も甚だ整つてゐた。此邊挿秧の特色とも見るべきは、あらかじめ田面に繩を張り、それを定規として田植を爲すために、稻の間隔が一定して、どこまでも見通し得ることが如何にも愉快の感を與へた。之れを報徳植と唱へてゐるが、施肥に平均なからしむるため斯く繩張りを爲すと聞いた。流石に二宮翁の遺訓はよくも遵守され居るものと感じたが、斯くまで整然たる農圃には美の一字を許しても決して不當で無い。いつぞや日本全國に耕地整理をやつたときに、それが第一に行はれたのは静岡縣、それに次ぐのが石川縣であつたと云ふ。二宮翁の遺訓が耕地整理に先鞭を着けたことも決して偶然でないと思ふ。

由來靜岡縣の地質は粘土質であるために、農圃を美的にするに天恵がある。此の土質は畦畔を作るにも溝渠を作るにも正形をなし得るが故に、體裁の美を見ることが出来る。前記報徳講の成功も實は此の地質にも因るのである。之れに反して彼の土質の黒ボクである所に於ては、土がぼろ／＼して溝渠でも畦畔でも切つ立てに作る事が出来ず、それを正形に作つても直ちに崩れる、そして此の土に水が混ざると、さながら汚水のごとく見えるので、概して此の土質區域に屬する農圃は事實不潔である。此の所の堆肥の取扱などの頗る不完全で、糞壺などに覆ひのないのも畢竟色づける汚水が流れて綺麗にするかひがないからでもあらう。斯く天恵に差はあるにしても、天恵の無い所を其儘放擲して汚穢蕪雜に委し去るべきではない。天恵が無ければ無いだけに人爲でそれを補ふ必要がある。畢竟先達の薰陶次第であることは報徳講の例で知り得ることである。要するに農家に美的觀念を持たしむることは最も大切で、彼等の天地を麗はしくせしむることは、やがて彼等の精神健康に大なる效益を齎らすことになる。聊かにても美と云ふ觀念があれば、僅かの勞で自家の庭先に花卉を植ゑて目を怡ばすことにもなり、生垣などを枯死に委かせ置くことの不體裁を思つて、自然之れが修理を心掛けることにもならう。

農家に美術的觀念を有せしめる必要は、先輩既に之れを説いてゐる。唯だ農家の知識は未だそこに達しない迄の事である。農家の知識がそこに達するの日は則ち日本農圃の美化する時で、農業を美術となし得るや否やの問題もおのづから決するであらう。

橋の種々相

大震災で東京が全滅した時に、橋も殆ど悉く滅びたことからして、復興事業の中でも殊に大切な事業とせられ、且つ非常な金を投じたものは架橋である。全體橋は文野を表象するものといはれ、橋の良否を見ると直にその國の文明の程度がわかるのである。この復興された東京市の幾多の橋は、震災前よりも餘程規模も大きく、意匠もよく、従前のやうにグロテスクの裝飾をつけるやうな無駄が省かれ、經濟的に出來て同時に橋の規模が擴張され、構造が堅牢になり、四圍の風景などにも相當に調和がとれるやうに工夫された。随つて復興後の橋は東京市の誇となるやうになつた。東京市のみならず恐らく東洋第一として誇り得るやうになつた。一日、あ

ちらこちらの橋の見物に廻つて歩き、多少感ずるところもあつたので、こゝに橋について漫談を試みる。

全體日本は久しい間貧弱な橋の所有者であつた。——明治になつてからは兎も角も——廣重が如何に彩筆を揮つて兩國橋を描いても、それは木橋に過ぎなかつた。然し橋も風景の一要素であることはいふまでもない。日本のやうな和らかみのある風景には、木橋が寧ろ調和を保つかも知れない。風景地に鐵橋が架せられたというてそれがために風景が滅茶々になつたところぼす風流客も多い。畢竟調和を缺くからである。日本の家も木造であるから橋も木橋であるのは、寧ろ自然というてもよい。然し橋は堅牢でなければ危険である。大水が到ると直に流れるやうなものであつてはならぬ。また重量に堪へるものでなければならぬ。今の世で砲車、殊に重砲の通り得ないやうな橋では用いたゝぬ。とかく橋は永久性のものでなければならぬ。畢竟橋に非常の多くの金をかけるのも經濟から割出してやることで、多く金をかけても久しきに耐へれば、その方が利益だから金をかけるのである。で、文化につれていろ／＼の橋の出来ることは蓋し已むを得ない。到底今の都會に木橋などは落第である。全體、堅牢な橋を架けたから

というて必ずしも風致を損する譯のものでない。石にせよ、鐵にせよ、要は設計如何によるのである。橋の美が四圍の風景に調和し、風景を害せずして美を存するといふことが架橋の大切な條件で、材料如何は問題でない。

原始時代の橋

順序として橋の沿革——といへば大袈裟であるが、原始時代の橋についていさゝか考へて見たい。如何なる蒙昧の世の中でも、水陸を連絡することが生活上必要であつた。野蠻人などもこの連絡のために種々なる工夫をしなければならなかつた。それで獨木橋を造つたり、或は粗末な舟を造つたりした。然しこれが今日の文明人が想像するやうに容易なことではなかつた。蠻族の中には双物を一切知らないものがある。それ等は舟を造り得ないことは勿論、獨木橋を架けるにも、邪魔な枝を切り落すすら双物がなければ容易でなかつた。であるから、水陸の連絡は、或る種の野蠻人には、水を泳ぐ一つの方法より他に方法を知らなかつたと、その研究家はいうてゐる。

想像して見るのに、大方獨木橋を架するといふ工夫などは、偶然風などのために木が谷を跨いで倒れたのを、それを渡水の方便としたから始まつたものであらう。また藤蔓などが溪流の一方から前溪の藤蔓とからみ合つてゐるのに身を託して、猿などのなすのに倣つて、蔓から蔓へと、手でたぐつて渡つたこともあらう。で、この藤蔓も一本よりは二本の方が丈夫であり、三本の方がさらに丈夫であるから、恐らく一本につかまるよりは二本三本につかまる方が氣丈夫であつたらう。またなるべくそれを望んだであらう。また舌に手を託するといふことだけでなく、他の藤蔓に身を寄せ身をもたせることを氣丈夫に感じたに相違ない。で、橋に欄干が作られることは原始時代に既にあるのであるが、この欄干なども藤蔓に身をもたせるところから案出されたものかも知れぬ。全體人間は猿と異つて身軽でない。猿よりも輕捷を缺いてゐる。そのみならず、高いところから深い淵を瞰おろしたり、激湍などを見下ろす時に眩暈を催し、長怖の念を起すものである。恐らくこれは文明人のみならず、蠻族にもあつたに相違ない。文明の世の中に橋を造るのに欄干を設けるが常であるが、これは烈風に渡橋者が吹き飛ばされることを防ぐためにも必要だが、實はこれがなければ渡橋者が不安を感じるからである。別して

極めて細い橋や揺れる橋となると、どうしても欄干がなければ人は不安に驅られて、臆病の人になると一步も進み得ない。だから原始時代でも架橋となると、必ずこれ等の不安に對してそれを除くことが、いろ／＼工夫されてゐる。すなはち蔓だとか、木の枝などで、極めて粗末に欄干のやうなものが作られてゐる。また蔓で橋身を絡んで、附近の樹木に結び付いたり、橋下に木材で支柱を作つたり、工夫は様々だが皆橋の動揺を防ぐためであつて、その構造は勿論粗野この上ないものである。然し今日文明國の架橋技師が法として行つてゐる大切な條件に、臆氣ながら原始人が必要から工夫してゐるものがないでもない。すなはち橋を堅牢にすることや、急激の出水に耐へるやうにすることや、また渡橋者に不安なからしめることや、すべて必要が教へて原始的に工夫されてゐることが一二に止まらない。敵に備へるために、事ある時、橋の一部を撤去し得る方法などは、早く原始時代に行はれてゐるが、これもやはり必要が生んだ工夫に外ならぬ。

原始時代に工夫された橋は、大體極めて幼稚なものである。然し中には文明人が驚くやうな工夫のあるものも稀にはある。その一つを挙げると、橋に二本の釣革があつて、その釣革の間

に人が坐る。そしてその釣革が木鈎に附着してゐるので、そこで傾斜と重力との關係から滑走が出来るやうになつてゐる。これはカシミヤの廣い急流に架せられた昔ながらの索橋にあるのだ。序でながらいふが、原始時代に往々にして獸皮を蔓同様に用ゐた例がいくらかもある。畢竟堅牢を欲しての工夫であることはいふまでもない。

なほまた原始時代の架橋の傑作といはれてゐるものがある。それは橋の上下動と側動とを全然なくする工夫をした、藤の蔓橋であつて、セレベスのサロ・マニオの橋がそれである。その構造は、極めて丈夫な蔓をもつて圓い輪のやうなものを作つて、それがいくつもく橋の上に置かれ、それを下にも支へるものがあり、上にも支へるものがあつて嚴重に結びつけられてゐる。そこで人はその圓い藤蔓の間を歩くのであるが、その道が上にも下にもきつちり結びついてゐるから、さながらトンネルをくぐるやうで些しも揺がない。構造は如何にも簡單であるが、工夫においては今日の技師が金屬や凝土を用ゐるのに較べて、物質材料こそちがへ、大差ないもので、これが先づ原始時代の傑作といはれてゐる。

各種の橋

次に架橋の様式或は種類を案するに、日本においても種々雑多である。溪間に高く危くかゝつた釣橋もあれば、舟を鐵鎖で繋いだ舟橋もあり、木の桁の上に柴を並べた柴橋もあれば、土を置いた土橋もある。穹窿形をなした錦帶橋の如きものもあれば、太鼓の胴の半徑狀をなす太鼓橋——例へば龜戸にある橋のやうなものもある。日光で見る赤塗の橋もあれば、鐵の鎖で高く釣り上げて自在に撤することの出来る吊橋もある。西洋の風が日本へ入つて來てからは、早く西洋風に倣つて眼鏡式の橋が方々に出來てゐる。そして今日では人の歩道でない橋がいろいろある。

全體橋は必ずしも水上に架するものとは限らぬ。また人の歩道とするものとも限らない。水道の鐵管や瓦斯の鐵管を通す橋などは、それくゝの専用である。また鐵道の橋も同様で、市中の高架鐵橋などは水の上に架するものでなく、また人の歩行を許さないものである。昔しもこの種の橋は少なくない。神社佛閣などに社殿と他の建物を連絡するために橋が架されてゐる。

が、これ等は殆ど皆屋蓋があり、その屋蓋に種々變つた意匠もある。また今日では、どここの停車場にも、高く道の上に架した橋がある。なほ橋と思はれずして、その實、橋であるといふやうなものがある。最も著しいのは安藝の宮島であらう。嚴島神社は全部海中に建築されてゐるのだから、橋上の建築というてもよいのである。少なくとも歩廊はまさしく橋である。これは海中の一例であるが、山においても京都の清水寺などは高い桁をもつて支へたものであり、本殿の地盤は山そのものであつても、あの幅の廣い歩廊は全く橋である。一説には、海中に屋舎を營むのは、原始時代に猛獸や敵の襲來を避くるため特に水中に家を建てた遺風であるといひ、高く山に憑つて建築するのも、同じく原始時代に猛獸や敵を避くるため、高い處に穴居した遺風であるといふ説もあるが、とにかく構造から見ると、橋の一類として差支ないやうに思ふ。尙ほ他の一例は、支那の青島で日本人の經營してゐる料理屋を見た。この料亭は海濱にあるのだが、母屋の座敷から接続して海中へ細長く突堤のやうに突き出した建築物がある。それは石の桁に支へられ、側面から見れば全然橋と見え、また橋に相違ないのであるが、それに入つて見ると、一方には一條の通路があつて、それが長廊下で、その道に面して幾十の室がある。各

室は隣室と厚き壁で遮斷されて、全く獨立の室であるのみならず、獨立の一戸に擬つて各室の入口には小なる籬があり、内地の待合のやうに御神燈を吊し、下駄ぬぎが備へてある。どうも連れ込み所に相違ないが、橋上にかゝる工夫をしたものは内地には未だ見ない。右のやうに多端であるから、日本だけの橋の種類を擧げること容易でないが、こゝには只一端を擧げたい過ぎぬ。

西洋の橋

さらに先輩國たる西洋の橋を少しく考へて見たい。それについて斷つて置きたいことは、これまで西洋に出かけて橋を研究したものは建築技師などに多いことはいふまでもない。然し橋を趣味上から専ら巡察して相當の研究をして來たものは餘りない。自分の知るところでは、わが早大の校友濱田青陵といふ人が、西洋を股にかけ、各國の橋を見て歩き、技師的でなく興味的に有名な多くの橋を見て、嘗て大正三四年頃これを大阪朝日に連載したことがある。今は「橋と塔」といふ表題で書物になつてゐる。自分の如く西洋に行つたことのないものは僅にこんな

書物によつて西洋の橋の一端を知るに過ぎない。この書によつて教はつた西洋の橋の一端を語ると、今日西洋諸國の中で最も古い橋が残つてゐるのは、多くは羅馬の盛んな時代に經營されたもので、當時羅馬の屬國であつた國々にも今幾らか残つてゐる。また羅馬人に建てられたものでなくして、羅馬の形式で追々造つた橋がいくらかもある。で、この著者は羅馬人は橋を造るの天才だといつてゐるが、或は然らんと思ふ。ともかくも羅馬時代の道の造り方などは、かねて聞いたこともあるが世界に比類のないもので、大抵今日の西洋諸國の道路は五寸乃至一尺を、コンクリートで固める位な程度のものであるのに、羅馬の道路は三尺乃至五尺をコンクリートで築いてゐるといふことであるから、橋も従つて規模が大きく、非常に堅牢に出来てゐて、何千年経つても今日なほ幾何か残つてゐるといふ譯で、各國を遍歴して注意を拂ひ得る橋は、羅馬時代のものか、羅馬形式のものが一番で、それはフランス、イスパニアあたりに存在してゐるといふことだ。

殊に外國の橋で注意を要することは、昔しの橋は只交通のみが目的でなく、他に副目的もあつたのである。すなはち橋を要塞の用に供したことがある。橋は嚴重に武裝され、敵の渡橋に當

つて橋を斷つ設備があつたことは勿論である。或は中世紀の頃宗教の盛んな時代には、橋に禮拜所を設けて、渡橋毎に神を拜ましたこともある。

それからまた橋上にいろ／＼の店舗を設けて、種々のものを販賣した例もある。これは今日のやうな繁劇な都會地には出来得ないことではあるが、昔しは橋を市場にしたことがあるのだ。また田舎へ行けば橋で水車と小舎を連絡したものがあつて、今日の橋のやうに單純ではなかつた。その構造にも、裝飾にも異つた點があつて、それ／＼其時代を現してゐる。日本でも昔しは多く僧侶によつて橋が架けられた例があるが、西洋でも中世紀にはイタリーから橋梁僧團といふのが起つて、これが架橋のために大なる活動をなし、それがために出来た橋も少なくないと言はれてゐる。

ロンドンに今もあるタワー・ブリッジと唱へるものは橋上に塔が二つあり、この二つの塔を繋ぎ合はせる歩廊が上頭に作られてゐる。帆船や荷船などが通る時には、橋の中央が左右から吊上げらるゝ装置になつてゐるので、渡橋者はその時塔に上つて上頭の歩廊で往來することになつてゐる。これは何人も知る名高い橋である。

天空に聳ゆる高いビルディングの甲乙を連絡するために、上頭に橋を架することは、日本などでも大きな工場などにもあるが、この橋で名高いのは伊太利の「歎きの橋」である。ヴェニス市内を流るゝ運河を挟んで西岸には總督の官邸があり、東岸には有名な獄がある。それを連絡するために高く架された屋蓋のある橋が、すなはちこの異様の名のある橋である。何故か、名があるかといふに、獄中の囚人がこの橋を通つて總督の法廷に導かれ、そこで死刑の宣告を受け刑場に送らるゝのであるから、かゝる悲愴の名があるので、詩人ならざるもこの運河に船に棹して橋下を通れば、感慨に打たれないものはないのだ。

橋に就てのエピソード

橋についてのいろ／＼なエピソード、種々の雑事を擧げてみると少なからずある。漫りに思ひ出づるまゝを漫りに談ずるのは、雑駁に失して恐縮であるが、そこが漫談であるから御免を蒙りたい。

昔しの戦争には、敵をして橋を渡らせないといふことがしばしば、勝敗の決となつて、或は橋を壊すこともあり、或は橋を焼くこともあつた。日本の戦史には斷橋の事實が多く見えてゐるから、委しくいふまでもないが、日露の戦役にも露軍の輸送を遮らんとして、沖禎介などいふ憂國の志士が變装して深く蒙古の地に踏み入り鐵橋の破壊を企て、終に國に殉じた例がある。

大井川、天龍川等の出水の場合には、昔しは橋がなかつたので、人が橋の代用となつて肩で渡したものだ。大阪のやうな大小の橋の多いところではいろ／＼面白い橋がある。四ツ橋といふところなどは、事實四つの橋が二つの川に架せられ、方形になつて十文字に繋ぎ合はされてゐる。すなはち上繋橋、横堀橋、吉屋橋、住屋橋の四橋をさして四ツ橋というてゐる。あれは他にあまりない例である。同じく大阪で、橋の半から陸につながる處がある。すなはち鰻谷に出るところがそれだが、一種の風致がある。大阪にはかく堀や川が縦横で、大小の橋が多いところから思ひついて、人物の番附を作ることが流行つた時分、人間の評判を橋に象り、一番大きな人物を大きな橋、小さな人物を小さな橋といふやうに、橋の一覽表の如くにして人物の品定めをした。小橋に比せられた人物の中に不平なものが出来て来て、抗議を申込み、遂に其版を絶版させるまでやつたことがある。また橋を納涼のところとし、又は月を賞するところとしたこ

となどは何處にもあつたことで、特に絮説を要しまい。京都の鴨川の夕涼みは名高かつたもので、三條や五條の橋の下には、夏になると棧敷をかけて、そこで客が遊興をやつたものである。

橋上に偶然起つた趣味ある話といへば、日本橋の真ん中で菅茶山と谷文晁が邂逅した事であらう。文晁は日本橋附近の或る書畫會に赴いての歸り途、不圖仙人めかしい茶山に出會ひ、かねてその書畫會に茶山も出席と聞いてゐたから、これ必然その人ならんと、あなたは備中の菅先生でないかと聲をかけると、果してさうであつたので、文晁も自から名乗つて、茶山を同伴して書畫會へ戻り、茶山を會衆に紹介したのだ。この日本橋の真ん中で兩文人が出逢つたのが面白いといふので、これが一時文壇に喧傳し、繪にかゝれ詩に作られた。これも橋についてのエピソードとすることが出来よう。

橋にも幸不幸があつて、妙な出来事から名高くなるものだ。京都の五條橋が名高くなつた譯は、浮世繪のお蔭といつてもよい。義經が牛若といつた時代に辨慶と戦つて、あの怪僧を征服したといふことが浮世繪畫家の筆の働きて、橋までも有名にした。あの童形の牛若が豪僧を家來にまでしたといふは、お山の大将を氣取る子供には最も受けがよかつた。また男色流行の折

でもあつたので、男色家はその童形の姿に惚れ込みもして、この繪がいろ／＼に描かれ、いろいろに傳はつたものであるが、その背景が五條の橋だといふので、田舎のはてまでもこの橋は誰れ知らないものゝないまでに名高くなつた。また三條の橋は、こゝで勤王の高山彦九郎が、王室の振はざる時代に、禁闕を拜して涙をこぼしたといふので名高い。これについて一つの話がある。橋本雅邦といふ近世名高い畫家が、或る乞食書生に畫を望まれ、拒みかねて咄嗟に筆を執つて、橋の下に一人の人物が跪いてゐる圖を描いて興へた。一寸見ると彦九郎を畫材にしたやうに見えるが、その實、乞食書生が橋本に哀を乞ふといふ意を寓したので、そこに興味がある。

架橋の場合に習慣として橋供養をどこでもやつた。大阪で天滿の橋が出来た時、建野大阪府知事が架橋式を行はんとして、橋上の兩側に屏風を建てるにつき、鴻池に使をやつて金屏風一雙を借りたいと頼み込んだ。ところが案外にも斷られた。知事は鴻池ともいはれるほどの金満家が、一雙や二雙の金屏風がない譯はない、それを借さないと不都合だと憤慨したが、だんだん取調べたところ譯がわかつた。鴻池は金屏風といふから純金の屏風と早合點して、斷つた

のだが、金紙の屏風ならば十双でも二十双でもお望み次第である。純金の屏風となると實は半双しかない。それで御希望に添へなかつたと意外な挨拶に、知事も呆れたといふ話がある。

古い橋についての因縁話は少なからずある中に、最も名高く昔から傳へられてゐるのは三河の矢矧橋である。此橋は昔から東海道第一の長橋といはれたものだが、その宿に長者があつて、その娘が淨瑠璃姫といふ美人で、曾て牛若と契を結んで再會を誓つたが、牛若は奥州に行つて歸つて來なかつたため、娘は悲しんで川に投じて死んだ。その話が小野お通なる女流作家の手で淨瑠璃物語十二段に作られ、今も傳はつてゐる。また名古屋の熱田には裁斷橋といふのがある。この橋は、豊臣秀吉の驍將堀尾吉晴の妻により、その愛する子息が戦死したのを悲しみ、冥福を祈るために架されたもので、その擬寶珠には假名書きの文字が彫刻されてゐる。それが如何にも哀れな文章で、その終りに、この書付を見てこの橋を渡る人々は、どうか念佛を唱へてくれと後人に呼びかけてゐる。そこに母性愛が見えてこの橋が名高い。

擬寶珠について一二語るべきことがある。日本式の橋の欄干の突出した柱頭には、必ずこれが装置され、人は目慣れて橋には是非缺き難い裝飾と思つてゐるが、元來これは日本に限つて

あるもので、世界の何れにもない。實は禪が日本に齎らした佛具の形を橋の建築に應用したもので、宗教的臭味を帯びたものである。この擬寶珠の構造にもさまざまあつて、千利休の挿話が傳つてゐる。利休は或る席で勢田の橋の擬寶珠を談じ、多くある擬寶珠の内一つ氣に入つたのがあるというたのを、古田織部が側らに聞いてゐて、即刻勢田に出かけて隈なく橋の擬寶珠を検し、歸つて來て利休に、貴老のお氣に召した擬寶珠は第何番目の、これこれの形のものであらうといふと、利休は、然り〜といふて織部の熱心なるに感じたといふ話が、茶人の、何物についてもうつかり見てをらぬ例として時々擧げられる挿話である。尙ほ他に擬寶珠についての一挿話は、往年日本橋改築の際に、田中智學翁は府廳に一の建議をしたことがある。その要旨は、日本橋は日本帝國首都の中央にある第一橋であるから、相當の裝飾を要する。擬寶珠は宜しく純金をもつて造るべしと。豫算まで添へて熱心に主張したこともあつたが、終に採納を得なかつたと翁から直接聞いた話である。

高野山の奥の院に格別大きくもない橋がある。これは大分やかましい橋で、罪業の深いものが渡ると必ず怪我をすると嚇してゐる。豊太閤のやうな豪傑でもこの橋を無事に渡り得るや否

やについてひそかに怖氣を催し、登山の時には無論多くの武將を伴ひながら、瀬踏みをしようといふので内々この橋を一人で渡つてみたが何事もなかつた。そこであの無邪氣な豊公だから俄に強氣になり、翌日多くの武將を伴うて大威張で橋を渡り、左右を顧み、我は多くの人を殺したが、皆天下國家のためにしたので、私事でないから佛がとがめ給はぬのも道理である、といつたと「紀州名所圖會」に載つてゐる。

橋については古來いろ／＼の迷信がある。橋の擬寶珠に願をかけることも一時大に行はれた。京橋や日本橋の或る欄干の擬寶珠に荒繩をかけて括つて、頭痛を癒やす願掛けをすると、必ず癒えるなどいうた。その願掛けが效を奏した時には、青竹の筒に茶を煎じたのを入れて擬寶珠に注ぎかけ、竹筒は擬寶珠にかけて置くことが例となつてゐた。四谷の鮫ヶ橋、麻布の笄橋など、頭痛と百日咳を癒やすに願掛けをしたものだ。また京都の橋々などにも齒の痛みをとめる願掛けの習慣があつて、煎餅を鴨川に流すやうな迷信もあつた。

こゝに外國に關する一小話を思ひ出した。今拓務大臣である、永井柳太郎氏がオックスフォード大學に學んで歸朝後、いろ／＼在學中の話をした。英國の大學生もなか／＼亂暴で、或る

時酔に乗じてテームス河の橋に火をつけ、橋を焼き落した。酔がさめて悔悟し、直ちに届出で、自費で復興の計畫を立て、幾何もなく橋を架け換へたといふ。流石にオックスフォードやケンブリッジなどには貴族の子弟が多いから、そんなことが出来るが、日本には焼く亂暴者はあつても橋を架け替へる學生は絶對にあるまい。

擬 橋

橋の話の序に擬橋の一二を附け加へる。私が擬橋といふのは、人工になつたものでなく、自然で出来てゐる橋の役をなすものをいふのである。山中などで往々谿間に自然の岩が或は高く或は低くはびこつて、それを渡れば一方から他方へ通じ得るものである。その最も著名の例は後に説くウラル高原の天然橋であるが、妙義山の奥の白雲山の絶嶺に行くと壁立千尺ともいふべき岩がある、その岩の頂きはさながら屏風の縁端に立つの趣があつて、極めて細い道が三ヶ所に大きな岩にて隔てられてゐる。これも一種の橋と見られないでもないが、その橋を渡つて盡きたところに頗る大きな岩があり、その岩に穴があつて、それを匍匐して通り抜けて、また

戻つて三つの橋を渡るのだが、風でもあれば甚だ危険で、一步を誤れば千仞の谷に墜ちる。これを「三橋胎内潜り」と呼んでゐる。これも擬橋の一つであらう。

橋といふ名まであつて、名高いのは天の橋立である。これは詳しく説くまでもなく、潮流が兩側から砂を揉みあげて、自然に一條の砂路をなしたのである。この砂路には兩側に松があつて風致を添へてゐる。海中の自然の橋で、天橋の名のある所以である。然しこれはあながち日本ばかりにあるのではなく、支那にもあつて、それに砂線といふ名があるとかで、日本のある文人は天の橋立は俗だから、よろしく支那に倣ふがよいといつたが、實に馬鹿げたことである。砂線では雄大味が無い。それに較べれば天橋の名こそ如何にも大きく、如何にも莊重で且つ典雅でもある。これを俗であるなどいふ詩人は甚だ心得違ひである。

擬橋の内でも事實橋といひ得ることがある。それはウラルの高原での名高い頗る雄大の石橋がそれだ。これは何千年かの水の浸蝕作用であらゆるものを抉り去つて、深い谿となり、その上に浸蝕を免れたものが橋となつたので、谿の兩岸を連絡して人の往來となつてゐる。これなどは些しも人工を藉りない天然の橋であつて、擬橋の内に入れるのは或は當を得ないかも知れない、と思ふほどのものである。

最後にいふべきは庭園の橋で、擬橋に近いものである。これは人工で出来たもので、眞に橋の役立をするものもあるが、只庭の風致を助くるためのものもある。概して趣味本位でさまざまの意匠が籠つてゐる。例へば光琳風の畫家が燕子花かきつばたに添へて作る八ツ橋などは、昔東海道にあつた八ツ橋になぞらへたもので、八枚の板を錯綜して架したところに趣味があるので、今でも庭園に風景を添へる道具となつてゐる。全體日本の庭園は自然の景色に擬つて小さく作つたものであつて、池水のある所もあれば無い所もある。池水のある所には橋は勿論必要だが、水の全くない所にも橋を架して、水のあるかに思はせるのが、作庭家の工夫のあるところで、橋の種類で種々の風景を聯想せしめる。例へば懸崖に架した橋は甲州の猿橋などを思はせ、柴の橋や土橋のやうなものは田舎の風景を思はせる類である。勿論橋があつても、必ずしもその下に水がある譯でなく、白沙をもつて水に擬したり、橋下を潜らせるために殊に橋を高く架することなどもある。どんな庭にも橋の一つ二つないところは無い。橋がなければ風景が調はないといはれてゐる。大なる庭園になると勿論多くの橋があり、それが地形によつて適當な橋が工

夫され、同型の橋の重複を厭ふところから、あらゆる橋の標本が一つの庭に備はつてゐるやうなことが往々にしてある。その橋にはこれまで庭師などが命じて、通り名となつてゐるものがある。前にいうた燕子花のある所には八ツ橋がつきものであり、庭中に社壇があつたり華表などがあつたりすると、その前の流れに眼鏡式の石橋を架けるのが殆ど例になつてゐるが、これも通例神社の境内にそんな式の石橋があるところから來たのであらう。築山の間や、深い溪などに象つたところには橋脚を用ゐないで、組出しかまち框で丁度猿橋に擬したやうな橋を架ける。これを組出し橋と稱へてゐる。また岩海橋と稱へる橋も、溪に擬へたやうなところに架ける橋であるが、その構造は略ぼ前の通りである。田舎道に流れるやうな小さな流れには土橋をかける。これは橋桁の端れに繩巻きにした丸太を打つて、兩方の縁に芝を植ゑるのが通例で、これを芝太橋と稱へてゐる。岸の高くない溝川などに一枚の板を渡して、それを普通組板橋と稱へる。また同じやうな場所に杉、檜のやうな丸太を半分に割つて桁の上に並べて橋とすることもある。これを連尺橋というてゐる。一枚の板の代りに一枚の板を渡して橋とすることもある。これを柵橋と稱へてゐる。また池の尻の吐け口などに古い舟底板を用ゐて、「形に架することもあ

る。これを汐見橋と名づけてゐる。すべて池水のあるところには舟橋に擬へたものもあり、溪流の流るゝところには飛石をもつて橋としたところもあり、また水中に樓閣を起してゐる所は橋の家とも見るべきものであつて、百端の意匠が凝らされてゐるが、その巧拙は作庭家の手腕の試金石ともなつてゐる。

石を語る

自然石を愛することは東洋人に限らなく、西洋諸國には此の趣味は無い。勿論建築材としては西洋でも石は用ゐてゐるが、庭園に風致を添へる爲め自然石を點綴するやうなことは無い。日本では自然石に價があり、佳石となると何百圓何千圓もするが、西洋人は之れを不思議としてゐる。夏目漱石が書いたものゝ中に、洋行中或る人の家を訪ねたら、そこに立派な巨石が積がつてゐたので、それを褒めた所が、主人は平然として、コンナ邪魔なものは其内取り除く積りで居ると云つたのに漱石も愛想をつかしたとあるが、これに據つても西洋人が自然石に對し

て趣味の無いことが分る。

日本の庭園は自然の山水に擬してゐるから、自然石が尤も大切な材料となつてゐる。築庭の費用の半ばは、石の價と其の運搬費に在りとも云へ得るであらう。庭園のみでなく、床に靈壁石を置いたり、夏時盆石に水を注いで銷暑の具に供したり、机案の上に石を置いて翫弄することもあるので、自然石も一部骨董に屬し、小形にして自然峯巒の狀を爲す石に對しては、愛石家は多くの價を拂つて惜まない。紀州の布流谷石などは多く峯巒の狀をなしてゐるので喜ばれ、鞍馬邊にも佳石が出るので愛玩されてゐるが、何と云うても佳石に富むてゐるのは支那である。研材でも印材でも床の裝飾とする靈壁石でも、皆支那産が優れて居る。勿論庭園の眼目となる太湖石の如きは支那が本場で、日本に僅かにあるのは皆支那から運んだものだ。

右のやうな譯だから、自分が先年支那の燕京に遊んだ時、意を用ゐて到る處に石を討ねたが、流石に帽を脱して一拜に値するものが少なくなかつた。萬壽山の頂には巨石が群をなしてゐて、中にはすばらしいものもあつた。併し自分の意に尤も適つたものは紫金城奥深く、禁園に羅列された六七の太湖石であつた。全體支那は太湖石を愛重する國ではあるが、完璧の此石を見る

ことは甚だ稀れで、大官鉅商の庭園にもあることはあるが、多くは人工が加はり、或はセメントで縫ひ合はせたやうなものが多かつた。天津の李鴻章の舊第にあつたものも、矢張りセメント加工の厭ふべきものであつた。但だ禁園に見た五七の太湖石はなかく、大きなものであるが、何れも完璧で、形貌と云ひ、姿態と云ひ、孔竅と云ひ、一點非難を容るゝの餘地なく、初めて太湖石の上乗なるものを見て、今も忘れ難いものがある。唐畫などには多く太湖石が描かれ、それに宮嬪などを配した圖を多く見ることだが、その畫中の石のやうなものは、帝者の禁園などで無ければ、見難いものであるかに感じた。

尙ほ燕京で美石に觸れたのは、當時内閣顧問であつた曹汝霖を訪うた時である。曹は普通外國人の出入の出来ない宮廷内に居た。曹の案内で一堂に入つて見ると、そこに純白の硯で作られた美人の坐像があつた。これは乾隆帝の嬖妾の像だと聞いたが、等身よりも大きい、全裸體に近いもので、五彩の寶石と金銀を以つて飾られ、妖艶の風采、豐滿の體軀は人を魅するものがあつた。あれほどの白硯の大塊は如何にも珍らしいと感じた。尙ほ其堂を出ると、庭内に大なる水盤があつた。これを見て亦驚いたのは、此の水盤が一塊の青硯であつたからだ。大きさ

は測定もしなかつたが、多分長さ一間半高さ四尺もあつたであらう。これには高雅な細紋が刻してあつて、如何にも堂々たるものであつたが、變亂によくも此の二品が掠奪されなかつたのだと、坐ろに感懐に堪へなかつた。

自分は長安の碑林は見ないが、支那はどこに往つても豊碑が多く、全く碑の國であることを思ふと共に、大なる石材に恵まれた國であることが頷かれる。或る時代の天子は、宮殿を作るために矢鱈大碑を築材に應用し、礎石や橋や歩道をこれで作つたと書物に見えてゐるが、かゝる天子が幾人出ても逆も盡し切れないほど大碑が存在してゐる。石塔を始め宮殿や陵墓の石階、豹、獅子、麒麟、駱駝、象、馬等の石獸も支那石工の伎倆を知るの材料だが、萬壽山下の石船なども大石に富むの一證となすことが出来よう。尙ほ自分の寓目の内で、支那に不似合の小石細工の歩道を二三見た。これは種々の色彩の小石を安排して花や禽蟲などの形象を作つたもので、ステインド・グラスと其の趣向を同じうし、宛かも更紗を地上に敷いたかの觀があるが、洋館の歩道などには折合ふか知れんが、餘り感服の出来ないものであつた。

支那漫遊中青島に到つてさらに大なる石に觸れた。此處は幾んど全土、石が地盤をなしてゐ

ると云ふので、先づ一驚を喫した。自分が訪うた時は獨逸が敗退して、此地が日本の手に歸した後であつたが、諸般の建築は獨逸經營其儘に存してゐた。此處では自然石よりも建築材としての石を見ることが一興であつた。石材の豊富なるに任せ總督邸を初め官私の邸宅は皆石造で、獨逸人が石材で家を築くの巧妙さにはつくづく感服した。どの建築を見ても皆スタイルが異つてゐて、一つと雖も同じ様式のものになかつた。石材の使ひ方も種々雑多で、或は磨したのもあり、或はラフの面を露はし彫琢の勞を省いたのもあり、あらん限りの技巧を弄して居るかに見えて、しかも皆經濟的に出来てゐる所に妙があつた。全體、地下が石であるから、地盤を築く必要がなく、石材は矢鱈にあるから他の築材を用ゐるよりも遙かに經濟で、そして堅牢で且つ美觀を呈する。これも畢竟支那が石に恵まれて居る一例となすことが出来よう。

愛石の國支那には、米元章の如き、佳石を見ると拜する人も出た。蘇東坡なども愛石に於て米元章に負けて居るものでなかつた。彼れが石壁の挿話もいろく傳つてゐるが、爰に一佳話を紹介する。東坡が曾て居た黃州の齊安の河底に美石を産する。それは玉の如く玲瓏で、色は紅、黄、白さまざまであつて、中には指紋の如き螺形の紋のあるものもあり、精明にして愛す

べきものである。此地の小兒輩は河に浴して戯れに此の石を拾うて遊ぶのを、東坡が見て菓子などを與へて、交換したのが漸く積つて二百九十八個に達した。その内大なるものは一寸許、小なるものは棗栗の如くで、中に虎豹の形のもものが、口鼻眼皆具はつてゐる。これが羣石中の逸品である。暑夏古銅盤に此等を盛つて水を注げば燦然として頗る趣致を覺える。ある時廬山に在る東坡の友人佛印禪師から使が來たので、折節贈るものが無かつたので、此石を使に附して布施とした。其時東坡の申送つた語がおもしろい。

使自今以往。山僧野人。欲供禪師。而力不能辨衣服飲食臥具者。皆得以淨水注石爲供。蓋

自蘇子瞻始。

石を以つて布施とすることは東坡自身の言ふごとく實に東坡から始まる。貧乏人で何も布施の供物のないものには、自今此石に水を注いで布施に易へしめよとは、よい思ひつきである。此の挿話は「怪石供」と云ふ東坡の文にある。佛印禪師は此の賜を受けて、如何にも面白い思ひつきだと喜んで、其意味を石に刻した。それを聽いた東坡は笑つて、禪師にからかつて云ふには、全體差上げた石は菓子と取替へたものである。菓子は食用となるが、石は無用のものだ。然る

に菓子を贈つても敢て喜ばない和尚が、無用のものを貰つて石に刻するほど喜ぶと云ふは何故だと、禪宗の問答よろしくの文字を弄して、更に二百五十個の石に今度は水盤二個を添へて贈つたことが文集に見えてゐる。之れに據つて見ると、佛印禪師も矢張り愛石癖があつたと見える。

以上の挿話に就て思ひ出すことがある。自分の少年の頃、夏になると、曾祖母の隱宅に多くの美麗な小石を水盤に盛り、それに水を注いで床に置き、消暑の具に供した。此の小石こそ、曾祖母が若かりし時、江戸に出で、上田を経て、木蘇に廻つての長旅に、記念にとて方々から拾ひ取つて來たもので、寸にも満たぬ珠のやうな美石が多かつた。その石には江の島、嵐山、須磨、明石と云ふやうに、朱漆で細字を以つて産地が記されてあつた。之れを水盤に入れて見ると、五彩さまざまの色が錯綜して、朱書さへ一種の色彩を添へて美觀を呈した。曾祖母にはそれぞれに石に思ひ出があつて、いろ／＼の話を聞かされたことがある。その都度必ず各地の名所圖會が参考に示されて、自分は早くから名所圖會に興味を覺えた。石を愛する癖も或はこれから養はれたのかも知れないが、旅行の記念に石を拾うて他日の思ひ出の料に供するなどはわ

るくない趣向で、今でも旅行者に勧めてもよいことと思ふ。

右の曾祖母記念の石は今失つて一石も存しないが、自分は旅行其他で佳石を見れば食指を動かす習癖があつて、今も十數の玩石を有してゐる。中には天台山と名くるもの、廬山に似た石、溪琴が寸碧と銘じて珍藏した石、紀州の布流谷石等等、皆二寸乃至一寸五分許のものであるが、どれも奇峰の形をなしてゐて、石質もよく、人工は一切加はつてゐない。自分も元來旅が思ふに任せず、夏時の旅行期になると、此等の石を架上に陳列して、連峰層巒に之れを擬し、雲烟の去來を想像し、羈旅に換へて自ら娛んでゐる。

諸侯の本艸道樂

春陽堂で此頃創刊した雑誌「本草」に、何か隨筆を寄せよと頼まれたので、咄嗟に考へ出したのは、昔し諸大名が研究的に若くは道樂的に本草に指を染めたものゝ少くないことであつた。本艸は立派な科學に屬するものであるけれども、素人にも趣味の感ぜらるゝもので、蒐集癖の

ある人などは、種々珍奇のものを寄せ集めたり、或は寫實的に圖して圖譜などを作つた例があり、或は研究的に著述を試みたり、或は花卉などを自から栽培した人もある。加賀の前田松雲公が稻生若水をして大部の庶物類纂を編纂せしめたことなどは著名な事實で、これなどは諸侯の道樂仕事と軽く考へるべきものでない。富山侯が善美を盡した本草の圖譜の出版を思ひ立ち、多くの財を投じて邸内に畫師や彫工や刷師を置いて作つたものは實に目を眩するほどの華麗のものであつたが、全部成らない内に誤つて火災を起したので、擔任の家臣は申譯がないと自刃して罪を謝するに至つた。そこで後世此書に人殺し本草の名を附けたことは書物通の熟知の事實である。讃岐の高松の松平家には臣籍に平賀源内のやうな本草家もゐたので、本草趣味の君侯もあつたと見え、草木禽蟲魚介を精寫した立派な巨冊が保存されてゐる。先年松平伯に隨伴して高松に往つた時には親しく之れを拜見した。水戸の支藩の守山侯が菊の栽培に浮き身をやつし、其實験を録して出版した「菊經」は有名なものであるが、餘りに菊の鑑賞に耽つたので、幕譴を蒙つたこともある。某侯が雪の結晶體を研究して六華の譜を作つたことや、越後高田藩の家老鈴木某が毎年一二の熊を殺して十數年熊膽クマノイの研究をしたことや、案ずればいろ／＼思ひ

出すこともあるが、今は此等の事實を精しく調べる暇が無い。

事實を昔しに求めるまでもなく、手近に談柄となるものがあるから、それを紹介しよう。それは既に故人となられた、徳川頼倫侯の逸事である。侯は多方面の趣味家であられたが、本草趣味はその尤なるものであつた。侯は全国各地の竹を遍く蒐集されたのみならず、竹の工藝品をも多く蒐集された。それが爲めに邸内にはその陳列館が築かれ、自分も貳回か拜見したが實に豊富のものであつた。併し侯の本草逸事はこれよりもまだ他に語るべきものがある。それは大磯の別荘に移植された雑草である。此の別荘は宮内省の御料地高麗山下の一部を占め、自然の森林帯が官道まで突き出し、その中に一條の道路があつて、それが別荘の建築に通じ、頗る風致に富んでゐる。侯は此の森林を利用して、樹下に無数の雑草を植ゑ込まれた。聞けば此の地點の周圍三十里に亙る各地から異草を採集されたので、其種類は數百に上ると聞いた。卒然として見れば、滿地菌のごとく草が密生してゐるに過ぎないが、諦視すれば、何れも異つた草で、日光を欲するの草は日當りのよい處に植ゑられ、日を厭ふ草は陰氣の地が選ばれ、濕潤を欲する草は水邊に植ゑてあると云ふ様に、すべて周到の注意が拂はれ、森林中には特に二三の

井戸があつて、園丁は適當に其水を注ぐやうになつてゐた。さて別荘の庭に廻つて見ると、これも雑草の延長で、趣味ある樹石が風致を作つてゐるが、重きは寧ろ下た草に置かれて、雜然たる異艸は互ひに其奇を争うてゐた。座敷に入つて先づ目に入つたものは襖の繪で、よく見ると、幾百の草が文様のやうに描かれてゐて、其の一一に二寸四方位な色紙形の解説が附され、學名が皆書かれてあり、如何にも届いたものと感服した。尙ほ庭の一部である山に登つて見ると、園遊會などの折の假設の摸擬店を見た。それには屋端を繞つて小なる暖簾がかけ連ねてあつたが、その暖簾の裂には假名文字が染め抜いてあるので注意して見ると、皆園内の重なる花樹の名であつた。如何にも意匠が本草づくめで徹底してゐるので、さてもくと感歎した。

此の別荘の山は境域の狭い割合に樹木が多く、殊に崎嶇の道が多いので、さながら深山幽谷に在るかの感を懐かしめた。尙ほ山中に大なるコンクリート製の池があつて、そこに大きな山椒魚が飼養されてゐた。これは追々絶滅の運命にある天然記念物であることは申すまでもなく、こゝにも本草の香りがあつた。座敷はすべて檜材を以つて造られ、他材は一つも採つてないが、撞球場の四圍の腰板丈には煤竹が用ゐられてあつた。その煤竹は如何にも古色があり光澤があ

り、實に言ひ難い風味があるので、何れより採取されたかと問うて見たら、附近に農家の敗屋があり、その天井に用ゐた竹が多年烟氣を受けて棄て難い味があるので、一軒買ひ潰して應用したと語られたが、流石に竹の趣味家であると思うた。

蟲と詩

夏と秋の珍客として詩人に喜ばれるのは蟲である。蟲の中でも蚊や蠅などの意地きたない害蟲は誰れにも嫌はれるが、そんなものは除外して、有聲の蟲は寂寞を破る同伴とされ、其の奏でる自然の音楽は紛囂を掃ひ、塵懷を清め、人の心を爽快ならしめる。そして時としては、其の奏樂が人を悲哀に誘ひ物の哀れを感じしめるが、そこにも風流の趣がある。

先づ無聲の蟲から擧げて見ると、螢が夏の蟲の中では尤も人氣ものである。此蟲の特長は麗しい光を體中より放射するにあつて、水上を飛んだり、草叢に停つたりすると、清涼の氣が漲つて、人をして暑熱を忘れしめる。形が小さく優しく、人懐かしくつて時には戸内に飛び入

つてくる。一茶の句に「寐た振りをすれば天窓に螢かな」とあり、「我袖を親と頼むか逃螢」とあり、又「手枕や小言いふても來る螢」などあるのは、皆此蟲が人なつかしいことを言うたのである。俗語に啼かぬ螢は身を焦すとあるごとく、聲が無いだけに哀れさが深い。昔時から螢狩が優雅な遊びとなつてゐるが、納涼がてらのスポーツとしてよく工夫されたものだ。兒女の遊嬉であるばかりでなく、親達までさわぐので、一茶には「それ〜と親からさはぐ螢かな」と云ふ句がある。螢の飛ぶのを見て、あちらからも、こちらからも螢來い〜と叫ぶ。此の情景を寫して一茶は「あちこちの聲にまごつく螢かな」と云うてゐる。太祇の閨怨の句に「とぶ螢あれといはんも獨りかな」とあるのは、螢が閨房に飛んできて共賞する對手がないと啣つたのである。こんな風に螢は誰れにも珍重がられてゐる。一茶は流石に螢に同情があつて「初螢都の空はきたないぞ」と言ひ聽かせ、「飛ぶ螢女の髪に繋がれな」と注意を與へ、戸惑ひの螢が戸内に閉ぢこめられはせぬかと氣遣つて「出よ螢錠をおろすぞ出よ螢」と叫んでゐる。一茶は螢を友達でもあるかのやうに、其飛び去るのに呼びかけて「初螢なせ引かへすおれだぞよ」と云うたり、逃げて來た螢をいたはつて「逃げて來て溜息つくか初螢」など云うてゐるが、

どの句にも同情があらはれてゐる。

螢のやうに人氣はないが、夏時斷り兼ねるお客は蛙と蟬である。共に有聲の蟲で、隨分啼聲がやかましいので、蛙鳴蟬噪の惡評を博してゐるが、蛙はどことなく愛嬌があつて、案外詩人に喜ばれ、その姿體がさまざまに寫されてゐる。左の數句がそれである。

藻がくれに浮世をのぞく蛙かな

其聲ややがて飽かれな初蛙

あとへ飛ぶ心は持たぬ蛙かな

鳴き出して五分でも引かぬ蛙哉

叱つてもしやくとして鳴く蛙

來かかりて一と分別の蛙かな

小高みに音頭取りの蛙かな

親分と見えて上座になく蛙

西行のやうに坐つて鳴く蛙

つき橋の案内顔なり飛ぶ蛙

世の中の何事も知らないものを井底の蛙と云ふだけに、蛙は迂濶もので哀れなものである。彼等は僅かに藻中から世を窺ふに過ぎぬ。初めて聲を發する時こそ人は珍らしがるが、餘りに騒々しいのですぐに飽かれる。併しあの蛙は人を恐れぬ豪氣らしい所があつて、決してあとへ退かぬ。啼き出せば徹底的に啼く、人が制しても酒蛙々々然たるものだ。あの蟲の歩き方はチヤプリン式で、ぶん／＼と歩かず、人の前でも時に歩を停めて分別でもあるかの如く躊躇したりする。親分らしい蛙は上座に坐り、音頭取らしいのは小高い所でなく。或は西行法師よろしくベツタリ坐して鳴くのもあり、橋上の人を案内でもするかに見える蛙もゐる。その行動を仔細に檢すると、なか／＼興味もある。詩人の喜ぶのも此故であらう。

三伏の暑候に蟬の鳴くのはなか／＼に暑さを増すかに思はせるが、芭蕉は流石に蟬を藉りて夏景を美化してゐる。

閑けさや岩にしみ入る蟬の聲

寫實の絶調とはこんな句を云ふのであらう。又

聲にみななきしまふてや蟬のから

やがて死ぬけしきは見えぬ蟬の聲

これも芭蕉の名高い句だが、寫實の外に無常の意が寓されて幽玄の趣がある。

秋が漸く近づいてくると、蟲もなんとなく短日を促がすかに鳴くやう感ぜられる。一茶の句に「つまる日を蟲もギイツチョ〜哉」とあるのは、アプト式に刻まれて、日が段々短く成り行く故である。又秋の蟲の音は、夏の蟲よりも一段清涼の氣を漂はして快感を與へる。一茶の「涼風や力一杯きりくす」だの、桐雨の「更る夜や艸を離るゝ蟲の聲」などは、一語何人にも一脈の涼味を感じしめるではないか。

秋の蟲の力弱きさまを寫した誰れやらの句には「秋の蟬ころび落ては又鳴ぬ」と云ふがある。一茶は常に蟲に同情があつて、「鳴くな蟲別るゝ戀は星にさへ」と云うて、牽牛織女を引合に出して蟲を慰め、又「我死なば墓守となれきりくす」と云うて慇懃を寄せてゐる。青蘿が「松蟲よ美人の袖に落ちて死ぬ」と吟じたのも蟲に同情のある句だ。

全體蟲は雌雄共に聲を發するものでなく、雄蟲が雌蟲を誘ふ爲めの聲であつて、戀を語るさ

さめきだと云はれてゐる。かゝる有情の聲が人に感動を與へるのも不思議はない。蟲類の中には嫉妬の激しいのもあつて、益キキ斯などは、雌雄睦しく遊んでゐる所へ、他の雄蟲が這入つて邪魔でもすると、例の後肢に備はるギザムで一蹴し去ると云はれてゐる。兎角エロの世界だ。有情の人間が蟲の妻戀の聲を聞いて哀れを催すのは尤も千萬の事だ。抱一上人の句に「蟲選み聲無きは皆美しき」とあるは雌蟲を斥したもので、上人はよく蟲の雌雄を知つてゐた。

倭文の妙

閑に任せて自輯の語鏡を読む。漢文の簡潔にして力あるを喜べる吾れも、老い來り、倭文の穩かに和らかに、敢て鋒鋷を露はさず、おのづから至理を語る所に、妙を感じることに多し。これ余が修養の進歩に由る歟。今一二を抄す。

一昔いやしく今たつときあり、今を忘れて、昔をのみ語り出て、人をうやまへば、人必ず貴みて、いさをしをほむ。今いやしく、昔たつときあり、今をかへりみず、昔にのみほこり

顔すれば、人必ず笑ひて、これを悪む。おのれませば(増)、人へらし(減)、おのれへらせば、人ます。

右は中井整庵の「とはすがたり」にある語なり。平々説き得て甚だ妙を覺ゆ。

一うれしきことは忘れやすし、心のとけゆるぶかたなればなるべし。かなしき事は大やうわすれがたし、心結ばれて凝かたまればなるべし。あなう(憂)の世や、むつかしつらしといふめれど、うれしきは多くて、かなしきはすくなかるべし。雨ふりつゞくこと、たびつゞくなれば、年の半は、日の光も見ずなど、うちわぶれど、雨しげきとし、九十日に過ぐることなし。

これも整庵の語也。人情の一斑を説き得て妙也。

一もろこしのかしこきがいへる、よき人の心は、たとへば白し、あしき人の心は、たとへば黒し。さればよき人の、よき事するは、白きに白きを加ふるなれば、その白き、ますます白く、いよ／＼ほこらず。あしきことの、つゆ心に至れば、すなはち知りて、すなはち拂ふ。しろきが上の黒きは、見やすければなり。あしき人の、あしきこととして、心ます／＼

黒くなり、たま／＼白きが至れば、よく覺えて、うちほこるめり。

これも整庵の文なり。さながら牛乳を飲むの味あり。やはらかにして味濃やかなり。

一女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、引つくらふ人も侍らじ。かく人に恥らるる女、いかばかりいみじき物ぞと思ふに、女の性は皆ひがめり。人我の相ふかく、貪欲はなはだしく、物の理を知らず、たゞ迷のかたに、心もはやくうつり、ことばもたくみに、くるしからぬことをも、問ふ時はいはず、用意あるかと思れば、又あさましきことまで、問はず語りにいひ出す。深くたばかり、かざれることは、男の智恵にもまさりたるかと思へば、その事あとよりあらはるゝを知らず。すなほならずして、つたなき物ぞ女なる。其心に隨ひてよく思はれんことは心うかるべし。

これは兼好の女を評するの語なり。女の悪徳を指摘して餘蘊なく頗る力あれども、眞綿で頸をしめるの概あるは倭文の特長に歸すべきか。

一柳は花よりもなほ風情に花あり。水にひかれ風に隨ひてしかも音なく、夏は笠なうして休らふ人を覆ひ、秋は一葉の水に浮みて風に歩み、冬はしぐれにおもしろく、雪にながめ深

し。

これ鬼貫が四季の柳を禮讚する語なり。誰れか漢詩もて、この上を行くと言ひ得るものぞ。

一自から心をはかるに、善に背くにもあらず、惡を離るゝにもあらず、風前の草の靡きやすきがごとく、又浪の上の月の静まり難きに似たり。

これ鴨長明の語なり。最も説き難き心を簡明に説き、一讀人を魅するの妙あるは、その譬喩の巧みなるにもよるが、筆致の飄逸、さながら心の如きものあるによるべし。これも和らかなる邦語の一長歟。

一某、若き時、大内の草紙を見侍る中に、節會の折ふし、雪いたう積りけるに、衛士に仰せて、橋の雪拂はせられければ、傍なる松が枝も、たわゝなるが、恨めしげに刎ね返りてと書けり。是れ心なき草木を開眼したる筆勢なり。その故は、橋の雪を拂はせらるゝを松が羨みて、おのれと枝を刎ね返して、たわゝなる雪をはねおとして恨みたる景色、さながら活きて働く心地ならずや。

これは近松門左の説く所也。開眼の筆も近松に會せざれば、或は看過せられたるも知る可からず。

畫家の下職

藝術品は、何から何まで藝術家其人の手で作り上げられなければ、其人の作と云ひ得ないか。工程の或る部分を他人に委しても、要部だけ自からの手に成れば、それでよいことであらうか。此問題は藝術品の物柄に付て考察せねばならぬ。或る藝術品は絶対に他の手にかけてならぬことがあり、或る藝術品には幾ばくか他人の手を許さるゝことがある。書畫などは、或る除外はあるが、先づ前者に屬し、器具の類は後者に屬する。例へば利休作の茶杓などは、中には荒削りまで利休自身手に掛けたものが絶無とは云へないが、多くは門人などに削らせて、自から一刀二刀を加へる。その一刀二刀が畫龍點睛で、僅かの刀の動きで茶杓に活精神が生ずる。鑑定家が一見利休作として見過たないのは、刀の行き方に動かす可からざる利休の特徴があるからである。此點は陶工木米などの「ヘラ」の動きに争ひ難い特徴があるのと同様である。木米に

しても轆轤細工まで自からなしたとは思へぬ。手づくりものと異つて轆轤細工は機械的であるから、下職にやらせても差支は無い筈だ。いづぞや京都の五條坂で初代三浦竹泉を訪うた時に、座中に幾十の人物を描いた赤繪の小器があつた。それには竹泉の書も落款もあつたが、自分は竹泉と別懇であつたから、此の微細の人物は君の筆かと聞いたら、竹泉は笑つて、これは下職の書いたものだ、こんな畫は私よりも下職の方がうまいと云うたことがある。染付などの作は、竹泉が書畫共に自分から書いてゐるが、手のこんだことになる、必ずしも自身の業のみでない。併しそれに自身落款を入れ、匣にも自署してゐる。

右の如き工藝品には、眼目さへ作家が自から手にかけて居れば、假令下職の手が交つても、そこに作家の意氣が籠り、其人の特徴が現はるればそれでよしとする例はいくらかもある。併し書畫になると、絶対に他人の觸るゝことを許さないものが多い。先づ書に就て見るに、塙保己一の短冊はどれでも他人の筆である。林述齋の書には子の整字の書いたものが多い。狩谷掖齋は、あれほど能書であるのに、幅や額は必ず娘に書かせた。此等は明かに代筆であるから問題にならぬ。書に於ては先づ除外が全く無いと云うてよからう。畫に於ても幾んど除外は無いや

うなものだが、事實はさうでなく、門人などの助筆に委することが往々にしてあり、又さうしても敢て差支ないこともある。例へば畫面に金粉を振ることや、土佐繪などに多くある雲形に金泥を塗ることや、定まつた輪廓内に繪の具を施すことなどは、其心得のある門人に課しても害がなく、通例門人の仕事となつてゐる。此等は機械的に近いものであるが、機械的のものでなくして下職の手にかゝるものがある。服裝の細微の文様などは、必ずしも大家先生自から勞することをせない。後に陳べるごとく、文晁も北齋も蹄齋北馬を下職に使つたものだ。又大家先生自から筆を下すを屑しとしないもの、例へば繪表裝の如きは門人に書かせることがあり、臨畫なども必ずしも先生自からしない。

一概に門人とこきおろすが、中には出藍のものがあつて往々にして先生を凌ぐ。豪放の畫家はかゝる優秀の門人に書かせて、平氣で自家の落款をなすものもあるから、如何に落款が正しくとも代作がいくらかもある筈だ。中村正直翁のやうなあの篤厚の人が、文債堆を爲すと、幾回も石川鴻齋に代作を頼んだとは、嘗て鴻齋の門人から親しく聞いたことである。竹田の門人草坪が、遊蕩の資を得ん爲、先生の名を冒してそつと一幅を作り畫料を收めた。後に表裝が出來

て題匣を竹田に需めて來たので、祕密がばれて師に叱られた逸話があるが、草坪は早く死んだけれども、その技は敢て師に譲るもので無かつた。英一蝶が門人に代作させて見ると、如何にもよく出來たので、一蝶讀歎の餘り「一蝶が書いたげなとて書いたげな」と題した。それが有名の幅となつて、某家に藏されてゐると、或時高貴の人が其家に立寄られて此幅を見、一蝶と同じ讀歎を禁じ得ず、祕かに筆を把つて「書いたげなとて書いたげなく」と書き添へたなどは、代作が如何に巧妙であるかを語るものである。

門前市をなすやうな繁昌の畫家になると、いくら健筆でも大家先生獨自では書き切れなかつたに相違ない。かゝる場合に或る程度のことを門人に助筆させたり、要部を自から畫して他を門人に委したと云ふやうな事は勢ひあつたと思へるが、唯だこれが畫室の祕密だから、門外漢は之れを知ることが出來ない。自分は幾回か故今泉雄作翁に應擧の畫幅の鑑定を請うたことがある。或る一二の幅に就て、翁の云ふには、印は確かである、應擧の畫室から出たものに相違ないが、しかし應擧自身ではない。恐らく優れた門流の手に成つたものであらう。此類のものは敢て少なくないと云はれたが、若しこれが應擧在世の時の作とすれば、應擧にも代筆があつ

たことが推測されるのである。

鷹峯には光悦の一門がゐて、光悦屋敷と云ふがあつた。光悦の一門はそこに一部落をなしてゐた。光悦が種々の藝術品を作り出すに参加したものは、皆此の部落の内にゐたのである。鍛工もあつたらう、木工もあつたらう、漆工も髹工も陶工も紙工も皆備はつて、光悦の考案に據り、それ／＼のものが手足の如き働きをなしたであらうと思像する。光悦好みの陶器、漆器、繪畫等々が、下職の手で成つたものは強ち少なくないであらうと思へる。畫の巨匠宗達の如きも、光悦の姻家である故を以つて同じ屋敷に住したと云はれてゐるが、此の巨匠が助け成したものは、必ずしも下繪の雲母畫や金泥畫のやうなものでなく、今日光悦の畫とされてゐるものの中には、此の巨匠の助筆に係り、若くは全部此の人の手に成つたものもあるであらう。當時は無落款のものが多く行はれたから、宗達は光悦の大名の下に下積みになつてゐるものもあらう。又光悦の爲め下職に近いことをもしたと思像するも必ずしも無理ではあるまい。

江戸での大工場は谷文晁の寫山樓であつた。苟くも江戸に來て歸國の土産に、文晁の畫を持ち歸らねば恥辱であるかに思つた位だから、寫山樓の繁昌は非常で、各方面の依頼客は常に堂

に満ちた。文晁は殆んど應接に遑あらず、藝妓を聘し來つて杯盤の周旋をさせ、文晁は飲み且つ談じつゝ畫を作つたと云ふから、寫山樓はさながら一大俱樂部の觀があつたのだ。文晁には多くの門人があつたのは勿論だが、一門の妻も子弟も皆畫をよくし、且つそれ／＼の欲するまに各流の畫を畫かせたと云ふから、實に盛んな大工場であつた。斯うなると、どうしてなかなか何もかも一人では書き切れないから、門人などに手傳はしたと想像せざるを得ないが、それに就て左の一話がある。

前に掲げた蹄齋北馬は、「三國妖婦傳」や「自來也物語」などの挿繪で知られてゐる浮世繪師である。此人は幕府の小吏であつたが、家を弟に譲つて北齋の門に入り、糊口の爲めに北齋の助筆をした。なか／＼器用な筆の持主であつたので文晁の氣に入り、文晁にも助筆を頼まれた。ある時文晁其家を訪うて見ると、北馬は頻りに文晁から頼まれた畫に細紋を書き込んでゐたが、をかした人には左手をのみ用ゐてゐるので、何故かと不審を打つと、北馬は漸く筆を收め、妙な所がお目に留まりました。斯く露顯に及ぶ上は、包むやうありません。實は北齋の門に入つて號の一字を貰ひ、それで生活してゐる恩誼もあれば、それを棄てる譯に參らぬ。さりと

て折角先生のお見出しを受けた恩誼もあれば、右の手を北齋に捧げ、左の手を先生に捧げることにした、との答を聽き、文晁も驚き且つ義理の堅いのに感じたが、左手の筆の働きは自在であつたので、文晁は此助筆を珍としたと云はれてゐる。

此一小話は文晁が浮世繪畑の助筆を持つてゐたことを語ると共に、北齋にも亦助筆があつたことを語るものである。曾て見た文晁の極彩色の關羽の服装に金泥の繊細の文様があつたが、恐らくあんなことは北馬あたりが助筆をしたものかも知れぬ。北齋にしても、要部は自身で書いたであらうから、或る部分を助筆せしめたからと云うても、それは無難に通つてゐるに相違ない。

浮世繪師に就て、他の一例を挙げれば、初代豊國である。あの忙がしい繪師は、輻湊してゐる畫を一人でなか／＼書き切れなかつたので、門人に助筆をさせた。門人の誰れに助筆をさせたかと云ふと、國虎などが其一人である。その確證は早稲田の演劇博物館に藏してある一幅の文書が之れを示してゐる。尙ほ傍證となるべきものが坪内逍遙翁の書齋に藏されてゐる。それはいろ／＼の婦人の面貌と頭髮を豊國自身が書いたものであつて、幾十となくあるが、皆餘白

の無いまでに断ち剪つたものだ。これは前年翁が豊國研究をやつた折、豊國の遺族を訪うて割愛を得たものと云ふが、何の爲めに斯様なものが書かれてあるかと云ふと、門人に助筆をやらせる時の用に供するもので、草稿にそれを貼りつけて、衣服その他は門人に委するのである。云ふまでもなく美人繪に最も難しとするはその面貌と頭髮にある。讀本よみほんや草双紙などになると、同じ人物が各頁に現はれて、喜怒哀樂種々のエキスプレションが顔に現はれねばならぬ。それを書き現はすことは、難きが上に難く、到底助筆の成し得る所でないから、豊國自身が忙がい場合に應ずる爲め豫じめ書いて置いたものである。乃ちこれが下職を使つたことを間接に語り、傍證たるべきものである。

要するに畫は他人の手を交へないのが本則であるけれども、事實に於ては他人の手が加つてゐるものがある。嚴格に云へば合作と云はねばならんが、要部に觸れない以上敢て差支ないこととして許されてゐて、合作とは見做さぬ。圖外れの大作だの、非常に手のこんだ繊細の畫になると、助筆に委しても大局に障りのない所が少からずある。門人もない貧弱の畫師は別として、畫の大工場とも見らるべき繁榮の畫家となると、下職が相當にあつたことを想像

して強ち過たないと思ふ。唯だ私の寡聞はそれを説くのに十分の材料を有たないことを遺憾とする。

詩人の足跡

京都の友人谷村一太郎氏より小冊子「中嶋棕隠と越中」を寄せ來る。谷村氏は越中の人、此小冊子は越中の郷土誌と見るべきもの也。余中嶋棕隠の我越後に遊びたることを知るも、未だ越中に遊びたることを知らず。此の冊子に就て見るに、棕隠は越後柏崎より越中に入りたるがごとし。

棕隠初度の越中入りは天保五年の初冬と云ふ。當時交通未だ十分開けず、羈旅なか／＼困難也。殊に北越の雪候を知らざる京客の旅行はさぞかしと同情せらる。棕隠自白の如く「賣文隨處信塵縁、争問先生潤筆錢」で、生計の爲めの遊歴は佳候を選ぶに違あらざりしならん。併し彼れも雪中の富山には餘程困つたらしく、コボした詩がいくつか見えてゐる。先づ越中に入る

時、神通の溪流に沿ひ藤橋を渡つた詩に云く、

枯藤萬縷管通津。柔解代剛堪濟人。爲感腐儒徒處世。不如山佃有經綸。

一經一緯亂藤橫。排板中間踏有聲。遙見先畏蜿蜒影。幾丈玄虬截水行。

後詩正しく原始橋の狀を説き、描寫甚だ妙也。富山に着しての詩に云く、

嘗盡艱難出僻陬。初逢空豁拭吟眸。立山玉立青天雪。照看神通一水秋。

漸く嶮路を踏み盡して始めて市城に達したる、快や知るべし。

冬期の越國は白晝晦冥陰慘を極め、霹靂時に來つて屋を打つ。棕隱が此實景を寫し岡田半江

に寄せた詩に云く、

電光頻突凍雲圍。曠野冥々無所依。霹靂一聲天殆裂。萬行驚電擊人飛。

これも越人にあらざれば解しがたき光景也。棕隱流石に描し得て眞を得たり。

高岡を去る時、諸友に別を告ぐる詩に云く、

去負交情雖不安。老人何耐雪霜闌。忽々告別無他故。他比吾都十倍寒。

こゝに於て棕隱本音を吐く。彼れが寒を怖るゝの甚しき、見るべし。

高岡を去つて後、諸友に寄する詩に云く、

寓食連旬擁暖衾。老肌不覺峭寒侵。出門群嶽涼成雪。初感曾來養護深。

行喜奇感未逞威。野風吹雪々猶稀。轎間况有情人贈。當膝提爐吐暖輝。

寒氣と戰ひつゝ尙ほ情人から寄せられた手爐のノロケを云ふ。棕隱の面目躍如たり。

福光村客寓雜詩の内に雪を説くものあり。云く、

老寓天涯歲已闌。滿窓風雪一燈寒。嗒然撫枕無聊甚。誰作袁安高臥看。

臘末山村阻雪時。出門之事總難爲。一條唯有加餐計。榾柮爐頭坐啜糜。

彼れは福光の東を流るゝ小矢部川を見て幾たびか鴨川を憧憬したが、鴨川のごとく絃聲の聞こゆることもなく、紅燈の水に映するものもなく、徒らに寒月の孤客を照すのみで、歸心矢の如く急なれど、雪に阻てられて奈何ともする能はず、天保五年は暮れて、次年の一月廿六日に漸く福光を去つて高岡に出た。詩客風流を事とすれども、其心事は風流にあらず、彼れの自白の如く「休怪投閒乏好詩、思家山外亦無思」と、彼れは雪國の苦に堪へず、家山に歸ることに悶々したかは想像に餘りあり。併し此の悶々の羈旅の客なれば此の詩無し。此等の詩は皆郷

土の縮圖なり。敢て請ふにあらずして、其地の爲めに遺し去るは詩人の什とす。詩人足跡の印する所、多く詩あり、而して郷土誌を彩る上乘の資料なることを思ふと、藝術家の田舎漫游は其の郷土の幸と云ふを得べし。

逸事の流用

世に名高い人の逸事に、往々面白過ぎて信じ兼ねるものがある。それはその人の事蹟を光らす爲めに捏造したものが無いにも限らない。全く根も葉もない捏造もあらうが、さなくとも聊か種のあるのを潤色したのもあるであらう。逸話などはいろ／＼の人の口から傳はるもので、人に依つて説き方に様々あり、巧みに説くものはどうしても潤色するから、それが面白いので、潤色された話の方が廣く傳はり、それが終に本當とされる。所が逸事の主體が往々閑却されて、話だけが浮泛して傳はるので、或は之れを甲の逸事だと云ひ、或は乙の逸事だとして主體を更へるから、一つの逸事がいろ／＼の人の逸事となる。あの人は磊落の人だからコンナ逸事があ

らねばならぬと、アテ推量でその人の逸事とすると、それが眞實であるかの如くに傳はる。いつぞや自分が「藝苑一夕話」を編した時、名人の逸話を涉獵して感じたことがあるが、共通の逸事の如何にも澤山あるのに驚いた。多分西洋にも同様であらうと思ふ。

今二三の例を舉げて見ると、昔しの櫻間青厓といふ畫家がある時人に訪はれた。其時唯だ一張羅の單衣すら持たぬ青厓は、折あしく其單衣を洗濯して竿に吊して表に晒してあり、自分は全裸でゐたので、在宅かと問はれて、不在とも云へず、表に乾してある着物が乾いて居れば在宅だと答へたなどは名高い話して、磊落文人にありさうな事だが、これなどは磊落文人の誰れにも適用され得る挿話である。又日本橋々上でこれまで面會したことのない、菅茶山と龜田鵬齋が偶然出遇つて、鵬齋が第六感で菅さんと呼びかけたのが外れず、こゝに橋上で初會見をしたなどは、面白い劇的シーンであるが、これには記録もあり、文晁が其の邂逅の光景を畫し、二詩人の詩まで録してあるから、確かな事實に相違ないが、これとても好事家に據つて他に轉用されないとは保證し難い。内田魯庵の隨筆に、紋章學の研究家沼田氏が、ある時街頭に不思議な紋服を着けた人を見て、紋の研究から、どこまでも其人を追跡したので、怪まれたと書い

て居るが、コンナ話も熱心な研究家によくある事實で、潤色家は拘賊と間違はれたとして誇張する所である。又これも同じ隨筆に出てゐるが、和田萬吉博士がモンタヌースの日本紀行を翻譯してゐると、享保度の大火の所に譯筆が及んだ刹那、十年前の九月一日の大地震が起つたところもある。これも確なる事實で、和田博士もそれを語つてゐるが、すべてこの様な興味ある挿話は年を経ると他に應用され勝である。そこで逸話の取捨には多少の注意を要する。普通一般に傳はつて誰れの逸事だと云はれてゐても、一概にそれを信じてはならない。全體逸事など云ふものは其人の傳記などに逸してゐるものだから、取捨の場合、考證が案外面倒であるが、多少の根據が無ければならぬ。即ち人に遣つた手紙の内に書かれてあるとか、書畫などの題識にあるとか、或は交つた友人が何かに書いて置いたと云ふ位な考證が無ければならぬ。山陽などの逸事としていろ／＼傳はつて居ることを、自分などは深く考證もせず、傳はるごとく書いたこともあるが、後に山陽の評した詩集などを讀んで見ると、考證は其評にあつたり、又其集の序にあつたりして、成る程これから出たのだと、あとから知ることが度々ある。近刊の「文藝春秋」に伊原青々園氏の書いた隨筆がある。それにはシーボルトが團十郎と面會した話に就て、

似たやうなことが此の出來事よりも三年前に鶴屋南北の脚本に書かれてあると云ふことだ。三年後の出來事が、三年前に書かれる筈はない。シーボルトと團十郎の會見など云ふ逸事も、或は南北の脚本から附會されたのであるまいか。此會見の事實はシーボルトの日記にもなく、團十郎がその爲めに罪を獲たことも記録にない。大概如電は何から材料を得たのか知らない云々とあるが、斯様なことはよくある奴で、自分などはしば／＼出遇つてゐるから、ア、又かと思ふに過ぎぬ。

たばこ

世界の偉人が烟草を愛喫して、後世に残した逸話は少なくない。米國のグラント竝に獨逸のビスマークは、共に鐵血の人と云はれ、亦共に大の喫烟家で、何れもシガラの佳品を愛した。何人もグラントの口にシガラの無い場合を見たものはないと云はれた。ビスマークは、ある時、人に語つた。烟草の大切さを眞身に感ずることは唯一本残つた時であらう。コーニグラヅの戦

争には自分のポケットに一本のハブナが僅かに残つてゐた。自分はそれを吝嗇家が寶を護する如くに大切に、戦勝を得たら喫せんと、紫烟の立上る光景を胸に描いてその機を待った。然るに爰に意外の事が起つた。或る士官が瀕死の傷を受けたので、これを慰める方法が無く、思ひ切つて大切な一本しかない、ハブナに火を點して負傷者の口にさしこんでやつた時に、彼は微笑を湛へた。大切な烟草はこれで失つたが、あの時ほど嬉しく思うたことは無かつたと。

エマーソンとカーライルは親友で、其の交は生涯續いたと云はれてゐるが、千八百三十三年のある日の夕方であつた。兩人が對座すると、一語をも交へず、先づカーライルから一管のパイプをエマーソンに薦め、自分も一管を把り、共に喫烟に耽つて沈黙が過ぎ、漸く畢ると、握手を取り替はしたが、何も言はずに別れたとある。頗る餘韻のある挿話である。

英國のラツセル卿が、その華麗のホールに多くの客を招いた時、詩人テニソンもその客中に在つた。卿は特に此の詩人に丁寧な挨拶をして、貴君は先頃ヴェニスに旅行されたと聞いたが、あの驚異に價する古都には種々の藝術品を御覧になつたであらう。定めし興味を感ぜられたことであらうなど云ふと、テニソンは一向氣乗りのしない様子で、いや／＼私はヴェニスは嫌ひ

ですと云うた。それは又なぜかと問ひ返すと、あそこには私の嗜む烟草がありませんから、私は不愉快で、さつ／＼と引上げましたと云うた。

ハックスレー教授がブリツテツシ・アソシエーションに烟草に就て討論のあつた時、座に烟草好と烟草嫌ひの會員がゐた。教授は起つて自家の經歷を述べ、四十年間烟草は自分に取つて害毒であつた。青年の頃、醫學生であつた際に喫烟を試みたが、甚だ不快を感じた。それから海軍に身を寄せた頃また喫烟を試みたが、矢張り失敗であつた。自分はどうも烟草の味方になり得ないと語ると、會員中の非喫烟連はその談話の切れ間／＼に喝采を浴びせ、盛んに賞揚したが、さて教授は終りに臨んで一轉して、自分はある友人と連れ立つてブリタニーに旅をした時である。その際友人達は旅館でしきりに喫烟してゐるのを見ると、如何にも愉快さうであるのが羨ましくて、一寸一服やつて見ると、案外にうまかつた、その時から自分は變つた。烟草も適度にやれば結構なものだ。多く茶を飲み肉を喰ふのに比すると、何程優るか知れぬと云ふ結論に達した時、喫烟連は皆總立となつて大喝采をした。

伊太利の名高いマジニの追放中、暗殺者はその身邊につき纏うた。ある日暗殺者は突如マ

ジニーの室に這入つて來た。其時マジニーは靜かに烟草をくゆらしてゐたが、闖入者を見ると、徐ろに一本のシガーを取り出して、先づ一服やり給へと與へて、落ちつき拂つてゐるので、闖入者は却つてドキマガシした。マジニーは微笑を湛へ、あなた方の仕事は分つてゐる。私を殺さんとするのであらうが、それにしてもせくには及ばない。一服やつてからのことにし給へと、悠々通らない英雄の態度に刺客も恐縮し、終にマジニーの足下に跪いて罪を謝するに至つた。

ロバート・バルンスはベーコンと懇親の間柄で、嘗てはベーコンと同棲し、酒を飲みかはしたり喫烟を樂んだりして、多くの傑作が此頃に出來た。バルンスがベーコンと別るゝ時、常に携帯した烟具を記念にとベーコンに與へた。それが千八百二十五年ベーコンが歿すると、他の家具と共にヨークションに出た。ある者は之れに一シルリングの價をつけた。場内の評判では、一シルリングは高すぎる、二ペンスタ位なものだと云ふものもあつた。管理者も此氣配を見て、一シルリングを呼んだものゝ手に落さんとした刹那に、烟具にバルンスの名のあるのを發見したものがあつて、それから大波瀾を捲き起し、段々にせり上げて、終に五磅に達して落札した。那破崙は全く喫烟の趣味を解しなかつたと云はれてゐる。彼れが最初一服を試みた動機は、

土耳其公使から、パイプと烟草の寄贈を得た時である。喫烟に無經驗の此の英雄は烟を口に入れて見たが、それをどうすればよいか、それすら分らなかつた。到頭喉まで烟を送つて、それを吹き出したが、忽ち一聲叫び出し、惡魔！ 惡魔！ 早く取り去れ、と侍者に命じたとある。或る批評家が云ふのに、あの人もセント・ヘレナに流竄になつた時、若し喫烟を解したならば、それに依つてどんなに寂寞を慰め、喫烟しながらよい氣持で筆を取つたら、いろ／＼後世に傳はるものを書き残したであらうにと。

* * * * *

烟草は交際の要具で、喫烟が交際に妙用をなすことは、誰れも言ふことであるが、その妙用を委しく言うたものは多く無いやうだ。誰れも感じて居ることだが、敢て道破しないことを聊か言つて見よう。但し談話の際の事に就てのみ言ふのである。談話の際の喫烟は多少の興奮を起し、談話に力を添へるものである。沈黙の人も、喫烟を藉りて口の封を解くことがある。どんな達辯の人でも、立てつづけに話をするへ行詰ることもある。その時は烟草一服で息をつく。

その瞬間に話のつゞけさまを一考する便利がある。休息もなく、一瀉千里に話をする相手も困る。話す本人も、兎もすると脱線して言ふ可からざることをも言うて、駟も亦及ばないことがある。烟草の一服は瞬間であつても分別が一閃する。説き難いことを説く場合、婉曲に物を云はねばならぬ時などは、喫烟がいつも便利を與へる。喫烟の爲めに談話が途切れても、相手は話が行詰つたと思はぬ。又それを以て無作法ともしない。喫烟は、談話を鼓舞すると共に、談話をなだらかにする。諺に人を見て法を説けと云ふが、喫烟一服が乃ち人を見る時である。相手がどんな人か、自分の話を聞いてどう感じてゐるかが、その時に凡そ窺はれる。その氣合を見て話すので無ければ、話は多く無意味となる。聽者に談話や質問の機會を與へるのも亦喫烟一服の時である。演説や講演などは中間に聽者をして語を挿むことを許さないから一種の壓迫であるが、對話は之と異つて餘地があらねばならぬ。此の餘地も亦喫烟が多く媒をするのである。遠慮深い婦人から話を引出すに、相手が迫つて促すやうでは、婦人は愈々堅くなつて口を封するものだ。敢て迫る意があるでなくとも、默然の對座では婦人をして迫るやうに思はせる。喫烟を藉りて黙するに於て、始めてそこに餘地が生れる。これも喫烟の一得である。幼稚

な若連の話しを聞いて、一々受け答への出来ないことがある。壯重に沈黙して何も答へねば、先方の氣を損ふものだ。喫烟を藉りて、うなづいてゐれば、受け答へをするにも優して好感を與へることがある。強談など持ちかけられた時には、人情激するものだが、その激するに任せて叱咤すると往々自家の人格を損する。そんな時も喫烟を藉りて激情を抑へれば、靜かに事が治まることがある。サカレーの喫烟禮讚に云く、

The pipe draws wisdom from the lips of the Philosopher, and shuts up the mouth of the foolish; it generates a style of conversation, contemplative, thoughtful, benevolent, and unaffected, &

* * * * *

以上は人と對話の際の喫烟に就て言うたのだが、劇の舞臺の喫烟に就て聊か考察して見たい。日本の烟管は西洋のと違つて羅字が長いのが特色である。長管ながびしほとなると尺五寸もある。舞臺の上で缺き難い小道具となるのは、此の特色があるからだ。俳優は此の烟管で喜怒哀樂の情を巧

みに遣ひわける。喜び樂む時は徐ろに烟を吹き、柔かに灰を落すが、激怒の時はセキこんで烟を吐き、荒つぽく灰吹や火鉢を叩く。そこに情の發露がある。烟管の持ち方にもなかく、面倒な註文があつて、五代目菊五郎などはいろ／＼の工夫をしたと云はれてゐるが、舞臺の上の喫烟はその形が美でなければならんから、持ち方には工夫を要する筈だ。一俳優が長臺詞を述べてゐるのを黙して聞く俳優が多く喫烟する、斯くせねば間が抜けるからである。長烟管一吹の後女が男に差しつけければ、それは親愛を表するものだが、長烟管が多くの場合折檻せつかいに用ゐられるのは人の知る通りである。烟管を火鉢に打つことが往々合圖に用ゐられる。幕切れなどにボンと烟管を叩く、その途端に拍子木が鳴り、幕が落ちたり舞臺が廻つたりする。烟管を叩く刹那に拍子木が鳴る、其の呼吸がピツシリ合はねば失敗であるから、こんなことがなかく／＼やかましい。舞臺に烟管の群を爲す一光景は、助六と髯の利久の遊里の會にある。助六が大勢の女に圍まれて、吸ひつけ烟草を突き出されるのを、助六左右の手で平氣に受け、幾十の長烟管を左右の手で纏めてそれを一吹し、髯の相手に遊廓の烟草は斯うして喫すべきものと示すあたりは、妙な工夫であるが、流石によく考へた意匠である。石川五右衛門のやうな荒事師の持

つ烟管は太い逞ましいものだが、果して實用に足るか否かは別として、あんな大きいもので無ければ格好が取れないので、案出された意匠であらう。こんなことを挙げればまだいろ／＼あるけれども、紙に制限があるから、此の邊で筆を收める。

やせゝる

國文と風流で聞えた、一枝堂村田了阿を出した都下有名な烟管屋淺草黒舟町の村田の家も、時勢の風潮に打負けて倒産し、すべての家寶を賣らねばならぬやうになつたのは、大正三年の頃であつた。この家には商賣柄各時代の各種の烟管の標本が、二百點も藏してあつた。その中には頗る珍奇なものがあつたが、その一切が博物館に納まつた。今一二珍しいものを舉げて見ると、花見ぎせると唱へるものは、下部に瓢などを吊して、天秤棒もよろしくといふ大きさで、長さは四尺にも餘り、火皿は共通で吸口は二方にわかれ、二人同時に喫烟し得る装置で、花時これを肩に掛けて歩いたといはれてゐる。山東京傳所持の烟管と聞こえたものも三尺もあらん

と思はるゝ長ぎせるで雁首のところに捻があり、それを外せば、中より螺線の作用で管が延長し、自在に伸縮の出来るやうになつてゐる。こんな異様なものが多く蒐められてあつたが、今一々記憶しない。

すべて古い頃の烟管の材料は概ね質素で、眞鍮の製作が多い。但し羅字は、御殿物となると特に黒漆で塗り、蒔繪を施す事を例とした。かゝる標本も無論いろ／＼あつたのである。ある日、自分方へ賣りに來た烟管も矢張り村田所藏のもので、其人の云ふには、特に上製なるが故に、せめて一本だけは記念に家に留めて置きたいと、博物館へ納めなかつたのだが、年末の始末に窮し、已むなく賣らねばならぬとあつて、示されたのを見ると、雁首、吸口が銀製で、總身しん銀の延べきせる。上部には紅葉、下部に鹿の銀象嵌があり、抱一の落款があつた。これに添はる囊も極めて好事のものであつた。多分了阿が、道樂に作り、常に用ゐたものらしかつた。同じ頃、玩具蒐集家として聞こえた、清水晴風が蒐集した、古代烟管を三箱に納めて賣りに來た事がある。それには天正、文祿、元和、寛永、延寶、天和、貞享等に涉つて種々の形式があり、五ふくつぎと唱へるもの、水口張などいふものもあつたが、結局、誰の手に歸したか、

自分はわづかに晴風自から箱裏に書いて置いた、考證を寫したに止まる。それは粗略ながらきせるの沿革を語るものであるから左に掲げる。

(大和本草六)煙草の日本に初めて來ること天正の初年なるべし。或は慶長十年なりとも云ふ。初めは竹筒に入れて火を吹く。後には眞鍮の烟筒を用ひ、請取渡しに禮あり、今は其禮廢れたりと云ふ。(色音論下)此頃江戸のはやりものをいふ條に、丹波苳にひできせるとあり。(毛吹草)諸國名産を擧たる條に、熊本きせるとあり。寛永の頃肥後きせる行はれたりと見ゆ。(人倫訓蒙圖會)幾世留張、今二條通富小路に樓屋と云ふものあり、其先祖これを始むとかや。昔は葭をそぎて、それにて呑しと云ふ。思ふに今樓張といふは此樓屋が元祖なるべし。又水口張は桐の紋を付け、權兵衛吉久の銘を刻す。(風流旅日記三)水口きせる名物なり云々。此桐の紋は豊公の頃御免を受けて彫付けたりと云ふ。又其當時の烟筒は火皿大きく、首長く、雁の首に似たるより雁首と云ふとは京傳の説なり。又五ふくつぎとて最も火皿の大なるものありて、其頃の俳句に「花見るに憎いきせるや五ふくつぎ」など詠じたるあり。餘は嬉遊笑覽に委し。

逍遙翁に聽く案山子

自分は、毎年例として一月には避寒かたぐ熱海へ赴き、そこに別荘を有する逍遙翁と往來することが、自分の娛樂の一つとなつてゐる。そして恒例に依り此一月にも出かけた。一夕逍遙翁に招かれて晚酌を與にした時、案山子が端なく話題となつた。翁は其作「お夏狂亂」や「兒童劇」などに案山子を材料に遣つて居られるので、私の蒙を啓く考證がいろ／＼出た。翁が先づ示されたのは、古事記の一節であつた。それには左の如く書いてある。

所謂久江毘古者、於今者山田之曾富騰者也、此神者、足雖不行、盡知天下之事神也。これは古事記に大國主神が初めて少名毘古那の神に逢ふ條りにある一節で、翁のものしたる兒童劇に「クエヒコは、しよつちう野天に立つてゐて、何の事でも知つてゐます」とあるのが、古事記の正文に據つたので、クエヒコこそ案山子の先祖である。それが山田のソホドウとも云ふとあるから、これも古い案山子の名であることは云ふまでもない。現に水邊の水を利用して

鳥獸をおどす仕掛をなしてゐる所では、それを添水と云うてゐる。これはソホドウの音通から來たもので、案山子と見るべきものだ。又續古今集に玄賓僧都の和歌が收めてある。それは

山田守るそほづの身こそ哀れなれ秋果てぬれば訪ふ人もなし

とあつて、此の作者は桓武天皇の時の高僧で、事實田を守つた人である。率然として讀めば、作者自身の寂しみを詠じたかに見ゆれども、これも矢張り案山子を詠んだので、曾富騰と僧都が音相近い所から、自分の身にも引きあてゝ古事記の文をそのまま取り入れたものであらう。兎に角、日本の神代のミソロジーに、早く案山子の記載のあるなどは珍と云はねばならぬ。日本の如き農國には自然鳥獸を嚇す神があつたのも不思議がない。

西洋で古くかゝしがあるかどうか、これに就て逍遙翁の語られるのには、自分の書物で見たのでは沙翁のメジュア・フォア・メジュアにスケーア・クローとあるのが案山子である。即ち沙翁の原文は、

Angelo

We must not make a scare-crow of the law,

Setting it up to fear the bird of prey,

And let it keep one shape, till custom make it,

Their porch and not their terror. (Measure for Measure. Act 1. Scene 2.)

右のごとくで、逍遙翁の「以尺報尺」の譯文を見ると左の如くである。

法律を案山子同様のものにしてはならない。いつまでも同じ格構のまゝで樹てゝおくと、わるい鳥どもが、しまひには慣れて、こはがらないで、それをとまり木にして仕舞ふ。

とある。自分は興に乗じて西洋の案山子の圖を見たいものだと思ひ出したら、翁は例の塔形の書庫から一二冊の洋書を持ち來られ、或は此内に圖があるかも知れぬと、スクエア・クローの處を繰つて見ると果して圖があつた。此の辭書は圖解辭典で、シー・オール (See All) と云ふ近刊書で、三省堂の版にした圖解辭典と同じやうなもので、それに圖が出てゐるのを見ると、田圃の中にシルクハットを戴いた擬人物に一羽の鳥が留つてゐる。其の註に人物に擬らひて鳥を脅す具とあるが、偶然ながら東西案山子は頗る形體を同じうしてゐるので一笑した。自分は熱海で圖らずも案山子の研究が出來たことを喜んだが、自分の喜びは單にこれに止ま

らず、逍遙翁が興に乗じて自から西洋の案山子、兒童劇中の案山子、お夏狂亂中のかゝしを、それ／＼おもしろく圖し、それに説明的の詞書をもつて、畫の成る都度、私の旅宿に訪ひ來り、私の徒然を慰められたことが甚だ嬉しかつた。以上の三つの畫は今皆表装されて架中の珍となつてゐる。

笑

昔し支那の宰相王安石は、好んで文字に故事附けの説を弄した。蘇東坡はそれを忌んで、揶揄的に問うた。「笑」の字は竹下に犬がゐる、犬が竹の下に居れば何故にをかしいかと。王安石は返答に窮し、ギャフンと參つたと云ふ挿話がある。これも一笑話たるを失はぬが、昔しから「笑」を幸の形象としてゐる。笑ふ門には福來ると云ひ、笑堂福聚なども云うてゐる。誰やらの詩に、仙人の住居と云ふも格別の相違があるでもない。唯だ通常人の家に較べれば、笑聲が多く聞えると云うたのも、畢竟繫累のない境遇を形容したのであらう。

笑は身體の弛緩に由つて生ずるもので、愉快な形である。人は緊張してゐる時には笑はない。憂鬱のときにも笑はない。憂悶から脱すると笑が起るのは、身心が弛緩するからである。どう堪へても堪へ切れないで笑を爆發することもある。笑は陽氣な形である。噴飯など云ふ話は、堪へ切れず笑ふ極端の形容である。笑は愉快のものであるから、世には笑を賣る商賣がある。そしてそれを買ふものもある。幫間などは此稼業だし、賣笑婦と云はれる如何はしい女もある。併し賣り物の笑には眞實がなく、虚偽である。それにも拘らず買手があるのは、笑が人を魅する偉力を有するからだ。美人の一笑國を傾けた例もあり、「越女一笑三年留」と云はれるまでの引力を有する。笑は魔である。女の靨は人を擒にする陷穽である。

笑には種々の形貌があつて決して單純でない。俗に泣き笑と云ふのがあつた。これは悲喜交々到つた場合に起る複雑の笑である。苦笑など云ふ笑は不愉快の爲に生ずる笑で、據んどころなく笑うて其場をまぎらすのである。嘲笑となると積極的に反感を表現するものである。尙他に豪傑笑と云ふがある。磊落豪放の笑ひ振り、物に頓着しない態度を示すものだが、随分質物があるから氣を吞まれてはならぬ。又極めて沈着の笑がある。何か物を問うても濟まし込んで

答へず、隱者氣取のものもあるが、これも油斷はならぬ。

自分などの好まない笑は、氣味のわるい笑、意味ありげの笑、をかしくもないのに笑ふ笑、キザ味を帯びた笑、利口振る笑などは皆不愉快の笑である。全體多くの場合笑には詔諛追従が潜んでゐる。往々相手の氣分を和けて、其虚に乗らんとするものもある。低級の商人などが因習的に媚びた笑を呈するのは甚だ卑陋の形貌で、人をして嘔吐を催さしめる。笑は往々愚弄と相隣ることがあつて、此種の笑は一種の侮辱である。昔し借用證文に違約の時はお笑ひ下さいとあるのも、侮辱を甘受すると云ふのである。

笑は天真のものでなければならぬ。小兒が無心で嬉々として笑ふのはよい心持である。少女がユモアに接して笑ひ崩るゝのも氣持がよい。敢て聲を發せず微笑を漏らすのも奥ゆかしい。西洋人は日本婦人の笑顔を評し、西洋人の笑ひ顔が美であるのに反し、日本婦人は笑顔がよくないと云うてゐる。多分笑ふ時大きく口を明け相好を崩すからであらうが、天真爛漫は却つて此處にあるとも云へよう。或る詩人は「春雨や土の笑ひも野に餘り」と歌ひ、又「山々に笑はせて富士の高根かな」と歌つてゐるが、如何さまのんびりしておもしろい。吾等がかゝる純眞

無垢の笑を好む。

杖道樂

世間には杖道樂で熱心の人がある。道樂となると、自然、蒐集を事とする。杖も種々のものを集めれば數限りもなくある。材料が多般であるは勿論、産地も廣く世界に互つてゐる。或は名家の手澤を経た杖だとか、旅行記念の杖だとか、握りに意匠のある杖だとか、さまざまあつて一々擧げるわけにゆかぬ。杖も實は一種の骨董である。少くとも杖の蒐集を趣味としてゐる人が杖を見る事は骨董同様で、實用は必ずしも目的でない。この點になると、骨董を賞玩するのと、その揆を一にする。杖を遊ぶ人の中に、主力を握りに置くものがある。金銀珠玉象牙その他さまざまの彫刻のある握り、それが精巧であれば、他の部分はどうでもよいやうに思つてゐる人もあるが、そんな人は骨董においても杖においても幼穉の人で、共に談ずるに足らない。握りは蝙蝠傘のそれと同様のもので、取りつけければどんなものでも取りつけ得られる。飾

りがましいものを杖の上端に嵌め、杖の一物一體を損する事が既に面白くない。骨董などでいへば、蓋のある器物は必ず同作のものでなければならぬ。握りをつぐ事は他作の蓋を用ゐるやうなもので、杖を片輪にするのである。杖の美は決して握りの美にあるのではない。尤も一物一體を損する事なく杖の上頭に趣味ある握りを作るのは敢てあしくないが、附けものは大體褒めたものでない。骨董の極致は高雅を喜ぶ。杖においても同じくあらねばならぬ。先づ杖に必要な條件は、眞直でなければならぬ。堅牢でなければならぬ。そして割合に軽くなければならぬ。太さは上頭より下部に至るに随ひ多少細くならねばならぬ。握りは必ずしも屈曲を要しないけれども、屈曲を欲する握りは、材が屈曲性を帯びるものでなければならぬ。種々の材を見立て、適當に用ゐる事は妨げないが、多く人工を加へず、自然に前述の條件の備はるものがあるれば、杖として珍重すべきである。

日本には竹が頗る多種あつて、節の多いものなどが自然杖として用ゐられてゐる。これは適當に握りを曲げる事も出来、前掲のあらゆる條件を備へてゐるので、天然のものとして最も杖に適する。昔は等身以上の畸形の竹に瓢などを吊して風流がつたものだが、今でも西園寺公な

どは好んで等身の杖を用ゐてをられる。しかし餘りに長いのは仙人らしくもあり、按摩らしくもあつてをかしい。また騎馬用の鞭も多く竹を用ゐたが、これは地を衝くものと自から異つてゐる。支那の輕薄才子の杖は日本の鞭の如く細いが、それは洒落のために携帯するので、杖の本質を具備してゐない。日本の竹は、なんというても杖の適材である。西洋諸國には竹がないから、外國趣味のものとして大いに歡迎さるべきであるが、全體生産の日本國では格別高價のものでなく、且つ竹がまだ外國に十分理解されないために大なる聲價を博さないが、前途は有望のものと思はれる。竹には蟲の巢が存して一種の紋を印した斑竹といふがある。その斑に黒色のと赤色のとあつて、杖としても趣きのあるものだ。節の澤山であるのも一種の趣きがあるけれども、人に依つてはこれを嫌ふものもある。西洋に十分聲價を博さないのは、或はこの點にあるかも知れぬ。

西洋でも英國は特に杖の嗜があり、紳士たるの一條件であるかの如く、外出には必ず杖を伴ふ。歩行しない場合でも杖は同伴である。但だ日本の如く地上に衝くものは少なく、腕にかけたり、肩にかけたりしてゐるものが多い。恰も婦人がパラソルを携へて歩くのと一般である。

英國でどんな杖を一番珍重するかといふと、籐の上に出るものはない。籐は杖たるべきあらゆる條件を備へ、竹の如く多節でない。中には全然無節のものもある。有り觸れた籐には一尺毎に節があつて、一節毎に細くなつてゐるが、英吉利では加工して節を除くから無節のものと見紛ふものもある。この籐は肌が滑かで玲瓏たる質を有し、斑竹の如き斑點もある。この斑は人工で作つたものもあるが自然のが最も賞玩され、隨つて價も高い。紫檀や蛇樹なども杖とされてゐるが、到底籐の高雅に及ばない。自分などは杖に親しんでから十幾年と經つが、いつも購ふのは蘇格蘭のアツシで、之には露骨に節があるけれども、自然のまゝで輕くもあり、堅牢でもあり、持ちこむと一種の色澤を發して趣味を生ずる。五年七年持ちこんでやつとよくなると、道中で置き忘れたりする事があつて、何よりも惜しく感じ、旅行には駄杖を特に選んで携帯する事にしてゐる。いつぞやも自轉車に衝き當つて大切な杖を折つて、今でもその殘骸を保存してゐる。自分もいろいろの杖を購つてみたが、矢張り籐の有斑無節のものが一番よいやうに思はれる。

漫談手拭と火燧

四五の同人折々會して、酒次特に鄙俗の題を選び、漫談に打興することがあつた。自分の取り當てた題は「手拭」と「火燧」であつた。大略を左に録して笑資に充つ。

手 拭

自分の識る人で足袋の研究を熱心によつてゐるものがある。その人の言ふには、足袋程民衆のあらゆる階級に用ゐられ、これほど廣く行はれてゐるものは無い。そしてそれが日本固有のものであると。その人の研究の結果をいつか聞いたこともあるが、流石に手廣く調べてもあつた。が、私は研究するなら寧ろ手拭の方だと思つてゐる。足袋は足に穿つの外に他の用を足さないが、手拭は足袋と共に廣く行はれて、其用は頗る多般に涉つてゐる。手拭は尺が一定しあつて、其本務は洗面や入浴に用を足すものだが、それがいろ／＼の事に應用されてゐる實況は、

プロ階級に就て見れば直ちに會得される。印度人のごとく頭を包む時は帽子の代用となり、頭邊に結びつければ襟巻となりネックタイとなる。時には顔を隠す爲めに用ゐられ、食事の時に衣類を汚すまいと膝に置けばナプキンの用を爲す。或は紙入や錢入を包んで懐中に入れ、或は辨當箱を包んで肩に掛ければ風呂敷の用をする。團體などが揃ひの手拭を襟に挿めば徽章の代りとなり、怪我などした時は急場の繻帶ともなる。時には兇器ともなつて猿轡となつたり、締め殺す具ともなる。手拭があらゆる階級殊にプロの社會に調法がられるのは偶然でない。近來西洋風のハンケチが大に行はれてゐるけれども、手拭のやうには融通が利かない。昔は手拭を染めるに種々の意匠を凝らし、互ひに得意の物を持寄つて手拭合せをやり、意匠の競技をやつたこともある。この時分は藝妓や俳優が客に配る手拭に精根を凝らした。随つてその意匠に見るべきものもあつて、その手拭を大切がつたものもある。親和といふ人の書が染め抜かれたのを親和染と云うたり、種彦の田舎源氏や馬琴の八犬傳が大に行はれた時には、その圖が手拭に染められ、作者も鼻をうごめかしたものだ。京都の田舎の八瀬、大原あたりでは、婦人は今でも手拭を裝飾用として、染めや意匠を粗略にしない。前年京都の大丸呉服店でいろ／＼の

手拭を陳列したことがあるが、八瀬、大原の分が殊に目を惹いた。八瀬と大原は接近の地であるが、それらの特徴があつた。元來ローカル・カラ(地方色)は手拭に於て見得べきもので、温泉地の手拭には温泉が畫かれ、風景自慢の地方にはその風景が染めぬかれ、或は物産、或は風俗など、地方色を見るべきものが大いに意匠されたものだが、今は商店や旅館などは自家宣傳に偏してゐる傾きがある。併しそれにしてもその間に地方色が看取されないでもない。

ブルジョア階級は別だが、本所、深川あたりのプロ階級車夫、労働者等の片時も體から離さないものは手拭で、その冠り方、手に持ち方、腰に下げ方、襟に巻き方などに就て、仔細に考現學者が研究したのを見ると、頗る興味を感じるが、爰には一々紹介が出来ない。兎に角同じく冠るにしても男女に相違があり、襟に巻くにしても相違がある。仕事に熱中する時には喧嘩をするときと同じく向う鉢巻となり、人に敬禮を表し跪いて物でも言ふ時は、手拭を固めて手に緊握するのが例である。斯様な扱ひ方を見ると、手拭と精神作用には離る可からざる關係があると思はれる。都會の氣負ひのものは手拭の扱ひまで生きてゐる觀があるが、田舎ではダラリと腰に下げてゐる。これだけでも都鄙の人氣が窺はれるではないか。

大衆用のハンケチは何と云うても手拭である。廣告用としてもこれが商家に専ら行はれて居るし、進物用としてもこれが調法である。日清戦役に出征軍人に何を贈るべきやと早稲田大學で案じた時も、手拭を遣ることが尤もよいとあつて、谷將軍の激励の書を染め抜いて幾萬本送つたことを思ひ出す。我國の如き温浴好きの國民は、手拭は一日も缺き難いもので、クウルなどが大分行はれて來たと云へ、日本固有の手拭の生命はまだ頗る前途がある。

火 燧

火燧はよく工夫された我邦の暖爐である。置火燧といふは、どの室へも持ち運びの出来るもの、火爐の切つてある處には槽をかければ直ちに火燧となる。僅かばかりの火がよく保たれ、火氣が掛け布団に移つて如何にも暖かい。四方に四人入ることが出来るは勿論、狭きを厭はねば、六人乃至八人まで入ることが出来る。このやうに寛ろいで暖を取り得るものはない。寒國の家庭に備へてあるは勿論、旅舎に於ては各室に之れを備へることが客を喜ばせる一法となつてゐる。輕井澤などでは、寒中土間に火燧が作られてあつて、旅客は草鞋の儘踏みこんで、暖

を取りながら、櫓の上に杯盤を載せ、飲食せしむる茶屋があつた。これは自分の書生時代のことで、今も同じことであらう。

川柳は火燵を頌して「四角でも炬燵は野暮なものでなし」と喝破してエロテツクの意を寓してゐるが、火燵は何と云うても寢所のものである、閨房のものである。いくら角張つてゐてもエロテツクの味なきを得ない。男女接近して、互ひに遠慮なく足さし延べ、衣類亂れて股もあらはに、火氣に浴せしめるは、此の暖爐の特色であつて、疲れたるものはオツトリ眠りに墜ちるもあり、戀するものは低聲に語るもある。だから吝氣ものは常に氣を置いて油断せず、川柳の云ふごとく「火をもつてこたつに水をさしに来る」ことがある。時によりては火燵が戀の隠れ家に充てられ、或る時は人の目を避けんとして男を火燵の中に隠し、或る時は女を隠すこともあり、意地わるは男が女を隠し居ることを知つて、川柳子の云ふに倣つて、態と烈火を爐中に取り添へて、隠れたものを困らしたことは近松の書いたものもあり、ある才氣ある女郎は萬一の場合を考へ、火燵の火を撤し、自からそれに隠れ、辛うじて目を避けたとは西鶴の説く所。その趣向は異なれども、火燵を避難所としたことは同じである。

日本の習慣では、相當嚴格の家庭でも、男女の共に火燵に入ることを餘りやかましく云はぬが、火燵のぬくもりは春心を挑發するものだから、實は危ないものだ。田能村竹田の「置こたつ」に云く、

この世はあだの假まくら、むすぼれ易い櫛の齒に、ほつれて見する洗ひ髪、惚れたといへば、べつたりあつい厚化粧、いやぢやといへば、どうやら小棲の水淺黄、したでもなしせんでもなき、ゆふべ結んだ一重帯、ながいせんぎはまあおいて、これこゝに燕がある、飯あがれ、雑魚がある、酒ひとり、氣の合うたどし、寄合うて、膝と膝とをかうすり合せ、火鉢の不祥じや、こらへてくれと寄りかゝり、ちよと話してさつと笑うて、あとはなんにも置火燵、

墨江回顧

老い來つて兎角舊を憶ふことが多い。墨江の橋場に住した頃のこと、動もすれば夢裡に往

來する。實は墨江は思ひ出の多い處である。もとの風色が全然ない今日でさへ、散策に往き足をこゝに向ける。何と云うても東京の第一の勝槩地は此處である。雪月花が無くとも、風物が如何に變じてても、東京の呼吸を司るものは此の一帶の流れである。此頃も蘆洲の書いた「墨江兩岸圖」二卷を購ひ來つて、備さに展觀し、懷舊の資に供した。此圖は自分のまだ生れない前に書かれたものだから、自分の青年時代に見た風物とは違つてゐるが、それにしても今日の風物よりもまだ似寄つた所がある。自分が橋場に暫時居を構へた頃は、まだ二十歳位の時で、病體の先考の保養の爲、特に閑地を選んで住したのであつた。幸ひに江に面した或る富豪の別莊類の所を見出して、そこに居た。家は狭かつたが、二階に座敷と二間小室が添はつてゐたので、自分は二階を占領し、日夕此處の風景に親んだ。此頃小野梓君が矢張り橋場の義兄の屋敷の構内に住して居られたから、頻繁に往來した。吾々同人が小野君を中心として鷗渡會を設けたのも此頃であつて、諸同人は、小野君を訪問の往き還りに、自分の居に立寄つたものである。此頃の橋場、今戸あたりは江戸時代と餘り變らず、此邊には多く名流の別莊地があつて風流の地であつた。前岸にもまだ西洋建築などは一字もなく、野趣が漲つてゐた。河水には船が往來す

るのみで、野暮な川蒸氣などはまだ無かつた。朝は霧立ちのぼる間に模糊帆影を見、夜は枕頭に櫓聲を聞いた。此頃漢詩人等は向嶋は雅稱でないと云うて夢香洲と命じた。自分の樓を枕江樓と名づけて、逍遙居士が長文の記を作つた。此樓名は同人が書生時代自分を呼ぶに市ン公の名を以てしたので、音の近い處から此名を命じたのである。自分の長い書生境界は多く山の手の僑居に日を送つたが、此の勝槩地に居を移したのは自分には尤も愉快であつた。但し餘り長くも居らなかつたが、其後亦偶然橋場に一ヶ月計り起臥することになつた。是は廿三年議員選舉の跡で、自分が郷里から出京した時に、宗家の別莊が此所にあつて、留守居の外誰れもゐないのでそこへ身を寄せ、再び橋場の住人となつた。此別莊は前岸の植半と向ひ合せになつてゐたので、三食は植半から船で運んできた。贅澤な食客であつたが、孤獨の生活は面白くないので、日中は大抵外に出あるき、夜分になると淺草の觀音邊に一杯を傾けて歸るのが例であつた。酔後枕頭に櫓聲を聞くことが何よりよい氣分であつた。尙ほ追懷すれば、前岸向嶋にはいろいろの友人が住した。内藤(久寛)や三輪(潤太郎)などの郷友もゐたが、濱村藏六、饗庭篁村、幸田露伴、大久保湘南、淡島梵雲などもゐたので、橋場を去つて後も、墨隄にあこがれ、時々諸

友を訪うたこともあつたので、考へて見れば墨水にはなかく縁因がある。夢中往々去來するのも偶然でない。曾て「新潟新聞」の記者山田穀城が初めて上京した時、今日江戸時代の氣分を味ひ得る所があるかと云ふから、自分は伴うて先づ淡島梵雲を訪ひ、椿岳の遺址を見せて、それから長堤を歩いて、所謂の鷗の渡で船に乗り出した時は既に夕刻で、暮靄は川を罩めてゐた。中流で四方を見ると、蒼然たる暮色は太古そのまゝで、文化的の何物も目に入らないので、穀城も廣重の繪を見るが如くであると興じたことを想ひ出す。又阪口五峯が自分の爲め鶏血石歌の長篇を作つた時、一會を催したのも中の植半樓で、其時席に陪したのは藏六と湘南であつて、湘南が得意の吟聲で此詩を誦し、自分は高芙蓉の印を五峯に贈ると一場の演説をなした。當時これを文壇の佳話と云うたが、今は三人皆白玉樓中の人となつて、予獨り瓦全であることを思ふと黯然たらざるを得ない。尙ほ思ひ起せば、吾等が兎もすれば一醉を買つた入金と云ふ待合の名の雅を缺くのが氣に喰はぬとあつて、誰れも頼みもせないに、苦心して透遷錦の三字を撰んだのも此時であつた。いろ／＼追想に耽けると際限もなく過去の事が湧き、遂に寺門靜軒が晩年橋場あたりに僑居して、「江頭百詠」を著したことに想ひ到つた。あの詩人は吾が郷國に

三年もゐて、「越女一笑三年留」の前輩の句を實にし、吾等に縁因がない譯ではないが、時代が異つて、吾等はあの詩人と席を同じうして夢香洲の詩趣を談ずることを得なかつた。しかし「江頭百詠」は今尙流布してゐる。夢香洲を知るの詩人は恐らく此人より以上のものはあるまい。今左に百詠より數詩を摘録する。

霞抹遙山風力和。滿堤花影浸平波。哀絲豪竹紛如沸。春正深時舫正多。

春眠喚醒倚窻紗。水鳥聲中婢報茶。旭日未昇船未走。閑看倒影一堤花。

漁艇帆寒落暮天。蘆洲花白入殘年。江邊近日絲聲少。擣月村砧隔水烟。

江天催晚色。相逐畫船移。帘影餘殘照。絲聲帶艷思。花昏木母寺。月上水神祠。渡口極喧

聒。人堆舟欲危。

江波碎月夜潮回。前灣秋色入悲哉。枕上愛聽人定後。櫓聲去處雁聲來。

漁舟ノ入影西東。白葦黃茅畫軸中。忽地何人加點筆。一繩寒雁下秋空。

渠頭際晚舟如織。伊軋波驚櫓似梭。又欸又張交相避。問容毛髮不曾磨。

水樓夢覺聳吟扇。月落長堤曉爽然。想像花陰滴濃露。茶棚未看箇揚烟。

簾前棲鳥起。岸暗水光浮。側臥吹烟處。曉帆上枕頭。

午睡回時日未收。一江風物伴閑愁。箇中愛那殊成趣。岸上行人水上舟。

寒江風度自淒兮。蘆荻萎霜洲渚低。半夜幽清何限味。樓頭夢醒水禽啼。

浮槎四五丈。棹客二三蓑。似艇而非者。比舟風致多。

試揭湘簾憑曲欄。不看遊舫過前灣。模糊始識淡粧好。花隔水烟江雨寒。

秋意方深綾瀨天。水光如練露光妍。淒然咽月渾如沸。萬種蟲聲萃一船。

此等の詩、墨江の樓雲、風帆、雨蓬、烟靄、嫦娥、沙禽を描して、さながら畫の如し。到底江頭に起臥するものにあらざれば此等の句を拈出し得ない。自分の拙なる文を以つて景物を叙せんよりは、靜軒翁の詩を藉り來る。

書齋雜興

讀書萬能

昔しから讀書を讚美した詩や歌は多くありますが、私は先づ本居宣長の歌を藉りて讀書の禮讀を試みます。一日一夜書物を讀まねば千年も讀まない様な氣がするといふ歌に、「さはりありて一日一夜もふみ(書)見ねば千年も讀まぬ心地こそすれ」とあります。楽しみはいろ／＼あつても讀書に優る者は無いといふ歌に、「楽しみはくさ／＼あれど世の中にふみよむばかり樂しきはなし」とあります。讀書してをると心に春夏秋冬の季節がなく、書物の中で花が咲いたり、月が澄んだりすることを感ずると言ふ歌に、「ふみよめば心の内に時わかず花もさきたり月もすみたり」とあります。讀書して居れば人が尋ねて來ないでも、又酒を飲まないでも、寂しいこととはないと言ふ歌に、「ふみよめば絶えて寂しき事ぞなき、人も訪ひ來ず酒ものまねど」とあり

ます。いくら夏あつくとも、書物を読んでゐれば暑さを忘れて扇が要らぬと言ふ歌に、「暑けれどふみよむ裡は忘れられて、夏も扇はとらんとせす」とあります。必ずしも讀む爲めでなくとも、和漢の様々の本を集めるのも楽しみであることを詠じて、「讀まねども倭もろこし諸々のふみをあつめておくも楽しみ」と言うてゐます。そして最後に、遊ぶには暇のある人々が書物を讀む暇がないと言ふのを諷して、「をりくりに遊びいとまのある人のいとまなしとてふみよまぬかな」というてゐます。

讀書の禮讀は大凡そ以上の歌で盡きてゐるかに思はれますが、實はこれのみではありません。私は申したい。貧賤を累とする勿れ、書物中に富貴あり。九尺二間のわび住居を悲しむを休めよ、書物の中に大厦高樓あり。妻なくして孤獨を哀まんとする莫れ、書物中に賢妻あり。妻が醜婦だというて歎くな、書物の中に美人がある。酒がほしければ書中に酒あり、うまい下物を欲すれば、それも書中にあり、清涼劑も刺戟劑も皆書物中にある。悲哀の人は書物に依つて慰められ、興奮の人は書物に依つて落ちつく。分別のつかぬことは書物で教へられる。俗界に清地を求めれば、それは讀書である。汚濁の世の中に淨土を求めれば、それも讀書である。古い言葉に、

工夫があつて書物を讀めば、そこに造化があると申してゐますが、實に名言であります。

昔しから讀書家にいろくゝの流儀があつて、大切な書物は滅多な場所に讀まない人がある。井上金蛾と言ふ學者などは極端な人で、或る大切な書物を獲た時、これは塵深いエロ・グロの市中に讀んでは勿體ないと言うて、態々藩から休暇を貰うて箱根に出かけて讀んだと傳へられてゐますが、これは極端ですけれども、讀書は讀む處で其趣が違ひます。地誌などの類は、其土地に入つて讀みますと常に分らんことが分り、一種の興味を覺えます。旅で一二の書物を携へ、無聊の折柄讀みますと、案外身に沁みて得る所があります。書齋にゐてはいろくゝの書物があつて氣が移りますけれども、旅中は一冊の書物に氣が集中するからであります。深夜人定まつて後の讀書は身に沁むもので感じが深い。繁劇の人が偶々閑を得て、書物に親しむのも愉快なものです。

専心書物の讀める所は牢屋です。しみくゝ書物に親しみ得る處から、平生いそがしく讀んで分らぬことも分る。哲學的の書物なども精讀するによい處である。相當讀書能力があつてアダに光陰を送りたくないと考へるものは、讀書するが何よりです。未決監に數月若しくは一年餘

も居るものがいくらかもあるが、此の時間を無駄に費さなかつたら、なか／＼大なる修養が出来る。高島嘉右衛門と言ふ人は自分も懇意であつたが、あの人は易の學問は浅かつたやうだが、占には他人の及ばない處があつた。あれも牢屋で自分の運命がどうなるかを判断する爲めに、易經を全部誦して、一所懸命に判断を試みた。これがあの人の易斷のそも／＼初めである。あの人の易の研究は牢屋でやつたものである。今も思想問題で刑務所に置かれてゐるいろ／＼の人があつたが、あの人の見聞も、さまざまのマルクス反對の論説を讀ませて其知見を聞いたたら、自然に非を覺るであらうと思ふ。牢屋は思想の鍛錬場である。

斯やうに讀書は境地により氣分が異なる爲め結果も異なりますけれども、境地を選んで讀書をするとなると、時間を無駄にする不經濟が起ります。今日人間は毎日々々如何に時間を無駄に送つて居りますでせうか。敢て人と語を交へるでもなく、自分から何事か考へるでもなく、亦坐睡するでもなく、唯だボンヤリ一二時間を毎日々々費すものがどの位ありませうか。郊外に住んでゐて、電車で朝夕都市へ往來する人は大概往復二時間を費します。これを讀書に費したら、どんなものでせうか。毎日の二時間は一年で七百三十時間、即ち約一ヶ月に當ります。

これを唯だ欠伸で過すことは随分馬鹿げたことではありませんか。

労働者の労働時間を八時間に制限したわけは、その健康を保たせる爲めでもありますけれども、そればかりではない。時間に餘裕を與へて、その時間を自家修養向上の圖りごとを爲さしめる爲めでもあります。即ち讀書といふことが修養の爲めに尤も大切であることは論を待たないのであります。勿論むづかしいものを強ひて讀めと言ふのではない。それ相應のものを何でも讀んでよろしい。この餘裕の時間をレジュー・アワーと申しますが、これを保健と向上修養に利用するで無ければ、労働時間の制限は意味をなさないと思ひます。餘分の時間があるからと言つて、酒を飲んだり賭博などをやつたりすれば、八時間制限は寧ろ害惡に導くものとなります。我邦の労働者は、動もすれば此制限の趣意が分らず、却つて迷惑がるものがあります。兎角時間に餘裕があると却つて費用がかかる。寧ろ長時間働いて収入が多く、金を遣ふひまのない方がよいと申しますが、此等は畢竟レジュー・アワーを修養に用ゐることを知らないからであります。私は労働に従ふ人に飽くまで讀書を勧めたい。労働爭議などで随分十日乃至三十日も業を休むことがあります、その休む間の幾許の時間でも讀書に費したら、或はその得る所

は争議の結果賃銀で得る所より遙かに大なるものがあらうと思ひます。

我邦では、兎角落付かねば本を読まない癖がありますが、西洋の習慣に倣つて、どんな場合でも寸陰を惜んで書物を読む習慣を養ひたい。汽車でも自動車でも電車でも、ひまがあれば西洋人のごとく必ず欠伸、居眠の代りに讀書することに致したい。乃ち讀書をする所は、どこでも書齋であると考へて欲しい。

今は書物を箱に入れて、ぐるぐ廻して村落などの人に見せる法もありまして、それを巡廻圖書館と申してゐます。既に移動圖書館があります位だから、移動書齋もあつてよい譯です。誰れもが本を開いて見る處は、公園でも車中でも、それが即ち書齋だと思へばそれでよいのです。丁度、昔しの高僧が一年四方に巡錫して、大道端でも船中でも、法を説く所が即ち寺だ道場だと言つたやうに、どこにでも書齋のあるやうにしたいものであります。

書物を読む尤も適當の境地は自分の家に書齋を有することでありませう。けれども、これはある少數の人に限られることであります。しかし今日は幸に共同の大書齋が備つてゐます。それは迎も一個人が有ち得ない整頓した立派なもので、どんな本でも澤山備はり、極めて靜肅の

間に讀書が出来ます。夜は明るく、冬は暖かで、四面が立派に裝飾されて如何にも氣分がよい。こゝに居れば、來客に妨げられることがない。債權者も來ない。こんな處はどこにあるかと言へば、それは圖書館であります。これほど讀書によい境地はないのに、何故に之れを閑却してゐるのでありませうか。老人などはヒマがあるのに一向之れに足を運びません。八時間制下の勞働者も之れを利用することをしませんのは遺憾と申さねばなりません。世界の富豪カーネギーが、あれほどエラクなつたのは村の小圖書館のお蔭だと言つて、富んでから方々に圖書館を建設して金を惜まないのは、畢竟圖書館の大切みを體驗したからの事であります。圖書館がどれ程大切な効果があるか、この一例でも分りませう。外國では老幼男女の別なく圖書館に通ふのを此上ない楽しみとして居ります。畢竟小學時代から圖書館に親しみ、それが習慣となつて居るからです。我國に於ても此の習慣を起して、時間の無駄を有用に轉じなければなりません。文化の進展、國民の向上にこれほど大切な事はありません。(右某歳讀書週間の放送)

進獻本と獻題

圖書を進獻する事は日本でも、支那でも、西洋でも、古くから行はれてゐる。西洋の圖書の標題には往々誰にデダイケート(捧げる)するといふ事が書かれてゐる。また特に一頁の餘白を割き、國王にデダイケートするとか、某貴族にデダイケートすると大書してゐるものもある。それが獻題である。必ずしも自家の著述に限るわけでもないから、私は廣義に圖書の二字を用ゐんとする。日本と支那とはデダイケーションの標榜の形式が、西洋とやゝ異つてゐる。近年日本の圖書で西洋の例に倣ひ、タイトル・ページに獻呈を標榜するものが續々現はれて來た。私は今獻書の沿革を述べる用意と暇を有たないが、おそらく佛に經を獻する事が最も古くから行はれ、獻書の淵源はそこにあるかに思ふ。納經には寫經もあり、刻經もある。その獻納の意味は多くの場合卷末に録されてゐる。それは何人も周知の事である。圖書の出版完成を神に祈願した例は、盲偉人塙保己一が群書類従の出版を心掛けた時にある。初め塙がその目録を印

刷して世に頒つた時、その表紙裏に左の如く記してゐる。

此書の趣意は、本朝の古書多くありといへども、世々の兵亂、度々の大火に就きて過半亡失す。今其幸に残れるもの一千二百七十三種、集めて六百七十冊となし、梓に上せて以て不朽に傳へんことを思ひ、いにし安永八亥年より天滿宮に祈誓して、毎朝鹽味を絶ち、般若心經百廿卷を誦讀し、開板の速にならんことをねがふのみ。

とある。これは獻書の例ではないけれども、鹽斷ちまでして心經を讀み、祈願を籠めた位であるから、刻本の成つた時、先づ菅廟に獻じた事は勿論であると思ふ。

獻書の最も手近い例は、頼山陽が日本外史を樂翁公に獻じた事である。この書の卷首には進獻の文が收めてあつて、樂翁公の自筆の私文も共に收められてゐる。山陽の文には、

不圖邸吏帶閣下之命。來就襄家取所著私史。欲賜覽閱。禮意殷勤。愧悚交至。夫襄不敢求於閣下。而閣下求於襄。襄之榮大矣。復何所嫌而辭避乎。

右の如く山陽は見識ばつた事をいうてゐるが、公から求めたにしても獻じた事には變りはない。すなはちデダイケーションの明かなる一例である。

ふるく鎌倉時代にさかのぼつて見出だす一例は、虎關禪師が元亨釋書を著して、時の天子後醍醐天皇に進獻した事がある。虎關が元亨二年八月十六日、この書を獻するについての上表は卷首に收めてある。それによると、

如是至寶不敢私蓄。敬上陛下。弗爲僭越耳。……乞降中書得受官校。若有可采。入大藏行天下。於戲瓊瑤之玩弄王者之事也。匹夫唯輸貢而已。然則此書之流播陛下之任也。云々

虎關はかくの如く稿本を闕下に獻じ、官の校訂を経て、もし採るべしとすれば一切經の中に入れて、廣く天下に傳播せしめられたい。かくの如きは陛下の責だというてゐる。虎關の進言は随分露骨であるけれど、進獻の一例として著名のものとなさざるを得ぬ。

水戸の進獻本は一にして足らない。なかんづく大日本史は最も著名のものだが、時代からいふと、それは文化年間の事に屬し、近い時代の事であるから、順序として後に廻し、徳川光圀が禮儀類典五百十卷を闕下に獻じたのを、先づ挙げねばならぬ。この書は貞享三年秋より編輯を始め、成功の後右大臣藤原公觀によつて奏覽に供し、書名の勅賜があつた。また光圀が弘仁より承應に至る間の名人の遺什を名山靈區に探り、これを編輯して三十卷となし、闕下に獻じ

た扶桑拾葉集もまた書名を勅賜された。すなはち進獻本に書名勅賜の例としてこゝに特記を要する。

大日本史は進獻の上表を卷首に收めてある外に、別に叡覽の次第を叙した一文が載せてある。それによると、文化七年の冬大日本史の刻本に上表を添へて京師に送り、關白藤公の内覽を経て十二月朔日藤公より御覽に供へ、皇上の嘉賞を得た事を叙し、聖旨は特に朱摺にして卷の冒頭に附してある。それは左の如くである。

專據國史。博考群書。爲一部之書。昭代之美事。堂構之業。勤勞可想。

右の如く聖旨を刻する事は支那には多く例があるが、日本においては稀なる例である。

將軍に獻書の例も少なからずあれども、手近の例は林道春が正保年間に日本紀以來の國史を參考し、繁を刪り要を取り、闕を補ひ遺を拾ひ、宇多の一朝を加へて纂輯四十卷となし、本朝編年録と名づけて將軍に獻じたのが著名の例である。道春歿後その子春齋がさらに續篇を作つて進獻するに至り、書名を本朝通鑑と改めたのは將軍の命に出づるもので、これもまた賜名の一例と見るべきである。

日本の進献本の例はいくらもあるが、先づ以上に止め、さらに外國の例を案ずるに、差當り日本に關する圖書の範圍に一二の例を擧げる事が出来る。すなはち有名なマルコ・ポーロの東洋紀行の卷頭を展べて見ると、一枚の餘白を割いて國王に捧ぐと大書してゐる。また一六四五年佛國で譯したピントウの東洋紀行には著名な僧正カーディナル・リシリユーに捧ぐとあり、一八三四年アイザック・テツチングの佛譯した日本王代一覽はムンスター伯に捧ぐと明記してあるなど、進献の例は澤山あつて一々擧げる事が煩はしい。

以上擧げたいいくつかの例で考へると、進献の問題は甚だ簡單であるかに思はれるが、實は神佛や高貴の人に捧げるのみが進献でない。由來進献は一種の敬語であつて、目上に對して多く用ゐられる語だが、廣い意味で進献の場合をいふと随分複雑である。また進献と明かに斷つてなくとも進献と見らるべき場合もある。書物の序や例言などに誰のためにこの書を作つたとか編したとかあれば、それが矢張一種の進献本である。或は君公のためにし、或は父母のために書いた文の如き、また亡き父の志を繼いで完成した著述の如きは、何らの表示がなくとも、君父に捧げる性質のものである。私はデデイクートといふ言葉を軽く取りたい。誰のため、かれ

のためとあるを矢張デデイクーションとしたい。著書の中には、子孫のため或は門人のためにすると、例言や序に斷つてあるのがある。その中には子孫、門人を藉りて謙遜でいうてゐるものもあるが、一概にそんな文字にとらはれず、その實體から判斷して、その然ると然からざるとを推定したい。子孫のためにするといつても、實は廣義のデデイクーションである。

多くの場合デデイクーションは謝恩のためにするものである。例へば、自家の著作や研究を助けた人に、謝恩的にその書を献ずるのは最も自然の事である。その研究を助けたといふうちには、多くの材料を供給してくれた場合もあらうし、衣食を與へて生活を助けたといふ場合もあらうし、刻費を出してくれた場合もあらう。以上は皆著作の出産に直接の關係があり、これなかりせば出産がなかつたかも知れないのであるから、恩人にその産物を捧げるのは自然の情誼であらねばならぬ。尙著作に對し直接何ら恩恵をうけないにしても、他に深甚の恩誼に浴した事のある人が、それに酬いんとしても酬いる方法がないので、著書を捧げて、せめてもの情を遣る事もあらう。

謝恩のために圖書を献ずるの例は餘りに多いから、特に擧げるに及ばないと思ふが、謝恩の

ためながら、愛書家に圖書を刻して獻じた内外一對の例がある。かくの如きもまた獻書の一體であるから、こゝにそれを擧げて見よう。一八二三年頃、英國にスペンサー卿といふ好書家があつて、殊に豆本を好み、書肆に命じて出版せしめたものも少なくなかつた。書肆はその眷顧に對し、種々の豆本を作つて進獻した。私の所持してゐるのはダンテのデブアイン・コメデーであるが、卷首に進獻の意味が刻されてあつて、卷末には進獻のために作つた豆本の目録が載つてゐる。その中には沙翁全集の豆本も見えてゐる。日本で同じやうな例を求めると、書肆慶元堂が宋本參校經典釋文三十冊を翻刻して、吉田篁墩の靈に捧げた一例がある。慶元堂主人は老泉というて篁墩に師事したもので、書物の出版についても種々の指導をうけた恩誼がある。篁墩は平生經典釋文の佳本を得たいと苦心したが、終に得る事が出来ずに歿したので、老泉は後年漸くこの書を手に入れると篁墩の志を思ひやり、これを翻刻して、發賣に先ち篁墩の靈に獻じたと傳へられてゐるが、これには人情味の濃かさが感ぜられて、美談とするに足るものがあるやうに思ふ。

謝恩以外の進獻の場合を案ずるに、いろいろの例がある。その一二を擧げると、友人の著書

の誤りを正したり、或は駁論を書いたりして友人に示さんとするに、友人が故人となつてゐる場合などに、亡友に捧げる例がある。或は友人に某の書を著する事を約束したのに、其人が故人となつた時なども、その靈に捧げるやうな事もある。哀悼の詩篇を故人の靈に捧げたり、愛の詩歌を情人の靈に捧げたりする事もある。或は皮肉に政治の得失を論じ、警醒を庶幾する目的をもつて國務大臣に捧げたり、非違を彈劾して警視總監に捧げたりする如きは、共にその人の閱讀を促す趣向から出てゐるのである。或は懺悔の告白を嘗て己の行動に忠告した人に與へる如き事も稀にある例だが、以上は謝恩とは全然異なる場合で、デブイケーションの動機は頗る複雑である。

そして最後に一つ異つた例を擧げる。脚本などで、その主人公が如何にもよく書かれてゐると、獻題にその主人公の靈に捧ぐと書く事がある。ところがその主人公を扮する俳優が如何にも妙を極めて、さながらその主人公の靈が乗り移つてゐるかの如き場合には、むしろその俳優に捧げる事が當然だとした例もある。すなはちロスタンが脚本シラノ・ド・ベルジュラツクの獻辭に左の如くあるのがその一例だ。

余はこの詩卷をシラノの靈に獻ぜんと欲す。されどシラノの靈は、コクランよ(俳優の名)、君に乗り移りたれば、今はこゝにこれを君に獻ず。と。

徳川氏の藏書は如何に取扱はれたか

吾が皇室の圖書寮に保管されてゐる圖書は、概ね徳川氏から引繼がれたものであるから、その沿革を知らんとすれば、勢ひ徳川氏の書志に據らねばならぬ。それに就てはいろ／＼の文獻も存してゐるが、近藤正齋(重藏)の書いたものが尤も委しい。それは誰れしも目を通してゐるものだが、自分は此頃偶然一冊の寫本を獲た。それは欄心に宮内省とある罫紙三十五枚に書かれた、幕府の書籍の始末記である。之れを獲た時に、近藤正齋の右文故事などの抄録であらうかと思つたが、比較して見ると全然異なるもので、近藤のは、右文故事にせよ書籍考にせよ好書故事にせよ、書物の來歴や考證には委しいが圖書事務に關することは甚だ疎である。實は自分は今久しく幕府の圖書の取扱ひを知りたかつた。此の寫本を得たのは誠に仕合はせである。實

は舊幕藏本の考證にはおのづから成書もあり、差當り近頃圖書寮で出版された善本目録は考證の頗る委しいものであるから、自分は全くそれ等の事に觸れず、單純に幕府が如何に圖書を取扱つたかの事務の一端を擧げて見たいと思ふ。

幕府の圖書は家康公の手澤を経たものを始めとし、歴代の將軍の閲覽を経たもの、諸藩よりの進獻本、幕府が特に撰著せしめたもの、家記に屬する者等等、頗る多般に涉つてゐるが、幸ひに家康公以來一回も火災に罹つたことがないので、皆儼然と存してゐるのは實に幸ひと云ふべきである。但だ此等儲藏の圖書は書物奉行まで設けて大切にされたことは想像に難くないが、敢て今の圖書館のなすごとく、縦覽せしめた譯でもないから、或は徒らに死藏されたのではあるまいか。學問好きの將軍が偶々出れば特に圖書を買ひ集めたことがあつても、然らざる場合は圖書の増殖を圖るやうなことは無かつたのではあるまいか。尙立入つて云ふと、將軍は己れの好む所に偏して圖書の蒐集をしたことは無かつたか。將軍は勝手氣儘に寵臣に圖書を與へたやうのことは無かつたか。儉約などの爲めに圖書を蠶食に委したことは無かつたか。貴重の圖書には特別の扱ひをしたかどうか。偽書や俗書は在るに任せて保存したかどうか。これ等に就

いては、種々の臆測も起り、いろ／＼の疑ひも生ずるのであるが、幕府の圖書の取扱振りを見ると、案外に行き届いたものであることを知つて、想像の甚だ誤つたことを覺えるのだ。其取扱振りは後に説くが、それに先きだち幕府の書庫の沿革を略叙すると、家康公駿府在城の時代には、其愛藏の圖書は大體駿府にあつて、林道春に委されてあつたらしいが、家康薨去の後は水府、紀州、尾州の三卿に幾許かを分與され、他の希世の圖書は皆江戸に移されて、駿府の文庫は爰に廢絶を告げた。司籍の官即ち書物奉行を置かれたのが寛永十年十二月で、當時江戸の文庫はどこにあつたか分明を缺くが、寶永七年六月紅葉山に於て御文庫を舊貫より狹めて改造すとある。これが所謂紅葉山文庫で、又東御文庫と稱するものである。恐らく前の文庫も同じ處にあつたのであらう。後に正徳元年に一庫を建てられ、同三年に又一庫を建てらる。即ち前のは西の御文庫で、後のは新文庫と稱した。此の新文庫は櫻田邸にあつた藏書を移す爲めに造られたのだと云ふ。そして後年毛利出雲守(高翰)が二萬餘の圖書を獻するに迫んで又更に一庫を建てると至つた。これに就ては後段に述べる。

全體幕府の圖書はどれほどあつたものか。正徳の頃四萬冊あつたのに、その後三萬六千冊加つたとある。毛利出雲守一家の進獻本だけでも萬餘もあり、圖書集成のやうな大部の本も加はつてゐるから、正徳後増加したのも四萬に近いものがあつたであらう。當時としては實に豊富の收藏であり、之れが保管だけでも容易ならぬ事務であつたに相違ない。或る時代に修繕を要する圖書を検査させた結果壹萬八千冊と分つて、それを八年かゝつて修補したとあるのも事務の一端が知れるのである。

さて當時の圖書事務はどんなものであつたかは、私が獲た始末記が年代順に巨細に語つてゐるから、それを全部掲載するに若くはないが、此の「圖書館雜誌」には到底それは不可能であるから、やゝ目覺しい事務を簡單に條列する。遺憾なことは、紙に制限があつて、年次を一一記すことも出來ず、事例も多く擧げ得ないことである。

一 圖書事務の最も大切なるものは勿論目錄の編纂である。その編成法に就てはしほ／＼論議され、改訂もしほ／＼あつた。そして終に出來たものは、本篇目次共に十九冊、始末記一冊、來歴志四冊、彙刻類目十八冊、合はせて四十二冊。之れを重訂御書籍目錄と題し、五部を進呈したとある。全體目錄は必ず三部を作ることが例で、一部は將軍のお手許に、一

部は書庫に備へ、一部は林家に置かれたもので、目錄の改定毎に繕寫するには能書を選び、奉行や林家がそれを點檢するなど、なか／＼の手數であつた。

一圖書の校訂も大切な事務の一つで、これだけは今の圖書館には及びもつかぬことで、唐本も諸家から借り集めて嚴密の校正をなさしめるには、その道の學者を多く勞した。一二の例を挙げると、類聚三代格を京都の祠官羽倉齋宮(荷田春滿)へ送つて考定せしめられたことがあり、文獻通考を再三校正すべき命があり、明月記の闕本を水府藏書を以つて補正すべき命があり、園太曆、日本後紀纂の校正の命があり、武徳大成記編輯疎脱なるにより改訂すべしとの命あるなどは其の實例の一斑である。

一校訂の外に謄寫も亦事務の一つで、京洛の伶官豊伊賀守藏本の掌中要録を影寫せしめたり、甘蔗の事を諸書より抄録の命があつたり、柴野栗山に明實錄闕卷の補寫を命ぜられたこと等、一にして足らない。

一圖書の出納に關して嚴重なる掟があつて、縱令將軍のお手許に廻つてゐるものでも、定期に必ず取調べた。此點は今の圖書館の取扱ひと同様である。隨分諸侯に借覽を許された例

もあり、天文、醫學の専門家に貸された例もあり、庶物類纂七帙は醫學館に貸されたが、それは回祿の災に罹つた。塙檢校が或る典籍を拜借して讀んでもらつたことも見えてゐる。

一禁廷へ書物を獻ぜられたことも度々ある。經解を進獻せられたこともあり、文獻通考正續を進獻につき、闕本を林大學頭に補足を命ぜられたこともある。寛永十三年仙洞御所より律令の書を求められた時は、鎌倉の建長、圓覺兩寺緇徒二十餘人を江戸の海禪寺に招き、金澤文庫の律令を書寫せしめられた。徳川家の親戚へ圖書を下賜されたこともあるが、必ず後にそれが他本で補充された。

一文庫に備へられねばならぬ圖書で備つてゐないものは、特に長崎奉行に命じて常に支那に注文をした。かゝる不備を取調べることが林家の務であつた。支那各地の地誌類は斯くして蒐められた。又圖書集成の如き大部の書の備はつたのも、皆斯くして得たものである。

一諸家よりの進獻本も少からずあつた。その尤も大なるものは毛利出雲守の進獻で、經史子集八百八部一萬四千二百本、道藏經全部四千百五帖の多きものがあつた。すべて進獻本は、先づ林大學頭に問訊して指揮を待ち、而る上にて進獻するの掟であつた。

一重複の圖書、不用圖書、陋本の類は拂下げた例が度々ある。陋本と云ふのは俗書で、中には今云ふ軟派の本もあつたらう。その拂下げた金を以て書櫃を作つたことも見えてゐる。或は存置を忌む書物を焚き拂つたことも度々ある。又僞撰の圖書は稽查の上容赦なく焚き棄てた。類聚三代格に日本後紀、弘安禮節、日本國諸風土記などが焼却された僞書である。

一圖書の保護に就ては決して疎慢に附されなかつた。紅葉山文庫は大樹に蔽はれて濕氣が多いと云ふので、其木を伐採したこともあり、貴重の圖書を一番最後に出來た新庫に移したりした。汚損蠹食の圖書を修繕するに八年かゝつて、一萬八千の書冊を修補した。圖書集成には特に木帙を作つたり、道藏經にも特別の修補を加へたりした。書庫の防火に就ては一再ならず達しがあつて、常に當事者の頭を病ました。

一曝書も圖書保護の一大要務で、家康公歿後は舊例に従ひ、或る貴重書は林大學頭自宅へ持ち歸り、曝書の上、林家が封緘して納める例であつたが、それは後に止んだが、貴重なる掟の下に曝書され、御成りの場合、邪魔になつても、それに遠慮は及ばぬと云ふ特典もあつた。

一御條目、法令は三四年に一度曝書すべき定めであつて、特に黒書院で曝書し、老中が封緘することになつてゐた。

一貴重書はどう扱はれたかと云ふと、家康公手澤本などは最初から特別扱ひにされ、特に別函に納めたが、追々他の希覯の圖書を、架を異にして特別に扱はれることゝなつた。その圖書は北條本東鑑、慶長活字版、駿府本、享保新寫校合本、金澤文庫本、宋元槧本などであつて、足利義政、義尙の墨蹟を存する元槧後漢書の如きは、特に卷子に裝潢して保存された。宋元槧其他貴重の圖書で諸家より獻じたものも、勿論特別に扱はれたに相違ない。

一右の如く或る圖書を特別に扱はんとする時には、必ず其理由を奉行に申立てねばならなかつた。書物の來歴や其の希覯の譯を記すことが、かゝる動機から生じて、前に記した重訂目錄中に來歴志などが加はることになつたのであらう。

一將軍日光山御參詣の節は、儒者が國史を齎らして供奉する定めであつた。それが後に國史を改めて地圖を携帯することになつて、地圖修補の事がしきりに見えて居る。何故にかゝる圖書の携帯を要したか、恐らく儀式に過ぎなかつたであらうが、これも要務の一つであ

つた。

一 必要の圖書を適宜に置いたことは、蕃書を開成所に移し、醫書を醫學館に移し、多くの經史百家の書を昌平費に移したことに依つても知られる。追々書庫が狹隘を告げ、置き所がない爲めにも原因したことが、それ／＼學者の進言に斯く利用されたのであらう。

一 書物の取扱ひは、初めは林家に委され、書物奉行が出来ても吏僚が甚だ少數で、將軍の御手許へ書物を持参したり返却したりする時は小姓がそれに與つたが、後にはそれは廢されて、圖書事務に與かる吏僚が追々數を増して來た。そして吏僚の採擇は、格式や門閥に依らず、書物に精通し鑑識あるものを擧げた。それが爲めに吏僚其人を得て、奉行に對しきりに進言することが如何にも要を得て居るので、大概採納を得て居る。そして臨時の事務に勞して功のあつたものには必ず賞を與へてをる。

以上列擧したのは幕府の圖書事務の一端に過ぎぬ。これより以上書くことは遺憾ながら紙が許さない。しかし以上の簡単な列擧に依つても、幕府の圖書の扱振りが大略知れるであらうと思ふ。幕府が如何に圖書を重んじたかは、寛永頃早く書物奉行を置いた一事でも分る。圖書を

保存する爲めに幾回か書庫を造つてもゐる。圖書を大切に保つ爲めには數多き圖書の修補をしてゐる。貸出しを嚴にして、將軍の手許にあるものでも書物奉行の管理に屬するものは定期に調査をしてゐる。闕本は手寫に補はれ、誤りのある本は善本に依つて校訂され、失はれた本は常に補充され、書庫に闕如の本は、しきりに支那より船載して藏書の添加を力めてゐる。貴重書は單に家康公手澤本のみでなく、愛書家の今爲すごとく、相當の鑑識を以て鑑別し、特別の注意を拂つて居る。俗書の混合を忌んで陋本は取除いて居る。特別の研究者には多くの圖書を貸付けてもゐる。八萬許りの圖書の目録もしば／＼編纂され、不便を感ずれば目録編成法をも改めてゐる。以上の如き圖書の取扱振りをみると、今の圖書館のごとく公開はして居らぬが、圖書保管の法は頗る行届いてをり、可成圖書を利用するやうに、醫學館や開成所や昌平費などに本を移したり、篤志の研究家には借覽を許してゐることなどを見ると、圖書に就ての事務は吾等の想像を裏切つて如何にもよく届いてゐる。歴代の將軍は圖書に就て常に尊敬を拂つて、嘗て放縱の沙汰がなく、代々有益の圖書を添加するに冷熱がなく、圖書管理に要する經費は吝む所が無かつたやうに見える。勿論保護も十分届き、一たびも回祿の災に罹らなかつたことは

何よりの仕合はせである。觀じ來れば、舊幕の圖書の取扱振りは頗る見上げたものである。

前田松雲公の集書事蹟

私は全國圖書館大會に出席した一人であります、私は加賀に於て松雲公を語るのを光榮と存じます。併し御當所に參つて、公の御遺蹟を談ずることは大膽であると思ひます。私は公の御遺蹟を十分調べてゐるものではありません、寧ろ諸君に就て承るべきであります。然るに私が講演の題に松雲公の御遺蹟を選んだなどは、顛倒の非難を受けるかも知れません。併しながら、書物關係の吾等が、こゝに參つて一言松雲公に及ばないのは、公に對して濟まないやうな氣がします、又諸君に對しても禮を缺くやうに思はれます。と申すのは、昔し新井白石が申したやうに、加賀は天下の書府である、即ち加賀は圖書館界の總本山であります。吾々は今度圖らずもこゝに大會が開かれた爲め、總本山に參詣が出来た譯でありますから、何人も祖師松雲公に多少の感なきを得ません。ふつゝかながら私が公に就て聊か談ずるのは此故であります。

公の御業蹟は如何にも幅が廣い。今度中田館長が苦心して催された展覽會に臨んで見ましても公の御事業の雄大さがほのめいてゐます。公の御事業は文藝は勿論百般の工藝に及び、燦然目を奪ふものがあります。併し御業蹟の尤も大なるものは、何と云うても集書の御事蹟が第一と思はれます。勿論すべての御業蹟を語ることは到底私の企て及ぶところではありませんから、僅かに集書の御業蹟の一端を語るに過ぎません。集書の御業蹟と申しても、全部を語ることは短時間で能ふ所ではありませんから、専ら今日の圖書館事業に引き較べて、多少の觀察を試みるに過ぎません。

先づ順序として公の系圖の大略を挙げますと、公は藩祖前田利家公より五代の藩主で、綱紀と申されました。寛永二十年十一月の御生誕で、享保九年五月に薨去されました。即ち八十二の高壽を保つた人です。父君即ち四代は光高と申されましたが、不幸にして早く薨せられました。御母は家光將軍の養女で水戸の義公の姉君ですから、義公と松雲公は叔姪のお間柄であります。弱冠で父君を失はれました處から、將軍の命に據り、會津の藩主保科正之公が後見をされましたが、公の室は乃ち保科侯の女であります。

松雲公の系圖は以上に止めまして、昔し諸大名で圖書を蒐集した人々の事を考へて見ますと、一二に止まりません。何人も先づ指を水戸の徳川家に屈しますが、其外に會津の加藤式部少輔明成があり、保科正之があり、八雲軒と號した脇坂淡路守があり、天芭堂と號した木下肥後守があり、菊山と號した内藤豊前守があり、幕府へ二萬卷以上の圖書を獻じた毛利出雲守などがあります。此等諸大名の集書の事蹟は委しく分りませんが、どの道松雲公の集書に比しますと、言ふに足らない程度のものであります。水戸の彰考館は、大日本史が名高い爲めに、その館藏の圖書は數に於て質に於て天下に冠たるものゝ如く考へられました。これとても加賀に比しますと頗る遜色があつたのです。水戸の圖書は多く編纂用に供したものだから、云はゞ間に合はせもので、實用に足れば、それでよいので、質に於ては到底加賀とは比較になりません。後に追々申しますが、水戸はしばしば數多き圖書を前田家から借りて居ります。随つて大日本史の編纂は加賀に負ふ所が可なり大であります。

昔しの大名の集書は道樂半分にやつたらしい。水戸は趣を異にしてゐますが、前田家に至つては、道樂と見るには餘りに規模が大きくあります。松雲公の集書は決して道樂と見るべきも

のでないと思ひます。白石が申したごとく加賀は天下の書府で、松雲公の志は、今の詞で云ふと、絶大の圖書館を作るに在つたと申し得るやうに思ひます。到底幕府などは其の規模に於て及びもつかなかつたものである。公の集書の目的は公の傳の内にも明かに書かれてありますが、珍書奇籍に耽つたのではなく、寺社や搢紳、其他各所にある門外不出の圖書が概ね唯だ一本であるのに、萬一それが失せれば、永久に無くなるのであるから、どうしても副本を作つて置く必要があると云うて、集書を始められたとありますから、此の趣意は正しく今の圖書館の趣意と合致するのです。天下惟一の圖書を斯くして或は購ひ或は謄寫されたから、其の結果は珍本奇籍の淵藪となりましたが、其志は絶大の圖書館を作るにあつたのです。

公の集書の趣意は、今申した如くでありますから、其の範圍は頗る廣汎に涉つてゐます。公は武家であります。決して武家に偏した集書ではなく、あらゆる方面即ち百科に及んで居ります。當時何れの處に大切の圖書が藏してあつたかと云ふと、京都の五山を始め、南都、鎌倉、武州の稱名寺、其他の諸社寺、搢紳家では、近衛、九條、二條、一條、西三條、正親町、飛鳥井、持明院、坊城寺等で、此等には天下惟一の各般の圖書が藏せられ、殊に搢紳家には朝廷の

儀式典例に關するもの、和歌に關するもの、史料に屬するものなどが傳つて居るので、公は百方此等の畑を漁り、蒐集に力を致された。今日は國家の力で史料の蒐集をやつてゐますが、松雲公はあの早い時代に獨力で同じ事を遣られたのであります。

松雲公の當時は圖書が一概に秘されて、借覽することがひどく困難でありました。將軍家の命でも出すことを肯んじなかつたものがいくらもありました。それも其筈です、當時は儀式典禮を司るいろ／＼の家柄があつて、有職故實を世襲し、それで衣食してゐたのですから、その書物は命の綱とも云ふべきものです。それを人に知られては、職の世襲を失ふことになりますので、極力秘したのも道理であります。寺社の文獻にしても、當時は寶物扱ひをしたのみならず、迷信なども手傳つて、門外に出すことを罪惡でも犯すやうに考へた頃であるから、松雲公の集書の困雜は、到底今日と同日に談する譯には參りません。

併し公は百難を冒して、或る例外はあつたにしても、大概のものを手に入れた。どうしても購ひ難いものに限つて謄寫もされた。これは前田家の如き有力な雄藩でなければ出來ないことである。と云うても百萬石の威力を以つて買つたり借りたりしたのではなく、禮を篤くし

て其の目的を達したのである。公は祕書借覽の場合には必ず厚く酬いられた。京都の東寺の數多き天平文書を借りて、返す時には、一通一通金襴の表紙をつけて立派に表装をし、それを數十卷づゝ箱に納めた。其箱が百個に及んだから、爾來百合文書として知られるやうになつた。西三條の圖書を借りた禮には、書庫を修繕せられた。後には改造せられた。遂には其家と縁組までされたとあるが、斯くも厚く酬いられたから前田家に貸しても損は無いと云ふので、社寺でも指紳家でも、前田家の需めとあれば皆應じたのである。全體圖書は斯く重んじ、他人の所藏は別して鄭重にせねばならぬものであるが、さて現在の圖書館では此範に則りたいと申しても到底力が及びません。

圖書の蒐集に尤も大切であることは選擇である。選擇には鑑識を要する。松雲公の下には多くの學者がゐました。木下順庵、室鳩巢の如きは公の儒臣として誰れにも知られてゐます。併し松雲公自身に大なる鑑識が具つてゐたので、決して人任せに選擇されたのではない。公は木下、室などに、君等は漢籍は分るが和書は分らぬと云はれたと傳へられてゐるほど、公自身に鑑識があつたのだ。今日の圖書館長などは、管理事務は兎も角もとして、館長であるからと

云うて圖書の鑑識が必ずありとは申されません。此點におきましても松雲公に對して慙然たらざるを得ないのであります。

前田家の力を以てして圖書を購ふなどは容易の事で、恐らく購ふことが最も便利な法であつたでありませうが、どうしても購ひ難いものは謄寫をする外に道が無かつた譯です。當時はただ寫真術は開けてゐません。謄寫は實に容易で無かつたに相違ない。さて前田家の寫本はドンナものかと云ふと、實に精を悉したもので、さながら眞亂るほどの影寫であります。偶然北地の舊家石黒氏の宅に一覽した日本書紀は、松雲公の寫の散逸したものと申しますが、如何にも原本をよく影寫してあります。そして各紙に小箋が附されてあるのを見ますと、影寫した人の名、蟲喰を寫した人の名、第一校正者、第二校正者の名がそれ／＼書かれて、責任が明かになつてゐますのに驚きました。これが一つの標本であります。恐らく前田家の寫本は皆斯様に丁寧精密に影寫されてゐると想像しますと、實に驚くの外はありません。謄寫は今の圖書館でも大切のことではありますが、略々寫すことすら行はれ難いのは、非常に費用の嵩むことで、此點も到底公に學ばんとして能はざることであります。

寫本を製本したり、崩れた本を綴ぢ直したり、蟲喰本を修理したりすることは、藏書家に必ず伴ふ仕事であります。前田家の如き大家の此等の仕事は亦格別であります。前年東京の本郷のお屋敷で貴重書を拜見したことがあります。其の折、製本の標本を三種拜見しました。それは漢書、和書、和歌に分ち、各大きさが異なり、表紙も簽題も別になつてゐましたが、其の標本は板で作られ、さながら書物と見まがふやうに精巧なものでした。すべて製本の時はこの標本を範としたもので、如何にも届いたものであります。貴重書の蟲喰などを修理するにも頗る丹精を凝らしたもので、上等の表具師が常に出入し、さながら古書畫を修理すると同じ様に修補したと聞いてゐます。恐らく修補の痕跡が全然無いほどに繕はれねば、殿様のお氣に召さなかつたでありませう。こんな事も今の圖書館では學び兼ねます。

さて最後に尊經閣の藏書の數はどれほどあつたかと云ふと、それは私には分かり兼ねます。淺野樸堂の隨筆「寒檠瑣綴」を見ますと、論語の部だけを曝書するに一ヶ月半を要したとあります。そして全體の圖書の數は前田家の重なる家臣と雖も知ることが出来ないと思つて、茫然、茫茫、湖海を望むごときものでありませう。そして其の大部分が天下第一の珍本奇籍である

ことを思ひますと、實に盛んなものでありまして、幕府と雖も及ばなかつたに相違ない。幕府から宮内省圖書寮へと引きつぎました圖書は、八萬足らずであります。そしてそれは質に於て尊經閣本ととても拮抗は出来ません。若し加賀の大藩を以てして唯だ圖書の多きを貪つたとしたら、一舉百萬の書を買ひ集める位は易々たる事でありましたらう。併し前に申したごとく松雲公の集書の方針は徒らに圖書の数の多きを欲するのでなく、大切な書物を傳へたいと云ふのでありますから、云はば一粒撰りであります。それにしても一年中人を諸方に派して舊書を捜索し、遠く手を支那にまで伸ばして購入を事とし、典籍を積み込んだ支那の船が加賀の港に着くと、それを悉く買上げるのが例であつたと申しますから、其藏書の数の大なることも想像に難くありません。唯だ多少疑問の存するのは、此の莫大の典籍をどう利用したか、弘通の法に缺點がありはせなんだかと云ふ點にあります。加賀では本を貸し惜んだと云ふ説もありますが、今日でも天下惟一の本は減多に貸し出せません。別してあの頃と今日とは違ひます。尙ほ松雲公が諸家の祕書を借りて謄寫されます時には、必ず他見を禁ずる條件があつたに相違ありませんから、約を守つて祕されたものも少からずあつたであります。今日の史料編纂係に於てす

ら、同様の條件があります爲め、借覽の出来ないものがあります。まして古い頃でありますから事態が違ひます。併しそれにしてもなか／＼多數の書物が貸し出されてゐます。水戸の義公と松雲公とは叔姪の間柄でもあられますから、大日本史の編纂に就て折々圖書借覽の請求があつて、多い時は百部も貸し出されてゐます。塙が羣書類従を編纂しますにも、林家を経て澤山の本が貸されてゐます。又新井白石などには特別の貸出しもされてゐます。松雲公の傳には多くの文書が收められてゐますが、其中にをかしなものがあります。それは水戸の義公からの書面で、拙方には國史の編纂用に書物を集めますが、貴方は何の爲めに集められるかと皮肉な書面があります。それに對して加賀の答は、當方では集めて然る後仕事にかゝる積りだとあります。公の藏書は勿論今日の圖書館の圖書の如くサルキュレートしてはゐませんが、併し決して死藏された譯ではありません。忘れてならぬ事は加賀には「庶書類纂」の如き大部の編纂物があります。これは稻生若水が公の命に據つて編纂したもので、水戸の大日本史に比して敢て遜色のないものであります。

これを要するに、松雲公の集書の志は如何にも大なるもので、其の趣旨は希觀の書籍を保護

するに在り、其の範圍は百科に涉つて居る。あの古い時代に早く圖書館たるの模範が示されて居る。公自身深く圖書に興味があり鑑識があつて、圖書の選擇を親らされてゐる。圖書に對しては大なる理解があつた爲めに他家の珍藏に對しては特別鄭重の取扱ひをされ、人より本を借りるには必ず厚く酬いられた。およそ此等の事は吾等圖書館に従事するもの若くは圖書を愛藏するものには大なる教訓を垂れて居られる。公の集書事蹟に學ぶべきものが少なくありませんが、奈何せん公の如き大なる力がありませんから、學ばんとしても學び難いものゝ多いのは赤面せざるを得ません。私共はかゝる圖書の偉蹟で名高い御當所へ参りまして、つくづく松雲公の偉大さを感じます。全く加賀は書物の本山であります。吾々は公に敬虔を捧げざるを得ません。それと同時に此地方の人々に對しまして、私共よりも更に大なる敬意を此偉大なる舊藩公に捧げられねばならぬと思ひます。尙又公の事蹟に願ひて加賀の人々は圖書に理解が無くては相濟まぬと思ひます。更に一步を進めて申せば、圖書館事業に十分御力添へのあることが、此地方に於ては特に大切な任務であるやうに思ひます。(金澤に於ける講演)

古 本 屋

學問知識の糧は何處にありやと問はゞ、誰れも學校や圖書館を先づ擧げるに相違ないが、本屋を逸してはならぬ。書物の豊富を論ずれば、圖書館に越すものは無いが、圖書館は讀書慾を満たす處で、讀書人には他に一慾がある。それは圖書の獲得慾で、圖書館では此慾を満たすことが出来ない。此慾を満たす所は本屋である。本屋は獲得慾に對する供給者である。

大體圖書館と本屋に以上の相違があるが、併し兩者は極めて縁の近いもので、似寄りの點がある。本屋は圖書館同様に店頭に多くの圖書を陳列して顧客をして任意に漁らせる。だから某の書物はどんな體裁で誰れの著で幾冊あつてどんな内容であるかゞ凡そ知れる。圖書館でも借り出して見れば同じことが知れるけれども、相當手數がかゝる。書庫に立入ることが出来れば、本屋の店頭で漁るよりもはるかに多量の書物に接し得れども、通例それは許されてゐない。本屋が圖書館に比して便利であることは先づ此點にある。

本屋は所謂るヒヤカシ客を卑しむけれども、客は必ずしも某の書を購はんとして確乎たる目的で立入るものばかりではない。書物を漁る内或るものに觸れて卒然獲得慾を起すことが割合に多いものである。だからヒヤカシ客を卑しめてはならぬ。ヒヤカシは購求の豫備行爲と見做される場合が少くない。兎角實物に觸れねば獲得慾は起らない。目錄だけを見ては何の感じも起らないものが、實物の體裁や版式や挿繪などで刺激されて獲得慾が起るのである。

同じ書物でも初版があり、覆版があり、異版などがあつて、普通本と同じからざるものがあると好書家を刺激する。禁版、絶版書などは一層刺激を與へる。すべて希觀の書物が好書家の獲得慾を起す誘因となるので、本屋は流石に職業柄よく心得てゐて、書物通を以つて任じてゐる人でも、本屋に教へられることが往々ある。此點は圖書館の貸出係に比して優つてゐると云ひ得よう。

書物を求める人には種々雑多の別があつて、珍本ばかり漁るものでない。時には或る種のものに限つて搜す人がある。例へば蒙求とか消息往來とかに限つて集める人がある。かゝる客は本屋が餘り注意を拂つてゐない雜書の内から取り上げて喜んで購ふものがある。零本を所持し

てゐる人が、店頭で自家の零本を補足する他の零本を得たとすれば、其人には非常の仕合せである。それだから曾ては零本のみを賣る専門の本屋もあつた位だ。

古本の商賣が他の商賣と異なる一點は問屋が無いことである。そこで仕入に骨が折れる。別して希觀の書物を手に入れるには非常の努力を要する。ツマリ藏書家からセビリ出すか、舊家の拂物をねらふか、藏書家の死を待つかの外はない。此點に於て古本屋就中珍本屋に大切みがあつて、好書家が幾許敬意を拂ふのもこゝに存する。

古本の商賣は利益の細いものであることは、反町茂雄氏が此「書物展望」に書いたのが事實の告白であらうと思ふが、しかし本屋は上品の商賣であることは争はれない。その上品性が細利を償ふことも亦争はれまい。自分は曾て本屋を著述家の墓所だと云うたことがある。普通の墓は石で作られてゐるが、書物は紙碑である。精神の籠つてゐる墓である。普通の墓は一基で寺域に安置されてゐるが、此の精神的の墓は一基に限らない。各著述は皆それ／＼墓と見做さるべきもので、十の著述があれば十基の墓があると云ひ得る。石の墓は物を云はぬが、此墓は物を云うて世道人心に教化を與へる。靜的でなく動的で、どこへでも移し得る。石の墓は亡び

ることもあるが、此墓は廣く流布してゐるから亡びることがない。石の墓は血族に拜まれ、血族に據つて護られるが、此墓は萬衆に拜まれ護られて、其の感化に浴する。だから古本屋は先哲の碑林で、店主はその墓守のやうなものだ。圖書館も亦同様である。吾等の古本屋を訪ふのは、先哲の墓参に行くやうなものだ。

街頭に聖賢の遺蹟のあるのは古本屋ばかりである。古本屋を墓所扱ひにするのを當業者は厭がるかも知れんが、實は尊い營業である。好學の人の散策の折の大切な遊び場であり、亦趣味あるステーションは此商店であらう。三三五五の客が此のステーションに落合つて、兎もすると書物を漁ることをソツチのけにして、互ひに圖書に就て雑談に耽り、時の移るを知らないことがある。本屋は迷惑がるかも知れんが、本屋の主人がそれを傍聴して書物の教育を受けるのはかゝる場合にあるので、此の傍聴で偉くなつた本屋の主人が幾人もある。

古本屋は好書家や學者の俱樂部のやうなもので、會ては二三有力な古本屋では座敷に客を導き、随意に雑談を交へさせたこともあつた。あれなどは確かにクラブの相を具してゐた。自分なども既往を顧みると、此のクラブに日參して、午時は辨當まで取寄せて、同好の人と語つた

り、方々から集めてくる本を、吾れ先きに檢して、優先權を得るに汲々としたこともあつた。今は座敷に客を導くやうな古本屋は無くなつたが、陳列場を設けたり、座談會を催したり、雑誌を發行したり、書志に關係の書物を出版したりすることが行はれて來た。こんなことも時勢に應ずるやり方で、古本屋の活きる一法に相違ない。勿論間接に自家を宣傳する法ではあるが、一概に商利に拘泥しない所は美譽として褒むべきである。兎角新奇を喜ぶ世の中に古本屋が前途だけの運命があるか、覺束ない感がないでもないが、吾等は好書家の爲めにレア・ブックを賣る家の健在を祈るものである。

モールス先生の「日本その日く」を讀む

米人エドワード・モールス先生は、吾等が學生時代に帝大で動物學を教へた人である。その人の著書に就て此の雑誌「本艸」の一隅に多少の談を試みるのは、強ち縁がないでもあるまい。モールス先生は繪を書くことが達者で、いつも五色のチョークで、黑板に種々の動物を書き、

巧みに説明したものだ。蜻蜓などを描く時は、両手にチョークを持つて、双羽を疾風の如く迅速に巧妙に書き、學生をアツと云はした。此先生は繪が達者であるばかりでなく、口も達者で頗る能辯であつた。先生の動物書は當時教科書として出版されたが、挿繪はすべて先生の自筆であつた。

モールス先生にジヤパン・デー・バイ・デーと云ふ著書がある。その譯書は「日本その日く」と題し、啓明會の資金で科學知識普及會から昭和四年出版されてゐる。自分の讀んだのは一昨年であつたが、卷首に先生の教を受けて最も縁故の深い石川千代松博士の長い序があり、博士の長男欣一氏が曾て先生の宅に寄寓したことのある縁故で、氏に據つて反譯されてゐる。二卷で千頁もあるものだが、先生が日本に来て歸國するまで四年間、毎日々々見聞したことを筆まめに書き留めたものゝ内から、特に風俗、習慣に関する事項を、晩年本國で出版したものである。前にも言つた通り先生は繪が達者であるから、毎頁スケッチに満ちてゐる。その繪を見るだけでも吾等は陶然として愉快を感じる。

先生の日本に來た頃は明治の初年で、まだ日本特有の事物がそつくりその儘にあつたので、

それが新來の先生の眼には餘程珍らしく映じたらしく、あの鋭利な觀察力を以て、吾等が通例意を留めないやうな物を一つも漏さず繪にかき、所感が録してある。自分などは親しく教を受けた關係もあるから、毎頁懐かしみを感じて卷を釋くことが出来なかつた。先生は頗る日本最貞で、すべて好意をもつて日本を解し、其觀察が皆的確であるから、外人の書いたものとは思はれない氣がした。先生は種々の研究の爲め北は北海道、南は九州まで旅行をして、到る處の風俗、習慣を書き留めたので、日本を外國に紹介するには此上のない名著である。先生が朝廷から初め勳三等、後に勳二等に叙せられたのは決して偶然でない。

先生がどんな動機で出版することになつたかと、先生の自序を案ずるに左の如く言うてゐる。日記帳三千五百頁を占めるこの材料を、どういふ方法で世に表はさうかといふことは、長年考へはしたが、ハキリした考がつかかなかつた。全く友人ドクター・ウキリアム・スターギス・ビゲロー（私は氏と一緒に三度目の日本訪問をなした）からの手紙がなかつたら、この日記は出版の爲めに準備されなかつたことであらう。私は大得意でビゲロー氏に手紙を出し、軟體動物並に腕足類に関する幾多の研究を片づける爲めに、セーラムのビーボテイ博物館及

びポストンの美術館から長い休暇を貰つたことを知らせた。それに対するドクター・ビゲロの返事は次ぎの通りである。

先生は不相變軟體動物の研究に熱中してゐることがこれでも知れる。それに對しビゲロー氏は、罵詈的に、軟體動物の研究などは君がやらんでも誰でもやる、有機體の日本は今變化しつつある、其の變化前を知つてゐる君は、何故に日本を閉却するのかと云うたのが次ぎの返辭である。

君の手紙で氣に入らぬことがたつた一つある。外でもない、より高尚な、君ほどそれに就て語る資格を持つてゐる人は他にない事の状態や習慣に時を費さず、誰れでも出来るやうな下等動物の研究に、君がいまだに大切な時を徒費してゐるといふ白狀だ。君は正直な所、日本人の方が蟲よりも高等な有機體だと思はないか。腕足類などは溝へでも棄てゝしまへ。腕足類は棄てゝ置いて大丈夫だ。いづれ誰れかゞ世話をするにきまつてゐる。君と僕とが四十年前親しく知つてゐた日本の有機體は消滅しつつあるタイプで、その多くは既に完全に地球の表面から姿を消し、そして我々の年齢の人間こそは、文字通り、かゝる有機體の生存を目撃

した最後の人であることを忘れないで呉れ。この後十年間に、我々がかつて知つた日本人は、みんなベレムナイト(今は化石としてのみ残つてゐる頭足類の一種)のやうに、ゐなくなつて了ふぞ。

ビゲロー氏の勸告は至極面白い。同じ日本人でもモールス先生渡來の時の日本人とは全然異つてゐるとも云へるほどに、今は西洋化してゐるのだ。此著書を読んで見て興味のあるのは、既に化石になつた其の昔の状態が寫されてゐるからでもある。

自分は此の著書に觸れて先づ希有の日記の體であることを感じた。日本の畫家などに繪日記と云ふものがある。それは繪を本體にして、多くは繪に物を言はせて、文字が聊か添はつてゐるに過ぎないが、先生のはそれとは違つて、目睹のものは必ず畫して、それに委しい解説がある。そして其の觀察は極めて的確であるのに驚く。誰れでも外國に遊ぶと、物珍らしく感ずることを日記に記すけれども、畫で寫すことは畫家の外には無い。そして心覺えの畫を書いても周匝の觀察まで書くことは幾んどない。羈旅匆々の場合、筆に親しむ時間がないからでもあるが、先生はどんな旅中でも必ず委しい解説を書いてをる。あの種々の研究に忙がしかつた先生

が、よくも毎日々々見聞を漏さずに書いたものである。先生は他の人の多く爲す如く、後日記憶から呼び起しておぼろげに髣髴の記を書くのではなく、必ず目睹の際に筆寫するのであつて、路上でも、人を訪うた時でも、さながら今日コダツクを携帯して見た刹那に寫すと一般、何物も適さない。小兒が街頭で遊戯をしてゐると、立駐つてそれを寫す、見世物があると、稠人中でそれを描くと云ふ鹽梅にやるから、どの繪も寫實である。街頭に筆を把つてゐると物珍らしげに人が立ちどまるので、それに妨げられてよく書き取れなかつたと斷りのある圖もあるが、それ等でも皆申分なく出来てゐる。大體は偶然目撃したものに即興を感じて書くことが常であるが、先生は偶然の場合のみでなく、寫すことを目的として散策することが頻々あつたと自白してゐる。日本の事物に興味を持つ外人は敢て少くないにしても、先生のやうに面白がつたものは他にあるまい。先生の日記は實に念の入つたものだ。凡そ日誌と云へば、人との往復を始め其日の雑事雜件を書き記すことが通例で、定めし先生の事だから、委しく書いたであらう。その上にスケッチまで加へて、いろ／＼の觀察を書いたのだから、一日の日誌に多分五枚乃至十枚の紙を費したであらうと想像するが、よくも毎日々々繁劇の間に書き續けたと驚歎の外は

ない。大體、人の日誌は、他人が読んで見て興味のないもので、珍らしいと感じて書き留めた記事でも、自家の記憶に委して、ホンの要略すら書かないことが常であるのに、先生のは全く其選を異にして、どの頁を讀んで見ても頗る興味がある。かゝる日誌は全く希有のものと云はざるを得ない。

先生の最初日本に來たのは軟體動物の研究の爲めであつた。その時は江の島に腰を据ゑて漁民と生活を共にした。それから帝大の聘を受け、一旦歸國して更に來朝したのだが、あの頃の大事件は大久保公が暗殺されたので、物情騒然であつた。先生は現に其日記中に新聞の號外を收めてゐる。大學で初めてダーウキンの進化論を講じた時の所感も陳べてあるが、西洋では宗教的掣肘があるので自在に説き得ないが、日本では講説が甚だ樂で、聽者の熱心であるのと、理解のあるのに満足したと云うてゐる。始めて地震に遇つた時の感想も書かれてあるが、先生には頗る珍らしく、恐怖どころか愉快であつたと云うてゐる。又グラント將軍が日本に來た時、先生も日本にゐたが、案外の事は、將軍を歓迎する會に先生が出席を躊躇したとある。併し先生は他の米人に勧められて、やつと出て見ると、將軍の高風にひどく感服して、寓所に残して

置いた九歳の小兒を迎へにやり、將軍の風貌に接せしめるに至つた。實は或る外國新聞が將軍をあしざまに書いたのを讀んで反感を抱いてゐたのが、實際其人を見ると全然異なつてゐるので、遽かに畏敬の念を生じたと自白してゐる。尙又先生の日本に來た頃は馬關砲擊事件がまだ忘れられぬ頃で、外人は誰れもが馬關に入ることを避けた。先生は海路九州から神戸に至る途中、物數寄に是非寄つて見たいと、上陸して市中を視察すると、如何にも外人に對して反感があるらしく、憎惡を顔にあらはしてゐたと書き、どこに往つても不愉快を感じたことのない日本に、此處だけは取除けだと記してゐる。

先生は日本に在留中目を回す程多忙であつて、専門である動物の研究にこれ日も足らなかつたのに、大學へ聘せられて間もなく京濱の汽車中大森の貝塚を發見して、それが又研究の科目となり、繁忙が亦加はつた。先生は又陶器に興味をもつて、しきりにそれを研究し且つ採集もし、自身製作に手を下すに至つた。陶器採集の爲めには随分旅行もして諸方の窯を探檢し、旅中は常に骨董屋を訪ひ、或は考古學者を訪うて其の所藏の器物をも見た。あの先生が日本の事に精通したのは旅行が與つて大いに力あつたやうに思ふ。當時考古家として聞こえた諸家は

漏れなく訪問してゐる。それ等は追々録するが、こゝに先づ根岸武香氏を訪問したことを摘記しよう。これは甲山の洞窟を探らんと旅行した途次で、根岸氏は先生の訪問を非常に喜んで極力款待し、其所藏の品は皆先生の覽に供した。此人は考古趣味のある豪家で、日記には其の豪農的生活の様子が委しく書かれてゐる。饗應の席には根岸氏の母堂が先生と隣つて坐し、いろいろの質問を放つことが皆節に當つてゐると記されてゐる。孫娘二人が傍らに侍つて團扇で風を送つてゐる。その模様までも細かに寫してあるので頗る情味を覺える。

先生の探檢旅行には多くの場合ビゲロー氏が同伴してゐる。そして共に道具屋漁りをやつて餘念が無かつた。どんな因縁からか岩國の太守に招かれて刀劍や漆器を拜見したことが記されてあるが、その時もビゲロー氏は同伴してゐる。往々旅行先にフエネロサ氏と落合つたこともあり、三人で書畫骨董漁りをやつたことも記されてゐる。フエネロサ氏には亡友有賀長雄氏が通譯として随伴し、モールス氏には亡友田原榮氏が隨伴した、そして兩人とも此書を見ずに歿したが、見せてやりたかつた。先生の骨董漁りにはいつも權左といふものが案内した。然るに此ものはよからぬものであつたか、ある時質物を先生に掴ませたので、先生は直ちに其の正品

でないことを看破し、詫び證文を取つたことが記されてある。先生も後には隅に置けない骨董の通人となつたのである。

先生は少し買ひ被つてゐたかと思ふほど日本を褒め、常に好感をもつてゐた。全體あの先生は大隈侯が外交官に適任だと評された程如才のない人で、到る處人受けがよかつたのと、大學教授と云ふ肩書もあるので、どこでも好遇されたことなどが好感を興へた原因らしいが、日誌中には先生が危険を感じた場合でも無事であつたことがいろいろ書かれてゐる。その一二を云ふと、江の島にゐた頃、ポケットに百圓の金を入れて暗夜島中をそゞろ歩きした時でも些しも危険が無かつたと云うてゐる。又或る時、人力車に乗つてテスリの無い狭い橋の中央に三人の醉漢に出遇つた時は、三人に悪意があれば、車は人と共に水中にたやすく墜されるのだが、醉漢は車を避けたので何事も無かつたと云うて寧ろ案外としてゐる。又九州の旅行に和船でどこかへ出かけることとなり、不安を感じて金時計と八十圓の貨幣とを旅舎に託した所、宿屋では蓋の無い亂れ筐にそれを載せて、先生の居室の床の間に置き、大丈夫です、確かにお預り申したと云うたのには、先生も心許なく思つたが、二三日を経て戻つて見ると、ソツクリ其儘床の

間にあつたので、意外に感じたとある。先生が邦人を正直であると云ひ、そして禮儀に富んでゐると常に書いてゐるのは、こんな實驗から出てをるのである。

モールス先生は陶器の研究から茶道に興味を感じて、終にその門に入つた。あの屈しにくい足を屈して、狭い茶室に正坐し、帛紗サバキや茶釜の扱ひまで習ひ、しばしば茶席にも臨んだ。どれほどの造詣があつたか、餘り多く期待も出来ないが、大體には通じたであらうと思はれる。茶席ではないが、左に大隈邸に招かれて饗應を受けた記事を摘録し、先生の座敷觀や料理觀の一端を見ることしよう。

昨日私は大隈氏の學校の開校式（早大の前身東京専門學校の開校式）で講演すべく招かれた。私の演題は進化論即ちダーウイニズムで、私の以前の特別の學生の一人である石川氏（千代松博士の事）が、私の爲めに通譯した。講演が終ると、我々は學校のすぐ前にある、大隈氏の別荘に招待された。これは美しい部屋のある家で、二十年前純日本風に建てられた。部屋は皆大きく美しく、床の間もそれに相應した深さを持つてゐた。私は大きな部屋の、床の間も非常に深く、懸物、花瓶其他の裝飾品も、それに釣りあつて大きいことに氣がついてゐ

た。床の間の前が名譽の席であるといふことは興味があらう。云々

餘興に盲人の琵琶の彈奏があつたことも書かれてゐる。これは五十一年前のことだ。侯の家は火災に罹つて、今の大隈會館たる舊大隈邸はその後のものである。餘興が終つて響應があつたことに就て左の如く語つてゐる。

この餘興が終ると我々は別の部屋へ案内され、そこで日本料理の御馳走が出た。私は日本で味な料理を澤山味つたが、この時出たお吸物ほど結構なものは、それ迄に經驗したことが無い。野猪の切身を入れたお吸物は殊によかつた。酢につけた生の魚類も美味だつた。云々

大隈家の料理上手が注意を惹いてゐる。又雉子橋邸のことに就ては左の記事がある。

一月十六日ドクタア・ビゲローと私とは大學(東京大學)に近い大隈氏の都會邸宅(雉子橋附近の舊邸)へ食事に招かれた。家は外國風で非常に美しく、ドクタア・ビゲローはその設備を完全であると評した。食堂の床は見事な板張で、戸や窓の上には複雑な木彫があつた。庭園は純日本風であるが、圓形の芝生だけは確かに日本風では無い。盆に載せ箸を副へた日

本料理が、我々が椅子に坐つて向つてゐる卓の上で供された。

などと記してをるが、此時である、大隈侯は肥前の有田製の陶器を多く出して示されたが、先生が餘りに如才のないのに釣り込まれ、初めは與へる積りも無かつたものを、遂に全部與へたと云ふことを聞いたことがある。後に侯は人に向つて、モールスは外交官とすれば頗る適任だと云はれたと。

先生は謡曲を習ふことを心掛けるに至つて、終に梅若の門に入つた。その記事がなか／＼興味があるから、左に抄録する。

今日の午後、私は日本の歌の最初の稽古をした。紹介状を持つて、私の人力車夫が、淺草南元町九番地に住んでゐる、梅若氏の家にたどりついた。彼れは能の歌と舞との有名な先生で、彼の家と接して能の舞臺がある。竹中が通辯としてついで來た。我々はお目通りを許された。梅若氏は非常にもてなし振りがよく、外國人が謡を習ふといふことをよろこんだらしく見えた。竹中は、私がいろ／＼することがあるので、すぐ稽古を始めねばならぬのだと説明した。梅若氏は私の爲めに謡本を一冊持出し、私がこれから習ふ文句を、ゆつくりと讀ん

でくれ、私はそれを出来るだけそれに近く書き取つた。私は日本風に兩脚を眞下にして坐らねばならなかつた。この坐り方は、外國人に取つては、初の間は、やり切れぬものであるが、今では、私は一時間半すこしも苦痛を覺えずに坐つてゐることが出来る。彼れは私の前に小さな見臺を据ゑ、扇子をくれた。これを私は脚の上のせて、持つのである。彼れが一行歌ふと、私が彼れを眞似てそれを歌ひ、そこで彼れが次の行を歌ふといふ風にして、この歌の十一行を歌つた。それをこのやうにして二度やつてから、我々は一緒に歌つた。私は彼れの聲が如何にも豊富で、朗々としてゐることを知つた。また彼れの聲は、すべて單一の音調でありながら、高低や揚音で充ちてゐるのに、私の、如何にとめても平坦で、單調であるのに氣がついた。私は私が行ひつゝある、莫迦氣きつた失敗を感じて、居心地悪くも面喰ひ、一月の寒い日であるのに、盛んに汗を流した。最後に死に者狂ひになつた私は、すべての遠慮をかなぐり棄て、何にしても彼れの聲音を眞似てやらうと決心して、一生懸命で遣り出した。私は下腹を力一杯ふくらせ、鼻から聲を出し、必要な時には顫音發生装置をかけ、其結果數名の人々が、疑ひもなく絶望の念にかられて、襖の間から、このやうな地獄の吐鳴り

聲で名譽ある場所を冒瀆しつゝある外國人を、のぞき見することになつた。何はとまれ、私の先生は初めて私の努力に對して賞讃するやうに頭を下げ、私に、三月もすれば能の演技で歌ふことが出来るだらうと云つた。云々

先生の努力も死にも狂ひと自白の如くであるが、梅若の骨折も亦想像に餘りある。それでも無本で幾許か謠ひ得るまでに進んだらしく、三十餘年を経て、曾て先生の教を受けた高田半峯博士が米國に游んだ折、偶然電車内で先生に邂逅し、快濶なる先生は、どうだ謠を一番やらないかとあつて、博士も即座に快諾して傍若無人に謠ひ出したとは、當時博士の歸朝の土産話であつた。

モールス先生の日記中には摘録したい趣味ある談柄が少からずあるけれども、紙に限りがあるから、僅かに二三の摘録をなすに止めよう。實はあの頃には先生が是非相手にせねばならぬ考古家が四五人あつた。其一人である根岸氏の事は既に前に録したが、他に柏木探古、蜷川式胤、松浦武四郎、神田孝平、町田石谷の五氏がある。此の五人の内神田、町田兩氏を訪うた記事は見當らないが、他には皆接してゐて、それらの記がある。今柏木と松浦の二人の訪問記

を左に摘録する。實はこれ等の數氏は吾等の趣味の先輩であるが、年輩が餘り異つてゐるので交りがなく、それ等の人の家居の模様などは、先生の日誌で始めて知るのである。

私は數回柏木氏を訪れたが、今日はドクター・ビゲローと一緒に往つた。彼れは蒐集中の古い漆器の箱に大きに興味を持つた。はじめて土藏の二階へ行つて見たが、そこには時代のついた箱や戸棚やその他の品が一杯つまつてゐた。柏木氏は私が日本で會つた最も氣持のいい人の一人である。彼れは、ある質問に對しては、彼れがそのことを知らぬといふのを恐れず、また蜷川が何物にも正確な年代を與へようとつとめることに賛成しない。柏木氏は古物に關する知識をすこぶ豊富に持つてゐて、光の懸物の上部から下つてゐる二本の錦繡の帯に就て、最も合理的な説明をしてくれた。云々

モールス先生が畫してゐる柏木の家は土藏の三戸前もある家で、土藏住居をしてゐたらしく、内部の構造に就てもスケッチがある。その記に云く、

私はまた家について新しい點を知つた。日本人が防火建築の、大きな、寒い、納屋みたいな部屋を氣持のいい場所に變へて、そこに住む方法は圖に示す通りである。部屋の形と同じ

い、然しそれより小さい、四角な竹製の枠を立て、部屋の壁と枠との間には三呎半の通路を残しておく。この枠は僅かに色をつけた布で覆つてある。この枠は部屋よりも小さいので、人はこの布と部屋の壁との間を通ることが出来る。彼れは一七〇〇年に發行された古い本を見せたが、それにはこの枠の構造、布のかけ方等のこまかいやり方が書いてあつた。これは明かに古くからある思ひつきで、かゝる防火建築が居住の間として利用されたことを示してゐる。(中略)夏にはこの部屋は涼しくて氣持がいいことだらう。藏の壁には本棚や置戸棚が並び、柏木氏はそこに書物や寶物を仕舞つておく。幔幕をかゝげると出入口が出来る。彼れは、さがすものがあると、そこからもぐり込む。云々

此の結構は自分もこれまで知らなかつたが、堅牢なコンクリート造の室に軟か味をつけるには、これが誠によい工夫である。衣桁のやうな大きな枠を作つて、その上も周圍も幕を掛ける結構である。

松浦武四郎に就ては左の記事がある。

かなり有名な古物蒐集家松浦武四郎を訪問した所が非常に親切にむかへてくれた。彼れは

最近古物に關する二卷の、全紙二ツ折の本を出版し、それには彼れの蒐集中の稀重な品物の素晴らしい繪が入つてゐる。私は大學の副總理服部氏の紹介狀を持つて行つた。召使が箱をいくつか持ち出すと、松浦氏は大きな束になつてゐる鍵で、それ等の箱をあけた。鍵には一ツ一ツ象牙の札がついてゐる。彼れが箱をあけてゐる最中で下女が物立て臺を三個持つて來て、それを床の間に置いた。彼れはそこで長い絲を通した玉、それは主としてコマ形の石である、曲玉、その他の石英、碧玉及び他の鑛物で作つたものを取出し、それを物立て臺にかけた。それ等の多くは非常に古く、大部分日本のもので、そしてすべて模糊たる歴史的過去時代に屬する。云々

當時の我國で趣味家として指を屈するやうな人々は以上數氏であるが、先生が此等の人々と交驩して得た收穫も、アーキオロジの見聞のみでなく、日本のいろいろの趣味に就ても發明する所があつたに相違ないと思ふ。日本にはいろいろの外人が來たが、初めから日本を喜んだものもある。又初めから反感をもつて、いくら長く日本にゐても日本を喜ばない人もあつた。その原因はさまざまあるに相違ないが、大體日本を理解しないと、日本に興味を有つことが出

來ない。何かの動機で日本に興味を感ずると、こゝに何事かを研究する念も生じ、追々研究すると益々興味を感ずる。初めは日本に憧憬するほどでなかつたものも遂に憧憬するやうになり、大なる最眞となつて、何につけ彼につけ日本を褒めそやすことになる。瑣細な事であるが、外人が初めて日本に來た時の待遇の可否などが大いに關係をもつから、注意を要する。外國の一大友人を作るか失するかは全く僅かの呼吸にあるとも云へる。日本の研究に興味をもたせる迄に外客を引ずりこめば、あとはメタものである。彼れ等は手を引くまでもなく、づんづ日本通となり、日本最眞となる。日本に反感を有つものは實に日本を認識しないからである。あらかじめ日本を神祕の國だと思つて、美術その他の事に神祕の鎖しを破つて探して見たいやつてくるものは、大抵は多少の不自由や不興を忍ぶことが常で、終には目的を達するが、然らざるものは氣分本位で、どうも日本は面白くないと、どこまでも否定するものがある。これは度し難いものだが、かゝる連中は多くは俗物である。苟くも研究の志を抱いてゐるものは、モールスにせよ、ビゲローにせよ、ラフカデオ・ハーンにせよ、フキネロサにせよ、皆日本の益友となつて、長く日本を忘れない。畢竟日本は研究すればするほど興味が津々として沸くから

である。到底、日本の如き他に比類のない文化をもつて居る國に来て、匆卒認識しようなどと思ふのは量見違ひである。どこの國でも同じだが、日本のやうな西洋文化と根柢の異なる複雑のものを認識しようとするには、相當の歳月を要するは知れたことであつて、モールス先生の如く日夕勤勉に努力してこそ、初めて餘り長からぬ歳月に日本人も及ばないほどの認識を得たのである。あの人の日誌は如何にも浩瀚なものだが、何一つ誤解のないのは、誠に見上げたものと吾等も敬服する。

先生の此の日誌は今より約五十年前の筆録である。日清の戦争、日露の戦争は皆先生が本國へ歸つてからの出来事で、此の老大の二國と戦つて、日本が捷利を得たに就て先生はどう感じたであらうか。恐く先生は其都度微笑を浮べて、俺れの最良の國を見よと云つたであらうと想像される。現に先生は日誌の終りに感懷を録してゐるが、それによると、先生はエンサイクロペヂヤなどに、日本人は徳川氏三百年の太平に慣れ、淫靡の風が盛んであるから、國民は懶惰で怯懦などと書かれてあるのを引き、その甚だ誤つた觀察であることを駁し、自分の日記は四十年前見た、偽らざる觀察であつて、決して日本に倭するのではない。今日の日本の發達を

見れば、自分の觀察は決して過つて居らぬと固く信ずる由を高調してゐるが、誠に其通りである。

「異國叢書」に就て

明治以來、叢書と命名のある大部の書物が多く出てゐるが、概ね故人の著書の寄せ集めものや未刊書、佚書等の叢刻であるが、只だ稍と趣の異つたものは近年出た「異國叢書」である。これは、外人が日本に就て書いたものを、翻譯して續刊十數冊に及んでゐる。自分は一と通り翻譯して見たが、明治以來第一の名著とは言はれないにしても、確かに名著の内に加ふべきものと思ふ。

本書は最初聚芳閣から一二冊出て、駿南社に移り、それから十餘冊續刊され、都合十三冊となつてゐる。其書名と譯者は左の如くである。

ケンプエル江戸參府紀行 吳秀三譯

- シーボルト江戸参府紀行 同上譯
ツンベルグ日本紀行 山田珠樹譯
クルウゼンシュテルン日本紀行 羽仁五郎譯
ゾーフ日本回想録 齋藤阿具譯
フィツセル参府紀行 同譯
ドン・ロドリコ日本見聞録 村上直次郎譯
ビスカイノ金銀島探検報告 同譯
異國往復書簡集 村上直次郎譯
増訂異國日記抄
耶蘇會士日本通信 村上直次郎譯・渡邊世祐注
慶元イギリス書簡 岩生成一譯
シーボルト日本交通貿易史 吳秀三譯

既刊の書は以上の如くで、續篇六卷の出版も企てられたが、それは刊行に至らなかつたが、その書名は左の如くである。

- フアレンタイン日本誌 全一冊
マイラン氏日蘭貿易史 全一冊
日本關係西籍解題 全二冊
ジョン・セーリス日本渡航記 全一冊
エルデン卿日本奉使記 全一冊

此五書が何故刊行されなかつたか、委細の消息は知らないが、賣行きのわるい爲め、出版を見合せたのであれば、如何にも惜しいことである。縦令右續書が出たとしても異國叢書の内に入るべきものが盡きた譯でなく、これに入るべきものは決して少なくないと思ふ。此の叢書の内ではなく既に刊行されてゐる此類の圖書も甚だ多い。今匆卒自分の記憶に存するものを擧げて見ると、和田萬吉博士が譯された、モンタヌスの日本紀行などは當然此内に入るべきものだが、和田博士の着手と聞いて省いたのであらう。又濱田青陵、木下奎太郎兩氏の譯著された、グワルチエリー原著の、大村、有馬の少年使節が羅馬に赴いた、天正遣歐使節記なども當然此叢書中に屬すべきものと思ふ。尙ほ又明治廿四年に出版された、淺井虎八郎譯編の聖フランシ

スコ・ザベリヨ書翰記が六卷三冊あり、吉田小五郎譯のシユタイシエンの切支丹大名記があり、村岡典嗣の切支丹文學抄があり、文化年間日本に渡來して幽囚の身となつた、露國の艦長ガロ一ニンの遭厄記事が海軍省で反譯され、初め遭厄日本紀事の書名であつたのを、近年校正してガローニン幽囚記として聚芳閣から出版されたものがある。又近年木下奎太郎氏に譯されたルイス・フロイス日本書簡がある。尙ほ此他に加ふべきものは種々あるが、それは後段更に検討することゝして、自分は異國に關する既刊若くは未刊の好書の目錄を作り、一部集大成した異國叢書が欲しいと思つてゐる。それに就て先づ此類の圖書殊に駿南社の異國叢書に就て聊か所感を陳べて見たい。

申すまでもなく以上の譯本の原書は日本に最も痛切の關係のある貴重な文獻であるのに、それが久しく日本に幾んど一切傳はらず、讀書家と雖も唯だそれ等の著者や書名を知るのみで、尤も有名である、ケンペルの日本紀行の原書を藏するものすら甚だ少なかつた。但だ日本に早く公使館附として來朝し久しく日本に駐在した、アーネスト・サトウ氏が天草版の圖書、其他キリスト教に關する圖書に興味があつて、大いにその蒐集に苦心した事蹟は所謂萬綠叢中の紅

一點で、日本の讀書家がいくらか寓目し得たのはサトウ氏のコレクションであつた。此の蒐集本は今多く東洋文庫に藏され、氏が田中青山伯に與へた天草本太平記は、今内野峻亭氏の珍藏となつてゐる。サトウ氏の感化が異國書の蒐集に多少の熱を與へ、それを心掛けた人がいくらかある。渡邊修次郎氏などは其一人であるけれども、實は此方面の趣味家は甚だ少なく、蘭學の先輩などが、いくらかを愛藏した事實はあるが、醫書や本草書や辭書等であつて、主として其の本業に關係のあるもので、道樂的に多方面に蒐集をした例は餘り無いやうに思ふ。但だ近年に至り此の方面の蒐集と研究が少數の學者間に起り、特にそれ等の文書を搜索し、外國に出かけた人もあり、日本に關する圖書のある圖書館に就て其の寫しを持ち歸つたり、或は古本屋を漁つて種々の書物を搜し得て歸つた人もある。乃ち新村、幸田二博士などは其の最も著しいもので、天草本の平家物語が新村氏に依つて出版されてゐるし、南蠻廣記と云ふ氏の隨筆も實は異國書の搜索記である。又多年東洋方面の圖書に没頭した、モリソンの藏書は岩崎氏の東洋文庫に歸したが、其内には異國版の珍奇の日本關係の書物が少なからずある。同文庫は更に足りない分を購うて之れを補うたから、今は必ずしも乏しきを感じて居らぬと云うても、それは

富豪の文庫にこそ備はつて居れ、一般には頗る希覯のものである。併し嘗ては丸善書店の如き洋書舗を尋ねても異國版の日本關係の書物は一冊もなかつた時代もあつたが、今は特にその部類のもののみで展覽會を催すまでに進んだことは事實である。

全體日本にこそあらねばならぬ日本關係の文獻が、幾んど日本に其跡を絶ち、外國に於て却つてこれあるは妙な事のやうだが、これは外教の禁令が如何に嚴であつたかを物語るものであつて、繫累を恐れる爲めに、苟くも耶蘇教の臭氣のあるものは何もかも排斥して玉石併せ焚いたから、日本に全く其跡を絶つたものである。この失はれた文獻の内には、僅かに一頁若くは數行耶蘇教と關係のことがあると云うて忌まれたものもあらう。又全然耶蘇教と關係のないものもあつたであらう。それを殆んど無差別に委棄した結果は、日本に關する、ある時代は全く闇黒となつた。少くとも耶蘇教時代の日本と外國との交渉、それが宗教に關することなれば已むを得ないとしても、他の通商貿易に關することでも、全く外人が書き記した日本の事實は一切鎖されて、爰に文獻の鎖國が現實に行はれた。書物は世界共通のものではあるが、日本に僅かばかり印刷されたものが廣く流布する筈もない。日本の如き、まだ外國によく理解もされな

い、其國に關する外國の圖書が廣く行はれる筈もないので、どれほど有用の文獻が失せたか、いま尋ねるに由もないが、耶蘇教排撃に當時行つた手段が餘りに嚴酷であつたので、それが爲めに外國の注意を惹き、禁忌の圖書を珍として博物館の備品としたので偶然存してゐるやうなものもある。かゝる次第だから、圖書は世界共通のものだと云うても、日本に失はれたものを、外國で漁れば、どこにも轉つてあるなど思ふのは莫迦の沙汰であつて、實は日本で珍書とするものは世界のどの市場でも矢張り希覯の書としたから、それが容易に手に入らなかつた。尙ほ此原書の中には蘭文で書かれたものもあり、伊太利語やポルトガル語、羅旬語などに書かれたものもあるので、假令ひ日本人の手にそれが落ちてでも容易に讀みくだくことが出來ず、翻譯することなどはなか／＼企てられるものでなかつた。しかし此等希覯の圖書は到底日本の手に戻らねばならぬもので、又日本で翻譯されねばならぬ運命のものである。勿論日本の手を待たず、諸外國語に譯されたものもあるけれども、日本人の手で無ければ絶対に正しく校勘され得ないものがある。それは何かと云へば、外人が聞き違つたこと、思ひ違つた事實の誤りもあるが、人名や地名の發音が甚しく違つてゐるので、之れを校訂することは、唯だ一に日本人のみが出

來るのである。

幸ひにも逸書を多く戻し入れ得ることゝなつたと共に、追々と日本に大切の関係ある外人の著述を翻譯し、或は耶蘇教の行はれた時代並に殉教者などの事蹟を著はすやうな氣運となつた。併しこれを待たず、出さうなもので出なかつた此等圖書の翻譯は、實はなか／＼容易の業でなかつた。兎角外國人には筆に特徴もあり、事の見方にも偏癖がある。殊に前にも言つた音の聞き違ひ書き違ひなどが少からずあつて、翻譯するに當つても十分の注意を拂つて、本文を改竄せないにしても、適當の校註を加へねばならぬことは勿論であるが、妙な地名や人名に出遇つて、其人、其地に思ひ當らず、筆を投じて空しく時を費すことが時々あるとの述懐は、此の叢書の譯者が口々に言ふ所である。それ等のために翻譯の筆が容易に進まず、一冊完譯するまでに意外の長い時間を費してゐるのは決して無理はない。

翻譯半ばに友人に就て種々と相談したり、譯者が讀みかねる外國語を其語の通人から讀んで貰ふやうなことは、普通は無いことであるのに、此の譯書にはそれが頻々としてある。適當の校註を作ることが日本の譯者の特權であり、これが無ければ誤りも正されず、記事も理解される。

ない。此の翻譯に譯者が尤も苦心したのはそこにあるが、此の校註を加ふことは普通の翻譯には無いことであつて、これにはそれが尤も大切であるから、譯者が困つたことも思ひやられる。

右の次第であるから、此等の書物の翻譯は、外國語に通じて居りさへすれば誰れでも譯し得るものでない。此等の書物に平生趣味を持ち、關係の圖書に一通り目をさらし、特殊の事柄に對して専門の知識を有するもので無ければ譯者たることを得ない。特殊の事柄は様々あるが一二を云へば、耶蘇教に關することや、通商貿易に關することや、日本の雜多の動植物や、沿海の測量などは皆専門に屬することで、著者の狙ふ所は色々であるから、それ相當の譯者は是非必要であるが、幸にして譯者はそれ／＼人を得たのは何よりの仕合せで、此の叢書に權威づけたものは、全く譯者が其人を得て居るからである。

さて此等圖書が何故價値があるかと云ふと、事は天正慶長頃の既往に屬して、此等の著述で無ければ知り難いことがさまざまある。耶蘇教のこと、殉教者の事などは、禁令其他の理由で日本には文献が甚だ乏しい。當時の貿易事情、これも日本に文献が頗る缺けて居る。沿海測量

の事に至つては日本が全然知らないことであり、本草の研究などに至つても、外人の發見に係るものが決して少なくない。これ等の事は外人の書いたものに就て始めて知ることが出来るのであるが、耶蘇教のことに附帶して種々の史實の闡明を得たのは、亦此等の著書のお蔭である。尤も著明な例は、大村、有馬等の諸侯の少年が天正年間に羅馬に使用して、往復八年を費して歸朝したことの如きは、日本の歴史に稀なる事實であるに拘らず、此の遣歐使節の消息に就ては、日本に於て幾んど文獻がない。彼等の外國に於ける八年間の經歷は全部外國書に就て始めて知り得るのである。こんな極端な例は且らく措き、天正慶長頃の日本事情を外人から聞くのも一興であるのみならず、日本の史家がこれによつて教はることも少なくない。地理的に云へば、當時の長崎事情、長崎から京都を経て江戸參府途次の模様、政治に就ては、當時の幕府が如何に外人を遇したか、更に細かに云へば、秀吉や家康に接見した模様など、其の目のあたり見た記事は皆直接に間接に日本歴史の缺を補ふ資料となるものである。長い間の鎖國時代に僅かに西洋文化の閃きがさながらスパークの如く日本を照らし、醫師などがしきりに外人の來たのを好機として、之れに就て熱心に外國の事情や理化學の事などを尋ねた事蹟は、皆他日西洋

文化を入れる動機であるから、此等の事實は我文明史の大切な事實で、薩摩其他の諸侯が西洋の事を聴くに熱中した模様などに就ても、新たに外人から聞くことも少なからずである。

異國叢書中の内容に就ては言ふべきことが少からずある。自分は讀過の際多少書き留めて置いたものもあるが、それは今略する。此叢書は史料として大切であることは申すまでもないが、書物として多く賣れる性質のものでないから、出版元も譯者も犠牲を覺悟でなければ出版の出來ないものと思ふのに、よくも十數冊刊行を續けたことを多とする。

尙ほ冒頭に陳べたごとく、異國叢書の内へ他より出した既刊のものまで入れて集大成したいとなると、どんな範圍にまで採收すべきか問題である。漠然異國に關する圖書と云へば多きに堪へないほどある。そこで先づ異國叢書の解説を定める必要がある。駿南社出版の所謂異國叢書の範圍も實は明瞭でないが、日本關係の西籍の邦譯と限定してゐるかにも思はれる。則ち外國人に書かれたものと局限するとなると、範圍がハッキリする。さうなると、日本人の書いたものは設令ひ異國の事に關してゐてもそれは採らないことになる。乃ち新井白石の書いた采覽異言や環海異聞は採録されないことになる。又叢書體になつて出版されてゐる海表叢書や

切支丹叢書や吉利支丹文庫なども概ね日本人の著述を収めたものであるから、これ等も採られないことになる。久米邦武博士の岩倉公歐米回覽實記なども、事は外國に關係があるけれども取られない。姉崎博士の切支丹に關する四著も取ることが出来ない。要は異國の事情を知ることが主ではなく、異國人が吾邦をどう見てゐるかの文獻が主となるのである。ラフカデオ・ハーンの日本に就ての種々の著述などは、著者は歸化して日本の國籍にあつたとは言へ、外國人としての日本觀察に特殊の點があるから採取すべきであらう。但し外國人に書かれた日本關係の圖書と云うても、日本に對する特異の觀察に重きを置くのであるから、外人の譯に係る日本歴史などは採るに及ばないと思ふ。斯く限定すれば凡その範圍が知れると思ふが、それにしても既刊のもので此の叢書の内に入るべきものは少からずある。自分は追々圖書館協會の同人、書誌學會の同人諸君の援助を得て、其の目錄を製して見たいと思ふ。亦同時に將來反譯を要する原書の目錄をも併せて製して見たいと望んでゐる。

本艸の素人觀

本草の範圍は如何にも廣汎で、幾百の分科がある程だから、その見方がいろ／＼ある。普通は藥物と見る。本草學の發達したのも畢竟漢方醫が草根木皮を藥物としたからの事であらう。尙ほ本草を産業的に見ると、九州では多く櫨を栽培してゐるが、それは蠟を得る爲めであり、會津に多く漆の木を培養してゐるのは、漆汁を得る爲めで、月ヶ瀬に多くの梅のあるのは、その酢から紅を得ん爲めであつたが、今は洋紅の爲めに押されて此の産業は廢つた。尙ほ凶歉の時に應ずる食料研究も本草の一科で、昔しは備荒の心得が大切なものとされた。更に本草を工藝的に考へると、これもなかく廣いものである。どんな工藝品でも、その材料と云へば多くは本草に屬する。木にせよ、竹にせよ、皮革などの類にせよ、工藝に用ゐるには種々の注文があつて、最も選擇を要する。染料なども亦本草に屬し、これにも頗る面倒な注文があつて、役立つものと否らざるものがある。

本草は往々にして投機の具となる。阿蘭陀のチュリップは投機品として有名であるが、その爲めにチュリップは非常に發達した。日本でも萬年青や千兩、萬兩、カウジなどが投機の具となつたことがあり、動物では兎や或る種の小禽が投機の具となつたこともあり、亦常に何物かが投機の具となつてゐる。尙ほ本草には獵奇的の展望があつて、珍らしいものを大いに喜ぶ。昔し駱駝や象が始めて日本に來た時は、方々に持ち運んで見世物にしたこともある。何でも畸形のものが喜ばれ、或る人々は變つたものをしきりに寄せ集めて誇りとする。併し普通手廣く行はれてゐるのは觀賞的の展望で、種々の盆栽や庭園に風致を添へる樹石や、すべて目を怡ばしめる草木、花卉の類を玩ぶものが此部類に屬してゐる。

本艸を詩的に展望することは極めて趣味あることだ。誰れも直ちに氣の附くことだが、本艸と詩ほど親密のものはない。詠物詩などは大抵本艸を題にしてゐることは言ふまでもない。本艸のあらゆる動植が詩に依つて美化されてゐる。詠物詩にあらずとも、多くの漢詩、和歌、俳句で本艸を材料に取り入れられないものは極めて少ないと云ひ得る。月に配するに鹿を以てしたり、秋には蟲が付きものであり、多くの感慨は蟲禽を藉りて發せられ、多くの風景は動植を藉りて

彩らる。枯木は生氣がないが寒鴉を配すれば活氣を見る。渺たる江湖も蘆荻亂れ鴻雁去來すれば茲に活氣を生ずる。本艸の或るものは詩に依つて美化されると共に、詩も亦本草を藉りて趣をなす。此間の消息は本艸の一問題として特に多くの趣味が感ぜられる。最後に漏らす可からざるものは本艸を割烹的に取扱ふことである。現に古い書物に食物本草と云ふがあり、和歌本艸と云ふがあり、又詩本艸などがあつて、或は有毒の食物を指摘したり、或は食道樂の感興を詩にしてもゐる。割烹の材料はすべて本艸に屬するから、人間の食味を満足させるために材料の按排が種々に研究されて、大切の一科とされてゐる。本艸の見方は斯くも多様多般であるから、本草研究ほど必要で且つ面白いものはない。

百科本草の内にも幸不幸があつて、或るものは専門家だけに知られて、一般には顧みられないものがある。大體人の目を怡ばせるやうなものは格段に研究されてゐる。例へば石などでも、端溪の石となると硯材となるので、大いに珍重されてゐるし、印材なども、凍石其他さまざまの石が文房の要具であるだけに、珍重され研究もされてゐる。鳥の部では、鷹の如きは、或る時代に格別の寵を得て厚遇された。其譯は封建時代に狩獵に鷹を使つたからで、鷹匠などの職

もあつて大切に飼養された。蟲の内では蝶などは其の羽毛の色彩が美であるために、洋畫家和田英作氏に取り上げられ、幾百千の蝶の羽の色の按排を仔細に研究されてゐる。農作保護のため若くは衛生上の必要から害蟲が研究されたり、其他さまざまの例を挙げればこれ日も足らぬほどある。

本草の研究を本格的にやつた人は日本に澤山ある。差當り吾等の戴く今上陛下は本草の本格的な研究者であらせられるから、本草家は意を強くしてよい。昔し兼葭堂木村巽齋は本草の標本を博搜したことで有名であるが、此人なども研究家の内に列してもよからう。榮西禪師が支那から茶を將來して梅尾に栽培してから茶が日本の常用となり、青木昆陽は甘薯を栽培して焼芋屋から崇拜され甘薯先生の名を博し、會津侯が領内に人參を培養したことなどは、研究と云はんよりは利用厚生のためで、前に言つた産業の部類に屬するものであらう。明治の初年、西洋の實用植物を日本へ移し來り、街樹などを植ゑた、津田仙氏なども一種の本草家と見るべきであらう。氏の學農社では利用厚生種の種々のことを研究し世を益したものだ。鷹司公は關白五攝家の家筋であるが、その姓の如く、今の公爵も大の小禽研究者であると云ふも奇な因縁である。

小説家の曲亭馬琴は一時多く小禽を飼養して家計を補はんとしたが、終に失敗したので、其の爲めに費した金の勘定を仔細に録し、子孫に飼禽を嚴禁した。それにしても禽譜を作り、門外不出とするほどの凝りやであつた。此人などを研究家に列すべきや否やは疑問であるが、單なる道樂ばかりでもなかつたらしい。大隈侯が大袈裟に世界のあらゆる蘭を蒐集して豪奢振りを發揮したのは、斯道の人の研究に資する所があつたに相違ないが、これも鑑賞的道樂と見るが妥當であらう。和田維四郎氏が大袈裟に世界の鑛物標本を蒐集し、金石の爲めに氣を吐いたが、和田氏は其道の専門家だから、此の蒐集は道樂のみとは見られない。法律家の城數馬氏が高山植物にうき身をやつしたのも一奇だが、高山植物の採取に先鞭を着けたのは此人である。小説家前田曙山氏が妙に櫻に興味があつて、相當に造詣のあることもこゝに附け加へておく。

自分が大學豫備門で博物學を教はつた頃、尤も興味を感じたのは動植物學であつた。あの説明上手のモールス先生が、五色のチョークを両手に持つて、巧妙に神速に黑板にいろゝの圖を書いて示されるので一層吾等の興をそゝつた。蝶や昆蟲を捕捉するため遠足を試みたり、山嶽に登攀して高山植物を採取し、押葉を作ることなども一興であつた。西洋では植物を紙に押

して標本とするが、日本では古來寫生を主としてゐる。押葉が時を経ると變色したり剝落したりするから、それを厭うての業か、割合に寫生が寫實に出來てゐるのは、多くの場合本草家自身で寫生したからであらう。本草に志あるものは自然繪を畫く心掛があつたと思はれる。モリス先生が達者に繪を畫いたのも亦此故であらう。日本に出來た多くの本草圖譜の類も、一時は漢方の醫書と同視されて高閣に束ねられ、價も二束三文であつたが、後には此等圖譜は漢方醫專屬のものでなく、學術上頗る意義あるものと分つて、價もメキメキ高まつた。自分も一時多く圖譜を集めたことがあるが、今は僅かに海藻の實物百種を貼つた帖と、鰯の各種を拓した帖とを藏するに過ぎぬ。

博物館の前期、博物館時代に名手を備うて魚類の寫生をやらしたことがある。毎日魚河岸からいろ／＼の生魚を購ひ來り、それを案頭に置き、寸毫實物と違はないやうに寫生をやらして、それを石版に附したのが今も存してゐる。それは流石によく寫されてゐる。これなどは本草寫生を獎勵した一例だと思ふ。又狩谷核齋の家に日々出入する八百屋の小僧が天稟に畫才があつて、魚類の寫生に妙を得て居るのを核齋が見て、此兒教ふべしと、毎日錢を與へて魚を買はせ、

それを寫生せしめて獎勵したのが功を奏して後には妙手となつた。これも亦本草寫生の一例で、畫名は忘れたが、鱗族の尤澤までみづ／＼と現はして、さながら實物を見るが如き趣がある。

自分の同窓に一人の動物學の大家を出した。それは石川千代松博士である。尙ほ他に植物學の大家が知人中にある。それは三好學博士で、往年北海道へ赴いた時偶然同車して、種々植物界の興味ある談話を聞いたことがある。此の三好博士と亡友寺崎廣業に就いて一挿話を思ひ出す。廣業は本草を解する畫家ではなかつたが、ある時墨色淋漓たる森林の圖を作つた。三好博士はそれを見てひどく感服して、本草の心得が無ければこの積翠を如實に畫ける筈はない。緑の深みが如何にもよく寫されてゐると激賞した。廣業は之を聞いて意外に感じ、自分は本草を解するものでない。偶々書いたものが本草家の鑑賞に入つたのは望外であると笑つたが、技が妙境に達すると、自から神に通ずるとは此事であらう。

國際間の本草交換は學術上大切のことである。元來本草は國々に依つて異なるものが澤山にあつて、甲の國にあるものが乙の國に無く、乙の國にあるものが甲の國に無い。そこで互ひに有無を通ずることが必要であるので、今日では魚類を交換したり、植物を移植したりしてゐる

が、實は研究の交換は今日を待たず、早くから行はれてゐる。外國船の日本に渡來する毎に、遠くマルコ・ポーロ時代から、必ず本草の専門家が船に乗り込んでゐるので、日本の動植物で外國に無いものが注意され、其標本が持去られたり、或は圖が取り去られたりしてゐる。殊にシーボルトは長く日本に居住して熱心に日本の本草を研究し、日本の本草家も後援を與へたから、西洋の専門家にそれが紹介されてゐる筈だ。追々は飛行機で世界の動植物の有無を通じ合ふことになるであらう。

寫經と平曲

寫經をなすの際に平家を語らせる故例の寺院に存するよしは、かねて聞くところで、その委しい事を知りたいと思つてゐた折柄、平家専門の館山漸之進氏が來り、その事ならば大概如電の「頓寫記」に一と通り記してある。と、其示されたのを見ると、今も尙この式の存する事を知るのみならず、その法式の思ひの外嚴格なのをも併せて知るを得た。今左に如電の「頓寫記」

を抄録する。

明治四十一年十月、自性院權大僧都大森眞應師來り、來る二十三日傳法心院に於て頓寫執行す、臨席せられたしと告ぐ。頓寫は耳にせしも眼にせし事なし。(中略)願うても參加したしと請けして返しぬ。會て聞く、頓寫には平家灌頂の卷を語るを、古來の例式とすと。兩者の調和いかなる工合なりや。これを試みんとて當日深川忍山、瀬川如山、三上代山三人を伴ひ、琵琶たづさへて傳法院の大書院にまゐる。此日の頓寫するは最勝護國宇賀郡頓得如意寶珠王修儀と題する帖子にて、辯才天行一百八座の修法儀則なり。按ずるに寫經功德に漸寫、頓寫の二法あり。漸寫とは時日を期せず一筆もて一卷若くは一部を自寫するもの。嚴島なる平家一門の一人一品づゝ寫したる法華經などの如し。頓寫とは頓次に一經を寫了するにて、衆人の力に依り即時速成を主意とす。此修儀は題目に頓得寶珠とあるより古來頓寫せしものと思はる。修儀の帖子は豎五寸、幅四寸半許、紙數五十折にて、片面六行づゝの立野ひき、修儀の方法を記載す。同じ寸法にて白紙引の新帖あり。大書院の上中二室を開け通し、其西側中央に長き机を幾脚も一文字に繼ぎ並べ、其上に新舊兩帖を延べ披き、舊帖を先に新帖を手

前に、兩々相對して列ねたり。參會の僧俗二十餘人なり。僧の首座は行者眞應僧都にて、上野、淺草の兩僧正より僧衆十人許整坐す。如電は半僧俗の身とて其末位に在りて俗衆の筆頭となる。従ひ來れる幸堂、法山、如調など其次に並び、他の人々と一同平列に居すまふ。一人に帖子二折づゝ、各二十四行を受持と定む。筆硯は各自に給せられ、般若心經を同音に三誦す。此三誦の間に墨するなり。寫法は、原帖を手本として、その行配り字配りの彼と此と移し寫すものなれば、手風こそちがひ文句つゞきは差ふ事なし。懸腕にて正書にかくあり、行體を帶ぶるもあり。遲筆あり、達筆あり。筆もつに單挂あり、雙挂あり。巧拙健弱くさぐさにてありき。頓寫の主意は初めにも云ふ如く一刻も速かに寫し終る事なれば、我が受持を早く了りたる時は他人の餘白を手傳ふも差支へなしと聞き、余と三上とは二三人の頰分に切込、イナ筆つき込みたり。かくて表面を了へ、裏面も亦復かくの如し。兩面五六十分の時間を費しぬ。多年おもひに思ひし頓寫を眼にするのみならず、手にせしは、深き因縁にこそあらめと尊くも亦ありがたし。さて平曲を奏するは、心經三誦すみ、各員筆とるを合圖に灌頂撥を弾じ出すべしと定む。最初は忍山かたる。大原御幸なり。裏面は代山代つて女院御出家

を語る。琵琶は前後共に如山つかまつる。その兩曲いづれも撥と筆と同時に了りたるは不思議なれ。正式は寫了すれば磬を打つ。平曲は半途にても直ちに止むるものとぞ。寫經の傍らに音曲ありて筆の進行を妨げんなど、思ひ居りしが、そは思ひの足らぬにて、音の甲乙より絃の緩急、其調子といひ拍子といひ、優美にして餘音あれば、自然と人の心耳を澄し、筆とるもの氣の散る事なし。されば筆の運びもよどみなく、寫誤、脱寫等とは誰しもあらぬやうなり。爰に於て頓寫に平曲もちゐるの實驗を得て、古來の例式いやしくもならざるをさとり、これ又有難しとも亦尊し。

圖解現代百科辭典

百千の書物を發行するよりも一の辭典を發行する功德は大きい。自分は此の意味に於て辭書専門の書店を尊敬してゐる。一部纏つた精纂の辭典を發行するには、其の準備に少なくとも十年はかゝる。辭書は精根の結晶である。往年日本空前の大百科辭典を發行した三省堂は、今度

「圖現代百科辭典」を發行し、全五卷の内第一卷が出た。此の辭典の特徴は、各辭に圖が伴つてゐることである。即ち六萬辭を包容する此辭典には六萬の圖があるのだ。卷を開いて見ると、三段に互る圖繪が帯のごとく展開されて、絢爛目を驚かすものがある。うつかり考へると圖繪が主で解説が従であるかにも見えるが、實はさうでなく、解説を補ふ爲めの用意に出でゝゐることは言ふまでもない。各辭の解説が頗る簡明で要を得てゐるのは、畢竟圖繪が伴うて半ば若くは半ば以上説明してゐるからである。圖繪の人に理解を與へることの早く且つ強いことは今更言ふまでもないが、百の絮説より一の略圖を示す方が確かに効果がある。どうも文字の解説は、如何に懇到細微に涉つても、ハッキリと物の印象を與へ得ない。複雑畸形の物となつては、文字で説明の出来ないものも少からずある。だから外國でも近年は別して繪の媒を藉りて地理でも歴史でも教へることが行はれて、頗る教育の効果が擧つてゐる。中小學の教科書に挿畫の追々多くなるのも此故である。辭書にも繪は説明の爲め挿入されてゐるが、長い間動植物の圖に限られた觀があつた。物があれば其の實體を現はす圖がある筈だが、中には圖で現はし難いものがある。それは空氣の如きもの、液體の如きものなどさまざまあるが、そんなものでも幾許

か聯想で現はし得るものもある。液體の藥劑の如きものは、現に此の辭典にも出てゐるが、藥名のペーパーを貼つた容器が現はしてある。だからどんなものでも圖にされないものは無いと云ふことが出来る。此の辭典の一特徴はどんなものにも其圖がある。殊に百科の廣汎に涉つてゐるので、多くの人が曾て其の形を見る機會の無いものが皆具はつてゐる。外國にも近來同じ趣向の辭典を出した例はあるが、此の辭典の徹底的にどれにも圖を具してゐるのとは比較にならぬ。全體圖繪で物を語る法は、諸外國よりも日本の方が非常に發達してゐた。各頁に精細の繪があつて、パノラマ式に連續してゐるものと云へば、草双紙が何千種とある。あれには文章もあるが、繪だけでもおよそ物語の筋が分り、文章よりも却つて讀者に趣味を與へたものだ。繪のある辭書と云へば、支那の「三才圖會」に日本のものを加へた「和漢三才圖會」もあるが、それよりも尙ほ俗間に廣く行はれた訓蒙圖彙があつて、これにはいろいろの種類があるが、これなどは正しく圖解辭典と見るべきものである。併し此等は何と云うても餘りに物の數が少ない。いろいろの専門學科にもそれ／＼圖を具した辭書があるけれども、一部に纏めて集大成したものは此の圖解百科辭典が創始である。最早物の圖を搜すに廣汎の圖書に就て檢索する要が

無くなつた。貳千年の昔しの世界諸國の事でも、今の人達の必要とすることは何でも圖されてゐる。勿論「現代」と書名にも標榜してあるごとく、現代の人物、風俗、機械、其他あらゆるものが網羅されてゐる。そして古い時代のもので現代人が知らねばならぬことがよく選ばれよく收められてゐる。恐らく他日に至つても此の選擇されたものは今日と同じやうに必要がられるであらうし、現在のものも亦他日に至り、恰かも今日江戸時代の物を見るがごとく、明治、大正、昭和の世相を知るの材料となることを思ふと、此の現代百科辭典の生命は甚だ長いものと思はねばならぬ。すべて辭書は乾燥無味が寧ろ其の本色であるのに、これは其の本色を破つて、卷を開くと、繪畫展に入つたかのごとく目を怡ばしめるものがあつて、繪に惹かされて、此物はナンデあらうかと説明を讀みたくなる。斯の如きは全く他の辭書に無い特色であつて、無聊に乘じ展開して行けば、繪が媒介となつて、思ひも寄らぬ物に觸れ、其の解を得て、不知不識の間に物識りになる。これも畢竟此辭典のお蔭と云うてよいと思ふ。

女百話の序

本書の特色は百話のすべてが女性の唇頭から發したと云ふ點にある。これをば獵奇的に考へて面白い思ひ付きだと云うてアツサリ片付ける人があらば、それは餘りに輕率だと思ふ。著者蝴蝶庵氏の眞意は、獵奇に驅られたのではなく、恐らく他に意味があるのであらう。全體女性は男性の如く語る機會を有たないものである。公けに語ることは尙ほ更らである。随つて女性の語ることには隠れたことが多い。尙ほ觀察の仕方も男性と女性とは異つてゐるし、趣味も同じくない。女性は概ね感情的で觀察は微に入り細に入る。男性が大まかに氣にも留めないことを女性はぬかりなく掴む。男性が聞き流しに附するものを女性はそれを逃さず記憶する。男性は多くの場合瑣事に頓着しないが、女性は却つて之れに興味を有つ。大體男性は自から成したことすら自ら記憶しないことがあり、物に就ての觀察も往々放漫に流れる。故に男性に聞いて知り難いことを女性に聽いて委曲の分ることもある。尙又女性の一徳とも云ふべきは、男性の

入り得ない所に入りこんで、いろ／＼の祕密に接することが出来ることである。乃ち宮仕をしたものでなければ殿中の事が分らず、豪紳の家庭に入らねば其の内政が分らず、寺院に住み込まねば僧侶の内生活が分らず、料理屋待合に居つたものでなければ客筋が分らないやうなもので、此等の内所には女性のみが立入ることを許さるゝが、男性には絶対禁断の處である。然るに人情はオツなもので、どんなに鐵錠を卸してゐる堅固な男性でも、女性に對しては誠に脆く、兎もすれば心を許して漏らす可からざることを漏らすことのあるのは珍らしくない。だから女性ほど人の祕事を知つて居るものは無い。祕密の事でもなくとも、男性の知り得ないことを知るの便利と長所がある。そして多くの場合、直接本人に接して口づから其の談話を聞いたり、其現場を目撃したりしてゐるから、その事實は概ね正確である。女性から種々の挿話を聞くことの如何に意義あるかは、こんな粗略な記述に依つても凡そうなづき得るであらう。

幕末、明治初期の逸話で、文獻にも存せず口碑にも傳はらず等閑に附されてゐるものが少からずある。それが當時の世相、風俗、人情を語る屈竟の資料であるのに、今は時々刻々失はれつゝある。今日辛うじて存してゐるのは老人の頭脳にあるのみだが、此等の人々も日々凋落し

行くので、其の頭脳中ものを拾ひ上げるには今を措いては機會がない。今は實に危機一髪の時だ。此時を失すれば、アタラ資料は老人と共に地下に入つて永久に失はれるであらう。幕末も明治初期も最早歴史の範疇に入つて、當時の逸話は聴く人をして隔世の感を抱かしめる。それだけ當時の逸話が史料として大切である。著者は既に百話二篇を公けにして多くの逸話を措據されたが、まだ逸話は決して羅し盡したとは云へない。残る多くは口を緘してゐる女性の方面にある筈だ。著者が百尺竿頭一步を進め、此の方面に涉獵を試みたのは頗る吾意を得たものである。自分は僅かに目次を見たに過ぎないが、どの題にも女性的特徴が見えて、男性の語る所と趣が異つてゐる。著者は既往に於て専ら銳利のメスを肉や骨に揮つたが、今は五臟六腑に及ぼしたかの觀がある。恐らく此著は前二篇に倍して江湖の歡迎を受けるであらう。

藏書印の考察

多くの書物を扱つてゐると、自然藏書印に注意するやうになり、それが往々一種の趣味とな

つて、不明の蔵書を調査したり、亦多くの印影の蒐集を試みたりすることにもなる。多くの場合、何人でも書物を披くと、先づそれに捺してある蔵印を見ることが幾んど例となつてゐる。それは誰れの收藏であつたかを知らんが爲めで、それに依つて書物の時代などが知れるからである。勿論これは古書に就てであるが、古書には多く不明の人の蔵記がある。その中に動もすると、歴史上著名の人の蔵記を発見することがあるから油断はならぬ。若し大人物の印が見出さるゝとなると、其の本が大いに光輝を發する。例へば、西洋で云へば、クロンウエルの署名やシーザーの署名でも發見したとなつたら、大騒ぎであらう。日本でも、光明皇后の「内家私印」の蔵記のある書物や空海の署名のある本が發見されたとしたら、圖書界に大波濤を捲くであらう。圖書を扱ふものに相當蔵記の鑑別力を要するは此故である。

自分も曾て蔵書印に興味を感じ、數年間印影の蒐集をつとめたことがある。切り抜いて差支のない印は本から切り抜きもした。切り抜き爲に特に古書を購入ひもした。名家の印を藏する人に就て印影を請ひもした。そしてそれを貼りつけた本が三四冊出來た。實は蔵書印譜を作つて見たいと思つたからである。自分が名家の私印の磨り潰されて亡びゆくのを惜しみ、有るに任

せて蒐集し、今も續けてゐるが、この名家の蔵書印も自然十幾顆を得た。此等も皆蔵書印譜の材料とする爲めであつた。此の蔵書印には格別古いものは無いが、尾藤二洲の「獨醒樓圖書記」、狩谷椽齋の「湯鳴狩谷氏求古樓圖書記」、橋南谿の「春暉堂圖書記」、水戸の支藩守山侯源頼寛の「觀濤閣」の印三顆などが重なるもので、二洲の印は高芙蓉の作で、銅印である。頼寛の印は彰考館の印と同形で、頼寛の著「論語徵集覽」の首部に刻してあるのが三顆の内にある。

右の如く自分も一時蒐集に没頭したが、遂に斷念した。その譯は、古書より蔵記を切り抜くことは書物に對しての冒瀆であることを感じたからである。一冊の本に同じ蔵記が首尾其他に幾つも捺してある場合一つ切り抜いても妨げないやうでもあるが、それにしても痕跡が残つて書物の疵となる。書物にかゝる疵のあるのは甚だ不快の感がある。時たま藏者自身が賣却する時に蔵記を切抜いたり、或は塗抹して自家の名を蔽はんとするものもあるが、矢張り書物を疵ものにして、よくないことである。人或は蔵記を切抜かず、それを摸寫すれば事足るではないかと云ふかも知れんが、印の摸寫などは素人の出來ることでない。纖毫の差のないやうに寫すには、寫真作用なら格別、篆刻家と雖も難んずる所であつて、素人がいゝ加減に影寫したもの

などは全然價値のないものである。尙ほこゝに附け加へて置くべきことは、名家の手澤の本を珍重することには、合理的の意味もあるが、その手澤たることは何に依つて證するかと云へば、藏者の書入や署名などのあるのでも判ぜらるゝけれども、専ら藏記で之れを證するものであるから、手澤本を重んずるからには藏記を重んずべきである。藏記を塗抹したり切抜いたりすることは手澤本の證蹟を滅却することになる。

藏書印は本來其所屬を標記するものであるが、それが後になると、いろ／＼書物を考察するに役立つ。と云ふのは、書物の所藏者の階級の違ひで印の形式や大小などに差がある。大體地位の高い人の藏記は堂々たる趣がある。武田信玄が僧三要に與へた本は足利文庫に存してゐるが、誰れも知る如く、如何にも立派な藏印である。政府所屬の圖書に大なる藏印を捺すことは特色となつてゐるし、皇族方の藏記も堂々たるもので、「青蓮王府」の印などは其の一例である。寺社の藏印も特長があつて、長方形なのが通例であるけれども、勿論方形、圓形もある。藩學の藏印も概ね大形である。漢學系の學者の藏印と、國學者系の藏印にも多くの場合相違があつて、前者には唐様が多く、後者には和臭があつて、往々假名文字を交へた印文がある。こ

んな風に藏印を見ると、凡そ所藏者はどんな人であるか略々推測される。又藏印の形式は時代に依て可なり違ひがあつて、古い時代の藏印は質朴で、黒肉で捺したのが多く、書體も楷行、或は倭古篆と唱へる日本式の篆字を用ゐてゐる。追々時代が降ると、支那風の印となつてきて、それにも種々の變遷があるから、それを見るとおよそ本の時代を知ることが出来る。

藏印は前述の如く所屬を標記するものだから、本來自家の姓名を明記すべきであるが、必ずしもさうではなく、或は號を刻し、或は書齋、或は文庫の名を刻したりして千殊萬別で、中には到底誰れの藏書かを判じ兼ねるものがある。一人で別號を幾つも持つてゐる人が、その種々の別號を印記としてゐる場合などは、通人でもなか／＼判じかねる。隨分中には唯だ自家の心覺えにと、姓氏に全然關係のない游印を捺す人もあり、或は絲印を藏印に間に合はせてゐる人もあるから、藏印で舊藏者を知ることが容易でないが、實はそれを詮索するに興味もある譯で、兎もすると研究の結果、偉い人の藏印を發見することがある。友人谷村一太郎氏がある佛書を得て、誰れの手澤本とも辨じ兼ねてゐたが、その捺してある鼎式の印が足利直義の印とわかつて驚喜したなどは、其の一例である。

尙ほ特に言ふほどのことでないが、藏書印に「藏」の字がなくとも藏印である場合が少からずある。およそ藏書印に普通用ゐる語類を擧げて見ると、「圖書記」「藏書」「珍藏」「家藏」「收藏」「鑑藏」「藏古」「秘笈」「挿架」「清玩」「清賞」「過眼」「讀書記」など頗る多般であるが、こゝに多少疑問であるのは「過眼」の印である。支那では他人の書物を借りて讀過すると「某過眼」の印を捺することがあるやうに聞く。さすれば過眼印は精確には藏記と云へかねる。しかし日本ではこれが藏記と見做されてゐる。又過眼印と同じ意味で「讀書記」の印を用ゐてゐる人がある。書狂、書盜として醜名を博した某の印などがこれであるが、これなどは狡獪の心術から工夫したものかも知れない。まさか他人の本に自分の藏記も捺し兼ね、咎められた時の遁辭に所屬印でないとは辯疏する積りかも知れない。それは兎も角も、讀書記も普通藏印と見做されてゐる。尙ほ藏書印の内に「曾在某氏家」と刻したものがあつた。これなどは書物の行末を考へ、どうせ自分の死後は人手に歸するに相違ない、しかし一たびは俺れの所有であつたと記念するために工夫したものであらうが、己れの手にある内に「曾」の字を用ゐるのは早計であるまいか。それでは所屬を争ふことがあつたら敗訴になる虞れがある。

書物を大切にする人は百代の後まで子孫に傳へたいと考へて、爾の子孫に宜しだの、子孫之れを寶とせよと云ふ様な文を刻したものが多くある。しかるにその反對の印語を撰んでゐるものも少なくない。「得其人傳之必不於子孫」と刻したり、「子孫換酒亦可」と刻したりする印は將來を見越した印語で、いくら子孫に寶とせよと云うても、それは覺束ない、俺れの死後には賣つて仕舞ふに相違ないと、早くあきらめてかゝる印を用ゐるのである。自分の如きは此種の印を用ゐる仲間で、現に前記の二顆とも有してゐるが、「子孫換酒亦可」の印は市野迷庵の書後の意を取つたのである。以上は皆藏書記であるけれども、斯様な印は單用しては所屬の標記とならないから、別に私印を重ねて捺す面倒もあつて、此種の印を用ゐることは餘り感心が出来ぬ。森川竹窓が大切な書物に捺すに「此書不換妓」の印を以てした掣みに倣つて、自分も戯れに「此書不換酒」の印を作つたが、これなども矢張り單用では所屬が知れないから、戯れに捺す用いしかならぬ。尙ほ此他いろいろの藏記を擧げると、父祖傳來のものであることを標記する印がある。家康公所藏の書に「御本」の印が捺してあるのは其一例である。或は「幾十年精力所聚」と集書の苦辛を標記するものもある。他人に貸す場合疎略にされてはならぬと、其の意を寓し

た和歌の印や、藏記の左右などに書物は必らず舊主に戻すべきものと云ふ様なことを刻した
ものや、圖書取扱の注意などをこまかくと刻したのもあつて、藏書記の類は如何にも複雑で
ある。

藏書印は圖書に缺く可からざるものであるが、書物を愛重する心があれば書物の膚を成るた
け汚漬しない心掛けがなくてはならぬ譯だ。實を云へば、藏書印で書物の或る部分に一痕を残
すのは一つの瑕疵とも見做さるべきものである。大きな印を文字の上に捺したり、種々様々の
印を餘白のある限りベタ／＼捺すなどは、圖書に對する大なる冒瀆である。別して俗惡の印を
捺すことは頗る圖書の權威を害し、識者はその爲めに唾棄することにもなる。極端の例ではあ
るか、古書にゴム印をインクで捺したとすればどうであらうか。それは大なる疵となるのは言
ふ迄もなからう。貸本屋の藏記は商店の仕切判で如何にも俗惡のものだが、それが小説などに
捺してあるから忍ばれもするが、若し相當の圖書に捺されてあつたとすれば、好書家に如何に
惜まるゝであらうか。名もない人の藏印は假令ひ雅刻であつても、その圖書の後繼者に迷惑を
感ぜしめることが少なくない。これを考へると、書物を愛重するからと云うて、自家の藏印を

やたらに捺すことは遠慮してほしくなる。實は圖書の愛藏家の矛盾は自家の印で書物を汚すこ
とにある。愛重の念が深ければ深いほど、一點も書物を汚さないやうに心掛けるのが本當であ
らう。極端を云ふと藏書記の絶對に無いことを主張したくもなるが、前にも陳べたやうに、藏
書記は所屬を標記する爲めであるのみならず、刊年や藏者を知る爲めにも大切であるから、一
概に極端論を唱ふべきではないが、書物の愛重者は心して藏記を捺して貰ひたい。藏記は所屬
を明かにすれば即ち足ると云うて、印判屋の彫つた俗印をベタ／＼押されては、或る種の書物
は泣くであらう。例へば宋本などにコレ式の印を捺したとしたら、此上もない冒瀆であらう。
兎角書物と印に調和を要する。捺さるべき圖書に相應する印が選ばれねばならぬ。藏記は其人
の人格や品性を現はすことにもなるから、相當の刻で無ければならぬ。随つて圖書を愛藏する
人は或る程度まで印に理解が無くてはならぬと思ふ。近頃の藏書家であつた某氏は、必ず拇子
大の圓形の印を本の邪魔にならぬ所を選んで捺すを例としたが、或る知名の藏書家は無遠慮に
その所有の藏記のあらん限りを燕雜に捺して餘白を埋めてゐる。そしてその印が皆な俗刻であ
るので、藏者は全く印に興味もなく理解もない人と想像される。自分は前者の印を見て其の奥

床しい心根を感ずると共に、後者の印を見ては戦慄を禁じ得ぬ。俗印を多く書物に捺すのは、さながら美人の肌に焦痕を印するやうなもので、これほど罪なことは無い。流石に昔しの書物に捺してある藏記は、質朴ながら雅趣があつて、聊かも街氣がなく、圖書に權威と光彩をこそ添へれ、一向冒瀆にならない所が嬉しい。

書物の書入れ

予は既に藏書印に就て多少の考察を下し、漫りに印を捺して書物の面を汚すことの非なるを云うた。而しておのづから別問題ではあるが、書物に書入をすることの可否も似寄りの問題に屬する。これは又藏書印に比すれば甚しく本の餘白を汚すものであつて、兎もすると、餘白の全部を書入で埋めるものがある。書入と云ふ内にも、軽いものを云へば、白文に句讀を施したり、訓點を附したり、振り假名を添へたり、或は人名、地名に棒を引いたり、或は誤字を直したりするなどは、書入とは普通見ないものであるが、書物に筆を加へる點から見ると書入も同じ

ことである。愈々書入となると、字義の註解を初め、文章の論評、諸家の説を擧げて誤りを正したり、本にある註を駁したり、研究の結果のあらゆることを書きつけるから、餘白の全部を埋めても書き切れぬことがあつて、幾枚も附箋することさへある。昔しの經學者などは、こんなことに没頭したもので、講釋本となると、講筵で説かんとすることがすべて細字で書きつけてある。これは諸書を講席に携帯しているく、の書物を翻閱する不便を省く爲めに工夫されたことでもあらうが、此の事のために、書入が本のどの頁にも満ちて、朱筆、藍筆の細字が狼藉たる觀がある。昔しは斯くせねば研究がつまぬと云はれ、書入の多い本を所持するを以つて誇りとしたこともある。門人などは先生の講説を筆記してそれを書物に書入れしたり、或は先生の本を借りて書入をそつくり寫すものもあつた。足利時代の僧も書入をつとめたらしく、多くの本に必らず書入のあるのを例とし、一見その書體で足利時代の本と知れる位のものだ。全體斯く書物を冒すことがよいことか否か。書入をなすものは云く、本は元來研究に資するもので、欄外の餘白は書入をなさしめるために設けてあるものだ、それに研究の結果を書きこむことが何で悪いのだと。又或る西洋の學者は云く、書物は自分に向つて説の是非を問うて居る、それ

に向つていかで黙し得よう、書入は即ちそれに答へるのである。バイブルなどでも、クリストの門弟がいろく、自分に呼びかけてゐるが、それに服し兼ねることがあれば吾れはそれを駁さねばならん、書入の已むを得ない所以だ。その云ふ所は尤も至極で、自分は書入を非とするものでないけれども、希観、貴重の本を漬すことには矢張り不賛成である。かゝる書物に訓點を附したり、人名、地名に線を引くときすら不賛成である。況んや餘白を書入で填めるに於てをや。書入はかゝる貴重の書物に於てせずとも別に本がある。書入の用意に故ら欄外に多く餘白を存した本もある譯だから、それを用ゐれば事足るのであつて、無差別に希観、貴重の本を冒瀆するに及ばない。全體書物を單に實用一方から見れば、無差別に汚瀆してもよいやうに見えるかも知れんが、書物趣味の上から見ると、そこに差別がある。アキラ天下無双の本に筆を加へるが如きは、矢鱈に藏書印を押して汚瀆すると選ぶ所のない罪惡である。著名の學者の書入本は講學者の常に尊敬を拂ふことはあれども、願はくはそれは普通本であつてほしい。希観の書籍は、いくら名家の書入でも、寧ろ無い方がよい。書物の趣味から云ふと、かゝる本は飽くまで純潔に保ちたいものである。名家の書入すら斯く云ふ、況んや俗輩の塗抹に於てを

や。書物の珍藏家の中には、欄外の書入を厭うてすべて剪り去り、欄内の板刻文を帖などに貼る人もあるが、書物の形體を損じた點で大いに價値を害し、好書家の鑑賞に入り兼ねる。支那の好書家が日本の書入本を喜ばないのも周知の事である。支那へ古書を裝潢にやると、日本では大切に考へてゐる、巻尾の扉に名家の筆蹟のあるのをスツカリ取り去つて仕舞ふ。あるものが林羅山の筆蹟のある書を裝潢の爲め支那へ遣つたら、その筆蹟を失つたので、ひどく弱つた例もある。善本を純潔に保たんとするには書入を疵と見るのも無理は無い。讀書家には、往々鉛筆を手にしながらかみ、會心の處若くは自分に役立つ處などを目標にと線を引いたり圈點を施したりする人がある。洋装の有觸れ本なら忍ばれもするが、佳本、善本にかゝることは甚だ忌はしいことであつて、書物を愛重する人は慎まねばならぬ。

更に書畫の冒瀆

前項に書物に書入をしたり圈點を附したりして書物を汚すことの非を鳴らしたが、尙ほ補足

すべきことがある。支那の習慣として書畫の紙中にべたく、藏記を捺すことがある。その書畫が貴重であればあるほど、多くの印が捺され、持主が替はれば、新たな持主の藏記が捺されて、藏者の變遷と沿革がその印を見ると分る位であるが、かゝる習慣は果して可とすべきであらうか。如何に所有者を明かにし盜難を防ぐ爲めとは云へ、書畫そのものを汚すに至つては最も罪の深いやりかたではあるまいか。印記を捺すには、書畫そのものを冒さずとも、おのづから他に處もあらうに、餘りのことゝ云はねばならぬ。日本は、幸にして、何事も支那に倣うたに拘らず、此點に倣ふことをせないのは、流石に日本人は書畫に理解があるとも云ひ得よう。しかし邦人でも或は支那に倣うて得々としてゐるものがある。いつぞや良寛の小切を澤山に藏する人の家に就て幾卷の書を見たことがあるが、各紙の餘白に二三顆の印記が必ず捺してあるので、眉を擧めたことがある。斯様なことは正しく書畫の敵である。書畫の要部に或は支那皇帝の印を捺したり日本では東山殿の印を捺したりしたものがあつて、人は却つて其の來歴を證するものとしてその印を珍とするけれども、實を云へばこれも冒瀆であつて、書畫を重んずる人としては忍び難いことである。尙ほ筆者自身「曾經御覽」などの大印を書畫の要部に捺すること

もあるが、これも自家宣傳で、その心事の陋を露はし、忌むべきことであるが、往々にして此の印のあるものが人に喜ばれるのは、捺印を汚損と心得ないからのことだ。實を云へば筆者の氏名などを筆太に書くことすら餘り感心されないことである。邪魔にならない所に細書してこそ筆者のつましやかな心根が知れて、床しさを感ぜしめる。印などでも、今の刻者は鈕の要部に落款を刻するを例としてゐるが、印も他日改刻を要することがありとすると、刻名が疵となる。流石に昔しの篆刻の大家は自分の名を刻するに遠慮が深く、印の最下端乃ち字を刻したあたりに細刻してゐる。改刻の時は刻者の名も共に磨し去られるからのことだ。自分の實驗に據ると、或る下駄印の中央に刻者の名があつた。それは前川虚舟である。又高芙蓉の刻した印には、名は□干圖の如く、丁印の處に孟彪刻と細刻されてあるのを見た。これなどは改刻の時には名も同時に磨り去られて鈕に疵痕を残さない處に作家の用意があつて、古人の奥床しさが感ぜられる。之れを要するに、書畫にせよ、印にせよ、それを愛重するものは、飽くまでも冒瀆を避けることに留意せねばならぬと思ふ。

柳亭種彦の手紙

柳亭種彦は「田舎源氏」を書いて、一世を風靡したくらゐであるのに、字を書くことが拙であつたので、手紙なども已むを得ない場合でなければ避けて書かなかつた。随つてあの人の墨蹟の残つてゐるものはなほ少ない。然るに饗庭篁村は曾て種彦の長簡一通を藏してゐたことがある。それは二代種彦といはれた、門人仙果に與へたもので、仙果はその頃名古屋にゐたので、さながら面談に代るやうに懇切に物を教へてをり、水滸傳反譯の事や、自家の家庭の事、殊に雷を恐るゝ妻の事などが委しく書かれてあるので、種彦の遺簡としては珍しいものであつた。饗庭のいふには、この書簡の卷物は無名氏から寄せられたもので、今になつても送つた人がわからないというてゐた。その頃自分は多く名流の書簡を集めてゐた際であつたから、強ひて懇望して割愛を得たが、數年の後餘儀ない事で手放して或る人が珍藏したが、それが大震災に亡びて、今は天地間に存在してゐない事を思ふと惋惜に堪へない。このごろ當時の雜筆を

翻して見ると、幸ひにその寫を取つて置いたのを發見した。文通は長いが種彦研究者にとつては好材料であらうから、多少の註を加へて全文を掲げることにした。

並便の方さきへ、早便の方は廿九日晝過に相届、朔日御返事認申候。

文章の事、京山子の譯のところあまり本朝の俗語多く、水滸傳らしくなきといふ評判なり。七編より、さる人をたのみ、譯し申候。すでに稿本二十丁出來候處、これはことに俗語甚しく、「此はつつけやらう」小書には「くそでもくらへ」などといふさへあり。これでは賣れぬといふて、板元より少々の筆耕料おくり、小子をたのみ書直し候なり。書ぶりの事は、小子のがまわり候間傳へ不申。俗語かなちがひにて□□、、、の趣承知いたし申候。(漫談者云、この邊少しく解し難きところあり)直しにあげ候ところが往來二百里の事ゆゑ、これは先づ此儘にて、あまり耳立ち候處は小子書直し可申、「カ、ア」と云ふ事を女房と云ふ位の事也。京山の水滸傳譯、板元に喜ばれず、終に種彦を煩すに至りたること、この文によつて明かである。餘り日本の俗語が續出し、水滸傳らしからずといふが板元の苦情なる事もこの手紙で知らる。察するところ、種彦は依頼を受けたれども、自から譯する事をせず、仙果に譯させる事に

したと見える。名古屋と江戸の間二百里も隔たりをれば、直しを頼まれたところは、敢て貴所を煩はさず、自から加筆すべしとあり。

十一編よりは、今少しまじめなる文章のかたがよかるべく存じ候。しかしかたくてもゆかず、御見はからひなさるべく候。

譯文の事、よいところに御苦しみなさるべく、わけがわかつて賣れさへすればどうでもよし。ただ通俗本で書とだに見へねばよし。小子も不案内の事ゆゑ、小説よみの所へ肴代をもちて聞にまゐり申候。林沖のもち候花鎗、一人の小説よみは手鎗といひ、一人の小説よみはかざり鎗と申候。林沖刀は買候へども、鎗を買ひしはなし。此鎗どこからもつてきたか知れず。

曲亭子（馬琴）は刀といつしよに鎗も買はせ候やうにおぼえ申候。これも出所にこまつての事なるべし。

一人の小説よみ曰、かざり鎗といへども身のなき鎗にはあらず、此論の出所のないのは、馬艸ごやをまもるものにて、用心の爲、飾り鎗をふる事なり。漢ではだれでも知つてゐる事ゆ

ゑ、その出所をかゝぬなりと云々。うそかも知らねど尤もらしき事ゆゑ、原本にはなき事ながら、林沖が飾り鎗をもらふところを小子はこの説によりて書申候。

小子の書候六十丁のところにも此たぐひのまごつき、いくらもあり。ずゐぶんく妻のなきものにつまをもたせ、母のうはさなどのうそは御勝手に御かき、おもしろくさへあれば、どこからも尻のくるきづかひなし。はりがみのある畫は、國芳のかきよきように致可申。どちらにてもよし。

この一段には種彦がある部分を譯した折の事を陳べ、支那小説譯は不慣れの事ゆゑ、酒肴料を持參して支那小説通の説を聞いたとある。種彦なかくの綿密家で、殊に考證を忽にせぬ人であつたから、林沖の花鎗について大分惱んだらしい。流石に門人の仙果には文章の書き方を注意し、どうでもよいところはうそでも構はぬ、おもしろく賣れるやうに書けとは斯道の老鍊家である。尙餘り原文に拘泥する勿れと、左の如くに教へてゐる。

あまり譯に苦しみ候と、風あめはげしくと、いふやうなる事ができるもの也。風雨と書ても、かなに和らぐればあめかぜといはねばならず。ただ水滸の意をうけて作をする心もちがかん

じん也。小子の六十丁のうち、楊志が弓いる事をいふ條に、左りのかいなは大山をのするばかりに云々。右のこぶしはみどり子をいやくこゝちにいとかるくひいたる弓はみつる月、ながるゝ星より矢ははやく。

此文章ばかりは、うまく譯文のはまりたるにて、あとは譯ではなく作なり。どうで水滸をかたなでそのまよには書け不申。書いたところがそれではうれず。林冲が骨こまにあり、きたつてひろへなど、水滸にはなき作文なり。いろく御問合せの事、小説よみにうけ給はり、あとより申いるべく候へども、これも人々にてちがひ、やはりあてにならぬ物に御座候。

この一節は漢文小説の譯し方について一步を進め、どうせ作をするつもりで書くが肝腎なりといひ、楊志が弓をいるところだけは柳亭も得意であるらしく、特にそれを擧げて自畫自讃をやつてゐる。手紙のおもしろ味はこんなところにあるのだ。

横の姓、疊といふ字にでもかへ、先春堂補といたしおき可申候。

他人は此やうな事笑ひ可申候へども、小子は一向笑はず。小子角力ぎらひにて、角力の事一向書き不申、甲州侍ゆる信支君の事わるくかゝず、川柳點には支君をほめた句でなければ點

にいたし不申。近年水天宮信心にて、平家ぼつらくの事を書くまいと願をかけ申候。いと馬鹿馬鹿しき事なり。

この節の横の姓云々のところは不明である。柳亭が角力嫌ひのこと、甲州侍であるから信支崇敬のこと、水神を信心するから平家没落水の事を書くまいと誓つたなど、皆この手紙で知る、柳亭のおもしろい逸事である。

水滸はまづ申上候赴にて、あと四十丁御書可被下候。今一々ぐらゐはあげられ可申候。

竹に雀も校合いたし、畫工の方へまゐりをり申候。是は別便並にて可申上候。

御きらひなる物、妻も幼年のとききらひにて、戸棚へかくれ、夜着をかぶり、癪をおこしなごいたし候よし。ある人、それは何々の弟子になるがよきとをしへ申候。其法、六月朔日、赤の飯に備へ餅、豆腐、御酒、四色そなへ、あなたのお弟子になさりくださりませとおがみ、此四色他人に喰せず、自ら一人にて喰ふなり。如此いたし候後、段々こはなくなり、只今にては、あまり暑き日には、小子へむかひ小聲(小聲とは、母がきらひゆるそれへはどかり、且つ女のあまり平氣もにくらしき物ゆるなるべし)にて、ちつと夕立でもあればようござる

なあといふくらゐ平氣になり申候。

此弟子にならぬ前は、そのおそろゝ事狂亂の如くなりしと申をり候。小子も實は好き不申候へども、侍のおそろゝは見ぐるしきものゆゑ、つゝしみくゝいたし、今ではまづ平氣のやうな顔なり。

この一節、柳亭の妻が雷をおそろゝ事をいうてゐるが、仙果も矢張り同様恐れたらしく、種彦自身も、またそのお袋も恐れたものと見える。種彦が侍だから辛抱して臆氣を見せぬと、瘖我慢をいふところに興味がある。これも亦この手紙によつて教へられた逸事である。

又水滸傳の事

しよせんが、唐本を見たる人が繪ざうしは讀ず、よしよみたりとも千人に一人なり。唐本はこんなものかと、ごまかしておけばそれでよし。おとしばなしでも、ゑざうしでも。

九人にほめられ一人に笑はれるは、じつは下手なれど、私は得なり。

九人に笑はれ一人にほめられるは、じつは上手なれど、錢にはならず。

小子病氣も正月廿一日よりめきくゝと心よくなり申候。あたゝかき日は、近邊歩行いたし申

候。もはや杖もいらす、只刀の重くなりしにこまり申候。俄にちひさな大小とりつくりひ申

候。常には大きなのが好きに御座候。火事もやうくなくなり、風だに吹ねば春めき申候。

街雀トリスのゑざうしに、わうじやうづくもといふ事あり、「わう」のかな御用ひのやうすにては、

モシ往生と御こゝろえ敷。小子も近年まで如此おぼえ、大きに笑はれ申候。

壓 状

いやだといふ状を、むりにおしつけてかゝする事、盛衰記にあるよしに御座候。

一兩日うちに並便の書状さしだし可申。まづ是ぎりにて、以上。

二朔

柳 亭

仙 果 雅 兄

末段再び水滸傳譯に戻つて戯作者の秘訣を教へてゐる。種彦は氣まじめな人であつたといはれてゐるが、自家の専門にかけては隅に置けぬ利巧ものである事がわかつた。盛衰記から「壓状」の二字を捜し出したのは例の穿鑿癖によるのであらうが、それを手紙の末に書き付けたのは、おれは手紙を書く事が嫌ひだ、已むを得ないから書くの意を寓したかに見えて、おもしろ

く感ぜられる。(因に、京山譯の水滸は稗史水滸傳といひ、其第七編からは種彦カナガキ「國字水滸傳」と改題して續譯し、第十編以後は仙果の譯で、第二十編まで出てゐる。又馬琴譯のは新編水滸畫傳と題し、十冊ある。)

インチキ陳列

いづぞや同人が繪本の展覽會を催した時、自分にも出品せよと促したが、自分には特に出陳する程の珍本の持ち合はせがないので辭したが、珍本に限らないから何でも出品せよと強ひて求めるので、然らばインチキの物を出して、人の笑を博すべきかと、博笑陳列をやつたことがある。さて此の試みは可なり骨が折れた。と云ふのは自分の貧しい架中にはそれに相應する物が甚だ乏しかつた。先づどんなものが此の陳列に合格するかと云ふと、人の意外とするもので無ければならぬ。ヒネリものでなければならぬ。稀れなるもので無ければならぬ。何となくをかし味のあるものでなければならぬ。併し滑稽や皮肉や諷刺で人の笑ひを博する趣意でなく、

寧ろ之れを避け、飽くまで眞面目でありながら、そこに微笑を誘ふやうなもので無ければならぬ。サアさうなると、合格すべきものが甚だ少ない。今試みに自分が作つた陳列目録に就いて自評を下して見ると、曆の部に元文四年の能狂言繪ごよみがある。これは十二月に配して、種々の能狂言を圖し、その服裝に曆の必要な語が文様らしく書かれてゐる。これなども奇警の意匠でもないが、先づ及第させてもよからう。具注曆は慶長某年の斷簡で、曆の一標本として加へてよからうとおもつたが、曆中に何か大事件でも録してあれば及第するが、それがなければ落第である。盲曆などは誰れも知つてゐるから無論及第しない。拓本となると、碑碣鐘鼎の拓本を避けたい。案外の拓本をと搜して見ると、水戸の烈公が大砲を作る毎に銘を撰んだ、例の得意の隸書が揮つてある。それが七八枚あるけれども、實は金石拓本で珍らしくない。却つてある水産の競進會に出た、各種の鰯を拓本にしたのがインチキで及第させた。山中共古が明治以後の洋裝本の表紙を拓したのも及第の資格がある。

書物の部に及第するものは焚餘の孟子が第一だ。これは天明の京都の大火に火風に煽られて藤貞幹の庭に落ちたもので、其の事由が貞幹の筆に録されてゐる。支那人の小遣帳はどんなも

のかと思うたが、當時の長崎の物價が知れるからこれを及第させた。芳原の娼樓三浦樓の當座日記は元治慶應あたりのものだが、將軍が下情に通ずる目的で微罪のものを白洲へ呼び出し簾内で之れを見る習慣があつて、その爲めに娼妓が召喚された記事があるから、之れも及第させることにした。蜀山人が判取帳を作つて同好に狂歌を録せしめた原本は有名だが、これは複製本だから及第の資格がない。櫻痴居士が秦野流平曲實盛最後の自寫本は或は及第させてもよからう。原稿の内で逍遙翁の一体禪師の稿本や默阿彌の稿本などは、奇警要素がないから及第せぬ方であらう。併し逍遙翁が裁判所の命で鑑定書を差出した原稿は及第の資格がある。福嶋安正(大將)の從僕であつた、森林黒猿は、後に講談師になつて大將の傳を自から講談風に書いて其の原稿を大阪毎日に寄せたが、其草稿には大將が新聞社に宛て登載を斷つた手紙も添はつてゐる。これなどは及第の資格がある。福地櫻痴が舊脚本時平公七笑に筆を加へ、事皇室に關するからと云うて、高崎正風の校閲を請うてをるので、これも及第の部に入れた。齋藤月岑の東都歳事記の原稿などはインチキ要素がないから落第である。逍遙翁が故あつて廢毀した役行者の初稿も及第させてよからう。

反故部類で確かに及第するのは渡邊華山の漢文の借用證書、藤田幽谷が水戸の富豪に差入れた十兩の借用證文、福地櫻痴が芳原の妓のために代筆して假名讀新聞へ寄せた正誤文、竝に成島柳北の狂歌も及第するであらう。中井敬所がある人に謝金を贈らんとして誤つて中空の包を遣り、それが知れての交渉文書なども笑資となすに足る。高崎正風が其子海軍大佐戦死の地點を圖した反故は悲愛の情があるから及第せぬ。

手簡部類では、木戸公が洋行中佛蘭西旅館のマークのある用箋に長篇の詩を録して青木周藏に寄せた書簡は、宿屋のマークがあるから及第點を與へてもよからう。慶喜公が或る姫君に宛てた口紅の書簡は、文面に奇はないが、文箱も封印の印鑑も、葵章染めぬきの風呂敷まで添はつてゐるので或は及第するかも知れぬ。曉齋が松浦武四郎に寄せた書簡は一種の證文とも見るべきもので、インチキの處に及第資格がある。寺崎廣業が自家亂醉の狀を畫した、繪入手紙も及第するであらう。

書畫の部では、頼山陽が田能村竹田の置火燵の俗歌を書いた扇面は及第する。其角の書いた十牛圖をかぼちやの元成と其角堂永機の寫した二巻も及第するであらう。坪内逍遙翁が瀕死の

病床にあつて仰臥執筆した熱海のペーゼントの歌を染めぬいた手拭、竝に繩暖簾濱作の圖、沙翁作中の案山子の圖も及第に値する。

上來の如く、自分の満足し兼ねるものを落第させると、折角作つて見た陳列目録で刪られるものが多く、残るものはいくらもないが、其の残つた内でも厳選すると及第しないものがいくらかあるやうな気がする。各部類のものでいろ／＼よい物があつても、インチキの要素を缺く爲めに多くは及第せぬ。野卑に墮ちず、奇警のものとなると、なか／＼多くないものだ。況して自分の如き貧しい架中には精々こゝに擧げた位に過ぎない。さてこれで笑を博することが出来るようか。笑は笑でも冷笑もあり苦笑もある、遣り損へば冷笑、苦笑を博することになるから、こんな展覽をなすことは全く危険で、決して自ら企つべきでないと感じた。

羣像片影

板垣伯

芝公園に大隈、板垣二君の銅像が建つてゐるのは、偶然地を爰に相したので、別に意味のある譯で無からうが、兩雄が竝び立つてゐるのは妙な對照である。吾等は此の公園に散策する毎に、二大銅像を拜して彼れを思ひ此れを憶ひ、低回去る能はざる感がある。自分は政治上では大隈侯の麾下に屬してゐたから、板垣伯には幾んど縁因が無い。しかしそれにしても嘗て一たび板垣伯の警款に觸れたことがある。事は三十數年前の既往に屬するが、黨派の或る用を帯びて伯を訪問した。其頃伯は芝公園内に住して居られた。番地は第何號と云ふのであつた。自分の想像では伯が住する程の邸宅は必ず相當大きなものであらう。苦もなく捜し當るであらうと期したが、さて尋ねて見ると容易に見當らん。第何號と云ふ家は尋ね當てたが、餘りに小屋で、

マサカこんな家が伯の住所でもあるまいと、附近を捜し回つても、それらしいものがないので、己むなく第何號と云ふ家に就て、戸口から障子越しに「板垣さんのお宅はどこか、御承知ありませんか」と尋ねると、障子の内に「板垣はこゝだ」との聲があつて、同時に障子が開いた。見ると、そこに坐して居られたのが、まぎれない伯で、三四の客に對して話し中であつた。自分は餘りの意外に驚きながら、黨派の委員の肩書ある名刺を差出すと、さあ御通りと云はれた。下駄ぬぎはヤツト五六足の下駄を並べる程の狭さで、そこに亂脈に古下駄が散つてゐた。さて上つて見ると、六疊敷位の室で、普通ならば玄關子の居りさうな室だが、そこが伯の應接室と見えた。如何にも庵末の構造で、下級官吏の住宅程度のものであるのを見ては、心算かに伯の困窮の内政も思はれて氣の毒の感に打たれたが、さて要件を云ふと伯の應對は如何にも快活で、さながら舊知に對するごとく、毫も城府を設けず、アソウカ、アヨロシイと云ふ挨拶で、餘り入り組んだ用でも無かつたが、五分も経たぬ内に用は片付いて辭し去つたが、自分は伯の住居の案外であつたのと、伯その人の應對振りの如何にも淡泊であるのに打たれて、萬斛の感慨を抱いて黨の事務所に戻り、要件は伯の諾する所となつたことを報告すると共に、伯

の家居の様様や伯の應對振りの大衆向きであることを云うて、一黨の首領たるものは伯の如くなければならぬ。お互ひの黨首はチトあの人に倣つて欲しいと云うて伯を稱賛した。其頃の大隈侯は晩年と違つて較々尊大であつたから、自分をして斯く云はしめたのである。

伯との對晤はこれが始めて、亦終りであるが、伯を見たのは他に一回ある。それは明治三十二年隈板聯合内閣の時、伯は大隈侯に誘はれて、早稻田大學の前身、東京専門學校の第十五回の卒業式に臨み、一場の演説をされた。此事は今考へると自分が伯を訪うた前の事に屬すると思ふ。今では早稻田大學で伯の來校を知つてゐるものは幾らもあるまいが、伯の校門を潛られたことは記念すべきことで、早稻田へ幾多の名流は來たが、板垣伯は珍客中の珍客であつた。伯と侯とは云ふまでもなく常に政治上反對の位地に立ち、或る場合には鎬をけづつて鬭争した間柄であるのに、與に同一の内閣に立たれたればこそ親しく駕を枉げられたのである。此の卒業式には宮内大臣田中光顯伯外多くの内閣大臣が臨まれた。即ち海軍大臣西郷從道、農商務大臣大石正巳、文部大臣尾崎行雄、大藏大臣松田正久などがぞろり列席された。自分は板垣伯を早稻田の壇上に見るにつけ時勢の變を思うて眞に感慨無量であつたが、隈板の提携も東の間で

あつて、別項星氏の部に陳べるところ、彼れが爲めに提携を破られ、爰に内閣の不統一を生じ、總辭職となつた。其際首相は官邸に吾等黨員を會して悲愴の演説をされたが、其言容は尙ほ耳目に存して、今も忘るゝ能はざるものがある。

板垣伯の岐阜の遭難は餘りに有名であるが、其の遭難の時に後の伯爵後藤新平氏が醫者の資格で見舞つた話は餘りに知られてゐないやうに思ふ。當時後藤は名古屋の愛知病院の院長であつたので、急變に赴いた。それに就て後藤から親しく聞いた事實は斯うである。愛知と岐阜とは近いとは云へ、縣は異つてゐる。當時縣外に往診するには縣知事の認可を受けねばならぬ規定であつたが、後藤は板垣伯の左右に侍してゐた内藤魯一の懇請に依り、知事の認可を得る追もなく匆皇岐阜に赴いた。伯は鮮血の染つたチョツキを其儘に寝て居られたので、先づ缺でチョツキを切り取つて、傷口に繻帶をして應急の手當てをなしたと云ふ。瘻の深淺や治療の詳細は聞き漏したが、其頃の事情に就て後藤の語る所に據ると、官邊では伯を叛逆の徒でもあるか如く憎惡の念を以つて見、遭難の際は縣廳では素知らぬ風で、見舞もしなかつた様な始末であつた。然るに遭難の報が東京へ達すると、聖上の宸襟を惱まし、勅使を差遣さるゝこと

となつて、其趣を宮内省から岐阜縣知事へ電報で通達し、同時に伯にも通達があつた。これは維新の功臣に對し陛下の思召に出でたことで、當然の事であるが、此の電報で驚いたのは岐阜の縣廳で、知事始め縣官が伯に對し餘りに冷淡であつた手落を痛切に感じ、遽かに知事其他高等官は伯を慰問して敬意を表したが、伯はその輕薄の舉動に不快を感じ、一喝して縣官を退けたと云ふ。さて又伯は勅使差遣の電報を拜して、聖恩の厚きに感激し、しばし無言で落涙に及び、何事か沈思の模様に見受けたが、伯の心を知らざる、自由黨の面々は、勅使差遣と聞いて、あられもない考を抱き、電報を以つて勅使を辭退すべしなど騒ぎ立つたが、伯に叱られて皆々屏息し、内藤魯一なども君臣の情誼はかゝるものかと始めて感じたことだ。これは後藤が伯の病床に侍して親しく目睹した實況で、當時の事情は實に今日想像し難いものがあつた。後藤は應急手當を濟まして名古屋へ歸る間もなく、愛知縣知事の官宅から使が來て、娘が病氣だから診察を頼むと申入れた。後藤は之れを聞き、心竊かに知事は娘の病氣に託して自分を招き寄せ、無斷往診を語るのであらうと推量し、場合によつては職を辭すべしとまで覺悟を極めて出かけて見ると、案に相違して何も詰責することはなく、懇ろに勅使が板垣伯を見舞ふと云

ふ風説があるが、それは本當であるかと問ふことが、招かれた目的であることが知れ、後藤はそれに答へて眞實であると告げると、縣知事の驚きは非常であつて、見る／＼顔色を變じて狼狽の狀を呈したと云ふが、當時板垣伯は逆賊とのみ思うてゐた官僚達が勅使降下を如何に意外に感じたかは、二縣知事の驚惶狼狽に依つても知ることが出来る。伯遭難時代の世相は先づこんなものであつた。

尙ほ瑣事ではあるが、最後に附記すべきことがある。それは何かと云ふに、大隈侯は曾つて字を書かないので有名であるが、板垣伯も幾んど字を書かないので、これも亦有名で、兩雄が申合せたやうに筆を把らないと云ふは不思議と云ふべきである。或る人の話しに、板垣伯は岐阜遭難の際七首を手で握つた爲め負傷し、それから後は筆を把らぬと。これは一説であるが、どうも早くから筆を執らないらしく思はれる。大隈家にあれほど澤山の書簡が保存してあるが、板垣伯のはたゞの一通しかない。その筆蹟は決して拙でないが、これすら代筆でないかと疑はれてゐる。此の書簡は明治の初年に屬するから、伯は早くから筆を絶つてゐるのではないかと思はれる。土佐出身の田中貢太郎氏の隨筆を讀んで見ると、伯が筆を執らぬことは有名であつ

て、隨つて其の稀れにある筆蹟が頗る珍とされるとあつて、二三の逸事が録されてゐるが、大隈侯にも似寄りの逸事があるので、一讀おもしろく感じた。其の逸話の一に、伯は木屋竹村與右衛門と云ふ人に金を借りたことがある。返金に及ばんとすると、木屋は御返金に及ばないが、お墨つきが欲しいと云ふので、伯は「至誠亦大」の四字を幾枚も書いて、女婿である宮地茂春に此内を選んで木屋にやれと命ずると、折ふし風が吹いて一枚飛んで庭に落ちた。そこに居合はせた壯漢は之れを見て、是れ天の與へる所と、それを掴むと逸散に駆け出した。伯はそれを見て、執事に命じてあれをとり戻せと云はれたので、執事も走り出で、追跡し、川端でヤツト追ひつくと、壯漢は水に入つてまで渡すまじと争つたが、遂に取り返すことを得たと云ふ一話がある。又或るものが伯の筆蹟を得たさに一計を運らし、無地白紙の紙鳶を作り、之を伯の愛孫に與へて、お祖父さんに繪を書いておもらへとそゝのかした。伯は晝は書けぬと云うて字を書いて與へられたが、たくらんだ男は、これこそ寶物と、子供よりそれを横奪して子供を泣かせたので、伯は怒つて其紙鳶をサン／＼に裂いて、他に紙鳶を購うて孫に與へたと云ふ逸話もある。兎角筆蹟が得難いとなると、それを得んとするは人情で、大隈侯にもこれと似た話があ

る。あるものは大隈侯が八太郎時代の五十兩の證文を持出して、それを高く賣らんとしたこともある。又侯に是非字を書かせたいとたくらんで、侯の親戚の子をそのかし、筆研を興へて、お祖父さんに某の字はどうかと問うて、それを書いて貰ひなさいと云うて失敗したことなどもある。兩雄に筆把らぬ似寄りの逸事のあるのも一興である。

星 亨 氏

先頃の市會議員の選舉當日に一政客が訪ねて来て、談は端なく政治に涉り、獨逸のヒットラーが、大膽にも五ヶ年間專制を議會に要求したことや、自己の欲せざる黨派の議員に招集狀を發しなかつたことなどを語り合つて、伊太利にはムソリーニも居るが、ヒットラーもなかく出来ないことをやる、どうも日本では今の處そんなことをやるものがない、どの政治家も兎角線が細く、利巧過ぎて困る、時には圖太い奴が出ないと國難が收拾出来ないなど、語つて、端なく、其日偶々大東京の市會議員選舉當日であることに気がつき、それと同時に星亨を聯想し

た。あの男などは線の太い側とも云ひ得ようが、魔道に踏迷つたからお話にならぬ。自分は市會議員選舉と云ふと、いつもいやな氣持がするが、實は市會は醜怪の府であつて、誰れが腐敗に導いたかと云ふと其の本尊は星亨である。星は亞米利加仕込の政治家で、嘗ては米國に公使をした。タマニー・ホルの腐敗などを厭ふべきものとは思はず、寧ろ學ぶべきものと考へ、その遣り方を自分の祖國に移したのではあるまいか。星の行く所には必ず醜怪の事がある。市會に間斷なく醜穢の出來事のあるのは、星が其俑を作り、その門流が繼紹して居るのである。星の信條とする所は、曰く金力、曰く腕力、曰く智力、これがあれば天下何の事か成らざらんと、彼れは全く道德を度外に置いて居る。併し彼れは珍しい剛愎、倨傲、自信の厚い男で、氣任せに横暴を振り回した。彼れは市會を金を作る場所とした。そして其金を以つて議院を制せんとした。議會の腐敗の本尊も政黨の腐敗の本尊も亦實に星亨である。全體星は如何なる素性のものであるか、一寸調べて見る必要がある。自分は曾て吾が先輩男爵前嶋密翁の傳記を編纂したことがある。其の逸事録の中に翁と星亨の一篇があつて、星の素性と性格を尤もよく物語つてゐる。此傳記は非賣品で餘り世に流布してゐないから、長きを厭はず殆んど全文を左に摘出する。

前嶋翁が改進黨の一敵國であつた自由黨の領袖星亨氏と不思議の因縁があつて、星氏の青年時代、翁に非常の世話になつたのも一奇と謂ふべきである。翁の談に、星氏を知つたのは慶應二年の秋の末か冬の初頃と思ふ。當時自分は牛込赤城下に住居してゐたが、其頃牛込矢來町の仲通に小泉某と云ふ幕府の御家人が居つた。此人の家祿は粟米で四十俵と三人扶持で、家宅も屋敷も小さいながら見苦しからぬものであつた。主人は六十歳に近く、配偶は五十歳を過ぎて子が無かつた。當時嗣子が無ければ家が斷絶するから、しきりに養子を捜し、夫婦共これには餘程苦慮した。然るに漸く養子が出來た。その養子が即ち星亨氏で、星氏の母は元或漁夫の妻であつて、氏は其子に生れたもの。其漁夫某に死に別れた母が連れ子をして本所あたりの某醫師に嫁してから、星氏を他に呉れることになつたのである。氏は此時十六歳、其養子となるに就ては二十兩の持參金を携帶すると云ふ條件であつた。小泉の妻は自分(前嶋翁)の養母と懇意であつたので、時々自分の家に来たが、此の養子の談には養母も自分も少しも與らなかつた。併し小泉も亨氏を引取ると間もなく、氏の教授方を自分に依頼した。當時自分は公務の餘暇自宅に書生を集めて英學、漢學を教授し、又知友の會讀などを遣つて居

たので、此依頼を受けたのである。氏が初めて自分の宅へ來た頃は、まだ英文典をも知らぬ初學生であつたが、其の理解力は頗る見るべきものがあつた。翌年の春當時日本唯一の官立洋學校開成所の教授となつたので、星氏をこれへ入學せしめた。然るに學力の進歩は著しく、同學生をして舌を捲かしめた。其夏自分は星氏と共に佛蘭西語を學び始めたが、自分は他の事務に支へられて専らなることを得ず、忽ち星氏に凌駕された。自分は其内神戸の開港に従事することとなり繁劇のため廢學したが、自分の薄志弱行は今に於ても恨事として忘るゝことが出來ぬ。星氏は少年の頃から、普通人と一種異なる所があつて、傲然として他の學生等をも眼中に置かなかつた。殊に婦女子に對しては、先方から言葉をかけられても感覺の無い様に見向もせない。曾てある嚴寒の夕刻、自分の家に来たことがある。自分は不在で其歸宅を待受けてゐる氏が、火鉢の無い書齋の隅に獨坐してゐるのを、自分の母や妻が氣の毒に思つて、火鉢の側へお出でなさいと勸めても、素知らぬ顔で他を顧み、何等返辭もせぬといふ無愛想に、母は氏を名づけて「トホラヌサン」と呼んだことがある。

翁は星氏の養家に一波瀾の起つたことにつき語らる。慶應三年六月の頃、氏の養家小泉と

星兩家の間に面倒が起り、自分をして之に立入ることを餘儀なくした。其の仔細と云ふは、持參金問題が主因であつて、亨氏は小泉家に入つて既に一年にもなるが約束の二十兩を納附せぬ。これが苦情の本であつたが、其外に星家の妻君は時々小泉家を訪づれ、其の都度酒を要求し、飲めば必ず大醉に至り、酔後悪口罵詈する所から小泉夫婦の感情を害したのも一原因である。又亨氏も例の無口無愛想で、養父母が何を命じても従はない。之も亦相助けて不和を生ずるに至つたのである。全體持參金二十兩云々は、亨氏を養子に遣る際に星家の妻君が一時の權略で言つた無責任の約束であつて、實は持參金を遣はす意は初めからなかつたのである。ある時小泉は自分を訪ひ來り懇願して云ふには、星家は到底二十兩の約を履む力なく、又其意も無い。且つ其母なる者は驚き入つたる横道もので、亨も當家に合はぬ人物であるから、離縁の外は無い。既に媒妁人を以てしばし談判に及んでも要領を得ないから、貴方を煩はし、早く小泉家の大患を除き、家名家祿を完うしたいと云ふことであつた。自分は之に對し、言を盡して亨氏の非凡の學才のあること、將來必ず有望の人たるべきことなどを説き、持參金の事は追窮せず、亨氏の大成を待つが小泉家永遠の利益であらうと諭したけれども、

既に感情の破れた上であり、且つ小泉の妻と云ふは其良人の温順に似ず、多辯の理窟屋で、言ひ争ふ時などは腕をまくつて男の様な荒々した聲を發する様な婦人であつたので、なかなか自分の説に耳を傾けず、終に自分の仲裁も效無く、到頭離縁となつた。云々

此の物語で星が年少から剛愎無愛嬌であつたことが知れ、又どこか優れた能力があつたことが、早く前島翁に認められてゐたことが知れる。

自分が此人を知つたのは衆議院に於てである。尤も忘れ難いのは隈板内閣の時星が誰れの許しも得ず、米國公使でありながら縦まゝに歸つて來て、憲政黨の打壊しをやつた。その遣り方は如何にも亂暴で、共同の一黨進歩黨には何等の通知もせず、自由黨のみが會合して憲政黨を解散するの決議をした。こゝに憲政黨は二分され、進歩黨はそこで憲政本黨と云うた。星が斯様な策動をやつたのは何故かと云ふに、言ふまでもなく憲政黨のまゝでは自分の自由が利かないからで、彼れは一黨を二分し、其の自由黨側の憲政黨を伊藤侯に獻じたのが、そも／＼今の政友會の起る所以で、分裂の際には自分なども其の渦中にあつたので、星の破壊力の凄さに驚いた。其時の内務大臣は板垣伯であつたから、星は之れを傀儡として、何でも勝手のことをや

り得たのである。

自分は衆議院で星を委員長として選挙法改正の委員会に臨んだことがある。あの人に感心するのは議事を苟くもしないことで、自分が委員長でありながら、盛んに自説を吐き、毫も疎慢の風の無かつたことである。彼れは全く精悍の氣の満ちた勤勉家であつた。彼れは自から信ずる所は、人の憚ることでもすん／＼やる。八百圓の歳費を二千圓に増額するの提議をしたのも彼れであつた。彼れは演壇で酒々として増額の理由を陳べり、これには諸君のことごとくが内心賛成であるに相違ないなど、皮肉を云うたものだ。

星は伊藤侯に憲政黨を獻じて遞信大臣を贏ち得たが、その頃に東京市に水道鐵管事件、汚物掃除事件、鉛管納入事件など云ふ忌はしい收賄事件が盛んに起つて、それが皆星の乾分に關係があつたので、そこで星が攻撃の焦點となり、流石剛愎の彼れも告發さるゝに至つて漸く辭職した。それは明治三十三年十二月であつたと思ふ。

星は常に云く、全國に幾十萬の同志があつても、いざと云ふ時に呼應が出来ねば何もならん、唯だ頼むべきは都門附近にある味方であると。彼れが三多摩の壯士を熱心に養成したのは此故

である。彼れは此點に於て迂濶の政治家でない、實行を本意とすれば彼れの故智を學ばねばならぬ。星が殺害された後其の遺鉢を繼いだものは森久保作造で、長い間市政を亂した。そして其の餘殃は今に於ても尙ほ掃蕩することが出来ない。

右のごとく觀じ來ると、星もなか／＼の鬪將である。その性格、氣骨、どことなくヒットラに似寄りの點もあるが、星は其の精力を悪用し、善玉とならず悪玉で畢つたのは惜むべきである。若しあの人に道德觀念があり、國家を愛する高級の情操があつたならば、立派な政治家であつたらうに。

犬養 木 堂

昨年の五月十五日は、戦慄すべき恐怖の日であつた。當日は偶々日曜で、諸新聞は休刊し、號外も早く到着せず、事相は唯だラヂオを通して聞くのみであつたが、犬養首相、牧野内府を襲撃した報が傳はると同時に、警視廳、日本銀行、政友會本部が襲はれたとの報もあつた。首

相は重傷を負ひ生命危篤と傳へられ、深夜内閣會議が開かれ、樞密院幹部の急會議が催され、陸海軍主腦部の重要會議が開かるゝと云ふ騒ぎで、實に容易ならぬことゝ思ふた。或は革命來の前提でないかとまで思はれ、寢室のラヂオ器で最後の放送ニュースを熱心に聴き、恐怖に驅られて徹宵睡眠を得なかつた。

當夜自分の所感の一端を云ふと、日本の政治家に對する最高の報酬は何かと云へば横死である。幾んど除外例がなく、餘りに現金過ぎる。政治家の首相となる時は、誰れも終極此の不幸なる報酬を受けるの覺悟が無ければならぬ。犬養首相も恐らく内々其覺悟があつたであらう。首相の齡は七十八歳、餘命は幾何もない、そして時局は首相の擔ひ切れないほど至重至難である。失敗して退かんより、定式の報酬で終る方が或は優しかも知れぬ。吾等は政治上の立場こそ異なれ、木堂とは久しい間の交りもある。今度の變は氣の毒千萬であるけれども、蓋し已むを得ない歸結と吾等をして思はしむるのは、今の惡世相が之れを然らしむるからだ。しかし政黨を代表しての犠牲となつたことは、犬養も本意であつたかもしれない。犬養ほど政黨を識るものはなく、亦政黨と終始したものは無い。政黨の代表として犠牲となつたのはあの人の不運

であるが、實はあの人ほど代表として合格の人は無いなど、終夜感想を馳せた。

翌朝の新聞紙に首相が暴行に遇つた際のことの報ぜられてゐた。それに據ると、首相は暴漢が自室に亂入して來ても、敢て遁げも隠れもせず、銃を擬せられても平然として「話をすれば分ることだ」と云ひ、負傷した後も婢を呼んで、喫烟の具を求めたとあるのを一讀して、自分は端なく、伊太利のマジニの事を思ひ浮べた。マジニが亡命して英京に在る日、刺客は突然マジニの室に闖入した。其際マジニは丁度烟草を喫しつゝあつた。闖入者に對し一本のシガーを與へながら、君の來た目的は分つてゐるが、マア喫烟せよ、そんなに急ぐに及ぶまいと、落ちつき拂つた態度に、刺客は機先を制せられ、終に跪いて罪を謝したと云ふのがマジニの逸事であるが、犬養首相の斷末の光景とよく似通つてゐる。話をすれば分ると論した所、致命傷を負うて尙喫烟せんとする所、悠々動ぜざる態度は兩政治家共に同じだが、異なる所は、彼れに在つては、危難を免かれ此れに在つては悲惨の死を得た。若しマジニの態度を稱揚すべくんば、犬養の態度は一層稱揚に値するであらうと、これは翌朝の感想であつた。

越えて數日、五月十八日と云ふに、首相官邸に悲しき告別式が行はれたので、自分も往訪し

た。門内の雑沓は非常なもので、四人立の列がわざと大迂回をして受付に達するのであるが、前頭は何をやつてゐるのか、歩武を移すことが如何にも遅々として、式場に入るまでに約三十分を費した。當日來弔者は一萬五千と稱されたが、こんなに混雑を極めた告別式は自分の経験には無い。棺は官邸の大ホール正面に置かれてあつた。此ホールはよもやかゝる不幸な場合を豫期して作つたものでもあるまいが、首相の葬儀を行ふには誠にふさはしい處と思つた。自分は蓋動の列に在つて、限りなく在りし日の木堂を追懐した。木堂は自分より五歳長じた先輩である。曾て林鶴梁の門下に在つたと聞いてゐる。彼れに漢學素養のあつたのも、亦文章に長じてゐたのも、鶴梁の薰陶に依るものであらう。彼れは慶應義塾の先輩で、尾崎學堂と同窓の誼があり、政界には兩々並び稱せられたが、其性格は甚しく異つてゐる。學堂は狷介な理想家であるが、木堂は臨機應變の世才がある。彼れが大隈侯の麾下を去つて、政友會に投じたのも、亦其の總裁となり、遂に首相とまでなつたのも、皆其の性格に由るとは云へ、五十年の政黨生活の酬いられたのは、全く長壽のお蔭と云ふ方が妥當であらう。

木堂の風貌は叢林の親方の如くで、恐ろしく思ふものもあるが、あれで案外愛嬌があり、人情もある。人は或は木堂の胸中何が潜んでゐるか分らんなど、思ふけれども、支那人などに云はせると、アンナに透明性の人はない。あの人が深く何物かを包藏してゐると思ふのは買被りだと云うてゐるが、或は然らんだ。あの人は他人の眞似難いユモアをもつてゐて、交はると面白い入だが、意外に偏狭で人を容れないのが缺點であつた。木堂は政治家不似合の多方面の趣味家であつた。併し彼の尤も長じたのは書であつたと思ふ。彼れ自身の語る所に據ると、幼少の時岡山藩の祐筆とならんとして、しきりに御家流を學んだと云うてゐた。追々書體が變じて御家流の臭氣は全然脱してゐるが、書には素養があり、亦筆を把ることが好きであつた。晩年は長鋒を用ゐて、一家の書を作つたが、自分は寧ろ變化前の書を喜ぶものである。何と云うても木堂は余が知人中の第一の能筆である。木堂は曾て曰く、君の爲めなら敢て揮毫を辭せずと、而して遂に書を請ふに至らずして已んだ。但し書簡は幾通もあり、亦幸ひに物徂徠の書卷の末に漢文で書いた長跋が自分の架中に存してゐる。これは自分から、求めて書かせたのでないが、偶然あるのは仕合せである。木堂は常に徂徠の書を賞して儒流中の第一としてゐたが、此の書卷の跋は徂徠の書を評して餘蘊がないから、殊に自分は愛藏してゐる。

木堂は刀劍に興味があり、亦研石に興味があり、彼れ自身も其の鑑識を誇つたものだ。自分の壯年期にはしばしば木堂の居を訪うて、その所藏の刀劍の附屬品を示され、亦其の説明を聞かされたことがある。自分が越後の「高田新聞」で筆禍に罹り、入獄の身となつた時、自分に代る主筆を選んでくれた人は木堂である。その人は俣野時中と云ふ秋田の人で、司法省の法學校で佛人アツペルに學んだ人である。此の俣野が刀劍の鑑賞力のあつたことを思ふと、木堂と趣味の友であつたことが推測される。木堂は嘗て秋田の新聞の主筆であつたことがある。自分が秋田に遊んだ時、木堂の遺蹟を尋ねると、種々の逸事を語つたものがゐたが、自分が聽いて噴飯したのは「木堂もあの頃新聞の社説を書くに随分出鱗目をやつた。筆が行詰ると、ブランドー氏曰くだの、オムレット氏曰くだのと云うて、田舎ものを馬鹿にして、勝手な筆を弄したものだ」と云ふことであつた。

木堂が「朝野新聞」にゐた頃、九州の高嶋炭鑛が岩崎家に歸したことに就き、木堂が辯護の筆を揮つたと云うて憤慨し、木堂に決闘を申込んだものがあつた。それは名も知れない「日本人」編輯人で、立會人を三宅雪嶺と志賀重昂に頼んだとあつたが、勿論物にならずに済んだが、

決闘の申込を受けたものは恐らく日本に於てこれが嚆矢であらう。

木堂が早稻田の松本順の舊邸に移つてからは、しばしば訪問した。客室には木堂不相應の立派な畫幅が掲げてあつたので之れを褒めたら、木堂は澹泊に、これは友人坂本金彌の物だと語つた。その頃初めて電燈を装置したので、木堂の云ふのに、此頃田舎客が來たから、祕かにスウキツチを押へながら、これは君等が吹いても消えないが、俺れが吹けば消えると云うて、スウキツチをねぢつて吹くまねをして消燈をしたので、田舎ものをアツと云はせたなど、木堂一流の戲言を思ひ出す。尾崎學堂の雅號がもと琴泉と云うたのを、按摩の名のやうだと罵つたり、後藤新平の俳句を綿入りだと嘲つたり、嘲罵は木堂の得意とする所で、それが餘りに深刻であつた爲め、動もすると人の憤怨を買つたこともあるが、多くの場合愛嬌があつた。

今は故人となつた、篆刻家濱村藏六を向嶋に訪うた時、大隈侯の印を彫りかけてゐたので、誰れの依頼かと聞いたら、木堂の依頼と分つたので、後日木堂にその事を語ると、木堂の談話がかしい。實は自分が侯の代筆をする時の印だから、二顆の内一顆に代筆の二字を誰れにも讀めない大篆で彫つてくれと頼んだが藏六は應じなかつたと云うたが、これなどは出鱗目である。

右のごとくであるから、大隈侯の書となつてゐるものゝ内には木堂の代筆がいくらかあるに相違ない。此事につき木堂は云く、大隈侯の代筆は早い頃は重野や川田がやつたから文章も立派であつたが、追々下つて矢野や自分が代筆することになった。若し維新頃からの多くの侯の序文を一堂に陳列して見たら、大隈さんはエラクなるに随つて文章は反比例に段々下手になつてゐると、人は評するであらうと一笑した。

以上の如き追憶に耽つて、やつとの事で焼香を済まし、歸路にも木堂の政治經歷、大隈侯との離合などにもいろ／＼追憶を馳せたが、大隈侯との離合は友人渡邊幾治郎氏の書いたものが雑誌に掲げてあり、自分と同論であるから、それは略する。自分が最後に木堂に會したのは、大隈侯の十年祭を大隈會館に催した時の面會で、自分は大隈侯の敬慕會を日比谷に催す肝煎をやつてゐたので、是非當日式に臨んでもらひたい。公務の爲め出席が出来ないならばせめて追懷文を寄せてもらひたいと頼み、木堂は追懷文を書くことを諾し、當日令息が代つて式場で讀んだが、即ち大隈會館での面晤が最後であつた。

澁澤子

自分が澁澤翁を知つたのは四十餘年の昔し、郷國新潟に新聞記者をしてゐた時である。翁は第一銀行の頭取であつて、新潟に來られたのは其の支店を見回りの爲めであつたやうに思ふ。翁の來越を機會に盛んな園遊會を催し翁を歓迎した。自分も出席者の一人であつたが、何分混雜の折柄、唯だ刺を通じたのみで、語を交へることは出来なかつた。

其頃の翁は多分五十歳位であられたであらう。晩年の如く肥えず、何れかと云ふと、コジンまりとした、やさ方の人であつた。其後翁に遇つたのは、翁が早稻田大學の基金管理委員長となられてからだと思ふが、それからは種々の事で屢々お目にかゝつてゐる。晩年は飛鳥山のお宅でよくお目にかゝつたが、兜町に事務所があつた頃も、一二度お尋ねをした。如何にも多忙の人で、此事務所はさながら大繁昌の醫者の玄關もよろしくで、いつも訪客で充満してゐた。番號順で呼び入れられて應接室へ入ると、テーブルも椅子もありながら、翁はいつも立つてゐら

るので、客も椅子に就かず、立談で用を済ますことが常で、その爲め用はドシ／＼片ついて小氣味のよい程であつた。朝早く飛鳥山の邸へお尋ねをすると、執事は必ず各所へ電話をかけてゐるのが聞こえるが、大概翁から働きかけて、何時に行くかと云ふ電話が多かつた。翁は活動が趣味で、他に何も趣味を持たぬと云ふ風に、終日関係のある事業や會社、銀行等に回るので日が暮れる。一時重要な關係會社が三十餘を數へた位だから、その繁劇さは想像に餘りある。尙ほ實業界の難件と云へば、必ず翁の處へ持込むことがお定まりで、翁の裁定や調停を待つことが頻々とあつた。翁自らも俺れの家は勸解裁判所のやうなものだと云はれたことがある。あんな多忙な人が實業上のことなら兎も角も、教育上の事などは深く氣に留めて居られまいと吾等は想像したこともあるが、いつぞや病床近く行つて驚いたのは、早稲田大學の豫算其他の書類が枕邊に開いてあつて、確かに目を通して居らるゝことが知れて敬服した。

翁は實業界の大明星であつたが、政治的にも大手腕を有し、立派に政治家たることを得た人である。唯だ翁は飽くまで中正の位置に立ち、どこまでも實業扶掖に任じた。曾て伊藤侯から政友會に入黨を勧められたことがあるが、巧みに辭された。其際の書面を見たこともあるが、

翁の一見識と云ふべきだ。翁と別項に書く中野武營氏とは、いろ／＼の點に合致の處があつて、遂に中野氏と肝膽相照すに至つた。此の提携は翁の聲望を一層大ならしめた。翁は中野氏の歿後左の如く述懐されてゐる。

其初めは、氏は私を以て權勢に媚び、官僚に阿ねる、所謂御用商人の徒を以て看做されてゐたかも知れませぬ。それと同時に、私も亦氏を以て兎角に人が悪くいふ或一種の政治家ではないかと誤解をしてゐたかも知れぬのでありますが、明治三十年以後に至りまして、商業會議所の關係から、親しく相知ることを得まして、追々親交を重ねるに連れて、曩日の誤解は敬服となり、如何にも眞摯な名利に恬淡な至誠國を思ふの人であることを看破致しました。と云はれてゐるが、二翁の提携は眞に實業界の大幸であつた。何か實業界に大事件が起ると、二翁の共同動作で皆料理された。

世間には一代でミリオネアになつた人は必ずしも少なくない。又一代で大事業を起した人も敢て少なしとしない。唯だ有り餘る人の手から、足らない人に資を移して、多くの事業を助成した人は、翁を措いて他に何れにあるであらうか。翁は常に言はれた、俺れは自分の産を作る

ために生れたのではない、人の産を分配するために生れて来た。如何にも其通りで、翁は大事業の經營に寄附金を募る時には、喜んで其の衝に當られた。早稻田大學の大をなしたのも、翁のお蔭によるのである。此他翁の力に依り大成した事業は、搜指に違まなほどある。或る人は言うた、澁澤子爵が歿せられたら寄附事業に大變革が生ずるであらうと、これはよく穿つた評である。

翁は非常に繁劇な身でありながら、慶喜公の傳を編纂することを思ひ立ち、しばしば公を招請して、其の閱歴を親しく聞かれた。又吾等が設けた下村觀山を中心とする畫會にも參加されて、時には自邸で會を開かれた。あの繁忙の人にゆつくり話を聞く機會は、此畫會の時を除いては無かつたので、いろいろ翁の閱歴は此會で聞いた。翁は幕末海軍の主計に擧げられ、其司る所は會計であるのに、其頃の士風は頹廢して、或る劍客を逮捕するに誰れも恐れて行くものがかつたので、已むなく自分(翁)が捕吏を率ゐて出かけた。幕吏の怯情が斯の如くでは、幕府の運命も迫つたと其時歎じたが、果してその如くであつたと云ふ話も其の折に聞いたのである。

翁は演説の達人で、よく謙遜の言葉を以て人を服するの妙があつた。いつも「論語」を引合

ひに出さるゝが、あんなに論語をよく咀嚼して巧みに使ふ人は自分は他に知らない。論語は翁の金科玉條で、常に其の身邊を離れなかつた。いつぞや湯ヶ原に病を養はれた時、見舞つて見ると、論語がチャンと机案の上に載せてあつた。翁の居室には論語を寫した屏風が立回つてゐた。君は確かに論語を活用し、それを躬行した人と云うてよい。翁の演説巧者であることは、亞米利加に漫遊された時、到る處其土地に適切な事を云はれたので、隨行の人は大いに舌を捲いたと聽いてゐる。書も能筆で、前島男爵の生誕地に記念碑を建てた時、翁に尺四方の大字の揮毫を求めたことがあるが、翁は喜んで揮毫された。それは既に石に刻して建つてある。

翁は磊落の人で、時には普通人の祕する様な失策談を語るゝこともあつた。自分は曾て翁と大隈侯とに隨伴して岡山縣に出張したことがある。此行も募金の爲であつたが、侯は早稻田大學のため、翁は女子大學の爲めで、二つの目的で同じ處に行つたが、これには困つた、所謂二兎を逐ふものは一兎も得ない諺の通りで、土地の大歓迎を受けたが、一向收穫は無かつた。唯だ興味ある一收穫は翁の旅中の一話であつた。自分は翁の英靈の許を得て、茲に語りたと思ふ。

吾等一行を載せた汽車が備中の大社吉備津神社の前を通ると、翁は往事を追懐して微笑しながら、こゝには赤面した一笑話があると云うて語り出さるゝのを靜かに傍聴すると、幕末に民兵を募集したことがあつて、自分はそのため此地に來た。年の若い頃だから羈旅のつれづれに此邊の惡所に游んだ。さて翌朝は供勢が籃輿カゴを具して來たから、平氣で乗つて出發すると、籃輿の兩側に何人か付き添うて歩いてゐるので、何かとそれをよく見ると、女が赤い蹴出しをむき出しにして、草履を穿つて歩いてゐるのには驚きもし且つ恥ぢもした。實は此邊の娼樓の習慣で、狎客を或る地點まで送ることになつてゐるのを知らなかつたので、大失敗をやつたと、大隈侯を顧みて一笑されたが、吾等も皆笑ひ崩れた。

翁は晩年ある時自分に語られた。人間は長壽を保つもよいが、耄碌モロクしたくないものだ。物徠はあれほどの學者であつたが、晩年は耄碌したのか、俺れが死ねば紫雲がたな引いて俺れを迎へに來ると云うたとあるが、正氣の沙汰でないと語られた。翁は流石に死期に近づいても精神は頗る健全であつた。但だ記性が衰へたことは事實である。自分は早大の重要な報告をするため翁を訪れたが、執事に傳達を請はんとしたのに、意外にも自身で面會すると言はるゝの

で遇つて見ると、一向病體らしく見えす、時には快活の笑聲まで漏されたが、翁に面したのはこれが最後であつた。

野口英世博士

福島縣猪苗代湖畔の貧戸に生れた、野口英世は小學校時代毎朝早く村内を一巡して納豆を賣り歩き、それで家資を助けた。それが後に細菌の研究家として聲名を世界に馳するに至つた。意外と云へば意外だが、立志傳中の人は多くはかやうのものである。野口は幼時名を清作と云うた。二三歳の時、母の不在に手を火爐に差入れて火傷し、不具となつた。こんな不幸の出來事も或は彼れが立志の基キとなつたかも知れんが、他に彼れの立志の基と見るべき一話がある。それは彼れの改名の事に起因する。野口の小學時代その校長であつた小林榮と云ふ人は、自分も面識があり、今も健在と思ふが、此人が野口の外國にある間何くれとなく其母に親切を盡した人であるが、野口が病歿した後、一昨年であつたか、熱海に在る坪内逍遙博士を訪うて云ふ

には、あなたのお若い時著はされた「書生氣質」の内に、野々口清作と云ふ放蕩の醫學生が出てゐるが、その名が餘りに野口英世の舊名清作と似てゐるので、念のためお尋ねするのだが、英世を御存じであつての事かと云ふと、野口英世がもと清作と名乗つたことなど夢にも知らない博士は驚いて、野口君は著名な學者で、今日こそ名を知るが、あの小説を書く頃は、そんな人の存在すら知らない自分が、その人を取り入れる筈はない。全く出鱈目の偶中であると云ふと、小林も、勿論さうでありませう。あの頃は野口はまだ十歳ほどの小兒であつたから、無論御存じの筈は無い譯だ。併し爰に申上げねばならんことは、あなたのあの小説が野口を玉成する端をなしたことであると云ふので、逍遙博士は不審顔して耳を傾けると、小林は語をつゞけて云ふのに、野口が東京に遊學中、病に罹つて入院した時、無聊を慰する爲めに、あの小説を翻譯すると、端なく野々口清作が出た。それが己と同じやうな姓名で、矢張り醫學生であり、且つ放蕩兒だであるので、何となく氣にかゝり、眞逆自分のことではあるまいと思ひながらも諷刺を受けたかに思はれて、クシヤ／＼してゐる所へ、私(小林)が見舞に行つたので、段々譯を聞くと、これ／＼だと云ふから、私は笑つて、そんなに姓名が似て居るのを氣にするなら、

一層名を改めるがよからうと云ふので、「英世」と改めたのは其時であります。考へて見ると、あの小説中の同名異人が放蕩兒であると云ふに刺激を受けて、野口が發憤の端を發したかとも思はれると語つたので、靜かに聽いてゐた逍遙博士も案を打つて喜び、その事實は全く立志傳中のものだと云うたとは、博士から親しく聞いた話であるが、野口を識る自分には最も興味をそゝると共に、「書生氣質」は自分等同窓の樂屋話であるときまで云はれて居ながら、既に忘れ切つて野々口清作と云ふ名があつたかどうかとも覺えないのに、妙なことがあつたものと思つた。

餘談はさて置き、野口の立志の端は恐らく以上の刺激に因るものであらう。彼れは英世と改名して果して世界に英名を馳するに至つたのである。彼れは家の貧なるため東京に遊學中も常に人の學僕となつて苦學をした。彼れが他日の大成を期して終始變らず懇切に世話をした人に、今齒科醫學専門學校の校長をしてゐる血脇守之助氏がある。氏は野口の師であるのみならず亦恩人である。野口が東京に苦學中のことなど委曲に語る必要もないが、唯だ一笑話を語れば、彼れが或る醫家の學僕であつた時、その家の令嬢が毎晩野口の居る書生部屋へやつてくるので、野口の勉強を妨げ、うるさく感じたとき云ふ。それも其筈、令嬢は野口に意があるのでなく、戀

人は家外に在つて、幾度も戀文の配達をさせられたから、野口も閉口したに相違ない。此令嬢も、野口が他日あれほど偉くになると豫知したら、遠い戀人に情を寄せるでも無かつたらうにと、野口を識る友人と語つたこともある。

野口が洋行することになつた機縁は、亞米利加のロックフェラー研究所を預つてゐる某醫學大家が日本に來た時、野口が其滯在中各所に隨伴して其の通譯の衝に當つたので、遂に其大家に伴はれて米國に渡つたが、なか／＼當座は困んで、生活も出來ない窮境に立つたが、幸ひに研究所に出入し得るやうになつても、此の研究所では嚴格な規定があり、職員にはいろ／＼の段階があつて、非常な發明でもしなければ一段と雖も昇り得ない、實力競争場であつたのだ。野口は追々と種々の研究に其力量を認められ、幾年ならず破格の昇進をして、爾來世界的大研究が續々成功し、終に所内のあらゆる學者を壓倒し、最上位を占むるに至つたのは、全くその非凡の力量と勤勉に由るものである。

野口がロックフェラー研究所で研究し發明した、細菌病毒は幾十件の多きを數へ、從來如何なる大家も不可解としたものが、斯人に依つて續々闡明を得て、世界人類のために大なる福祉を齎らした。遂には瘴煙蠻雨の危險地にまで踏みこみ、久しく人類を毒した病菌を探討し着々功を奏したが、不幸阿弗利加の蠻地に於て斃れた。しかし彼れが遺した濟世の功は、赫々として長く世界に謳歌されるであらう。

亞米利加人は野口の在るのを榮とし亦誇りとし、吾が野口と云うてゐる。亞米利加から歸つた人の話に、野口の聲譽は如何にも隆々たるもので、途中驟雨でもあれば、大統領が困つても路頭の人は平氣であるが、野口であれば、人は争うて傘を貸す程評判が高く、且つ大持てゝあると云うた。亞米利加に行く日本人は大抵一たびは野口を訪問するのが例となつてゐるが、研究所へ尋ねて行くと幾時間も待たされるのは閉口すると云うてゐる。自分の識る或る醫學博士も米國で偶然電車内に野口に邂逅し、研究所へ伴はれたが、一寸待つてくれと廊下に置いてきぼりを喰つて、一時間半も待つて、ヤット研究室から出て來て、室へ伴はれて研究の實況を見たとき、野口は研究室へ入ると人事のあらゆることを忘れて仕舞ふので、人を待たせてをることなどは無論腦中にないから、二三時間や半日位を待たさるゝなどは珍らしくないと云はるゝほど野口は研究に熱中したものだ。

自分が野口を知るに到つたのは、前年野口が隆々たる名譽を荷つて歸朝した時が始めで、前掲血脇氏の紹介に據るのである。野口が在京の間は毎日種々の宴會に招待されてこれ日も足らぬ有様であつたが、ある日在京醫學大家が三十數名で野口を招いたことがある。その時醫學には門外漢である自分が唯一人其席に加へられた。其時の發起人たりし血脇氏は自分の加はつてゐる譯を特に説明した。實は野口に遇つたのは、此時が初めてであるが、自分の友人で野口と同窓のものもあり、他に野口を識る人が自分の知人中幾人もあるので、野口の事は遇ふ前に細大となく知つてゐたのであるから、自分を此席に加へたのも偶然でなかつた。野口が東京滞在中一回訪問して、君は折角歸朝したのだから、大隈侯に遇つたらどうか、若し望むとあれば自分は同伴すると云うたら、野口は非常に喜んで、實は毎日々々餘りインテレストもない人に招かれるので閉口してゐる。本國へ歸つて大隈侯に遇はないなどは、富士山を望まないで空しく歸米するやうなもので、亞米利加に歸つても土産話がないと云ふから、一日差繰らせて大隈侯へ伴うて紹介した。侯も喜んで與に撮影までされ、色々談話もあつたが、自分は時間を見計らつて、自動車に同乗し、自分の落合の莊に誘うた。こゝは草深い田園で、見る蔭もない茅屋であ

るけれども、毎日料理屋責に遇つてゐる野口には、目先が變つて興味があつたらしかつた。丁度正午であつたから、兼ねて用意した食物を出した。實は内々野口が平生あこがれてゐる好物を、わざと用意してあつたのだ。その獻立は菓子として焼芋を大皿に盛つて出し、宴に移つては牛鍋を供し、饌には澤庵漬や鮭のはらゝの鹽漬などで、粗野のものながら皆野口が此上のない好物を供したので、野口は驚いて、よくも私の好物を御承知だと喜び、祖國へ戻つて来て、けふが一番愉快の日だと云うた。自分は嘘けに筆硯と野口の氏名を刻した石印二顆を贈つたが、酔後予の爲めに野口が揮毫した額は「過如不及」の四字であるが、今考へて見ると、此語は野口自身の最後の識をなしたかに思はるゝ。如何に學術の爲めとは云へ、阿弗利加の如き蠻地にまで出かけて、病毒と闘ふなどは、自分に言はせると、チト過ぎたる如き感がする。返すくも惜しい人物を早世させた。

中野武營氏

讃岐の名産は、曰く米、曰く鹽、曰く砂糖、何れも純白雪の如くであるので、讃岐の人は三白を以つて誇りとしてゐるが、他に一大名物のあることを忘れてゐる。但し、此の一名物は色黒く、其堅きこと鋼鐵の如きものであつて、三白とは全く異なつてゐる。それは何かと云へば中野武營君である。

中野君は嘉永元年高松藩の勘定奉行中野次郎兵衛武知の長子として生れた。君の父は忠誠硬直を以つて令名のあつた人で、同藩の景仰を博したが、武營君は先考のあらゆる美質を受け継いだ。時勢の陶冶は更に先考以上の傑物たらしめた。君の幼少時代の事は言はずもがなだが、君が長ずると忠誠以つて舊君に仕へ、殊に理財の才があつて、幕末各藩疲弊の際、よく舊主の財務を理し、松平氏をして華胄界有数の優産家たらしめた。當主頼壽伯が華族學校に學ばず、私立の早稲田大學に學ばれたのも君の輔導に依るのであらう。頼壽伯が母校の理事に加はつて、長く經營の衝に當られたのも、亦君の勧めに出たのであつて、伯が今日政治界將た社交界に令名のあるのも、君の輔導與かつて力ありと云はねばならぬ。何れの華族も、時移り物換はるに隨ひ、舊領地を顧みるものゝないのが通例であるのに、松平伯の舊領に厚いことは世間周知

の事で、舊領地開發の爲めとあれば、教育事業でも、社會事業でも、それを助けるに些しも力を惜まれない。如斯は眞に華胄界の異數と云はねばならぬ。此の輔傳あつて此の英主あり、讃岐は眞に多幸の國である。

中野君は初め官仕して縣官となり、後、内務、農商務諸省に出仕して官は權少書記官に列つた。此頃の君は全く一個有爲の政治家で、君の將來は必然臺閣に藏相の椅子を占むるであらうと期待されたが、君の硬直の資質は、不正不義に對しては、長官の命と雖も従ふを欲せず、農商務省出仕の節、品川長官と衝突して決然官を去つた。大隈老侯は君が歿後左の如く語られたが、頗る君の性格をよく穿つてゐる。

中野氏は、王政維新の際、恰も高松藩の最も多事多難の時に青年としての鍛鍊を受け、一藩剛健の士風を父祖の血に受くると共に、多事多難の時代に鍛へられたのである。後年官界に在つても、政界に投じて、亦實業界に入つても、生涯を終始して、高潔なる武士的の氣魄を失はず、鞏固なる意思の力を有すると共に、オモテ面に於ては掬すべき溫情を湛へて、自ら持することは嚴正に、他を待つことは頗る寛容であつた。然も不義不正に對しては、一步も假

借せざる操守を保ちながら、高潔なる人物の往々陥り易き圭角も苛察もなく、社交界の紳士として、飽くまで自他の融合調和を忘れなかつた。氏が早く官界を去つたのも、當時の長官の不義不正に屈從し得ないで、犯顔直言した結果、終に職を辭したのであるが、後政界に周旋しても、亦毫も此氣概を失はなかつた。政治家としても大に成功すべき見込もあつたが、後又實業界に轉ずる様になつた動機も、決して失意の爲でも、利殖の爲でもなく、寧ろ知己を救ふ爲めに止むなく方針を轉じた様に思はれる。

右大隈侯の説話にある如く、君が實業界に踏み入りたる動機は友人の事業の不振を救ふ爲めであつた。乃ち君の親友牟田口元學氏の主宰に係る東京馬車鐵道會社は頗る悲況に陥つてゐたが、君は友誼と株主の懇請とに依り同社に入つて、専心整理に力めた結果、漸く年を逐うて隆運に向つた。その入社は明治廿四年であるが、これより先き、同じく不振であつた關西鐵道を救はんが爲め社長となつて、これも亦君に依つて悲運を免かるゝことを得た。此等は皆君の義侠の舉に依つたものであるが、君は一時交通事業に興味をもち、東京市内の電氣鐵道を經營し、小田原馬車鐵道にも、社長として經營した。君の實業界への踏出しは交通事業であつたと云ふ

も不可なからうと思ふ。君が此等の事業に如何に熱誠を籠めたかは、君は重役の身分でありながら、身を挺して馬車鐵道の沿線を自ら監督したことに依つて其の一斑を窺ふことが出來よう。吾等はしばしば君が沿線に立つてゐるのを認めたものだ。

君は斯く實業界に乗り出したが、一面政治にも關係を有してゐた。乃ち明治十四年、大隈伯挂冠と共に官を去つて、或は河野敏鎌氏等と、訴訟鑑定、仲裁事務を專一とする修進社を起し、又同志と共に大隈伯を戴いて改進黨を創立し、帝國議會創設されては、先づ郷里より衆議院議員に擧げられ、爾來三十五年に至るまで、當選七回の多きに及び、君の政治的活動は目覺しいものであつた。君が議席を有した頃は、自分も其末班にゐたので、しばしば君の演説を聴いた。君の音聲は清朗を闕いたが、其の説く所は條理井然として委曲を盡し、いつも一時間に渉る大演説で、經濟上の大問題には君は必ず演壇に立つた。君は當時商業會議所會頭でもあつたので、君の所説は實業家を代表するものと見做され、大いに注意を惹いた。亦君は正義の爲めには毫も假借する所なく、政府の失政を痛撃したので、爾來政府は君を一敵國と見るに到つた。

君が實業界に最も力を致したのは東京株式取引所の理事長として、又商業會議所會頭として

であつた。當時取引所は最も多難多事の時であつたが、君の在任は十五年の長きに亙つて、其の熱誠と不斷の努力は終に今日の盛運に導いた。君の功は勿論少なくない。君が東京商業會議所の議員に擧げられたのは早く明治廿四年にあるが、常議員、副頭取を経て、終に澁澤男の後を承けて會頭に推され、これより以後澁澤男と共に實業界の双壁として中外の信望を繋ぐに至つた。時恰かも日露戦役の後であつたので、君は戦後經營に全力を注ぎ、日夜苦慮して商工業者の一致を圖り、全國六十個所の會議所を聯合したり、東京勸業博覽會を開催したりして國富の増進に努めた。又米國が我移民に對し失當の事起るや、我國情を認識せしめんが爲め、米國に於ける太平洋沿岸八個所の商業會議所員を我邦に誘致して、吾風俗、習慣、風景等を紹介し、彼等に好印象を與へ、又米國の翼望を容れて、澁澤男を團長に推し、君は副團長として、各地の商業會議所議員を率ゐて渡米し、盛んに國民外交を行ひ、後亦日清の親善を圖るため渡支團を派遣し、こゝにも國民外交を試みた。君の働きの高調に達したのは恐らく此時であらう。

君の實業界に於ける名聲は隆々たるものがあつて、大なる事業は必ず君の贊畫を待ち、盤根錯節の難件は必ず君に依つて解決を得た。君は終に市政にも力を致すに到り、再度まで市會議

長に擧げられた。君の主宰した事業は一々擧げるに追がないが、君が郷國に於ける一二の功績を擧げれば、鹽業の制限を脱して、郷國の鹽業者をして終歲其業に従事することを得しめた如き、分縣に努力して、終に香川縣を獨立せしめた如きは、最も顯著なる功績である。晩年には、早稻田關係の日清生命保險會社の社長となり、又早稻田大學の維持員として、當時の校紛を解くことに力めた。

君は六尺ゆたかの偉丈夫で、活動が其の生涯の趣味であつて、頗る多忙の人であつたが、かかる境地に在つて尙ほ綽々の餘裕があつたのは寧ろ奇蹟と云ふべきである。君は謡曲に深い嗜好があつた。聲音はよくなかつたが、其の藝は堂に入つた。君の他の嗜好は酒であつた。君は朝例として杯を擧げ、一旦寐て、それより活動するのが例で、夜分は深更まで酒に親しみ、日曜は門を鎖して終日酒に親しみ、酔へば必ず謡曲を獨唱して自ら娛むを無上の愉快として、訪米の時孤樽を船に載せたなどは有名な挿話である。君は犯すべからざる剛強の資質を有したが、世路の辛酸を嘗めて人情の至微に通じ、頗る人情味が豊かで、人は皆君の溫情に服した。最後に逸す可からざる一挿話がある。往年大隈老侯夫婦に扈從して自分が讃岐の高松に遊んだ際の

事である。其時は松平伯夫婦も中野君も歸省された。一夕松平伯邸に宴會があつたが、大隈老侯夫婦は床の間を背にした座席に就かれ、松平伯主人夫婦は其の左側の席に就かれ、自分は老侯の右席に坐した。宴酬にして松平伯は中野に陪席をさせますとお断りがあつて、間もなく中野君が現はれたが、其席は自分の側の末席に設けられ、膳部も略式であつた。自分は先輩の上に坐して甚だ落ちつかかなかつたが、坐るに君臣の禮の嚴であることに感じ、如何にも麗はしい關係が今尙存してゐるのは、松平家繁榮の偶然でないことを思うた。かゝる場合に於ける中野君の態度は極めて謙遜のものであつた。

古河市兵衛翁

古河翁には一たびも正式に面會する機會を得なかつた。併し餘所ながら二三回翁を見たことがある。それは熱海で偶々旅館が同じであつたので、散歩の出入にしばしば出會つた。いつもチヨン留の翁は若い女隊を引率してゐた。自分は翁に一語をも交へたことはないが、妙な縁因

で、翁の性格、翁の事業を割合によく知つてゐる。と云ふ譯は、友人岡山兼吉氏が翁の顧問辯護士であつて、訴訟事件に關係なく、毎週一回翁と濱町の常盤家に會して、何くれとなく事業上の相談に與かつたので、日夜岡山と往來してゐた自分は、岡山を通していろ／＼翁の事を聞いた。岡山が歿してから、友人昆田文次郎氏が師たる岡山の後を受け、入社して長く機務に與り、遂に理事長にまでなつたので、此人を通して聞いたことも少なくなかつた。鑛毒事件に、政府は百萬圓の除害工事を命じたが、工事成つて進歩黨よりも三四の視察員を足尾に派遣したが、自分も其一人であつて、備さに山の全局を視て其規模の大なるに驚いた。田中正造翁が鑛毒問題を提げて幾回となく議會に氣篋を吐いた頃、自分も議席を有してゐたので、毎々其の演説を聞かされ、終に鑛毒地に出張して實地の視察をしたこともある。翁が歿して大隈侯が内閣の首班であり、先帝の即位の大典がある直前、大隈侯に翁の鑛業界に大勳あるを説き、其の令嗣に授爵を進言したのも自分である。侯は自分の進言を默聽され、可否を云はれなかつたが、翌朝侯から招かれて訪づれると、侯は君の言ふ通り授爵に決したと云はれたので、自分はひどく嬉しかつた。尙ほ他に縁因を云へば、翁の傳記を編纂する時には、聊かながら其事に與りも

した。

翁の事蹟は餘りに顯著であるから、傳の抜き書きなどして紙を費すことを欲しない。翁の前半生は維新混沌の時に際し、世路の崎嶇艱難と戦つて、彼れが如き成功を見るに至つた。翁が一生を通じて経験したことが運根鈍の三字に約言されてゐるが、翁は如實に此の三字を信条として奮闘したのである。如何に奮闘力が強盛であつても、其の配下が手足の如く働かなければ事は成らぬ。流石に翁は苦勞人で、配下の心服を博する術を知つてゐた。嘗て岡山から聽いて今も忘れない事がある。翁がまだ小網町の小屋に居つた頃である。山からいろ／＼の事務員がやつてくる。其の多くは見るかげもない、どろ／＼した衣服を着けてゐる。それを鄭寧に扱つて犒つて、早く寝に就かせる。翌朝目を覺まして見ると、床の脇に新らしい衣服、羽織、帶、足袋までもチャンと取揃へてある始末で、此の更衣で、その人は次ぎの日には別人のごとく綺麗になる。翁は必ず一夕其人の勞を慰める爲め、花屋敷の常盤家に伴ふのが例であつて、其の階級の如何を論じない。常盤家に到る時には、其頃は自動車が無かつたから、必ず二人乗りの仿車に同乗する。宴會の席では、城壁を設けず、對等に款晤し、別るゝ時は、是非父兄を安心

せしむるため家に歸るやう勧め、特に車を僦うて送らせるのみならず、相當の土産ものを與ふるが例であつたと云ふ。大事業を経営する社長など云ふ人は、假令尊大でなくとも、下級の事務員などには、おのづから差別待遇をすることが通例であつて、人もそれを當然としてゐるのに、翁は全く待遇に差別を設けず、自身を同等の地位に置き、相手をいたはること、さながら家族の如くであつたから、かゝる待遇を受けるものが感泣して、翁の爲め粉骨齏身を心に誓ふのも偶然でない譯だ。翁は如斯して人心を收攬したが、それが政略や方便でなく、赤誠から出でゐるから、貴くもあり亦珍らしくもある。自分は翁に就て多く語るまい。唯だ此の一事、翁の平生を髣髴するに足ると思つて特に此事を語つて筆を闋く。

安田善次郎翁

安田善次郎翁には二三度面會をしたに過ぎないが、縁因を云ふとなか／＼深いものがある。令嗣善之助氏乃ち今の安田善次郎氏とは、同趣味である關係から、三十餘年交りを續け、翁に

は一面識もない頃、早く今の安田氏をしぼく横網の宅に訪うたことがある。其頃同趣味の連中が毎月安田氏宅に會したが、その會を欣賞會と名づけ、同人中には幸田露伴、林若樹、和田萬吉、三村清三郎氏等がゐた。現在も稀書複製會の事業や、書誌學會の事業で頻々と交つてゐる。間接の因縁を云ふと、自分の親友が二人まで、安田家の事業に久しく關係した。一人は小川爲次郎氏で、久しく大阪に在つて、關西に於ける安田家の事業を監督するの位地に在つた。他の一人は小倉鎮之助氏で、横濱に於ける種々の事業に與つた。兩人とも今は故人となつたが、安田翁に就て此等の人から聞いたことも少なくなかつた。

自分が翁の警致に接したとも云ひ得るのは、北海道旅行中、小樽で偶然同宿し、襖一重を隔てゝゐたことがある。翁の底力ある清朗の聲が手に取るごとく聞こえたから、刺を通じなかつたとは云へ、警致に接したと云ふことが出来るのである。其の時翁は一人の客に對し、しきりに人の送迎に繁劇の業を抛つて時間を潰すことの無益であることを説かれた。斯様なことは些事ではあるが、確かに翁の主張の一端であると自分は受取つた。翁は資を投ずるに先だち、必ず其事業を親ら探討稽査すると聞いてゐたが、翁の北海道に渡られたのも、鐵道投資の爲め

實地を踏査されたのであらうと思ふ。

自分が翁と直接面晤したのは、其後早稻田大學に後援を求めため、高田學長と同伴した時である。翁は私立經營の早大に非常の同情を表された。蓋し自家の經驗から私營を難しとされたからであらう。其際直ちに巨大の寄附を諾された。そして基金管理委員に義子の善三郎氏が加はられて、長く世話をされたのも翁の好意に出づるものである。翁は何事に就ても主義主張があつて、教育に就ても「獨立」と云ふことに特に共鳴された。翁は「獨立」を立て通した人であるから、翁の教育主義も推するに難くない。

翁が一生を通じて一刻片時も緩めなかつたのは、勤儉貯蓄であつた。産を成すにはいろく、の道があつて、勤儉貯蓄は産を成す正道に相違ないが、随分回りくどい方法で、説くは易いが行ふことは容易でない。非常の忍耐家で無ければ出来ない業だ。だから兎もすると人は捷徑を走る。權勢に阿附して一攫萬金を策するものゝ多いのは此故である。翁はどこまでも獨立獨行人で、苟くも他人に頼ることをしない。一代にしてあれほどの産をなしたのが、偏へに勤儉貯蓄の結果であることを思ふと、翁の精力に驚かざるを得ない。世に豪富の人は少なくないが、

翁の如く自力主義を徹底して成功した人は、恐らく他には絶対に無からうと思ふ。

自分等は度々耳にしたことであるが、翁は勤勉に毎日自分経営の銀行會社に出勤して、午時になると、幹部の社員と食堂に會して食事を與にすることが常であつたが、翁はいつも金拾錢の辨當で濟まざるゝので、他の社員も勢ひそれに倣はねばならなかつた。これには贅澤連は内閉口したものだ。横網の本宅に客を招待するとき、藝妓を招くこともあつたが、其の藝妓には矢張り十錢ほどの安辨當を供するのが常であつたので、安田さんの辨當には困つたと、花柳界の評判となつた。これも翁の勤儉の現はれの一端である。

翁は勤儉を躬行するのみならず、他人にも奨勵をした。毎年二季に社員に賞與金を渡す時には、必ず賞與金に添へて貯蓄を勧める一文が包の中にあつた。これは毎年翁自身工夫して立案したもので、口づから社員に勧める言葉が懇切に書かれてあるのだ。乃ちこれが社長の令旨であるから、社員はこれを服膺せぬ譯にゆかぬ。其の服膺を表する、尤も明白の法は、與へられた賞與金を其儘銀行預金とすることであつた。翁の期待も實はそこにあつたので、立身を望む社員は、手元がいくら苦しくとも、賞與金は其儘預け入れることが風をなし、相率ゐて皆々そ

れをやつたので、安田銀行は何萬圓支出しても、それが直ちに預金として這入つてくるのを受け入れたものだ。翁たる社長は帳簿を検して得々であつたに相違ないが、これは銀行のためにも、預金者未來の爲めにも幸ひを齎らすものであるから、預金者は、後に至つて、皆社長の好意に服したのも當然の事だ。

私は翁のいろ／＼の事業を語ることをせぬ。それは本誌「實業之日本」の讀者が私よりもよく知つてゐるからだ。唯だ概括して言ふべきことは、翁はいくつもの不健全の會社や銀行を併せて、次第に大をなした。此種の會社銀行は翁が救はねば助からないものであるのだ。それを翁は惜んで助けたのである。さて翁の堅實の撫育によると、どんな瀕死状態の事業でも忽ち回春して、立派なものになる。その成功を側らで見て居るものには、安田はうまくやる、安田は併呑家であると悪口を言ふものもあつたが、それは成功をそねむ上から生じた批評で、瀕死の事業を盛り立てる苦心を些しも考慮しないものゝ言ふ事である。安田は實に事業界の大病院たる役目をしたと云ひ得るであらう。

翁の家庭が如何に規律正しく、人を待つに禮を以てしたかの一例を挙げると、自分は前にも

述べたごとく善之助氏方へ時々往訪したが、ある時暗夜に出かけて、同じ邸内にある善次郎氏の家を善之助氏宅と誤つて刺を通じた所、しばらく玄關に待たされて座敷へ通されたが、自分は家を取り違へたことが漸く分つた。間もなく善次郎氏が出て來られたのを見ると、頭に氷嚢を戴いて居られて、病床から出てこられたことが分つた。大概の人は病を以て面會を斷る所であるのに、初めて訪うた自分を斷りもせず、閉してあつた座敷の雨戸まで開けて、疾を力めて應對されたのは自分も恐縮して、善之助氏の家と戸惑ひをしたことを語り、御病中を煩して濟まないと謝したが、翁の家庭の一斑はこれで窺ひ得らるゝので、自分は深く感じたことがある。翁は娛樂的の趣味を多く有つて居られなかつたやうであるが、抹茶は趣味の一つであつたらしく、翁が方々の茶會に赴かれた記事は、其都度仔細に録され、それは數冊の多きに及び、令嗣が記念の爲め出版されたことがある。全體富豪の茶事は多く珍奇の茶器蒐集に偏して、互ひに茶器を誇ることがそも／＼茶會を催す目的ともなつてゐるが、翁はそれとは選を異にして、例の堅實主義で、どこまでも茶の本體を守り、軌道を逸することが無かつたやうである。これも亦翁の他の富豪と同じからざる一面目である。自分などは茶道には門外漢であるが、嘗て「茶

道の素人觀」を録して數日郷里の新聞に連掲したことがある。丁度其頃翁は新潟に赴かれて、朝「新潟新聞」で私の所説を讀まれ、何と感ぜられたか、特に連續する拙文を纏めて新聞社より取寄せられたと云ふことを、偶々翁の宿された旅館が自分の定宿であるので、其頃此の事を聞いたが、自分は一人の知己を得たことを喜んだが、それも十數年の過去である。

いつぞや何かの會で上野精養軒で大隈老侯と同席された時、盆栽や花卉などの談が換された時、翁の言はるゝのに、自分の屋敷内にある、どの木が枯れても深く悲しむ、實は樹木も家族に對すると同じ愛があると云はれたのに、自分は大いに同感を寄せたが、大震災の時、翁の邸宅所在地が大火の激甚區であつて、翁の堂々たる邸を紅焔で一と嘗めに嘗め盡して、一朝荒廢に歸したのみならず、翁の家族一家が全滅した悲惨事が起つた時、一樹をも家族同様愛された翁の心事を思ひ遣つて、胸が塞つたが、そのみかは、翁は、これより先き、別荘に於て兇手に非業の死を遂げられたのは、積善の家に思ひがけのない事として、自分は天に私がありはせぬかと疑はしめた。併し主義一轍の人にはかゝる災禍が往々あることは人事の常で、偶々主義に忠なる結果と見れば、翁も亦偉なりと云はねばならぬ。

津田仙氏

津田仙氏が麻布新堀町の自宅で學農社を經營されてゐた頃は、自分は帝大の學生であつた。今は故人となつた、友人石澤兵吾と云ふが、學農社附近の某寺院に寄宿して、學農社出版の「農業雜誌」の補筆をやつてゐたので、時々訪れたが、或時石澤は、君も津田先生に遇つたらどうかと云ふから、伴はれて初めて津田氏に面接した。氏は顔面に薄アバタのある極めて温厚素樸の人に見えた。應接の際私に出生地を問はれたから越後と答へたら、それなら新潟の鍋茶屋を知つて居るであらうと云はるので、存じて居ると云ふと、氏は幕末明治の界目目に幕吏として新潟に居られた際の思ひ出を語り出され、新潟に餘り長くもゐない内に維新の變革が起り、官軍が攻め入ると云ふ騒ぎに、自分は匆忙の際取るものも取りあへず逃げ出したが、三年ばかり經過してから、意外にも新潟から大きな荷物が届いた。差出人は鍋茶屋の主人であつて、中を明けて見ると、自分が遁去の際、委棄した書物を始め、衣類其他一點残らず入れてあつた。

實は混雜の際すべて無くなつたことと思ひ、斷念してゐたものが、悉く無事に手許へ達したのには驚きもし喜びもした。是は全く鍋茶屋主人の義氣と厚意に出たもので、今も鍋茶屋の舊誼を忘れないと語られた。此事につき後日鍋茶屋から聞いた話に據ると、津田氏の新潟在勤中は鍋茶屋は常に飲食の用を辨じてゐたので、その關係から、氏の所持品全部を取纏めて、今行形亭のある邊の砂山を穿つて、そこへ一切のものを埋め置き、漸く無事の時節となつたので、東京へ送ることゝなつたと云うてゐた。此の初對面の時津田氏から農業上種々の談話を聞かされたが、今は皆記憶にない。唯だ氏の邸内に西洋の花卉や野菜の畠があつて、初めて見るものが多かつたことを思ひ出す。

氏の令息和田純氏は早大出身で、嘗て内務部長として新潟縣に來られたことがあり、後には朝鮮の知事を勤められた。が、今は閑散に日を送つて居らるので、時々會することもあるが、此頃來訪を受けた時、數通の先考の書簡を示された。それは皆新潟在任時代、北堂と令室へ寄せられた手紙であるが、當時の様子がこれに據り幾許知れるから、序に二三の事を擧げて見よう。

仙氏は其頃仙彌と云はれたので、仙彌署名である。令室即ち純氏の母は初子で、新潟へ赴任したのは辰年の三月とあるから明治元年の歳である。會津道中を経て、途中勢子堂に一泊したなどの記事がある。三月と云ふのに寒氣がひどく、室内に吊した手拭が凍結して、板のやうになつたと記してある。役人としての旅行だから、家來も随伴したらしく、下に居れの叱喝には氣恥かしかつたと云ふ記事もある。新潟に就ては、何から何まで褒めてあるが、餘程氣に適つたと見える。知人がないから、閑あれば遊獵を事としてゐるとあり、又通譯の事務は寧ろ閑散で、洋學を教へることが毎日の勤めであつたらしく、一通には敕使が新潟へ來るとの評判を記し、氏も遠からず危険が身邊に迫ることを感じ、東京の事を思ひやつて、若し戦争が始まるやうなことがあらば、家族は佐倉へ避難せよなどの文言も見えてゐる。氏の新潟在任の時は、恰も幕府の燈火が正さに消えんとする時であつた。

前陳佐倉に避難云々とあるが、氏の舊里は下總の佐倉で、氏の父小島善右衛門は佐倉藩主堀田正睦の家臣で、藩の勘定頭元締の職を奉じ、藩の財政を司り、令名のあつた人である。氏は其の三子として生れ、廿五歳まで小島姓であつたが、幕臣津田榮七の婿養子となつてから津田

姓を冒すことになつた。

氏は青年時代専ら武藝に執心であつたと云はれてゐるが、嘉永六年、米國の水師提督ペルリが浦賀に來た時は、「黒船來」の聲は全國を震撼せしめたが、此時氏は年十七、加農砲隊に加はつて、江戸海岸衛戍の任に當つたのである。此の衛戍任務は氏を刺激して一轉機を劃した。氏は早く時勢を達觀し、外國の事情を識るの必要を痛感し、その目的を達するには先づ外國語に通じねばならぬと、爰に外語研究に志したが、當時外語と云へば、蘭語の外に日本に於て學ぶべき方便がなく、氏も一旦は蘭語を學んだが、それには嫌らず、英語の研修には少からず苦心し、終に神田神保町の伊藤貫齋の英學塾に入つて、寢食を忘れて勉強した。貫齋はもと蘭學醫で、伊豆の下田に滞留の米國總領事タウンゼント・ハリスの病氣の診察治療を擔當し、下田に止まること三ヶ月間、其間米人ヒュスケンに就て英語を學んで、進境頗る見るべきものがあつたので、歸京の後此の英學塾を開いたのである。

氏の英語研究は直ちに實地に役立つた。當時外國との折衝事件が多く、幕府は外語を解し、且つ外國の事情に通ずる俊才を求むるに急であつたので、幾多外國通は「外國方」に擧げられ

た。氏も其一人で、蕃書取調所からは、杉田玄端、津田真道、西周、杉亨二、東條禮三、村上英俊なども皆外國方に轉勤した。これより先、幕府は軍艦三艘を米國政府に注文したが、期に及んで僅かに富士山號の一艘が到着したのみで、他は幾回督促しても要領を得ないので、幕府は小野友五郎、松本壽太夫の二人を特使として談判に赴かした。氏が福澤諭吉、尺振八は其隨員となつて渡米した。これが氏の初度の洋行で、時は慶應三年で、氏が新潟に來たのは則ち其の翌年である。

氏が初度の米國行は滞在僅かに半歳であつたが、彼れの國情を視察して大いに啓發する所があつた。歸朝後幕府の倒るゝと共に官を罷めて、一意農事に没頭したのも、全く米國の國富の農に本づくを看取したからである。尙ほ氏が米國滞在中痛感したのは、四民平等で尊卑の別なく、農民の位地の高いことであつた。氏は我邦農民の現状と米國のそれとを比較し、農民の智見をひらき、其地位を高めねば、到底國富を増進することは不可能であると、此時から生涯を農事に捧げることに決意したのである。氏は其決意を行ふべく、幕府が斃れると、直ちに官を罷めたが、親族、友人等は下劣の農事に身を委ねることを不可としたと傳へらる。當時、官は

九天より高く、農は九地よりも低かつたから、かゝる異議のあつたのも無理はなく、偶々其頃の事情を告白するものであるが、氏は斷乎決意を枉げなかつた。

氏の最初に試みたのは西洋野菜の栽培であつた。それはある必要から之れを思ひ立つた。其の必要と云ふのは、明治初年に築地に外人の居留地が置かれ、外國旅客の爲め會社組織で築地ホテルが出来、氏は其の理事であつた。然るに其頃は外人の食用となるべき新鮮の野菜は一切なく、外國製の罐詰を用ゐてゐたが、氏は此の不備を感じて、外國から種子を取り寄せて、アスパラガスやキャベツの栽培を試みた。然るに栽培の結果、西洋のとは似ても似附かないものが出来たので、これには困つて、米國公使館へ出かけて相談したりしても、誰れも其心得のある人がなく、果てはエンサイクロペディア・ブリタニカの辭典でやつこのこと栽培法を知つて、それからは成功したと云ふ珍談もある。何分にも其頃は西洋野菜などは人は好まず、折角出来て氏自身は大自慢であつても、家庭の人すら食はず、後には餘り多く出来たので、價が下落して氏も困つたなど、創業には有り勝の逸話が傳へられてゐる。

氏は再び洋行の機會を得た。それは明治六年、埃太利ウキナで萬國博覽會が開かれた時で、

日本では總裁が大隈參議、副總裁が佐野常民で、氏は佐野副總裁の隨員として渡歐した。氏が農業上に大なる知識を得たのは此時である。氏は彼の土の農業視察をやり、博覽會で多くの物を觀た外に、滯留中農業上の學術を學び、實地に就て傳習をも受けた。其の師たる人は和蘭の園藝家で、日本の植物にも精しい、ダニエル・ホイブリングと云ふ人であつたが、此人は日本文化の恩人である。シーボルトの友人で、シーボルトが日本より携へ歸つた草木の培養繁殖を依託された人であるために、殊に日本の植物に精しかつた譯で、氏が此人を師としたのは面白い緣因である。津田氏は此人に師事して、どれほどの學識を得たかは分らないが、當時としては洋風の農學者として第一の人であつたに相違ない。最早志ばかりの農事熱心家でなく、能力ある實行家となつたから、氏は歸朝後に農學校を興し、又「農業雜誌」を刊行した。農業學校は、駒場に農學校が興るまで持續し、雜誌は頗る長く續いたが、皆我邦の創始たる名譽を有してゐる。

氏は埃國から歸朝すると、師の口授した“Method of Cultivation, Explained by Three Different Processes”を編述して、之れを「農業三事」と題して出版した。それは明治七年の

出版であるが、其卷頭に、大隈參議に呈した、新農學に對する意見書が掲げてある。それは餘り長文でもないから、茲に全部抄録する。

本年第一月、仙辱く埃國維納府博覽會に差遣せられ、彼國に於て萬國審査官の列に擧げられ、其際埃國有名の農學者荷衣伯連氏ホイブリングに親炙し、同氏近時發明の三大法、仙幸に其大略を領する機會を得たり。抑々同氏、數十年來暋勉積學の力を以て、前賢未發の妙理を發明し、其邦國に大利あり、人民に鴻益あること、農業場中へ一大功德を布くものと云ふべし。

右三大法の第一は「アトモスフェリック・パイプ」(氣筒と云ふ義)と稱ふ。磚製の筒を地中に瘞通し、大氣を土中に吸入せしめ、地質を肥饒輕鬆ならしめ、以て植物の生育を助く。夫れ草木の肥を吸收する、又大氣の功用を仰がざるを得ず。然るに尋常大氣の地内へ吸入せらるゝ、凡そ一尺五寸より深きに及ばず。今此筒を設け、大氣の侵入を促すが故に、深淺自在に肥料の養ひを達するを得、以て耕耨の勞を省かしむ。第二は「インクリネー」(樹枝を曲る義)と稱ふ。樹枝を偃曲して、本幹の勢力を増大ならしむ。夫れ樹根吸入する所の瓦斯は、幹より枝端に通達し、葉底より吸收する炭素を配合し、其用を爲すものなり。今此偃曲法に

よりて、已に吸收する所の養分を以て、或は幹を長大せしめ、或は花實を増殖せしめ、或は枝葉を繁茂せしむ。皆人意の欲する所の如くならざるはなし。恰も人工を以て草木の命を支配するに異ならず。第三は「アルティフィシャル・ヘコンテーション」(人工を以て豊熟せしむるの義)と稱へ、果實の増熟を助くるの法なり。蓋し花瓣開放の時に臨んで、随意に花粉の配合を媒妁し、結果をして大且多からしむ。之を穀類に施せば、其粒愈々大に、其量愈々重く、其收穫愈々多し。仙維納府外の麥圃に於て、荷氏及び博覽會一等事務官田中芳男と共に此法を設置し、^{カウ}芻の期の至り、尋常成熟の麥と比較せしに、果して倍量を得たり。仙又同府に於て一葡萄樹を以て試験せしに、一根樹(六年前挿木して植ゑたるもの)にして、其果を結ぶこと二百三十餘把を得たり。荷氏と共に之を博覽會果實陳列場へ携へしに、看者皆其培養の驗あるを駭嘆せざるなし。加之本年七月適と佛國の新紙を閲するに、去年葡萄酒五瓶を得たる樹を以て此法を試みるものありしに、今年所得の酒一百五瓶に至れりと載せたり。是等は豈其明驗にあらずや。

夫自古西邦碩學名譽の士、異代競うて學藝の進歩を助け、經世濟民、天地の數理、物理の

學より、百工技藝の末に至るまで、皆其精奥を究めざるなし。抑々汽力、電信、醫手、化學の如きに至ては、其生民に洪利益を與ふる至大至廣、殆んど文物昌明の極と謂ふべし。獨り農務の一課に至つては、僅かに簡便の機械方術等、先哲の裨補無きにあらずと雖、其地價に關するに及んでは、古今曾て特別の差等あるを聞かず。況んや天然の配合を媒妁し、天造の榮枯増減を資くるをや。嗚呼荷氏の三大發明により、有限の人力、有限の土地をして、皆限界なからしむ。由是觀之、荷氏獨り農學場中に大功徳を敷くのみならず、殆んど天機を人間に洩し、造化の工を奪ふと云ふも可なり。今之を桑、茶、米、麥、山林、果樹等に施さば、其鴻益量る可らず。仙願くは今此法を天下に傳播せば、數年を出ずして、上は政府の歳入を増加し、下は生民の家産を倍殖し、貴賤天與の幸福を仰がんことを。因て仙今荷氏口授する所の三法を筆述し、普く世人の觀覽に供し、共に天下の洪益を圖らんと欲す。仙恐懼敬白。荷氏の學説が氏に依つて平易に説かれたので、「農業三事」は大いに世の歡迎を受けた。當時西洋の農書と云ふものは幾んど無かつたので、荷氏の説を聞くのは全く空谷の登音であつた。福澤氏の「學問のすゝめ」が、新文明を鼓吹するに與つて力あつた如く、此書は確かに農業上に

大なる新知識を與へた。これが博覽會から齎らし來つた大なる土産であつたと云ふも謬言であるまい。氏の工夫になる所謂津田繩と稱するものも一時大に行はれたが、これは云はば農業三事中花瓣媒助の實行法で、三事の延長と見るべきものである。此の工夫は終に天聽に達し、明治十年九月、兩陛下及び皇太后陛下の御前で稻花媒助法の實地を天覽に入れ、御満足の御沙汰があつて、氏は陛下に咫尺し、御陪食の榮に浴した。

氏は又明治四年頃から外國の果物を日本に移植することを力めた。西洋林檎だの、ストローベリーなどは今廣く内地に栽培されてゐるが、其の初めの試植は氏の骨折に因るのだ。當初はストローベリーは一向賣れなかつたと云はれてゐる。豚や玉蜀黍を日本の常食たらしめんとして熱中したこともあつて、帝大の卒業式に臨んで、特に此の勸奨の演説をなすに至つた。氏は又外國より街樹を移植した。古來日本では松杉の竝木を用ゐてゐたが、其代りに落葉樹を用ゐれば、夏は涼しく、冬は日光を遮らないからよいと云うて盛んに之れを奨励した。即ち皇城の濠端のアカシヤの竝樹は氏の植ゑたものであり、諸方に今繁茂してゐる、ユウカリ樹は、氏の農園に育つた苗木の生長したものが多いのである。

以上擧げた如く、氏の農業上の功績は決して尠くない。氏は基督教を奉ずる人であつたので、學生には宗教的道德を鼓吹した。青山學院なども、其の唱首は氏であつて、開校の際は來學者が少なく、氏は親族を勧めて入學せしめ、細君までも其の學生としたと云はれてゐる。盲啞學校も、今は立派なものだが、これも氏が唱首であることを近く聞いた。何を起すにも最も困難の時に當つて、氏が先鞭を着けてゐるのは如何にも敬服である。氏の令息和田氏の云はるゝのに、先人は思ひつきはよかつたが守成に疎であつたと。或は然らんだが、革新時代の人は大概さうであつて、範を示して人に成さしむる事が往々ある。氏の農學校は、北海道の農學校に一年前先鞭を着け、そして後終に持續に困んだは惜しいことであつたが、農學校を官設で起さしむる氣運を作つたことは確かである。即ち北海道に於ても駒場に於ても相踵いで起つたのは、氏の刺激に依ると云ふことが出來よう。

氏の功績は如斯きものあるに拘らず、氏は無位無勳の人であると云ふのは意外である。勿論位勳は氏を輕重するに足らないけれども、國家が今日尙ほ放却して居るのは何故であらうか。凡そ獨立獨行の人は、兎もすれば政府者に忌まれて、其功績を無視さることがある。併し獨

往の人を取つては、其の自己の意思を徹底し得れば、其の満足と快感は、勳爵を受けるよりも遙かに優るものがあるから、吾等は氏の無位無勳を以て寧ろ貴しとする。氏が米國に遊んで四民平等を見て感喜した精神を推せば、恐らく氏も亦吾等の言を可とするであらう。

田口卯吉氏

田口卯吉氏は鼎軒と號し、早く「東京經濟雜誌」を起して、自由貿易論を主張した。氏は經濟學者であると共に文學者であつた。自分の親友吉田東伍氏は史學界の大家の名を博したが、吉田の歿した時に、田口氏の親友島田三郎氏より私に電話が懸つてきた。島田氏には久しい交りがあつたが、電話のかゝつて來たのは此時が始まりで、島田氏の言ふには、自分と田口との關係は、恰かも貴下と吉田君との關係の如きものである。自分は田口を喪つた時慟哭したが、定めし貴君も自分同様の悲哀があらるゝであらう、と云ふ同情ある慰問であつた。島田氏は政治家として文學的の田口氏を親友に有つたことを、當時政治にたづさはつてゐた私が、文學的の吉

田を親友にもつてゐたから、田口氏は斯く同情ある弔問を寄せられたのである。

自分が學生時代即ち東京大學に在つた頃、田口氏は早く經濟雜誌でしきりに自由貿易論の氣燄を揚げた。自分も其頃は自由貿易論を盲信した頃で、田口氏は自分の憧憬の人であつた。何とかして遇つて見たい。遇つて親しく其説を聞いて見たいと、其頃吾等の先生であつた、外山正一氏に紹介を請うて、書狀を貰つたことがある。折角紹介狀を得たが、何かの都合で其際は訪問しなかつたが、氏はいつまでも吾等のあこがれの人で、田口氏の著したものは、何に寄らず必ず讀んだものである。あの人は文學の才があつて、經濟論の外に吾等青年を引きつけるものがあつた。紀行や小品の隨筆などに、往々狐でも憑かねば書けないやうな名文があつた。今になつて思へば、さまざま敬服するほどのものでないが、あの頃の周囲は闇黒であつたので、氏の所説は頗る新らし味があつた。例へば「日本開化小史」のやうなものは、今見れば淺薄のものであるが、西洋頭で書いた所に趣味があつて、一時世の歓迎を受けた。氏は追々日本歴史に興味を感じ、遂に「史海」と云ふ雜誌を發行し、毎號氏獨特の史談を公けにした。氏は強ち日本歴史の専攻家では無かつたが、其の着眼がよいのと其の説き方が斬新であつたので、此の雜

誌も經濟雜誌と共に識者に喜ばれた。然るに爰に田口氏に楯突くやうなことが起つた。當時吉田東伍氏は郷國を脱して東京へ來たり、數月間自分の食客となつてゐた。自分は其頃「讀賣新聞」の主筆であつたが、吉田は別に仕事がないので、或る時談「史海」に及んで、田口氏の説はどうかと吉田に聞くと、あの人の説は奇矯であるから讀者の興を惹くかも知れないが、觀察に誤りが多いから感服が出來ぬと云うた。自分も吉田に向つて、誤りがあるなら、それを正すがよからうと、史海の出る毎に評論を書くことになつて、それを讀賣の一隅に載せ始めた。其頃の吉田は自分の一食客に過ぎなかつたから、態と本名を掩うて「落後生」の名で出して見ると、忽ち學界の注意を惹き、落後生は何人であらう、とセンセーションを起した。吉田東伍の學界に起身の端は、史海の評で發したと云うてもよいのである。吉田は日本歴史の造詣に於て田口氏の敵では無かつた。参考書一つ持合せの無い自分の書生部屋から、すら／＼と書きなぐつたものが田口氏を壓迫したなどは、自分の敢て期さない所であつたが、田口氏はこゝに勁敵を得たのである。

併し田口氏の史海は、確かに史學界に新たなる道を開いたことに於て、功績の没す可からざるものがある。氏が史學界に貢獻したのはこれのみではない。彼の浩瀚なる「國史大系」に専門家の考證を附して全部發行したなどは忘る可からざる功績で、あの頃にかゝる企ては決して容易で無かつた。尙ほ其外に「大日本人名辭書」を刊行したが、これも吉田の地名辭典と並び稱すべきもので、今尙ほ此書が珍とされてゐるのは偶然でない。

田口氏の本領は勿論經濟に在つて、氏は自由貿易主義に終始した。氏に對抗して保護貿易主義の東洋經濟新報が犬養、町田氏等に依つて起されたのは、田口氏の刺激に依つたと思はるゝが、長い間兩々相對峙して議論を闘はしたことが、如何に經濟界を啓發したかは、經濟界の人の熟知のことであるから、吾等の呟々を要しない。田口氏も遂に筆を以つて自説を主張することに満足せず、幾回か衆議院議員に擧げられ、相當に幅を利かしたが、氏は本來學者肌の人で、政治家的人では無かつた。局外者から忌憚なく云はゞ、氏は飽くまで筆を以つて立ち、院外より自由に國政を批判したら、一層力を展べたであらうに、幾回の選舉に疲れて、基礎の略々成つた經濟雜誌社の財政を滅茶々々にしたのは惜むべきである。

氏の選舉運動に珍な一挿話がある。例の戸別訪問をやると、妙な暗礁に觸れた。普通戸別訪

問は唯だ名刺を置いて、どうぞよろしくと云うて立去るのが例で、其人を引き留めて、貴下の政見はどうだなど、聞くものはないが、田中館愛橋博士は流石に學者だけに、候補者に質すべき簡條を書き記して、玄關の書生に渡し、候補者が來たら、之れを示して其答を求めよと命じてあつた。そこへ田口氏が出かけたから、書生は質問の簡條書を出した。田口氏の事だから、少しも躊躇せず、直ちに平素の所懐を立ちながら堂々と陳べ立てたとあるが、田口氏と田中館氏はよい取組で、此一挿話は田口氏の性格をよく現はしてゐる。

氏は一轍の人で、自家の主張は何んとしても枉げなかつたが、極めて多感の人で、自から主張を變ずることもあつた。日露戦争には氏は強硬の反對論者であつたが、偶々清韓旅行に軍部の人と連れ立ち、旅中軍部の人からいくら説いても、主張を枉げなかつたが、露人が日本人に對する殘虐の行動を見るに迫んで、忽ち熱烈の開戦論者に變じたなどは其の一例である。極めて美質の人で、眞面目の裏にはユモアもあつた。氏と朝鮮旅行を共にした坪谷水哉氏の談に、一行の誰れか、風俗視察に妓生ヤサシを弄してはと動議を起した時、氏は笑つて、俺れも偽君子の假面を抜き去らうかと云うて其動議に賛成したが、氏は視察だけでは満足せず、翌日は單騎で妓

生訪問となり、一行をまいて所在をくりましたので、皆々啞然としたと云ふ珍談もある。

佐久間貞一氏

自分が佐久間貞一氏に兩三度會したのは、氏の牛込二十騎町の宅であつた。用件はいつも印刷の事に關係してゐた。其頃はまだ早稻田に印刷機關がなく、早大の出版物は一に氏の經營に係る秀英舎に依頼した。氏は宿痾があつて、身體は羸弱であつたが、精悍の氣は人を壓するものがあつた。本邦に於ける活字の印刷は早く天正頃から開け、徳川の末期にも相當開けてゐたが、具體的の印刷業は佐久間氏から始まると云ふべきだ。氏が今の秀英舎を創設したのは明治九年であつて、今を距る、五十幾年の昔である。氏は早く活字を鑄造し、凹版の印刷を創め、又寫眞應用の製版を試みた。そして吾等の敬服するのは、早く徒弟制度を設けて、優良技工の養成に努め、労働者の保護制度を設けたり、印刷同業組合をも組織した。此等諸般の制度は、今日こそ缺き難き施設として業界では當然の事としてゐるが、あの早い頃早く其の必要を感じて、

手を着けたのは炯眼であると云はねばならん。只だ目前の利のみを事とするものゝ出来ることではない。氏は衷心勞働を尊重し、自分は社長でありながら、常に身を従業員と同じレヴェルに置き、率先従業員を導き、時には自から活字を拾ふこともあつた。これもあの頃では、氏で無ければ出来ない業であつた。氏の従業員に對する温情は隠れもないことで、病者が社員中にあると、下級の職工でも自分の別荘にやつて保養せしめたものである。

氏の業績は印刷業に止まらず、外國紙の輸入防止の爲めには板紙を抄いて終に成功した。人口の逐年増加するに顧慮し、且つ國力を外に展べるの必要を感じて、海外移民を企て、これにも成功した。肥前天草の島民を北海道に移して、之れに産業を教へたこともある。天草の島民を利用して潛水業を創め、瑛國博覽會へ出品の幾多日本の國寶が、歸途船の難破の爲め海底に沈んだのを取上げたのも、亦氏の功勞の一つで、名古屋城の天守閣に光りを放つてゐる金の鯨も、取り上げた國寶の一である。氏は此他に或は信用組合を起して小工業者の爲めに資金の融通を圖り、工業協會を起して工業條例の協定に資する所があり、又府會、市會等の公職に就いて盡した事蹟は決して少なくない。

氏はよく案じ、亦よく行うた。よく案ずる人は必ずしもよく行ふ人でないのに、氏はすべてあの創始時代の困難期に、案じたことを徹底的に成し遂げ、後世に範を示してゐる。今日はしきりに社會奉仕を叫ぶものがある。サルヴェエとか奉仕と云ふには、少くとも自利を離れて犠牲的の誠意が無ければならぬ。今日の社會奉仕など云ふものは、其實己れの爲めにし、然らざれば己れの會社團體などの爲めにするもので、名は立派だが世を欺くものが多いのである。眞に社會奉仕の四字を許し得る人は佐久間氏のやうな人であらう。氏は何を目論んでも私腹を肥すごとき野心は一點も無かつた。時の政府は氏の目論見の斬新なるを危み、動もすると二の足を踏むやうなこともあつたが、氏の人格に信頼して漸く思ひ切つてやらせるやうになつた。やらせて見ると着々成功するから、氏の信用は益々増長した。畢竟至誠事に當れば外れないものである。あの多病で身體の弱い人が、よくも百難を冒して邁往したものと、其の氣魄と勇氣とに感服させられる。

一昨昭和六年十月、氏の銅像の除幕式を行つた時、自分も參席したが、故人と同じ印刷業を營んでゐる關係から、一場の演説を試みて、佐久間氏の社會的諸般の功績を擧げた後、左の如

く陳べた。

大概な社會事業の何十年記念會などには佐久間君の名の出ないことは無からう。多くの社會事業の創始者は君であるからだ。君の創めた多くの事業は多少の變遷を経て皆今發展してゐる。畢竟、君の創業的踐み出しが堅實で、好範を示したからであらう。今の事業家の手腕は必ずしも君に劣るとは云はぬが、その精神の純潔で、誠實で、犠牲的であつた點は、全く今の事業家の及びもつかぬものがある。かゝる人の銅像を建て、その人の人格を後世に偲ばせることは頗る意味がある。兎角銅像流行の時代に、今頃漸く君の爲めに銅像の出来るのは甚だ遅いやうな氣もするが、實はあの人は銅像などを建て、もらふやうな晴れがましいことを欲しない人であつた。併し今日は銅像建設に其の時機を得て居る。今は勞働爭議だ、失業だ、勞資協調だ、國產獎勵だ、と盛んに叫ぶ時に於て、誰れか數十年前早く此等の事に努力した、あの人の功を追懷しないものがあらうか。かゝる時に方り、事の創始の偉勳者の像を建て、後昆に傳へてこそ、初めて銅像を作るの意味があるのである。銅像が、君の死後幾十年の後に建つたのは敢ておそくない。建つべき時に建つたのである。そして銅像の建つ

たのは故人に倣するのでもなく、その親族、故舊に媚びるのでもない。何事も輕佻浮薄に墮する今の世の中に、一の大なる警鐘を作るやうな心持で此像が建てられたのだ、と自分は思つてゐる。今後此の社域に逍遙する人々は、像前に且らく足を駐め、生けるが如き故人の風貌を拜し、徐ろに故人の多くの事蹟を追懷せば、蓋し風教に益する所少くなからうと思ふ。云々

朝吹英二氏

一日、出入の書畫屋が十二枚の石の帖を持ちこんで來た。自分は性來石が好きであるので、此帖を見て食指が動き、それを購うて玩賞してゐると、忽ち朝吹氏のことと思ひ及んだ。元來石は醜の惡名を擔つてゐるが、それは形貌を云ふのであつて、その中にどんな連城の壁が藏してあるも知れない。切磋すればどんな玲瓏なるそれになるも知れない。一概に石は堅いもの、味のないものだと云うて看過し去るのは、抑も石を知らないものである。朝吹氏は其の面貌の

醜で通つた人であつたが、其爲人や人格に至つては、全く風非と反するものがあつて、あんな明るい、愉快的、氣の利いた、深切の、氣前のよい人はない。あの人は男の中の男で、すべての男に惚れられ、亦女にも惚れられた。あの人は石に譬へると靈石であるのだ。

あの人は、九歳の時、猛烈な天然痘に罹つた。其の結果として全く相貌を變じたが、これはあの人の不幸であつた、けれども、あの人が雛妓にまで喜ばれたのは、痘痕が一種の愛嬌となり、それが生涯の看版となつたことを思ふと、一概に不幸とも云へないのである。あの人は他人がいろいろ綽名をつけるのを一向氣にかけず、ある藝妓が、カルタ札の、萩をあしらつた猪の顔によく似てゐると云うた時、磊落の氏は、柿の本の人麿をもぢつて、俺れは「萩の本のアニマルだ」と云うたと云ふが、花柳界では猪の札に取りあたると朝吹さんが來たと云ふのが常で、東京ばかりか、關西の花柳界でも斯く云うたので、近藤廉平と大阪の或る酒席に藝妓が交つて花を引いた時、朝吹の名が出るので、どうだ、俺れは偉いだらうと、近藤に誇つたと云ふ逸話が残つてゐる。

明治時代にさまざまの人物が出てゐるが、面白い人物と云うたら、誰れでも先づ指を此人に

屈するであらう。あの人の實業界に於ける位地は始終下積みで、鶏口とならず、牛後で畢つたが、あの人の同輩若くは目下の人は、近藤廉平でも、吉川泰次郎でも、川田小一郎でも、莊田平五郎でも、皆ヅン／＼進んだ。政客方面で氏の世話に成つた犬養でも、尾崎でも、本野（一郎）でも、町田でも、皆臺閣の人となつた。然るにあの人は常に縁の下の力持で、隠れた方面のみを擔當した。幾多會社に従事して其功はあつても、要するに下積みとなつて、調法がられたに過ぎない。不遇と云へば不遇でもあるが、あの人に不平もなく、自からそれを分とするごとく、洒々落々として一生を終つたのは、珍しい人格である。

あの人は最初福澤先生の玄關番を勤めて、後には大隈侯に知られ、岩崎に知られて、岩崎の番頭となつたが、明治十四年の政變で、大隈侯が失脚して岩崎も其の卷添へを受け、氏も亦岩崎の番頭を辭するに至つた。あの混沌たる時節には、何をやつても失敗するのは當然であつて、氏の最も痛手を覺えたのは、貿易商會の取締役兼支配人となつたことである。この商會の起つたのは十四年政變の前年で、商會の目的は、從來外商が跋扈して貿易の利益を壟斷することを防がんとするにあつたが、朝吹氏は經驗がないから、就任を辭退したのを、岩崎と福澤が是非

と強いたので、已むなく諾したが、十四年の政變と共に局面が一變したので、此の商會も存續がむづかしく、遂に百萬圓許の損失を朝吹氏一人が脊負つて悲慘の破目となり、其の借金を長く負擔したので、如何にも氣の毒な生涯を送らなければならぬことになつた。あの人の一生涯の運命を決したのは、全く此の商會の失敗にあつたと云ふべきで、元々乗り氣のなかつた氏を無理やりに起して、さて失敗して見ると、誰れも救ひ手が無かつたのは、十四年政變の大嵐で誰れも手出しが出来なかつたからでもある。氏は全く政變の大犠牲となつたのである。

僅かに書生の境界を脱したばかりの朝吹氏が一朝百萬圓の借金を擔つたのは非常の難儀であつたに相違ない。氏を知る川田氏などは氣の毒がつて、日本銀行總裁の給料を封の儘に氏に與へたなどは、其當座を過ぎての後であるけれども、瘡痕は容易に癒えなかつた。熟知の藝者までが氣の毒がつて、料理屋、待合の拂を藝妓共が辨じた位で、まるで小説にでもありさうな浪人そつくりの苦境にゐた。

然るに爰に奇とせざるを得ないのは、かゝる窮苦に居る朝吹氏が、政府から兵糧攻めになつてゐる大隈侯や、その同志の爲めに兵站部長をつとめたことである。氏は兩潤社と云ふを起し

て、九州方面や北海道、千島の硫黄礦に手を出して幾許の金融を圖り、改進黨も其のお蔭を蒙り、大隈家の臺所をも露したらしいが、此等の事業が結局失敗に歸したとは云へ、一時の急を救ふの材料としたのは、朝吹氏の怪腕であつた。氏は多くの友人のためにいつも金策を司る衝に當つて、いつも否むことなく金融を辨じた。が、思へば氏は金の工面に不思議な靈腦を持つてゐた。尾崎、犬養などが朝吹を二世天川屋と稱したと云ふのも偶然でない。全く友誼に厚い俠氣の人であつた。自分などが氏に敬服するのは、氏が金の才覺に如何に苦心しても、それを些しも言動に顯はさず、黨費や選舉費などは飽くまで大隈侯に分配させながら、誰れも背後に朝吹が居るなど氣がつかかなかつた。ある時代には板垣伯から大隈侯へ借款の申込みがあつたので、朝吹は侯の顔を立てるために内々支辨したこともある。自由黨の内中江兆民、河野廣中などは、氏に負ふ所があつたのである。

朝吹氏は何事にも屈託せず、常に陽氣で、事に當つては豪膽で太ッ腹であつた。これは天稟にもよるであらうが、あの人の投機の趣味が因となり原ともなつて、此の性格を養つたかと思ふ。明治廿一年に、郵船會社の五十圓券五千株を買つて、其の騰貴を待つて一舉二十萬圓を儲

けたことがある。明治十九年に、株式取引所をブルス組織に改めんとするので取引所株は大いに暴落した。その際買ひ方であつた中村道太を向うに廻はし、田中平八の二代目が賣り方に回つて大戦争をやつた時も、田中の背後には朝吹氏がゐた。これは勝敗決せずには畢つたが、此の戦ひは今でも語り草となつてゐる位である。氏の大膽不敵の行動は、兎もすると相手を激し、怒りに乗じ氏の暗殺を企てたこともある。それは關西方面の事で、氏は其事を前知して、幸ひに免かれたが、氏の一生には投機に關する波瀾が少からずあつた。

貿易商會で不相應の負債を擔ひ、福澤、大隈、岩崎の先輩が政府にいぢめられてゐる天地に立ち、朝吹氏の才略も流石に泳ぎ兼ねて、刀折れ矢盡きるの窮地に陥つた時、氏は三井家に迎へられた。言ふまでもなく當時の二大財閥は三菱と三井で、朝吹氏は元來三菱閥の人であつたから、三井から迎へられたのに對して應諾を躊躇したが、遂に三井に降参した譯は、福澤の親戚である、中上川(彦次郎)が三井銀行を主宰してゐた、其中上川の妹が朝吹氏に嫁してゐるから、中上川に對して朝吹氏は義弟である、そんな關係から氏も遂に三井に投じたのである。其頃の三井は、舊家の常として何事も舊套を墨守し、一革命を要した時であるので、新進の人物

をしきりに物色した折柄であつた。中上川は其の革新の急先鋒として擧げられた人物である。三菱の背後には大隈侯がゐたと同じやうに、三井の背後には井上侯がゐた。中上川の三井入りも井上侯の推薦に係るものであつた。當時三井に取つて最も難物とされたのは鐘淵紡績會社で、三井は勿論最大の株主で、其興廢は三井銀行の運命に關係する程のものであつたから、朝吹氏は先づ此の會社を主宰することになつた。實を云へば矢張り貧乏圖を引き當てたので、頗る難局であつたが、苦勞をし抜いた氏は、格別難局とも思はなかつたらしい。三井の主腦である、義兄の中上川は邁往勇進の人であるのに、義弟の朝吹氏は其性格が寧ろ反對で、奇變百出、調節に妙を得た人であるから、中上川の短は朝吹氏の長を以て補つたことも少からずあつたに相違ない。中上川の下に此人を得たのは三井家の仕合せであつたのだ。

前日までは天下の志士論客と交つて、天川屋を極めこんで氣を吐いた朝吹氏が、遽かに紡績屋に早變りしたので、知人は皆目を聳て、其行動を見ると、其の精勵なるには誰れも彼れも驚いた。殊に會社工場内の職工が驚いた。その頃まだ自轉車がやつと行はれ出したばかりであるが、鐘ヶ淵まで人力車で通ふのは不經濟だと云うて、操縦も覺束ないのに自轉車に乗り初めて

通勤した。時には轉落して田圃に身を没するの椿事もあつたが、そんなことは平氣であつた。あの風半の人が覺束なく自轉車を驅る、其姿を想ひ遣ると、をかし味を感じざるを得ないが、尙ほ氏のその頃の服装はと云ふと、頭には刺子のお笠帽子を冠り、肩にはヅツクの袋を掛けたと云ふから、それを加へて自轉車上のあの人を考へると、其の様子が一層をかしく思はれる。誰が當時途上に遇うたら、これが鐘紡の専務と思ふものがあらうぞ。途上の人ばかりではない。氏はかゝる行装で工場内を仔細に巡察するので、最初は職工共もこれが専務と心付かず、うつかりしてゐるものもあつたと云ふ。又氏は、一旦歸途につき、百花園あたりから不時に引返して工場を見ることもあつたので、職工も時々面喰つた。併し苦勞人の朝吹氏は常に職工に同情を寄せ、飲食に注意を拂ひ、自分携帯の辨當は給仕に遣つて、職工の食物を試食し、やかましく可否を言ひ、澤庵漬の講義までやつた。それと同時に規律を正し、經濟を取締まつたので、此會社も舊態を全く變ずるに至つた。

朝吹氏は鐘紡を整理すると、其才幹が認められて更に三井工業部の専務に擧げられ、こゝにも難局に當つた。初め三井銀行から種々の事業に金を貸したが、それが拂はれないので、抵當流れて三井の手に歸したものがいくつもあつた。其重なるものは製絲所で、富岡、大崎、三重、名古屋の四ヶ所あり、此外芝浦製作所、新町紡績所などもあつて、此等を個々に經營することが困難であることを感じて、統制經營を爲さんとして、こゝに工業部を設けた。朝吹氏は先づ其の統制經營の任に當つたのであるが、これも面倒は一と通りでなかつた。もとゝ三井自家が始めた事業でなく、皆それゝの成立であるから、經營は無論區々である。そしてどれもこれも利益がないので、三井へ流れこんだのであるから、工業部に統制したからと云うて直ちに利益が擧がる筈もない。各部に頻繁に衝突が起つて、調停上手の朝吹氏も往々手古摺つた。當時三井の内外で此の工業部を不平の交換所と云うたのも無理もなかつた。その不平交換所の裁判役、調停役が朝吹氏であり、且つ鐘紡の専務も兼ねてゐたから、氏の繁忙と努力も一通りでなかつたと想像する。此頃はまだ工業の搖籃時代で、一旦三井を煩はした厄介な工業が、他日多く立派な事業になつたのにはいろゝの歴史もあるが、兎も角三井家を破綻に導かんとする諸事業を守り立て、三井家をして隆々たる財閥たるに至らしめた、初期の功は何としても朝吹氏に歸するが當然と思ふ。

朝吹氏が三井に仕へたのは十八年間の長きに迫んだ。此間氏は重職に在り、樞機に参したとは云へ、鶏口とならず牛後で終始した。氏は中上川氏の如く鶏口となつて功を爲すよりも、牛後となつて事を纏める人であつた。氏の十八年間の苦辛は餘り外部に現はれないが、あの人が縁の下で隠れた働きを終始しなかつたら、或は幾多衝突が起り、三井の安泰を破つたかも知れない。三井の背後には落雷公の綽名のあつた井上侯のあつたことを思はねばならぬ。中上川は侯の推薦で三井に入つたのだが、その中上川すら、侯と後には衝突して圓滿を闕き、これを調和するにも朝吹氏は一と通りならず勞したものである。

生涯縁の下の力持で終つた氏は何等不平も無かつたのは、あの人の希有の人格の現れと言つてよいのだ。あの人は才もあり膽もある人だが、混濁の世の中には珍らしい純な所があつたと思ふ。あの人が長上を重んじ友人に厚かつたなどは、皆あの人の純なる性格の閃きであらう。あの人の若い時に意外のことがある。それに就ては氏の友人すら疑ひを存する位であるが、本人自からの談であるから疑ふの餘地がない。それは曾て福澤先生を暗殺せんと企て、遂げなかつたと云ふ意外の事實である。氏が福澤先生の玄關番をした時代のことである。先生がしきりに

に西洋文明を鼓吹して、石鹼で身體を洗つたり、牛肉を喰つて舌鼓を打つたりするのを側らから視て、夷狄の蠻習に倣ふものとして心窃かに之れを厭ひ、かゝる人は皇國に害をなすものであると、暗に先生を失はんことを企て、居る内、或る時先生に隨從して大阪に往つた時、先生は一日緒方氏を訪問して、夜遅く籃輿に乗つて旅宿へ歸られた。氏は輿側に歩しながら、此人を失ふのは今此場合であると、意を決して短刀を抜き放ち、將に手を下さんとする時、ドンと一聲、太鼓の音がしたので機を失して遂げずに仕舞つた。其の聲は劇のハネの太鼓であつた。後年氏は此事を先生に白狀して益々信愛を得るに至つたのだが、あの通人にして何でこんなことがあつたのか。あれがシャボンや牛肉を嫌つたなどは不思議だ、と氏を知るものすら不審がつたと云ふが、あんな酒脱の通人も、田舎から漢學育ちで、ボツと都へ出て來たときは、ウブ其儘で、時勢も分らず、世界の事も分らず、西洋を夷狄と心得たのは恐らく當時の田舎漢學の薰陶に依るのであらう。敢て守舊思想などいふ程のもので無かつたらうが、若氣の認識不足から、無分別にも師を失はんと企てたのは如何にもおいそれたことだが、純な人には往々斯やうなことがあるもので、此の意外な逸事は偶々氏の性質の純を語るものである、と吾等は判斷す

る。氏の純なる性格はいつも大事の場合に現はれた。氏の貴さは全くそこにあるのだ。

人世の變化は誠に測る可からざるものがある。師を刺さんとしたものが、師に信愛されて、其姪を妻に貰つたり、殺氣の人が實業界にも政治界にも愛嬌第一の人となつたり、無骨醜面の人が花柳界に横行して、解人とされて藝妓に喜ばれたり、喧嘩の場合には其相手とならず、飛び込んでいつも調停役をつとめたり、朝吹氏の生涯は波瀾重疊であつたが、氏にはどこを探しても殺氣と云ふものがなく、いつも藹々として、共に談ずれば春風の間居るの思ひがあつたのは、氏が悟脱の人であつたからであらう。そして師を刺さんとして遂げなかつたことが、恐らく悟脱に導いた最初の動機であつたらう？

福澤先生が其姪なる中上川の妹を朝吹に嫁せんとした時、先生が姪に其事を云ふと、姪は御免蒙りたいと云うた。先生は其時云ふには、あの男は相貌はよくないが、内を明けぬことだけは俺れが保證するとあつて、爰に結婚が目出度成立したが、さて先生の證言が全然裏切られて、朝吹氏が繁忙時代は何週間も家に寄りつかないことがあつた。ある時久し振りに家に歸ると、留守中に傭はれた女中が玄關で氏を見て、主人とも知らず、忌なつらの男が上り込んだと云う

て、奥方に急報したと云ふ、一笑話がある位だ。氏の傳を編纂せんとする時、肝煎役の犬養が未亡人に其事を告げると、未亡人は「よして下さい、内の人は悪所通ひの外に何の事蹟もない。その隠れた事蹟を書かれるのは迷惑だ」と云うたと聞くが、如何にも未亡人が云はれたごとくで、朝吹君の傳記の、他人の傳と異つてゐて、どの頁にも趣味のあるのは、未亡人の欲しない方面の事が遠慮なく書かれてあるからの事だ。あの希有の才人をありのままに寫すでなければ、朝吹傳とは云はれない。未亡人の逆鱗に觸れたかどうか知らないが、其の編纂中に令嗣常吉氏に會した時、父の傳記は道樂を略しては物にならない、貴著の「隨筆頼山陽」に倣ふ積りだと云はれたが、果して實業家の傳には稀れなる、人間味の漲つた面白い傳記が出版された。

自分と朝吹氏の交りは、自分が早稲田の圖書館長として毎日圖書蒐集に下谷池之端の琳琅閣を訪れた頃から始まつて、氏は夫婦連で時々散歩の序に立寄らるゝに出會つて懇意になつた。氏には書物の趣味があつたとは思へないが、此書物屋の座敷には佛像其他古器物があつたので、骨董好きの氏は、その爲めにこゝに足を運ばれたと思はれる。いつも夫婦連であるので、自分は朝吹氏も多忙の事だ、内に歸れば、妻君にもなかく勤めがあるなと心筈かに思つた。事實、

氏は久しく家を明けて歸る時には、必ず帯や反物などで妻君を喜ばすものを携帯することを忘れなかつたと云はれ、妻君をそらさなかつたことは事實である。自分が琳琅閣に會する頃は、まだ深く氏と語る機会を得なかつたが、氏の晩年、毎日のやうに四谷の骨董店平山堂を訪はれた頃、自分も書畫や骨董漁りで頻繁に出かけたが、偶々一緒になると、種々の談が湧いて、夢中になつて、半日も話し暮すこともあつた。如何にも話し上手の人で、毎々惹きつけられた。氏に出遇ふと、物漁りは全然廢して、只だ對話にのみ耽り、何も買はずに歸ることが多かつた。

氏は嘗て骨董書畫漁りの經歷を陳べられた中に、俺れは資力が乏しいから、珍重するものでも餘り執着がない。實は執着には實力が伴はねばならんが、俺れは集めて且つ散ずる流儀だ。考へて見れば、一物に執着するよりも、走馬燈のごとく、いろいろのものを取り換へ〜持つ方が興があると云はれた。これもあの人の無礙の性格の現はれで、あの人は、他人が欲しがれば自分の愛玩でも無雜作に割愛する人であつた。あの人が、例の貿易商會時代に、大隈侯を横濱の富貴樓に迎へた時、氏が誇りとしてゐた頼山陽の假名書の古今集の序一卷を棚飾りに置いた。それが大隈侯の目に留つたので、氏は最愛のものであつたが、これを侯に獻じ、侯も長く

座敷に置かれ、吾々もしば〜拜見したが、流石の氏も此卷には執着があつたと見えて、ある時の話次、此話が出て、あの卷はどうなつたと云はれたのには自分も實は答に窮した。その譯は、此卷がいつぞやの蟲干の折に失せたと云ふ事を聞かされてゐたからである。此事實を以て答へることはつらかつたが、併し虚言を吐く譯にも行かないから其通りを言ふと、氏は果してひどく落膽の様子であつた。其後段々此書卷の事を調べると、事實は大隈侯が金融のため或る家に譲られたことが知れた。若し此事實が少し早く分つてゐたならば朝吹氏を落膽せしめなかつたであらうに、其事を知つたころは氏が此世を去つた後で、深く遺憾とした。

氏は山陽崇拜で、氏の郷里にある正行寺に、山陽が耶馬溪を見た日、寺主雲華の囑に應じて書いた二幅の書畫を得た時の悦びは非常のものであつた。終に耶馬溪の横卷も摸寫して、それに添へねば完璧でないと、田邊碧堂を煩して其の摸本を作るに至つた。自分は其頃「隨筆頼山陽」の拙著を出版せんとしてゐたから、山陽の話が出ると、自分も自然相手になり、談はいつも盡くる所を知らなかつた。

實業畑の人はどうも十露盤離れをしないので自分は好かないが、朝吹氏は十露盤の人であり

ながら全くそれを離れた快人であつた。

岩崎彌太郎氏

今の世、富豪に指を屈すれば、必ず岩崎、三井、住友を擧ぐ。併し三井や住友は累代の富豪にして、一朝にして富をなしたのでない。唯だ岩崎一家は一代にして朱頓の富をなし、今も財閥の雄として、益々隆盛に赴きつゝあり。如斯は財界の異數と云ふべきであらう。

世の岩崎彌太郎を論ずるもの、一概に維新の風雲に乗じた幸運兒となせども、是れ一を知つて他を知らざるもの、恐らく公論にあらざるべし。岩崎氏は國家多事多難の時に起ちたる一個の豪傑で、政治家であつたら確かに臺閣に立ち得べき人であつた。彼れの力量は風雲を叱咤して幸運を掴み得たれども、全體幸運は必ずしも玉成するものでなく、往々悲運に終るものが少なくない。唯だ幸運に駕する人に才略、膽氣があつて、初めて幸運を玉成し得るのであるが、氏は正しく其の素質を具へた人であつた。

氏は土佐の名門に生れ、小少にして麒麟兒と稱せられた。氏は幼年より學才があり、殊に詩を善くした。十四歳の時、藩主養徳公の命で御前に詩を賦し、賞金を賜つたことがある。これより氏の名聲は一郷に揚り、皆奇童と稱した。安政五年、江戸に出で、昌平學校に學んだが、其時の學頭は安積良齋であつた。良齋は特に氏の學才と人物を愛し、氏が故あつて歸郷した時には、中途の廢學を痛く惜み、歸郷後特に書簡を寄せて、再來を勧誘したことが、良齋の傳に見えてゐる。其の歸郷を餘儀なくされた事由は、氏の父彌次郎が村吏と事を争うて、誣告の禍に罹つたのである。氏は直ちに歸國の途に上つたが、匆卒の場合で旅費もなく、晝は食を人に乞ひ、夜は山野に臥し、全く乞兒同様であつたと云ふ。其頃の書生の境遇にかゝることは敢て珍らしくないが、他日豪奢を極めた氏の逸事としては珍とせねばならぬ。氏は歸郷匆々郡奉行に就て、父の冤を訴へたが、奉行は村吏の私を納れて氏の訴を聴かなかつた。氏は憤懣に堪へず、奉行所の門柱に「官以ニ賄賂ニ成、獄因ニ愛憎ニ決」と、墨痕鮮かに大書した。廳吏は怒つて此書を削り去つたが、氏は更に廳の外壁に同じ語を大書して屈する所が無つた。到頭氏の所爲であることが判明したので、糾弾されたが、氏は從容として掩ふこともなく自白したので、城

下の周圍四ヶ村内の居住を禁ぜられた。氏の不撓不屈のおもかげが、此の事件に於て早く閃くのを覚える。

氏は此事件の後一小村に屏居して、専心讀書に親んだが、氏の名聲は漸く高く、後藤象次郎、坂本龍馬と交はるに至つた。就中土佐第一と稱せられた碩學吉田東洋に識られて、其門に入つたのも此頃であつた。蟄龍久しく淵中のもならず、安政五年藩命を奉じて長崎へ赴き、外人の動靜を視察した。慶應二年には仕宣して、職を藩の開成館に奉じ、専ら勸業の事を司り、通商視察の爲め再び長崎に赴き、遂に國外に踏み出し、朝鮮の鬱陵島を發見して、標木を建てた。云く「大日本岩崎彌太郎土藩の命を奉じて本島を發見す」と。實は此頃朝鮮に渡航したものは氏が始めてであつて、氏は一たび足を擧げると、早く此の結果を得たのである。歸藩の後、氏は少參事に任じ、大阪留守居を命ぜられ、専ら會計事務を掌つた。當時藩有の船舶は收支償はず、藩は其の處置に窮し、之れを氏に一任することになつた。これが後に説く、明治政府が所有船舶の處置に窮して、氏に一任したと同じ筆法であるのも一奇である。氏は藩の船舶を受け、九十九商會と云ふを起し、運漕業を開始した。氏の意は、藩船で通商を圖り、收支の算を立て、

一朝事あるの日は藩に奉還して、軍用に供せんとするにあつた。當時各藩財政困難を告げ、土藩も其例に漏れなかつたが、氏は巧みに財務を料理し、通商の擴張を圖りつゝ、或は貨財を他藩に貸しつけ、或は藩札を整理する等、治蹟の見るべきものが多く、明治四年、廢藩置縣の時、自から職を辭し、九十九商會をも解散し、藩船を還附したが、氏の經營は數萬圓の剩餘を生じたので、之れを藩に獻じて、士族授産の資に充てしめた。氏の經營の才は早く此時に於て現はれた。

氏は職を辭して後、自から回漕業を營むことを思ひ立つた。既に藩船を取扱つて海運に經驗があつた氏に、斯様な目論見のあるのも自然の経路であつた。氏は本據を大阪に卜し、藩船數艘を購うて、爰に私設の三菱商會を起した。他日、百尺竿頭、數歩を進め、明治政府の特典を得、郵便汽船三菱會社と稱し、航權を專領するの端は、爰に胚胎したのである。

明治の初年、新政府が舊幕府より引繼いだ船舶は少からずあつたが、當時庶政更始財政困難の際で、新政府は如何に船舶を統制利用すべきかに就ては頗る困み、窮餘、大隈侯の工夫に一任することになつた。そして大隈侯が簡選し、其の衝に當らせた人物は即ち岩崎彌太郎氏であつ

た。氏は海運業に閱歴もあり、現に三菱商會の經營もやつてゐたので、此人ならばと思ひつくのは不思議はなかつたのである。大隈侯は、晩年淺野總一郎の邸に招かれた時、此時の事に就て語られた。自分も其の際侯に扈從して、親しく其談を聞き、今も尙ほ記憶が新たである。侯は曰く、政府の船舶を擧げて其の管理に委するは岩崎より外にないと思つたが、聊か躊躇したのは、其頃の岩崎の豪奢振りは驚くべきものであつた。彼れは毎晩芳原へ出かける。其出かける時は全く大名行列で、籃輿に附隨する供勢は十數を算し、如何にも豪勢であつた。贅澤をするのは本人の勝手ではあるが、大任を引受けて、毎夜芳原通を事としてゐては、果して大任を完うし得るかどうか、これが懸念であつたので、或る時、岩崎に對し、政府は君に船舶の管理を託せんとするが、君の如く花柳の豪遊を事とするものが、果して其任務を全うし得るであらうかと。岩崎は笑つて、それは御心配に及ばぬ。やらねばならぬ事があれば、徹夜でも吃度やると。如何にも豪快の態度であつたので、終にやらせることになつたが、果して約を食まずに立派にやつた、とは侯の述懐であつた。

岩崎氏が明治政府より船舶の管理を委されたのは、丁度前に土佐藩から船舶の管理を託され

たと、偶然ながら略々同じ事情であつた。併し藩船の場合と異つて、規模も遙かに大であり、責任も重かつたが、間もなく船舶を大いに要する幾多の事件が續出した。それは何かと云ふと、佐賀の亂、熊本の亂、荻の亂、征臺事件等で、當時はまだ鐵道の無かつた頃だから、軍隊の輸送、物資の運搬は一に海運に據るの外なく、回漕の繁劇は目を回はす程であつたが、岩崎氏の快腕を試めすには得難い機會であつた。氏は大阪にある本店を東京に移し大いに業務を擴張し、征臺の役には船舶が足らず、政府は幾艘の汽船を購うて岩崎氏に附託した。當時頻々として起つた非常事件が鎮定に歸したのは、其功の幾許は回漕に在つたと云ふも誣言であるまい。

日本近世の海運は如斯して端を發した。諸亂平定に歸してからは、沿海諸港の航路をひらき、又上海航路をも開くに至つた。斯くして三菱の業務は次第に擴張されたが、茲に三菱を困めたものは、内外の汽船會社が對抗して盛んに競争を起したことである。内地に於ては帝國郵便汽船會社が競争を始め、上海に航路を開くに方つては、太平洋汽船會社が猛烈の競争をなしたので、其の結果、運賃を際限なく低下することを餘儀なくされ、到底收支償はず、三菱は殆んど倒れんとするに至つたが、政府も黙過する能はず、三菱に後援して、遂に太平洋汽船會社の船

船を近海より驅逐し、爰に外船の競争を絶ち、後には競争の外船を購ひ入るゝに至つた。尙又政府は、帝國郵便汽船會社の船舶を收めて、之れを三菱に附與し、託するに郵便運漕の事を以てした。是に始めて三菱は其の社名を改めて郵便汽船三菱會社と稱した。然るに明治九年に外船と又競争せざるを得ざることが起つた。それは英國のピー・オー會社が新たに横濱上海間に航路を開いたのだが、岩崎の手腕は之れと對抗して優に勝を制し、爾來此外船又來らず、吾が航海權は全く岩崎の一手に歸した。此時に當り勃發したのが西郷の亂で、内亂としては規模甚だ大きく、前の佐賀、熊本の諸亂とは大いに趣を異にし、鎮定に半歳以上を費した。三菱が此の戰爭に際し回漕に執掌して萬違算が無かつたことは、亂平ぐの後、朝廷特に勳四等を岩崎に授けたことに見ても推し得ること、其頃の岩崎の名聲は天下に轟き、隆々たる勢であつた。

日本の海運は幾多の曲折があつたとは云へ、岩崎に據つて開けたと云はねばならぬ。勿論、政府から保護助成を受けたに相違ないが、それは海運の創始時代には何れの國に於ても當然政府がなすべき事であつて、日本に限つたことでない。維新後頻々として内亂相踵ぎ亦外船が航路を争ふ時に當つて、政府の保護なくして、如何して之れと抗争することが出來よう。岩崎は

僅々十數年で朱頤の富をなしたので、之れを一概に政府の保護に歸し、岩崎を幸運兒と爲せども、其の富は彼れが勤勞の結果に外ならないのである。あの紛亂の渦中に在つて、よく海運を料理し得たのは岩崎の膽氣偉略の然らしめたもので、傑物彼れが如きを得たのは維新國難の際の幸ひと謂はねばならぬ。併し成功の裏には必ず嫉妬がある。岩崎の名聲が隆々として揚ると、其權勢を忌むものが政府にも生じて來て、十四年の政變には岩崎は大隈の卷添へを喰つて、政府の壓迫を受け、岩崎の會社に對抗する共同運輸會社に政府が聲援を藉すやうな事が起つた。岩崎の炯眼、早く見切りをつけて海運界を退いたが、彼れの築いた富は抜く可くもなく、岩崎は明治十八年僅かに五十二歳で世を去つたが、岩崎兄弟の相續者は共に男爵を授けられ、今現に財界に雄視してゐる。

私は三菱の隆盛期に半歳ばかり身を寄せたことがあるので、臚ろげながら當時の會社の様子を知つてゐる。其頃會社は日本橋區の茅場町にあつた。土藏造りで、さまで大きなものでなく、何れかと云ふと質素の建築であつた。各地に支店もあつたが、本社在勤のものは百人は無かつたと思はれるほど少數であつた。社長は岩崎彌太郎、副社長は彌之助で、社内では社長を大旦

那、副社長を若旦那と呼んでゐた。副社長は必ず日勤してゐたが、社長は時々來社した。内閣員とも云ふべき人々は石川七財、川田小一郎、小野義真、莊田平五郎などで、此等の人々の内で日勤したのは莊田のみであつた。社内には、事務を二三部に分ち、各部に部長を置いた。自分分は運賃課長であつたが、部長は淺田正文であつた。社員の等級は政府の官等に據つたらしく、三等に別れ、俸給額も、大略政府の勅奏判のそれに似てゐた。其頃の三菱には潑刺たる革新氣分が漲り、人才を採用するに汲々とした。才幹ありと認むればズン／＼昇任させたから、人才も自然多く集まつた。社員は皆勤勉で、出社の時刻は極まつてゐたやうのもの、皆々早出を競うた。社長室に出勤の順序で銘々の札をかけたが、いくら早く出社しても二人三人は必ず前に札をかけてあつた。時刻は七時前であるのに、競争の結果、此の如くであつた。出社すると、退出まで新聞一枚読む暇もなく、皆々夢中になつて事務を見た。其頃社の方略として、社員を氣を絶對に他に散らさないやうにと勤め、毎晩必ず宴會があつた。社長、副社長、部長などから呼ばれることもあり、社員が月給割に會費を出して小宴を催すこともあつたが、必ず宴會は社員同士に限られて、他の宴會に臨むやうな暇が無かつた。全く三菱が一天地で、他へ氣を散

らすことは絶對にあり得無かつた。随つて事務は大いに擧つた。割合に社員の少數であつたのは、銘々が能率を擧げたからであらう。給仕や小遣などもゐたが、或る階級以上の社員の外は之れを使役することが出來ず、社員は、退出の時、必ずみづから重い帳簿を社長室の隣の金庫に運び入れたものだ。私は今考へて見ても、三菱の事務の執り方は今日の會社に例を見ない程進んでゐたと思ふ。岩崎社長は派手な人であつた爲めに、社風も亦派手であつたが、自分の手がけた一事を語ると、或る時、紀州の某地に地境の係争事件が起つて、測量を必要とした。自分分は部長の命で内務省の地理局に堀田連太郎を訪うて測量を依頼した。堀田は直ちに承諾をしたが、報酬はと問ふと、月額五百圓と云うたのは、當時の相場として過大と思つたが、歸つて其事を復命すると、三菱の體面でまけるとも云はれまいとあつて、直ちに堀田を頼んだが、堀田は三菱の襟度の大きさに感じて、測量の事が畢ると、終に官を罷めて社中の人となつた。此頃三菱の聲望は隆々たるもので、社員はどこに行つても皆肩身が廣かつた。

吉川泰次郎氏

自分も青年時代に三菱會社の或る課長をつとめたことがあるので、其社中の人で記憶に存してゐるのが二三ある。吉川泰次郎氏も其一人だ。氏は後に郵船會社の社長となつた人であるが、自分が三菱にゐた頃は、東京支店長であつた。

吉川氏は奈良の神官の家に生れた人だが、後に和歌山縣の人となつた。氏は慶應年間十五歳で江戸に出て、幕府の軍艦奉行木下の塾に入り、維新の亂には塾主に隨從して諸方に逃竄し、備さに辛酸を嘗めた。其頃福澤先生の義塾は新錢座に在つたが、氏は入塾を欲したけれども、束脩も出し兼ねる窮境に在つたので、正式に入塾が出来ず、特別に入塾した爲め、其頃の名簿には名が無いと云はれてゐる。氏は、明治二年、松山棟庵に從つて和歌山に入つて、共立學舎に英學を教授し、翌三年再び慶應義塾に入る。今度は正式の入學であつた。明治五年、弘前の東奥義塾(英學校)の聘に應じ、爾後文部省の命で、一二の學校長となり、三菱に入つたのは明

治十一年である。

氏の生涯の前半は右のごとく教育家であつたが、その後半は實業家である。氏は三菱入社後、横濱、神戸、東京の樞要地の支店長を勤め、明治十八年九月、三菱が廢社となつてからは、日本郵船會社に入り、或は理事となり、副社長となり、終に社長となつた。その社長になつた年が恰かも日清戰爭の起つた明治二十七年の三月で、氏は多年三菱で鍛へ上げた海事經驗で、盛んに獻替する所あり、戰勝の後其功を勒せられ、賞勳を受けたことは言ふまでもない。西南戰爭は岩崎の奉公で戦局が収まつたが、日清戰爭も岩崎系統の人の奉公で目出度收局を得たのは、奇縁であるとも云ひ得よう。吉川氏は晩年佐久間貞一氏と提携して吉佐移民會社を起し、濠洲に移民の計を立てた。これに就ても氏の功績は少くなかつた。

自分はおなじ會社に居ながら、三菱時代は遂に吉川氏と交はる機會がなかつたが、氏の郵船社長時代に、自分は「讀賣新聞」の主筆であつた。社長の本野盛亨氏が吉川氏と懇意であつたので、ある時、吉川氏と交つて置けと云はるので、移民の事を聞かん爲め、本野の紹介で遇つたのが初對面であつた。その時は三伏炎暑の頃で、氏の宅は向島に在つた。刺を通ずると、

直ちに座敷へ通された。自分は來意を告げると共に嘗ては三菱にゐたことなどを語ると、氏は熟交の人と相對する如き打解けた態度で、私の齎らした二三の質問に對し、懇切に説かれたので直ちに理解した。その會談中に榎本武揚氏が突然座に見えたが、氏は同じ向島に居られて、折々訪はるゝのが常らしく、吉川氏は軽く挨拶されて意にも留めないやうな態度で、自分に對してのみ懇勤に談話を續けられた。自分は、吉川氏の磊落で少しも城府を設けないのと、其の體格が偉大で肥滿してゐるさまなどを見て、何となく岩崎三菱社長に接してゐるとき感があつた。

自分は用が済んだので辭し去らんとすると、氏は引止め、けふ幸ひに來客もなく、(榎本氏は前刻既に立去つた) ひまもあるから、これから一杯飲まうと云はるゝので、強ひて辭退もせず、初對面の新聞記者に對して希有の取扱ひだと心竈かに面白く思つてゐると、けふは室内では熱いから庭に出ようと云はれ、ベルを鳴らして二三の侍女を呼び、何か事を言ひつけられ、誘はるゝまゝに庭に出た。此の庭は約千坪程もあらうと思はるゝ廣いもので、滿目芝草が綺麗に青疊を敷いたやうになつてゐる外、目を遮るものがなく、唯だ一方に鐵網を張つた池に水禽が飼

つてある外には何物もなく、如何にもサツパリして、四邊の堀際にのみ樹木があつて、それが風致を添へてゐた。主人は肥滿の體格で暑氣を厭ふ所から、酒はいつも庭に出て飲む習はしと見えて、庭の中央に涼み臺數個を組合せ、それに毛氈が敷かれて、酒席がしつらひてあつた。誘はるゝまゝ其席に就くと、涼み臺の四方に陶製の支那榻が置かれ、それが侍女の席であることが知れた。やがて立派な膳部が出ると、侍女の内には酌を擔任するものがあり、團扇で涼を送るものがあり、物の持運びを擔當するものがあり、なかゝゞ贅を極めた饗應振には坐ろに岩崎の豪奢時代を想ひ出さしめた。

主人は頗る豪酒と見えて、見るゝ銚子は幾本となく明き、侍女は頗る酌に忙殺された。自分にもしきりに勧めらるゝので、其頃は可なり飲めたから敢て辭しもしなかつたが、到底酒では太刀打は出來ないと思つた。よい加減に辭さんとしても主人は許さないで、酒は熟し談は益々沸くので、自分は立場を失つて内心困つてゐると、ポツ／＼雨が降り出して來た。これは逃げるによい機會と思つたが、主人は天を仰いで、此の雨は直ぐに已むと云うて、侍女に傘をと命じて、主客の背後から傘を翳さして、主人は平氣で飲んでゐるので、自分は此の光景を見

てをかしく思ひ、亦心窃かに傘下の酒も一快だなどと思つてゐると、陰風遽かに起つて、覆盆の大雨が來た。これには流石の主人も辟易して、匆皇座敷へ走りこんだ。そこで漸く逸走の機會が生じたと思つてゐると、主人は驟雨に興を感じ、此の一雨で漸く暑氣を一掃したから、これから杯を洗つて飲み直さうとあつて、今度はいろ／＼の鹽辛類を座に竝べられ、更に酒を勧めらるゝには自分も少しく辟易し、夜分八時頃、宅の遠方であることを言ひ立てゝやつと辭去したが、後日考へて見ると、吉川氏のやうな快人は餘り無い。酒を長時間飲んで倦まないものはいくらかもあるが、あんなに初見の者を相手に愉快に飲む人は滅多にないと感じた。殊に自分はいろ／＼の境地に酒を飲んだ經驗はあるが、雨中傘をかざして酒を飲んだ例は此外にはないので、今も尙ほ記憶を去らない。全體土佐には豪酒の人が多い。随つて岩崎一門の人に酒客は少くなかつたが、吉川氏は土佐出身でもないのに、豪酒は土佐人に譲るもので無かつた。吉川氏は何の病で薨れたか知らないが、明治廿八年、僅かに四十五歳で歿したのは豪酒の爲めでは無かつたか。惜しむべきである。

久保扶桑氏

久保扶桑氏は古い英學者で、明治八年に早く「世界奇談」三冊の譯書が出版されてゐる。明治五六年の頃、北海道に赴かんとして東京を發したが、途中疾に罹つて旅費を遣ひ盡し、やつと新潟へ辿り就いたのは、當時新潟師範學校の教員に氏の友人があつたので、それに頼つて旅費の才覺を爲さん爲めであつたが、其友人の言ふには、君は病後強ひて北海道へ渡るにも及ぶまい、且らく越後に足を留めてはどうか、若し越後に居る氣があれば、君を新潟學校の教員に世話をすると言うたので、久保氏も其勸告を納れて、新潟學校の新發田分校の教頭となつた。當時の新潟縣令は永山盛輝で、愈々辭令を渡すことになり、縣廳へ出頭を命じた。さて出頭して見ると、令公はさながら芝居で見る上使の如き態度で、懷中に辭令の奉書を挿み、威猛高に接見したので、野人禮に嫻はぬ久保は大いに面喰つた。さて辭令の交付を受けては拜禮をして引下るのが定例であるのに、久保は拜禮もせず、行きなり辭令を開いて見て、直ちに異議を申

立てた。實は官吏になる氣のない久保に對し、其辭令の文言が官吏の取扱ひであつたからだ。其頃の志士氣質の發露はこのやうなものであつたが、縣廳では手古摺つて、令公の側らに侍坐してゐた縣官が、なだめてやつと其座を收めたとは、久保自身の談話であるが、氏は斯くして新發田の分校を預り、上級の學生に英語を教へた。其頃新發田附近の富豪の子弟は大抵此の分校に入學したから、久保の教へを受けたものが少からずある筈だ。中にも白勢成熙と云ふ一家は當時隆盛を極めた家柄で、地方に稀れな贅澤をやつたものだが、久保は日夕其家に往來して、馳走になる傍ら、其家の書畫を見たり茶器を玩んだりした。此白勢家の主人は書畫骨董に鑑識もあつたので、名品重器が少からず蒐集されてあつたから、久保の趣味田を耕すには十分であつた。のみならず、茶道の心得ある道具方が始終指南もしたので、一層開發したに相違ない。久保が晩年語る所に據るに、自分に幾許か書畫の鑑識があり、茶器、骨董の見分けがつくのは、全く白勢の家什拜見に端を發してゐる、と語つたことがあるが、氏の越後滞在は決して無益でなかつたのである。氏の一生には種々の境遇もあつたが、其の一生を貫くものは趣味生活であつたと云へ得るのである。若し、氏が越後に客とならず、直ちに北海道に渡つたならば、或は

趣味の人とならなかつたかも知れない。

氏は、越後から東京へ戻つて、實業界へ投ずる第一歩は、岩崎彌太郎に知られて、三菱會社へ入つたのが始りで、在社中は各所の支店長となり、三菱廢社の後、郵船會社に近藤廉平が其の社長となつた頃は、氏は閱歷上近藤と對抗して、寧ろ郵船社長たるべき格式であつたが、氏の淡泊の性格は争ふことなく近藤に譲つたらしい。其頃日本鐵道會社が起つて、曾我祐準が其社長に擧げられた。氏は久しく運漕の業務に干與して、運輸に十分經驗があるので、自分の亡友山田喜之助が、曾我社長に氏を推薦した。氏は人に接して頗る調子がよく、洒落にして人を惹きつける特能があつたので、曾我子は一見氏に惚れこんで、直ちに社中に引き入れ、運輸のことを一任した。氏の此社に於ける位置はいろ／＼に轉じたが、社の廢せらるゝまで終始した。氏は三菱仕込みで派手好きであつたが、日鐵は質朴本位であつたから、兎角ソリが合はず、氏の獻策は動もすれば斬新に失して、採納を得ないやうなことが多かつた。氏は、ある時案ずらく、外國に於ては會社員にして公然コミッションを受ける習慣がある。此會社に於ても宜しくそれに倣ふべし。唯だ私に取るは不可なれども、重役會の決議を経て公然取るのは決して不

可なりとせずと。こんな獻策が當時行はるゝ筈もなく、結局一蹴されたが、氏は豪放洒落で深く争ふこともなく、物に拘泥しなかつたので、社中には氣受けがよかつた。氏の在社中、種々の挿話があるが、或る時氏の豪放振りは社を驚かした。それは展望車を連結して、そこに酒食を設けて、氏自身旅行したことがある。これなどは社規の許さなかつたことであるが、久保の流儀には困ると一笑されて、深くも咎めなかつたと云はれてゐる。併し氏も或る時困つたことがある。氏を日鐵に紹介した山田喜之助が關西へ行くとして汽車に乗ると、途中汽車が火を發した。これは汽車によくある事故であるのに、山田は酒氣を帯びてゐたか、吾れを焼き殺すものだど怒り、久保を呼べど怒鳴り出したのには車掌もひどく困り、氏も後に大いに謝したと云ふ珍談がある。

氏の趣味性は晩年能狂言師と成り濟まし、藝名を山下迂作と呼んだのは、久しく日鐵に従事して上野山下にゐたからの名であらうが、相當能狂言の技に熟し、人の聘に應じ、公然行くやうなこともあつた。矢張此場合も本地は岩崎家で、同家では氏を愛し、しばしば狂言師格で出入するを喜び、衣裳などを贈つたのを、氏は喜んで大いに之れを振り廻はした處に、氏の稗氣も

あり愛嬌もあつた。

氏はいろ／＼の道樂があつた中に、建築も其の道樂の一つであつた。茶に趣味があれば茶室の建築もおのづから生ずる趣味ではあるが、氏は妙に建築が上手であつた。氏は二度まで伊豆の長岡で自分の別莊を思ふがまゝに作り、又往々友人の參謀をやつて作つたこともあるが、なかなか氣が利いて瀟洒の趣がある。氏は一廉の茶室建築家で、今でも其の門流が残つて、氏の遺法を傳へてゐる。併し遠慮なく評すると、氏は動もすると奇を好むの病があつて、折角の意匠を損ふこともあつたが、畢竟意匠の豊富が偶々禍ひをしたと云ふべきであらうか。

氏の建築道樂に就て面白い話がある。柳橋の龜清が座敷を建築する時に、氏を仰いで指南役とした。氏は好む仕事だから一儀に及ばず承知して、それから龜清に泊りこんで、しきりに世話を焼いた。龜清の女將は年若くして所天を失ひ、その頃は未亡人であつたが、いつしか氏と戀に落ちた。普請の指南役が同時に樓主でもあるかの觀を呈したので、氏は流石に口善惡なき批評を忌み、女將に向つて云ふには、お前の家は割烹店ではあるが、此の建築の事でこゝに泊つてゐる間は、自分の食事は自分で辨するから、お前の世話にならぬ、どうか三度の食事を

餘所から取つてくれと請求した。それが龜清では面倒であるばかりか、料理屋でありながら、外から料理を取るなどは自家の暖簾にも障り、人の思はくもどうあらうと、女將はしきりに、さうまでされずともと云うても、氏はどうしても聞き入れず、飽くまで峻拒した所に氏の面目がある。

坪内逍遙翁

今より五年前、坪内博士の古稀を壽する演劇博物館を起さんとして關西にまで踏み出して資金の募集をやつた際に、博士の郷里名古屋に立寄つた。其際友人より日本ラインの遊覽を勧められて心が動いたが、自分には他に一つの野心があつた。それは五十年前の暑中休暇に修學旅行を試み、東海、東山の諸道を踏破した際に、同窓の逍遙君が歸省中であつたのを訪問し、得月樓と云ふ料亭に案内され饗應を受けたことを思ひ出し、その家で一杯を傾け、當時の氣分を味つて見たいと考へたことが私の隠謀であつた。偶々小山松壽君の訪問を受けたので、得月樓

と云ふ家は今尙在りやと質したら、「あるどころか立派に營業をつとけてゐる」と語られた。そこで自分は是非そこに行きたい、日本ラインは寧ろ他日を期してもよいと云うたら、その遊覽を終つて夕景得月樓に行くのが兩得だと云ふに従ひ、先づ日本ラインの景勝を賞した。

白帝城の美觀、河中に起伏する怪巖など目を怡ばすものが少なくなかつたが、船中より一勝地を望み、其の地が太田の莊と分つたとき、自分は人知れず感懷を禁じ得ないものがあつた。此地は美濃に屬して居るが、もとは尾張領で、博士の先考は此庄の幾代かの代官の次官を連勤してゐた。で、博士の幼時は此地に生長した。で、太田は博士には縁故の深い處である。毎々博士から聞かされてゐる所だが、今夜得月樓に到らんとするに先ち、此地を遠見したのは意外の仕合せであつた。

私は日本ラインの觀賞を終ると、小山氏を促して名古屋に戻り、得月樓に入つた。曾て逍遙君に招かれた室も其儘に存在し、柱や天井などは蒼然古色を帯びてゐた。此家に沿うて堀がある筈と云ふと、主婦が案内し、山陽揮毫の得月樓の額のある大座敷の戸を明けて瞰下すると、眼下に川が流れ、恰かも月光が水に映じてゐたので、得月の樓名の由來を知つた。呼びにやつ

た、同行長谷川天溪、河竹繁俊の二氏も席に來り、深更まで博士の若かりし頃の事など語り合つて、如何にも追憶深い一夕であつた。酒次逍遙君の舊宅は笹嶋村にあつたことを思ひ出し、其邊は今どうなつて居ると問うたら、今は廣井町といふ邊がそこだと聞いて、桑滄の感に堪へなかつた。

此の追憶の夕べに私が語り出したのは、文藝協會時代、逍遙君がマグダの劇を演ぜんと名古屋に來た時のことであつた。實は逍遙君が藝術家として初めて郷里の父老に見えたのは此時であつたので、劇の成功と否とは君の榮辱に關すると思つたので、一行中に在つた自分は心寄かに氣遣ひに堪へなかつた。

兎角郷黨は動もすると其出身の人を輕蔑する惡習がある。劇中のマグダも郷黨には侮蔑された事になつてゐる。逍遙君も若し此劇が郷里で成功せねば、マグダの二の舞ひを繰り返すことになりはせぬか、と内心氣懸りてたまらなかつた。

劇の開演に先だち、市長坂本鈺之助氏は博士の爲めに歓迎の宴を張つたが、自分は種々の心配が胸に滿ち、宴席にあつても憂鬱であつた。然るに逍遙君の挨拶演説が例の如く謙遜を以て

終始し、遊學中のことに及んでは、しばしナマケものであつたことを繰り返されるので、郷黨に對する態度は較々行届き過ぎた感があり、此言葉通りに信ずるものがあつては、と自分は此場合に於ても餘計な氣を揉んで逍遙君の言ふことを打消し、早稻田の寶物であることなどを吹聴したが、さて劇は意外に盛況で、自分の心配は全く無用であつたので喜んだことなどを語り、特に此の小會の模様を逍遙君に書簡で報じたが、忘れがたい面白い夕べであつた。

自分は逍遙君と東京遊學以來五十數年、間斷なく交りを續けたので、君に就ては多く知つて居る筈だが、記憶がわるいので今は多く忘れてゐる。臙げながら同窓當時の事を追憶すると、君ほど同輩に好遇された人は尠いことを思ひ出す。

君は早くから多能の人であつた。當時は洋學生でも馬琴の小説を読まねば幅が利かなかつた時代であつたが、君は馬琴風の七五調の名文を自在に書いて常に同輩を驚かしたものだ。滑稽の才にも富み、時には三馬調で戲筆を弄した。又巧みに鳥羽繪を書き、詩でも歌でも苟くも筆に繋るものは皆相當に出來たので、同窓の何人も君の將來は必ず文壇に名を成すであらうと期

した。

自分も人一倍さう思うてゐたが、三十幾年の後、君の筆に成つた歌曲、寒山拾得、浦嶋、一休禪師等が盛んに歓迎された時、愚息が彈手の一人に加はるなど云ふことは、當時妻もない自分には夢にも想像しないことであつた。實を云へば愚息は君の手引で稀音家の門に入り、その手ほどきに君の名作を彈ずることを教はつたもので、長唄研精會で初めて君の名曲を彈じた時には、吾々夫婦も場の一隅にゐたが、自分は逍遙君と書生時代の交りなどを追懐し、以上のやうな感想に驅られて、幾んど席に堪へなかつた。

餘談はさておき、君は當時二十三歳の身柄で、既に一家をなす程の文藝家であつた。君のごとき多能の人は同輩に珍重がらるゝ筈で、君を闕いては、どんな場合でも面白い會は成り立たなかつた。遠足などの時は君は步々シヤレづくめで歩くので、皆々腹をかゝへた。君が人物畫を能するのに乗じて、同窓のある者は君にせがんで意中の美人を極彩色に書いて貰つたものもあつた。或は戀文の代筆を頼んだものもあつた。

君は頗る快活酒脱の人で、人に驕るやうな氣合ひは少しもなく、友人が需めれば何でも拒まなかつた。だから同窓は皆君を好遇した。君は嚴格な本を讀む時も淨瑠璃句調に讀んだり、洒落本を讀むには男女の言葉の遣ひわけをしたりして同輩を笑はせたが、君の講義や、朗讀や、演説に人を魅するの妙のあるのは、早く學窓時代に片鱗が閃いてゐた。君が動もすれば自からナマケものであつたと云ふのは、此の遊戯的氣分を云ふのであらうが、君は早くから化政度の遊戯文學を排し、文學の眞劍味を唱へてをり、大學の在學中も克己勤勉の人であつた。

君は卒業前早く人の子弟を預つて、之れを教育するの端を發し、卒業の後もこれを續けて、君の預つた子弟の内から山崎覺次郎、丘淺次郎君の如き大家が出た。君は身を持つること頗る謹嚴で、遊戯者流とは全く其選を異にした。君の同窓が大隈侯の麾下に參した縁故から君も亦早稻田の人となつたが、君によつて早稻田文學が生れた。これは文學史上滅す可からざる君の功績である。君は又早稻田中學の教頭や校長を多年つとめて倫理の課目を受け持つた。此間にも君はやはり種々文學的の著作にも従事したが、一時は全く道學先生の觀があつた。此等の行動は皆君の非凡の克己勉勵を語るもので、君がナマケものなど云ふのは勿論謙遜の言葉に過ぎなからう。

君が教育に關係した間は數十年の長きに涉つてゐる。餘暇には種々の著述もあつたとは云へ、あれだけの天才をして其の爲す所を縦まゝにせしめなかつたことは、如何に教育が大切であつても、不經濟であつたと云はねばならぬ。

君は何等の事に當つても決して苟くもしない流儀だから、努力は非常のもので餘程つらかつたに相違なく、實は傍らに見て同情に堪へないものがあつた。併しながら、君が文學の大家中、嶄然一頭地を抜き、他の追隨を許さない、高く廣き超脱の人格好尚を有するのは、君の努力した教育の餘徳であると云うても過ちが無からうと思ふ。

君が大學を卒業した頃は、和洋何れに往くとして可ならざるなき君の如き文才は決して多く無かつた。君は全く方々の引張り風であつた。關西の一大ジャーナリズムも君を迎へた。しかし君は應じなかつた。當時小説家となるには、甘んじて假名垣などの後塵を拜することが已むを得なかつたが、君は之れにも一瞥を與へず、飽くまで獨往獨行で遣り通した。若し當時一步を誤れば賣文の人となつてしまつたかも知れない、實に危ない瀬戸を無難に渡つたのは、君に遠大の志があつたからであらう。

君に遠大の志を抱かしためたのは勿論當時の大學教育が然らしめたのであるのだが、亦其頃の書生の意氣にも原因してゐるのだから、此場合少しく此點を考察して見よう。それに就ては逍遙君自身既に語つてゐる、君の處女作書生氣質にもその反映が見える。

當時の大學書生は稗氣を帶んだ連中にさへ、時代精神のせいで、どこかに冒す可からざる氣魄があり、邁往的の意氣があり、朗らかな氣分、酒脱の風があつた。又朋友に對して信義があり、一口に云へば、封建的の士風を存してゐた。例へば花柳の遊びをするにしても、後ろ暗いことをするのを恥ぢた。其一例として、こゝに逍遙君と自分の逸事を書くも烏滯がましいが、ある夜君と他の一友と下谷の平生懇意の料理屋で飲んだことがあつた。夜が更けてゐるのに心づかず、引留めるのを強ひて其家を飛び出して見ると午前二時を過ぎてゐた。一友は平氣で泊る處があるからと云うたが、それは芳原であらうと判断して、逍遙君と自分はそんな惡所へは行かぬと頑張り、一友だけをやつて、吾等は朝まで歩かんと、神田に出で、日本橋の通から銀座を歩し、新橋驛より同じ道を戻つて遂に九段まで來ても尙ほ夜が明けず、疲れ果て、九段境内の四阿で眠らんと、漸くたどりついて見ると、入口に交番があるので、こんな時刻に誰何され

大學生とも言ひ兼ね、已むなく石燈の駢立してゐる芝生に腰を卸すと、其儘前後も知らず睡つたのはよく／＼疲れてゐたと見える。眠が覺め來ると、既に朝の八時を過ぎてゐたのに驚いたなどは舊惡の懺悔だが、吾々の書生時代はこんな罪のないものであつた。

さて此の時代の書生氣質を、往年同窓會の折、紅葉山人が伊井蓉峰一座を僦ひ來り、演ぜしめたことがあるが、どうも時代違ひの伊井式の書生の風では、土臺、品位が下つて、墮落書生の風をどうしても脱しないので、會衆は皆愛想をつかして、半途で藝を中止させたことがあつた。此時は逍遙君も席にゐたが勿論舞臺を監督したのではなく、君は見るに堪へかねて始終後ろ向きで苦笑してゐた。實はあの頃の書生の氣質はあの頃の書生それ自身が演ずるので無ければ、其の意氣も品藻も現はし得ないもので、精神に於て伊井式の書生とは雲泥の差があつた。だからあのころの書生から卓拔有爲のものが多く出てゐる、逍遙君も亦其一人で且つ其雄なるものである。

藝術家は概ね苦悶の生活を送つてゐるもので、其の作品も多くは苦悶の結果であるが、人は

其の仕上げたものを見て、藝術家など氣樂で愉快なものはないやうに思ふけれども、それは勿論皮相の觀察である。併し相當能力ある人でも此の誤りに陥るものが多い。大隈老侯は曾て君の二時間にわたる快辯を傍聽して、其の演説が終ると、「君は演説中餘程愉快と見えるね、自ら面白くなければ、あゝは面白く説けまい」と云はれたことがある。逍遙君の快辯は擒縱自在で、講演には時には詼諧百出、往々聽者を煙に捲き、人を酔はしむるの妙がある。老侯の評も畢竟君の快辯に魅せられたことを證するもので、講演者自身は愉快でなくとも樂しげに演ずる所に藝術の妙があるのだ。

逍遙君も藝術家に有り勝の苦悶の人で、幾んど此の三十餘年間、眠藥を藉らずに睡眠を得ることの出来ない人である。如何に藝術が作家を困しめるかは想像に難くない。尤も好む道であればそれに苦むのも敢て厭ふべきでないかも知れないが、君は長い間自から好む道にのみ没頭し得る境遇で無かつたことは前に述べたごとくで、君の半生以上は身を挺して教育に没頭せざるを得なかつたのである。

君は此の繁劇の間に文學雜誌を自ら執筆し、その本領を一刻と雖も忘れず、或は時流に後れ

んことを顧念してか、海外の新刊圖書に親んだことは勿論、時々刻々出版さるゝ文藝の圖書は、其門人格若くはそれ以下のものと雖も必ず目を通し、演劇などは、大中は勿論小劇と雖も必ず観ることを怠らなかつたやうだ。多分時流に後れんことを恐れての勉強であつたらう。

君は藝術上の苦勞人であつたことは勿論だが、社會的にも大なる苦勞人であつた。君には不幸實子は無いが、長兄は早く歿したので君は其の遺子を引受けて養育した。又仲兄の二男を一時養嗣にしてゐた。それが士行君其人である。今はその仲兄も歿した。君は教育に従事しつゝ、理想の劇を作る準備として自宅に舞臺を造つて、子弟に舞踊其他舞臺藝術の薰陶を與へた。此等薰育の苦勞も實に一ト通りでなかつた。

君は如何にも情誼の厚い人で、朋友故舊に間斷なく援助を與へ、門人の窮するものはいつもの之れを濟ふことが常で、君の不如意時代から今に迫んで世話をかけたものが幾十人あるか知れない。君は涙もろく且つ氣廣るで、敵人であつても其の窮を濟ふのに吝さかた無かつた。いつぞや文部省で文學の勳功ある人に賞金を與ふることがあつた時、銓衡の結果君一人が受けることに決定した。君の潔癖は自分はそのなものを貰はぬと云ひ出したので、文部省も困り、上田

萬年博士が態々早稻田へ來て、文部省は面目上受けて貰はねば困ると云ふので、自分は逍遙君を口説く役目を仰せつかつた。逍遙君は澁々受けたが、条件づきであつた。その条件は何かと云ふと、貰つた以上はその金を誰れにやらうとそれは自分の勝手にして貰ひたいとあつて、長谷川二葉亭の遺族に、又生前殆んど交りの無かつた山田美妙の遺族に、又國木田獨歩の遺族に願與したことを今も思ひ起す。

尙ほ往年墨田川が氾濫した時、向嶋にゐた君の親友養庭篁村を濟はんとて、濁流に棹して自から急に赴いたこともあつた。見舞はれた篁村は壘を積み上げて悠然と酒に親んでゐたと云ふが、救ひに出かけた方が寧ろ危険であつた位だ。君は義に堅く、温情の深い人である。

逍遙君の趣味方面も一考を要する。世間の人は或る年輩に達すると書畫や骨董の鑑賞などに趣味をもち、衣食が足ると風流韵事に興味をもつのが常であるが、逍遙君はどうかと云ふと、頗る多般の趣味家であるが、流石に君の趣味は微物の上になく、もつと大なる所にある。君はある時代から、小説の筆を斷つて、一意演劇に邁進し、今に於ても變らないが、演劇はあらゆる

る藝術的趣味を綜合統一したものであるから、趣味の大小を云へばこれほど大きいものは無い。君は森羅萬象を舞臺に載ずることを趣味としてゐるのである。君は又世界にあつて日本に無いいろ／＼の演藝を創建した。沙翁全集四十卷を完譯したのも亦君の趣味の現はれである。君は建築などにも優れた趣味をもつてゐる。それは、熱海の邸内に設けられた塔式の文庫を見ても、亦早稻田大學内に君の記念にと建てられた演劇博物館の構造に見ても、其の一斑が窺はれる。言ふまでもなく、これ等は全然君独自の意匠に成つたものである。

作庭の趣味に於ても亦語るに足るものがある。風趣ある老柿樹を見立て、別荘を營む中心としたことや、坐ながらにして魚見岬のトンネルを遠望するために、前面を遮る第宅を買収したことや、風致のため他人所有の山を借地して華表を作つたことや、舊廬の庭が狹隘であるので、前面の農家の畑地にある柑橘の實を買占めて立樹のまゝ觀賞に供したりして、其の風流の意匠に感すべきものが少からずある。君は晩年和歌、俳句にも筆をつけ、書も一家の風格をなすに至つた。君は何につけても卓抜の意匠のある人だが、演劇が其本領であるだけに、君の非凡の意匠は多く此方面に集中されてゐる。

君の藝術に就ての論評は自分は一切避けて之れに觸れぬ。蓋し世自から其人があるからだ。但だ自分として黙し得ないものは、君が藝術に忠實であることの非凡の點にある。君は空論を唱ふるを以て満足せず、必ず實行してゐる。

君は藝術の爲めには何物をも犠牲として少しも惜む所がない。君が數年前熱海に大患に罹つた時は頗る危険状態にあつたが、時偶々君の頓作に成つた「熱海の榮」といふ長唄を鐵道開通の祝賀用に急に振付けをして實演するの日は逼つたので、君は前約を重んじて其枕頭へ土地の舞踊師を呼び寄せ、臥しながら指圖して練習をなさしめた。君の病篤しと評判の高かつた其時、君の病室から絃歌の聲が外に漏れて、人をして異様の感を起さしめたなどは、君の藝道に忠實である其の現はれの一端である。

君は此の病患に如何に困んだかは、回復後自分に寄せられた書簡に據つても分る。君が生れて初めて試みた俳句の風趣を紹介したく／＼に掲げることにする。左の消息が即ちそれである。

(前略)漸快につれて随分無聊を覺え候ひしが、歌をよんで見る氣にもなれず、氣まぐれにも

生れてはじめての俳句すさびをいたし候、勿論、季なしの破格調に候、其中をお笑ひ草に少々左に、

病來心機不思議に一轉して死を忌み怖るゝの念頓に空しく、寧ろ速かに世を辭せんことをこひねがへり

歸らうぞ花も見あいた日も暮れた

奥が見えて花見の踵返しけり

四十にして死なむこそたやすけれとも、見過しにけり

り末二年とも見えたるに、われはことし六十七歳

十七度見過して春を病む身かな

春風やいざ散る花ともろともに

願はくは朧月夜の落ち椿

導尿といふ治療にくるしめられて

生きながら身を逆剥ぎの蚯蚓かや

晝夜寸時も止息せざる幻像の往來代謝に惱まされて

まぼろしの海に漂ふや二週日

これやこの目に物見する苛責かな

死機を逸す

あたら春を死にぞこなうてしまひけり

つれづれを苦にせぬほどに病み馴れぬ

四月三日はじめて庭におりたつ

わが物とおもへぬ脚の重みかな

たれが腰に絶るぞとばかり三足かな

春寒や脛ほどに股の細りたる

助かりて見れば此後とても何かせねばなるまじ

さりとても存らへば生きてゐるからは

これ等は翁の俳句の處女作と見るべきものである。句の巧拙はともかくもとして、翁の天真

流露の風趣には棄て難いところがある。

これより先き君が「役行者」を著した時、舞臺面を如何に物せしむべきかと苦心の餘り、身躬ら熱海梅園の老樟に攀ぢ、枝上に坐して體驗したことすらある。亦君は藝術の標本を集むるには少からず資を投じた。演劇博物館は君の古稀の記念に建築して君に獻じたものであるのに、君はそれを私するを欲せず、自から幾萬の金を寄附したのみならず、死後は凡べての財産をこれに投ずることを公式に約束した。如斯は君の皎潔たる麗はしい資質の然らしむる所とは云へ、君が如何に藝術に忠實であるかを語るものである。

君は明治以來新文藝を開拓して、いつも唱首の位地に立ち、曾て人後に落ちたことが無い。君はいつまでも文壇の大家として仰がれてゐる。それも其筈、維新以後の文壇を一統したものは實に逍遙君其人であつて、何人と雖も之れを争ふことが出来ない。由來尾張は英雄の興る所、信長、秀吉皆尾張より起つて天下を一統した。其郷土から興つた逍遙博士が文壇を、統するに至つたのも敢て怪しむに足らぬ。

吾等は曾て君に就て其祖先を質したことがある。君は云く、古いことはわからんが、織田信

長の料理番に坪内姓のものがあつたことは常山紀談かに出てゐた。信長の命で三種の料理を調べて薦めた所、信長は其中の最も高尚なものを斥け、最も鄙俗なものを悦んだといふ話がある。或はその男などが先祖かも知れないといつて笑つた。徳川期には美濃の太田に坪内といふ小名があり、維新のころの當主は定益と稱し、君の長兄信益と呼び聲が似てゐるので、知らぬ人は右の小名の縁者かと思つたりしたと言はれた。自分は此話を聞いて戯れに、すると君の祖先は口腹の藝術家であつたのだが、君は精神的藝術家で、高卑は同日の論でないねと云うた。

私は此稿を結ぶに當り自分が多年逍遙君に負ふことの大きなるを一言させて貰ひたい。自分は博士と同窓で師弟の関係はない。早稻田の講堂で一回でも講義を聞いて居らないが、書生時代から交はりが間斷なく續いてゐて、相接する機會が頻繁である。君が熱海に居を移しての後も、毎年或る季節には君の家の客となつたり、さなくも自分の旅舎から毎日訪うて殆んど半日閑談に耽ることが恒例であり、會すれば文學談が始まり演劇談が湧く。自分の最も短なる所が君の長ずる所で、君に依つて自分の短を補うたことは決して少なくない。世界の文學の趨勢だの變遷

だの、自分が原書に就て見るに暇もなく、それを面倒がる自分に大體のアイデアを與へてくれたのも君である。自分と君とは友人關係であるから師弟の關係よりも一層便利がある。君は親友に對して何もかにも言うて少しも掩ふ所がない。考案中で纏まらないことまでも言うて聞かせ。あの話上手だから、どんなむづかしいことでもよく分る。君は相手の趣味や嗜好を知り抜いてゐるから、談論は概ね自分に投ずる。門人などに教へるのとは態度も説き方も異つて、その蘊底を赤裸にさらげ出し、祕密に屬する心事や意圖までも掩ふ所がないから、自分の得る所は甚だ多い。恐らく自分ほど懇切の談話を聞いたものは門人中にあるまい。この意味に於て自分は博士の内弟子である。自分が自から逍遙の第一の門人だと云うてゐるのは決して博士に對する諛辭ではない。今博士の一端を語り、爰に平素の所懐を録して筆を闋く。

(昭和八年十一月中央公論所載)

賴氏山陽の遺事

賴山陽の逸事は、少壯より隨聞隨録して拙著「隨筆賴山陽」の材料となつたのであるが、あの書を著してから、追々目に觸れたものも一二に止まらない。それは概ね拙著隨筆に收めたが、尙ほ其後二三寓目のものがあるから、爰に收めて、「隨筆賴山陽」の補遺とする。

山陽幼時の漢文尺牘を表装して一幅としたものを、此頃一覽した。柴野栗山が山陽の郷里藝州に遊び、賴家を訪うた時、春水、杏坪が栗山を迎へ、山陽も亦座に在つて、其の應酬を傍聽し、栗山歸郷の後其報を得て、山陽が寄せた書簡である。

襄謹答。四序更端。三陽用事。伏惟

先生福履萬吉。不勝恭喜。曩者

先生千里裹糧。來訪家父。因又見家叔。曰遂望河之想也。相得歡甚。襄亦旁聽言談。得廣異

聞。何幸如之。但不能淹留。匆々爲別。不勝悵々。去臘初旬忽得尊書。就審

先生平安歸家。欽慰々々。見示及歸路之情況。敬誦再四。隱渡三原爲襄舊面識。讀

尊文如聽山水傳語。玉浦以東。幼時所經而不記焉。閱讀之際。如入未踐之路。茶山管先生山陽之望也。燈下吟詩談古。雅淡可想。山間逕路。遇昇夫之空轎。如有待

先生行。一杖頭錢。以得無翼而飛之妙。其亦天幸也。舟行之快絕。與重陽阻雨之興情。皆羈旅之奇遇也。其他玉浦以東。所相周旋。人物之沈重者。慷慨者。坦率者。魁偉者。如列一堂。捧讀不能釋手。一日不讀則鄙吝之心復萌。嗚呼亦

斯人而有斯文也。夫自藝至阿。百里而遠。山水異地。人物異居。如之何可一日而盡哉。今讀尊文。乃可片時而撫也。欣抃之至。敢陳鄙忱。敬奉答謝。維時春寒料峭。伏惟

順時自重。歸途諸什巧妙。誦之讀之。恍乎侍坐

其傍。爲賜實多。家父家叔皆無恙。幸勿爲念。不宜奉復。

彥先生赤松君坐右

賴襄再拜稽首

正月三日

栗山は當時の大儒、山陽の先輩である。山陽の答簡の辭令が慇懃を極め、崇敬の情を盡して餘蘊ないのは固より其所だが、其の言ふ所未だ稗氣を脱せず、晩年の山陽に若し此書牘を示したら、恐らく慙汗して、それを奪ひ去り必ず寸斷したであらう。

余昨年歸省中越後新發田に於て一冊の版本俳句集を見た。山陽の序があり、書名の不作可集と云ふのも亦奇である。其序に云く、

余看花嵐山。醉三家店。店下歸人續紛。中見吾齋堂挈一客過。呼之願而終行。後來語之曰。不能認君也。袖出與其俳師世南聯句冊。請名而序之。晒而未諾。數日世南來。前日所挈客也。叩其鄉關。知其嘗仕宦。問何以辭任。曰以遊蕩斥耳。余以趨其對。留與飲。問近詠。不敢舉。曰是不作而可者。不得已爾。世自有得己不已。以爲畢生業者矣。嗚呼何其與吾論詩文相似也。余初認之。認其貌而已。今乃認其心矣。宜乎齋堂之師之也。蓋其所以誹。異於世之

所以爲誹歟。余烏得不序。遂名曰不作可集。而書其語於端返之。并示齋堂。齋堂云何。

戊子至後一日

山陽 外史

山陽が俳句集に序した文は恐らく此外にあるまい。作者が放蕩の餘、仕宦を罷めて俳人となり、俳句は已むを得ずして作るのだといふ自白が、山陽の氣に入り、余が詩文を作るのも亦これに類すと云ふ處に、山陽の才識と酒脱の面目が見えて面白い。

山陽が横卷に宇治川先陣の平曲を揮毫したものが、大倉男に依つて藏されてゐる。これは頗る珍物で、山陽の識語が例に據つて面白い、云く、劍菱(酒の銘)の氣が腹に満ちて、おのづから筆端に逆り出で、高綱、景季も亦我鋒を避くと。後日山陽亦一跋を加へて云く、あの時は酔うて書いたが、今見れば敢て拙でない。俺れをして今書かしても、斯うは書けぬ。これは俺れが書でなく、實は酒の書であると云ふ處に、尤も妙がある。

文政丁亥夏五月。送母于有馬。還再過伊丹。宿長古堂。醉餘演平語。主人請余自書齣。半成就睡。翌晨宿醒未解。續而成之。劍菱之氣滿腹。自筆頭迸出。覺高綱景季亦避我鋒也。醉裏

又

堂主入京。携來請置印款。一笑再開。自愧狂態。然如其書爲野馬蛛絲狀。非斷非續處。謂之塵糟破裏王獻之。非誇語也。使余更爲之。決不能如斯。乃知酒書之。非頼囊書之。

私が拙劣な「隨筆頼山陽」を著はした事が機縁となり、山陽の書の鑑定を求めに来るものが少くない。同時に題匣を託さるゝので可なり閉口してゐるが、居ながら種々の山陽の墨蹟を見る事の出来るのは仕合せというてよい。舊臘から見たものゝ内で一二を擧げてみると、「梅花未放意先香」と書いた一行幅は、山陽が有栖川宮の御息女に新年試筆の手本にと書いて差上げたもので、書は上出来であるが、落款には御息女の雅號があつて山陽の署名はなかつた。お手本として差上げたものだからかくあるべきはずである。

外に梅花七絶を書した一幅を見た。その詩は山陽三十七歳の時の作で、詩集を調べてみると、東郊の僧庵を訪うて詠じた四首の内の一である事が知れたが、それには數十字の識語がある。すなはち左の如し。

禪榻參梅頓爽然。欲將茗椀換舢船。氷心可恨相知晚。紅紫叢中過十年。

詠梅之詩。自君復十四字以來。難復着手。此詩非詠梅。卽叙吾今昔之變也。 襄

此詩は識語にある如く梅に藉りて自家の心事を告白したものである。すなはち詩の大意は説くまでもなく、皎潔梅の如きものに親しむ事が晚く、うか／＼紅紫のエロやグロの中で十年を過したとの述懐であるが、山陽としては偽らざる自白である。そして識語には何というてゐるかといふと、林和靖が「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏」の詩を作つてから、それ以上の梅の詩は出来かねる。これは自家の經歷の變を叙するに過ぎないというてゐる。山陽の識語の妙は毎度敬服するが、詩集を翻へしても獲られないことが毎々書幅の識語に獲らるゝので、山陽の心事を赤裸に知り得るものは詩に付隨する識語である。私が山陽の書を見ることを喜ぶ一つの理由はこゝに存する。識語中にある「君復」は林和靖の字である。

尙兩三日前山陽の臨書一幅を見た。これは明人陳元素の長篇を臨したもので、起首に「有樹倚天數千尺」とあつて、六行に互る行書であるが、讚岐に客たるの日、有り合はせの紙で臨すとある。紙は禁水（じんすい）を掃き金粉を施したもので、墨つきがよくないが山陽の眞蹟に相違ない。こ

れにも長い識語がある。

乙亥夏日。客於讚。觀明人陳元素書。偶有此紙。就試臨之。殊覺失其故步。醜拙太甚。囊此識語に依り山陽の不滿が見える。その「故歩に失し」とある如く、とかく自分の流儀が出て原書に似ず、醜拙の甚しい事を感じると書いてゐるが、何人が臨書しても自己流の出る事は免かれぬもので、臨書の本意は敢て原書を摹するのでないから、自己流が出て一概に咎むべきでない。この臨書も山陽の筆意があるから寧ろ喜ぶべきで、これが光筆版の摹本の如くであつたら一向面白がなからう。陳元素は字は古白、長州の人で、文學をもつて名を時に知られ、書法は清勁、歐陽率更に類し、墨蘭を寫せば楚宛清芬の致ありと「無聲詩史」に出てをる。

坊間の書肆を漁り「三十六峰山陽外史遺墨」と支那人沈萍香が標題を書いた一帖を獲た。自分分は「隨筆頼山陽」を著はす時、この種のもは大概手に入れて材料に供したが、この帖は全く始めて見るものであつた。嘉永二年七十二翁龜齡軒の上梓とあつて、その人の所藏に係る山陽の遺墨を上木したものであるが、龜齡と云ふ人は未だ委しく知ることが得ない。併し清客よ

り月琴を學んで斯道に名のあつた人と見える。山陽並にその友人と懇親の關係があつた所から、この帖の中には山陽の母の短冊があり、日野中納言の和歌があり、小竹の文もあつて、この遺墨帖を通して山陽の逸事を知ることが一二に止まらない。山陽には月琴の趣味があつたかどうか知れないが、全く無趣味でも無かつたらしく、母に龜齡の月琴を聽かせて興じたことも見えてゐる。龜齡の請に應じて月琴の銘を撰んでもゐる。帖の巻首にある「天倪」の二字は即ちそれである。亦月琴に題する二三首の詩もある。その七絶に云く、

誰提蟾華裁王琴。團圓影裏帶清音。四絃如語語何事。碧海青天夜々心。

龜齡主人學月琴於清客。幾窮蘊底。故作此詩付之。子成

自分は毎々山陽の才に感ぜさせらるゝが、この詩を見ても其感なきを得ない。月琴と云ふから直ちに月を案じ、李義山の有名な嫦娥の詩の末句をその儘取り入れて應用した働きは流石に山陽である。筱崎小竹はこの詩に左の注を施してゐる。

李義山嫦娥詩曰。雲母屏風燭影深。長河漸落曉星沈。嫦娥應悔偷靈藥。碧海青天夜々心。謝疊山評云。嫦娥有長生之福。無夫婦之樂爲悔。前人未道破。余謂當時或有其人其事。義

山託嫦娥咏之耳。子成爲龜齡老人。咏月琴。結用義山全句。老人恐未知之。故爲書其末。

弘化二年七夕前三日

小竹散人筱崎弼

こんな説明は山陽自らやらず、他人がやつてゐる所に興がある。他に山陽が月琴を聽くの四言の詩がある。

非裁齋紈。剪於朝陽。團々其形。聲如鳳凰。抱焉對月。終此夜長。月落在膝。曉河茫茫。

三十六峰外史題

支那音で唄つたら月琴に乗りさうな詩である。この詩に附して左の詩歌がある。

都門迎母半年留。月白風清何處游。携酒侍與三十里。供君湖閣作中秋。

としごとの秋はあれどもいつにかはにほの海邊の中空の月

母と近江の琵琶湖に月琴師を伴うて仲秋の月を賞したなどは、山陽の傳中に漏らす可からざる風流韻事である。山陽の國歌も亦珍らしい。この時龜齡の詠じた下句に、母の梅鷗が添へた和歌がある。その短冊の詞書に、

初秋のよひ過る頃、龜齡ぬし訪らひ、月琴を弾、かつ下の句をうたひて、これにとのぞまれければ

その名おふ琴のしらべにひかれてや待しはつかの月も出けり

この外に山陽の短冊がある。

植しその五もと柳いつまでもわがたらちねとながめてしがな 襄

この歌は山陽の水西莊に植ゑた柳を母と共にいつまでも詠めたいと云ふ感想を漏らしたのだが、日野卿がこれを見て山陽の孝に感じ、上の句をそのままにして、感想を書かれた短冊がある。その詞書には、

山陽の歌を見て感慨にたへず、上の句はそのままに置いて獨りごつ

とあつて、

植しその五もと柳いつまでもあはれをのこす露のことの葉 愛

とあるが、これは一佳話として傳ふべきである。すべてこの帖に存するものを、拙著「隨筆頼山陽」に逸したことを遺憾とし、爰に加へて置く。尙ほこの帖の中に江芸閣のことを云々して

龜齡に寄せた手紙が收めてある。それには「江芸閣に約束の事有之、來て居るか、いつ歸るかと言事、御聞出しなれば急に御知らせ可被下候」とある。山陽が清客江芸閣に交はつたことは著名な事實だが、こゝにこの人を待つてゐる消息が簡單ながらほのめいてゐる。尙ほこの手紙に琴銘を撰んだことを云ひ、「月琴貴藏なれば勉強可仕候、即別紙に仕候間、朱漆にてゞも御入させ可被成候」とある。龜齡が芸閣にも銘を請ひたしと山陽に謀りたるらしく、それに對し山陽は、芸閣などには七絶の方ハマリ可申候と答へてゐる。龜齡は多分長崎邊の人であらう。この帖に題署した沈萍香は日本の國歌まで解した長崎在住の支那人で、山陽の門人を以て自任し、山陽を悼むの詩を録してゐるが、それは割愛する。

「竹雨齋詩鈔」は備中小野泉藏の詩集である。山陽は泉藏と交り深く、毎詩に評がある。そして評語中往々自家の生活を云々するものがある。泉藏の詩は敢て珍とするに足らないが、山陽自から自家の嗜好を云々するものは山陽の傳を補ふの資となすに足る。今左に數件を録す。泉藏が和蘭製の杯を人に送りたる詩に、山陽は己れも蘭製の杯を愛することを陳べ、小杯は

最も喜ぶ所だ。蓋し小杯は久坐細談、漸く醉郷に入るによろしいからだ云ひ、また中井履軒の杯の嗜好を併せ記してゐる。履軒は玉杯を好み、先づ其色を賞し、後に其味を領す、是れ先づ我心を獲たものだ。世多く漆盞を用ゐて、一生琥珀の光を知らないのは氣の毒千萬である。丹釀の佳なるものは、色、曉月の水に在るが如し。玉杯でなければ此色を見る可らずと、履軒に左袒してゐる。

泉藏の偶成七律の内に「酒味年加時自温」とあるのを山陽評して、酒を温めるに自から候あり、過不及の際毫髮差へば氣味索然たり、故に酒は自から温めざる可らずと云うて、酒の爛のやかましかつたことがこれで知れる。

泉藏の舟行の詩に山陽評して云く、三四句舟行の實況であるが、茶山翁、舟を畏るゝこと虎の如し、嘗て此境を経ざるが故に圈點を施さないのだと、茶山の舟嫌ひのことが此評語に因て始めて知ることを得た。

泉藏の「花下與友人飲」の詩に、山陽評して云く、世間の俗漢、往々花に對して韻書を翻して作詩に夢中になり、杯到つても飲まざるものあり、余は泉藏を煩して此詩を千萬紙書かせて

花筵に張りたいものだ。酒客山陽に此評無かる可からず、山陽は泉藏の詩を藉りて世を罵つてゐる。山陽の評は概ね斯の如き含蓄がある。

泉藏の「余嗜蠶豆飯偶有此作」の詩を評して山陽云く、俺れも嗜好を同じうす、但だ藝州の産、其皮軟かで、皮を和して之れを炊げば、香氣亦他産に倍するものがある。京師に来てから徒らに之れを夢想するのみだ。今高作を讀むで涎を流す。併し貴産の豆、藝のに比して如何は未だ審かにせずと。こゝに亦山陽が蠶豆に嗜好のあつたことを知り得た。

泉藏の「竹院圍碁」の詩を小竹評して曰く、此詩、世教に關するものあり、圈點なき能はず。唯菅頼諸公、碁を解せず、故に一語なきのみと。こゝに小竹に依り菅茶山、頼杏坪二家の圍碁を解せざるを知り得た。杏坪は他の評語中にも碁を解せざることを自白してゐる。

泉藏が詠史に楠正儀の叛名を惜んで「遺縱曖昧誰能別、偏惜千秋留叛名」と詠じたのに對し、山陽云く、正儀の事跡的知す可からず、余外史を筆し、是に至つて筆を握り躊躇之れを久しうし、遂に糊塗に終ると。大日本史には正儀を將軍家臣傳に收めて惡を懲らしてゐるが、自分の糊塗を爲すは闕疑の爲めであると、圖らずも此評語にて山陽が外史執筆中正儀に及んで困惑し

たことが知れた。

泉藏が人の問に答へて、山陽を蘇東坡に比し、「到處逢人何所說、方今都下有東坡」と詠じたのを、山陽評して、溢譽、之れを讀み、人をして面熱し汗下らしむ。獨り子年の臘月生れたるは東坡翁に同じ。中年已前酒を飲まざりしことも亦同じ。近頃飲を過せども、究竟酒腸を具するものにあらざる也。東坡の詩に云く、「少年多病怯杯觴、老去初知此味長」と、東坡も亦老に及んで此の味を解する也と。山陽が内々東坡を氣取つて以上のごときことを言うたのは有名な話であるが、典據の一は此評語にあるのだ。

山陽簡潔の漢文書牘、殊に情味を覺えるものは左の一文である。お世辭も茲に至つて妙甚し。
梅雨蕭然。終日未舉杯。以其無肴也。而今獲此。多謝々々。唯恨無客耳。公不與魚共來。
然魚味佳。猶公之談也。

端午後二日

襄復

通語返投。敬領。

賴齋賢友

拙著「隨筆賴山陽」には特に山陽と酒とを書いたが、此頃某友人より示された、筱崎小竹宛の山陽の書簡は、徹頭徹尾酒の事に關し、一篇酒史とも云ふべきもので、これまで知ることが出来なかつたことも此の書簡に據つて知り得た。山陽が長崎で始めて酒の味を知つたのは「鶴」の銘の酒であつたとは嘗て聞いてゐたが、その酒は伊丹醸造の偽物であることを此書狀で初めて知つた。山陽の最も喜ぶ酒は劍菱で、近衛家から往々頒ち購うたことが此書狀に書かれてある。これも初めて知ること、其酒が重くツてよくないと云ふことも初めて知つた。兎角劍菱を一樽買ひ取ることが困難であつたらしく、已むなくば泉川を見合せて一樽劍菱を求めんなど云うてゐる。泉川銘の酒も山陽の常用したものであることが此書狀で明かとなつた。山陽は酒の世話をする人を此上なく珍重がり、其人の爲めなら、何でも揮毫を厭はないと云うてゐる。山陽は酒にはどこまでも忠實であつた。

(首部二行散落不能讀)

伊丹控抄に(不明)書塗鴉狼藉敷張仕候へども、一ツも可觀は無之候へ共、先あまり延引に及候故、是をだに被遣可被下候、皆々酒にかゝり候詩に御座候、長篇の方は在長崎作申候、彼地は皆々堺酒にて、丹釀は七星斗參合候節にて、そののみ在長崎中たべ申候、絶句は下關にて鶴と申候酒、是は灘にて丹にせと相見へ、是のみたべ候而作候事存出候儘認申候、四字額一、是を全紙にそへ泉川主人へ贈申度、半切絶句、御世話に預候御門人へ寸志に進上仕度候、若若ケ様之拙書にて御用に立候事なれば、何ぞ自然御好にても有之候はゞ、いか様の六ヶ敷事にて可被仰下と御傳可被下候、其代酒之御世話煩度候

甚御面倒なるべけれ共、泉川四斗樽一丁買調申度奉存候、貴家迄御取寄、明石屋へ御出可被下候、價直御申越、直に可差出候

又先便にも申上候通、家母へ劍菱贈候處、敗候て甚失意、何とぞ又々差下くれと申越候、此酒は別て六ヶ敷と承候へ共、三升にても五升にてももらひ候事は出来申まじくや、若小買不出來に候はゞ、劍菱之方四斗調申度存候、左候へば其内分遣候て、泉川は追而の事に可仕哉、兩様共乍御面倒彼御門人の御方へ被仰遣、何卒早々返事被致吳候様萬々奉希候

丹釀は何印にても當地近衛家にて譲もらひ候へば自由に御座候へ共、先便度々申上候通、彼御家の分は菟角重き様に覺申候、已に只今白雪、あの方より大樽にて取寄居申候へ共、是迄御地小西店より取寄候より重く候て不好候、それ故劍菱なども決て直に取寄候はゞ、軽く候て可宜と奉存候、何分劍は少々なりとも右之譯にて入手致度奉存候

泉川名釀輕醪清冽、私多年の注文に合候義は先便にも申上候通に御座候、猶其内と申殘候、

頓首

九月既望

又ふり申候、樓前水増、水聲甚候、大阪如何

襄

承弼老兄

山陽翁に就て

群像片影

頼山陽翁が歿して百年となるので、その遺跡を顯彰するため、廣島を始め東京にも種々の催しがある。振り返つて自分の幼少の頃、即ち維新勿々の際の天地を追憶すると、山陽熱の最も高い時で、日本外史が讀まれ、其の詩が誦せられ、其文や其書が學ばれ、幕末に崛起した志士達は、皆山陽にあこがれたものであつた。實は維新の革命も山陽が唱首で、勤王心を鼓舞作興した結果であるとも云へるのである。山陽の子の三樹が、幕府の忌諱に觸れて刑場の露と消えたと、幕臣で山陽崇拜の人が、密かに三樹の遺骨の一片を盗んで、神棚に捧げて毎日拜した人すらあつた。山陽熱の高かつたことは、此一事でも推測が出来るであらう。

山陽熱は一時のものでなく、維新の革命はとうに完了して、今日に至つても山陽熱は決して冷却しないのみか、益々高まりつゝある。山陽の人氣は實に偉いものである。古今の學者、文人で、山陽ほど廣く永續的の人氣を有してゐるものは無いと云へる。其の然る所以は何故であらうか。山陽の歴史や詩文が維新の鴻業を鼓吹する力があつた爲めばかりとは思はれない。山陽は早くより民衆に投ずるあらゆる資質と文才とを有してゐたことが恐らくいつまでも忘れられず、いつまでも社會の寵兒となつてゐる所以であるまいか。山陽の青年血氣の頃には年輩相應の放埒もやつた。藩を脱してルンペンとなつた。これは美しい經歷とは云へぬが、山陽の人間學を修めたのも此の時にあつたのだ。

此頃三越を會場として山陽の遺墨、遺物の展覽會が催されてあるが、その中に私を最も刺激感動せしめたのは、山陽が自宅で押込められた座敷牢をそつくり其儘に摸したものであつた。二個大小竝んだ部屋の一面には青竹の檻柵が植ゑられて、さながら牢屋の嚴めしい檻柵を思ひ起さしむるものがある。當時諸藩の監禁の掟は斯くあつたものと見える。此室が仁室と稱せられ、山陽は二三年こゝに監禁を受けて謹慎したのである。これは言ふまでもなく山陽の大厄であつたが、山陽が一代を風靡する識見才藝の醗酵されたのも此の伏櫪期に在つたとも云へよう。日本外史の如きも此間に筆せられたもので、かゝる數年繼續の時が無かつたら、あの歴史も出來なかつたかも知れぬ。山陽の爲めには如何にも仁室であつたのだ。

山陽が君父の藩を脱したのは當時としては罪惡であつたであらうが、山陽の志は一藩の儒者をもつて終ることき小さなものでなかつた。彼は天下の儒者たらんことを欲したから君父の藩にそむいた。その代りどの藩にも仕へず、いくら困窮しても俸祿を官邊に食むことをせず、我慢

で押し通した。山陽は全く自由人であつた。何の遠慮もなく思ふ通りを行ひ、決して權勢に膝を屈することは無かつた。勿論、暮夜權門を叩き哀を請ふやうな失態は無かつた。山陽は身體の羸弱の人であつたが、氣魄は強健の人の百倍もあつた。

非凡の識見があつて、早く時勢をよく見抜き、無駄の學問をしなかつた。當時學者と云へば、經學を修めねばならなかつたが、山陽は經學を修めるにはおのづから他に人があると云うて、それを避けた。實は後ればせにそれを研鑽しても大家となり得ないと自覺したからでもあつたらうが、實は新時代を迎へるには經學は無用のものであつた。之れを達觀したのは流石に山陽である。實は經學の研鑽などに多くの歳月を費さなかつたことが、山陽自身の仕合せであつた。若し經學者であつたら、山陽の文藝はあれほどの光彩を放たなかつたであらう。經學ほど學者の才能を拘束するものは無いのだ。山陽は此の羈絆を脱した自由人であつた。

山陽の詩でも文でも歴史でも皆獨創のものである。少くとも死灰に齊しき支那文學の糟粕を嘗める因襲から脱した。それまでの歴史や詩文は飽くまで支那を摸倣したもので、それで無ければ通らなかつた。山陽にはそれを打破する勇氣と識見とがあつた。山陽は曰く、日本歴史は

日本風に書かねばならぬものだ。讀んで見て左傳でも讀むやうな心持するのは取るに足らぬと排した。文章に於ても、當時の文章家は經書を引いたり支那の典故を挿んだりすることが常であつたが、山陽はそれを排して、主として日本の事實を巧に應用した。詩も亦然りである。多くの文人は、文は文として詩は詩として作つたが、山陽は自家の精神と感懷を摑べて、これを文とし亦詩とした。だから山陽の詩文は生きてゐる。生きてゐるから人を動かす力がある。繪に譬へると、當時の多くの文藝家は、舊習に依り狩野、土佐をやつたが、山陽の文藝は浮世繪に近いと云ひ得るであらう。山陽はどこまでも實寫を旨としてゐる。どんなものにも己の精神を打ちこんでゐる。それだから、それが讀む人の精神の糧になるのである。山陽の外史は考證家に云はせると歴史でないとも罵倒する。詩は詩人の詩でないといひ、文章も格に嵌つてゐないといふて、昌平學校などでは外史を惡文の標本として學徒に直させた位である。

舊習に支配され、支那かぶれにかぶれた時代に、山陽の新體の文を見たら、さもあつたであらう。丁度狩野、土佐で無ければ繪でないやうに妄信した時代に、浮世繪が擯斥されたと同じやうな譯だ。が、今日はどうかと云ふと全く顛倒して、浮世繪こそ國民的繪畫と云はれ、世界

の尊敬を受けるに至つた。山陽の文章も靈活の處は浮世繪に似てゐる。新體にはいつも敵があるが、國民の大歓迎を受けるに至ると、敵も屏息せざるを得ぬ。山陽は大膽に新體を創めて勝利を得たのである。

以上觀察するごとく、山陽は道學者ではない、人間らしい人間だから、若い時に放埒もやつた。併し放浪生活でいくら窮しても、人間に有り勝の墮落をせず、遂に大名を博するに至つた。當時は權貴に仕へて其の祿を食むことを光榮とした時である。然るに山陽は斷然之れを黜けて、自由人を以て終始した。其の氣概は文に詩に現はれて、常に人を引立てた。直接間接山陽の熏陶に與つたものが國民中どれほどあるか知れぬ。山陽は此點に於て國民の指導者である。山陽は國民皆讀の歴史を書いて、手廣く國史を教へると共に、覇府が主權を壟斷するの非を鳴らして勤王心を鼓吹した。すべて此等の事は、國民の歓迎を受くべき筋合のもので、山陽の人氣が歿後百年の後でも、些しも冷却しないのみならず、益々國民の信望を厚くするのは決して偶然でない。

山陽が蘇東坡を讚した語に「長留嬉笑怒罵迹、咳唾滿地任人拾」とあるが、蘇東坡も山陽と

同じく支那にいつまでも人氣のある文豪で、東坡の事だと云へば、隠れた事實を熱心に調べて、どの場合に笑つたとか、怒つたとか、どんな風に人を罵つたとか、咳拂ひをした瑣事に至るまで、逸事を拾ひ集めて珍重がつてゐるが、人氣があると斯やうなものである。山陽に於ても東坡と同じで、その斷簡零墨をも珍とし貴んでゐるのみならず、逸事と云へば、失敗談でも、つや話でも、皆取り上げられて談柄となつてゐる。だから東坡の讚は移して以て山陽の讚となすことが出来るのだ。實は山陽自身も東坡に私淑し、東坡を氣取つた趣もあつたが、マサカ其の死後に、東坡を讚した語が己にはまるほど、人氣を博しようとは思はなかつたであらう。

山陽が隨時人に與へた書簡は、近年木崎好尙氏に依つて編纂せられ、大なる二冊をなしてゐるが、博く搜したらまだ多數あるであらう。山陽の生前ですら友人が山陽の書簡を珍として保存したと云はれてゐる。今日多く存してゐるのは決して怪しむに足らぬ。山陽ほどの手紙の名人は全く古今に無い。山陽の書簡集は一部の大著述である。私は嘗て山陽に隨筆があつたらと云ふ人に對し、山陽には立派な隨筆がある、書簡集が即ちそれだと云うたことがある。實は最も妙味ある隨筆と云うたら、山陽の書簡集であらう。山陽の書簡の好い所は形式に囚はれない

所にある。幾十幾百通を讀んで見ても、皆趣が異なつて、チャンと其時其人に嵌まるやうに書かれてゐる。その名宛や用件の處を書き直せば、誰にも通用するやうな手紙は一通も無い。すべて山陽の手紙には情味があつて、贈られた人は讀んで惚々とする。債權者のやうなものでも山陽の手紙を見ると、破顔一笑、張りつめた力を緩めねばならぬやうになる。山陽の手紙の書き方は如何にも如才なく、決して人をそらさない。往々諧謔を弄したり借金と言譯をしたり無心を言うたりしてゐるが、必ず自家の地歩を占めて品位を決して下さない。時には漢文を挿入するが、和文とよく調和して、縦ぎ目が判らないやうになつてゐる。流石に山陽は苦勞人だけに、どの手紙でも人情の機微を穿ち、學者不似合の俗事をうまく書いてをる。大概の人は手紙を書くに意動いて筆隨ふと云ふ譯に行かぬ。筆の都合で心にも無いことを書くことがある。「意動筆隨」の語は山陽にのみ許さるゝ言葉である。さて又書簡に最も大切なものは書であるが、山陽の書は書簡に於て最も其妙を見る。文と共に書簡に光彩を添へるのは書の美である。山陽の遺簡が一通二百圓の價のあるのも敢て怪しむに足らぬ。

山陽は能書であるけれども、同時代の人で山陽以上の書の名人が無かつたのではない。卷菱

湖が初めて山陽に會した時、君は筆法を知らぬと罵倒したと傳へられてゐるが、其の罵倒された山陽の書幅が五百圓千圓で賣買されてゐる時に、書道で一世を風靡した菱湖の書幅は十圓の價もない。山陽は徂徠に比し菘翁に較べて書が劣るかも知れない。しかし山陽の書は豪放磊落で氣魄があつて萬人受けがする、何人にも喜ばれる妙がある。此點に於ても山陽は國民的である。山陽の書が盛んに贗作されて黒白の辨別に鑑定家の苦しむのも、一面山陽の人氣の旺盛を語るものと謂はねばならぬ。

山陽があらゆる社會に喜ばれる所以の一は、あの人が、趣味性に富み、それが筆や其他に現はれ、あらゆる趣味家を喜ばす點にあらう。あの頃の京都は、土地柄、風流の事が盛んに行はれた。山陽の趣味性も土地の感化によるものであらうが、文藝の人で山陽ほど趣味性に富んだものは無いやうに思ふ。あの溢るゝ才氣を以て趣味を表現するのだから、到底他人は及びもつかぬ。山陽は如何にも多方面の趣味家で、餘戲には畫をかき、和歌を詠じ、俗曲を作り、平家を語り、篆刻をやり、書畫を翫び、骨董をひねり、且つ相當の鑑識もあつた。そして大なる酒客であつた。あの頃京都には文人墨客は雲の如く多くあつた。中には山陽以上の才人もあつた

のであるが、どうも山陽程廣い趣味家は無かつたやうに思ふ。

星嶺にせよ、海屋にせよ、竹洞、梅逸、半江、小竹、雲華などにせよ、詩や書畫を能くし、風流界に馳驅したけれども、趣味はその長ずる所に限られてゐて、山陽と比肩すべきで無かつたかに思はれる。たまさか多趣味の人があつても、それは低級であつた。例へば中島棕隠などいふ才人は、曾て山陽の家に隣つて共に鴨川の風色を賞したこともあり、銅駄町に居た頃に其居を「銅駄餘霞樓」と呼んで洒落たこともあり、時々割烹店に出かけて自ら鰻を割き、腕の牙えを誇つたこともあり、詩も文も書も巧で、時には猥文小説を書いたり、酒資に窮して娘を島原に賣らんとしたことすらある。通人には相違ないが、決して高い趣味家では無かつた。あの頃の文人の暗黒面を探るといへば、その缺點があるから、うっかり許すことは出来ぬ。

山陽がどの程度の趣味家であつたかは、書いたもので窺ふことは出来るが、その他は遺愛の品で窺ふより外はない。書畫骨董などで遺愛の品は各所に散在してゐる、それをボツ／＼見ると、流石に平凡でない。しかし私の合せとするのは、近年山陽の遺器四十點ほどを一手に藏してゐる人が伊勢にあつて、私が題匣を頼まれ、東京で居ながらそれを一覽したことである。

それはどんなものかと云ふと、文房具で云へば、匣、筆箱、筆筒、研屏、印箱などの類、茶器で云へば茶托、茶合、茶壺、茶盆、菓子器の類、其他額面、花瓶、煙草盆、箕局、酒器などさまざまあつて、どれを見ても皆山陽の詩書が刻され、中には竹田、海仙、雲華等の合作もあつて、木米製の陶器などには、特に箱を作つて、それにも山陽其他の詩書が刻されてゐる。樂翁公から拜領の野辨當に装置されてゐる一双の錫の酒器にも、矢張り拜領の意味が刻されてゐて、何から何まで山陽と友人の書畫によつて美化されてゐる。器物は、ある二三を除いては決して立派なものでない。若し山陽の詩書が無かつたら二束三文のものであらうが、すべてに山陽の手がかゝつて居り、山陽自刻のものも少からず見えるので、皆珍器となつてゐる。此等を見ると、山陽が生前書齋を始め茶の間あたりに置いた家具は、皆自作のものであつたことを思ふと、自分がつく／＼山陽其人の趣味が何物にも附いて廻つてゐるかを感じざるを得ない。多くの人は大概自製のものを用ゐないのが殆んど例であるのに、山陽に於ては、何物をも自家の詩書で飾つて、それを樂んだことが窺はれる。私が山陽を趣味の人であると云ふのは決して推測のみではない。

世の學者、文豪で一世に仰がれるやうな人は多くは道德の人である。中にはさながら超人間の如く拜まれる人もあるが、此等は仰がれるが親しまれない、敬せられるが愛せられない。それだから永續的の人氣がない。一時崇敬を受けても時勢が變ると忘れられて仕舞ふ。山陽は、どこまでも人間として弱點があると共に人間として重んぜらるべき非凡の才能と識見とを有つてゐる。決してウオルシツプさるべきアイドルではないが、國民にいつまでも氣受けがよく、愛され喜ばれ親しまれて握手を求められる人である。その藝術と多方面の趣味とは社會の各方面に交渉があつて、書畫屋、骨董屋にまで喜ばれ、兎もすると酒客、放蕩兒にまで珍重されてゐる。世の文豪の傑出した人は決して少くないが、山陽その人の如く廣く且つ永く人氣を博してゐる人はない。眞淵、契沖、錦里、白石などいふ人の、名をすら知らないものが澤山にあるが、山陽の名を知らないものは殆んどない。山陽は眞に國民的愛慕の的となつてゐる希有の文豪と謂はねばならぬ。そして愛慕さるべき十分の理由があるからの事である。今百年忌に當り、吾等も謹んで敬虔の情を先生に捧げんとする。

鷄 肋 百 談

日本は至幸の國

外國人が日本に来て驚いていふには、日本といふ國は如何にも日本人の多い國だと。一寸聽くと馬鹿らしい事をいふやうであるが、實は日本ほど異民族の交つてゐないところは世界のどこにもない。近く支那の上海へ行つて見ると、世界のあらゆる人種が街頭を往來してゐて、さながら人種の博覽會にでも臨んだ

やうな心地がする、とは誰もいふ事である。世界の諸國の異種民族を圖して色別けをしたのを見ても、その複雑なるに一驚を喫する。異民族の混合して國民を形造つてゐるところは、大體統治上に困難がある。いざ外國に對して戦争でもする事になると、日本などでは直ぐに舉國一致となつて何の面倒もないが、外國ではさうはいかぬ。敵國の民族が多く交つてゐるところには、命令が行はれぬ。亞米

利加が世界の大戦に参加した時などは、獨逸種の人民の操縦に頗る苦んだ。大戦終了の後、亞米利加の努力しつゝあるのは國民の統一にあつて、必ず國旗の下に人を會する事を例としてゐる。ハンガリーなどは異民族の最も多い國であるが、現在國王を闕いてゐる。元首のない事は勿論政治上に大なる不便の事だが、異民族が多いために國王の推舉が甚だむづかしいので、必要を感じながら無元首でその日暮しをやつてをる。どの民族でも満足するやうな人物ならば元首に推し得ようが、生憎そんな人物はゐない。またそんな人物はあらうはずがない。そこに至ると日本などは萬

世一系の天子を戴いてゐるので、少しも面倒がない。日本の有難味は日本にゐてはわからぬが、外國に出かけて本國を振り返つて見ると、初めてうなづく事が出来る、とは洋行者の歸朝談に毎々聞く事である。

漢文教育の廢頽

我國の漢文學は今は日一日と退歩しつゝある。漢文の試験に、柳宗元は誰れの事かと問ふと、學生は云く、日本著名の學者だと答へたと云ふが、彼れは柳宗元の柳子厚であることを知らず、柳姓のムネモトと云ふ人であると思つたなどは滑稽である。又國文科の試験

に、大町桂月の何人なるかを問うたら、平安朝の人だと答へたと云ふのも噴飯すべきだが、恐らく小野小町を聯想して斯く云うたのであらう。學徒の無理解は言ふまでもないが、教鞭を執る小中學の教師も、今は辛うじて教師用の釋文を辿つて、覺束なく漢文を教へてゐる。若し此の釋文に注が缺けて居れば、質問があつても教師は答へることが出来ない、情けない状態である。全體教師が釋文にカジリ付いてゐるやうでは教師たる資格がない。文部省は力ある教師を得るために、何故斷然教師用の釋文を全廢しないのであるか。教師に力がないから、其の講説は甚だ曖昧で、説

く所支離滅裂、さながら囁語を聞くがごとくであるから、生徒の漢文科を忌むのも無理はない。赤壁の賦だ、歸去來の賦だのと、その人口に膾炙する文である故を以て多く教科書に採られてゐるけれども、此等の賦は言外に意味があつて、それを今の教師に會得せしむることが既に困難である。いかで學徒が之れを會得し得よう。漢文は可成平易のものを選ぶべきであるのに、高等學校の入學試験を標的として某々の文を収めることが例となつてゐるので、試験の法を改めない限りは、教科書の編成も亦改めることが出来ない。一方漢文學の力は益々低下して、教科書の文の難き

を避け得ないデイレンマに墮ちてゐる。今日のやうでは漢文教育は眞に子弟を毒するものと云はざるを得ぬ。

五十公野村の杉並木

明治大帝が北陸に御巡幸の御事蹟は、追々堙滅に歸せんとするので、心ある人々は前年種種取調べて、一部の書を刊行した。それを見ると、毎日の御旅程が知れて興味を感じるが、さて陛下が越後の風土をみそなはして何とお感じ遊ばしたかに就ては、雲深くして、お側近く侍した臣僚の外には何も知ることが出来ない。あれほど詞藻に富ませらるゝ陛下は定

めしお歌も少からずあつたと思はれるが、すべてそれ等も傳はつて居らぬ。當時何事も聖上の御身邊のことは一切洩さぬことが宮内の官規であつたことを考へると、不思議もないわけだが、唯だ極めて稀れに陛下の仰せられたことが傳つてゐる。其一は、越後の新發田を發輦あつて五十公野村へ赴かせらるゝ途中に、一里足らずの杉並木が官道を掩護して風致があるのをみそなはせられ、「此處を通ると、何となく京都を思ひ出す」と仰せられたと云ふだけが傳つてゐる。北越の風景に就て御洩らしのお言葉と云へば、此外に絶対に何もない。然るにお言葉を賜つた五十公野は自

分の墳墓の地で、展墓の歸省には必ずこゝを通過するので、其都度陛下のお言葉を想ひ浮べて、懷舊の感に堪へないものがあるが、惜しい哉、今は五十公野の村も荒廢して、當時の面目がなく、杉並木も前年の暴風に多く斃れて、ひどく風致を損じて、陛下のお褒めを蒙つたおもかけがない。

西園寺公と東條琴臺

西園寺公の若い頃の經歷談が「中央公論」に出てゐたのを読みもて行くと、圖らず耳寄りの一話を得た。それは公が北陸山陰鎮撫總督として越後へ來られた時、江戸お構へで高田

の榊原藩に身を寄せてゐた、儒者東條琴臺が尙ほ存命で、公はそれに面會されたと云ふ挿話で、自分は郷國越後へ公が來られた際の事は可なり調べてゐるが、此事實は初めて耳にする所である。公の直話によると、

高倉永佑が公に先きだち高田にゐた。高倉は公に此地に東條琴臺と云ふ學者がをる、逢つて見ないかと云ふので、公は高倉の處で琴臺を招いて遇つた。琴臺は公の青年であるのを見て、山陰道を鎮撫された西園寺さんは、あなたのおとつさんかと聞くと、公は自分であると答へたので、琴臺も驚いて容を改め、お若いのに恐れ入つたと云う

て、それより文事の談に入り、琴臺が當時藩の命で明史稿を翻刻するにつき訓點を附しつゝあることを云ふと、公はかねて此書を讀過したので、明史稿に就ての話が琴臺と喰合ふので、琴臺は公が若いに似ず、明史稿まで讀んでゐるのに驚いたが、公はそれ式のこと何であると云はん計りの意氣で、一席の談話で懇意となり、琴臺が著した先哲叢談の續篇の草稿を公は借り受け、一讀さるゝに至つた。琴臺は當時七十歳の晩年で、其歿後碑を建てるときには、公は特に篆額を書き、琴臺の血屬下田歌子に交付されたとある。

關東州の地境

日本の治下にある關東州は、滿洲と地境を接して、其の經界には石が羅列されてある。然るに其の經界石が漸次移動して、滿洲地域内に入る事實のあるのは何故であるか。是れ決して吾國が祕かに隣地を盜むのではなく、滿洲國民が祕かに爲す業であることが知れた。何故斯くするかと云ふに、理由は甚だ簡明である。吾關東州は道路ひらけ、警察は行きとどき、夜間どこを歩いても剽盜に出遇ふ様の事は決してなく、如何にも樂土であるのに引換へ、僅かに幾間と隔つ隣地となると、白晝

でも盜賊が横行するので、滿洲國人は關東州民を羨むも道理なり、彼等は人知れず境界の石を吾が藩疇に移し入れ、迫害に遇へば則ち云く、吾れは關東州に屬す、見よ、此の境界線をと、彼等は斯くして迫害を免れると云ふ。これ谷萩那陸軍少佐より親しく聞く所である。

米國の禁酒解除

亞米利加が舉國禁酒して、兎も角十數年それを續けたことは、世界に比類の無い、珍らしい出來事である。併し自分が「ドライの亞米利加」と題して他の隨筆に書いたごとく、禁

酒の結果は豫期に反して、弊害が續出した。

これに就ておもしろく感じた一事がある。例の大富豪ロツクフェラーの一家は祖父の時代から一滴の酒も飲まない家であつて、嘗ては禁酒法通過を熱望の餘り、百萬圓の金を寄附したこともあつたが、愈々實行されて漸く其非を悟ると、今度は全米の新聞紙に公開狀を發して、熱心に禁酒法廢止を提唱した。他人の言ふことなら兎に角、禁酒の熱心家からかかる説が發したので、爰に社會に大なるセンセーションを捲き起し、青天霹靂の感があつたと云ふが、さもあらう。

和田垣謙三の俳號

法學博士和田垣謙三の洒落は同人間に有名であつた。晩年俳諧を學んだ頃、同人は君の俳號はなんといふかと尋ねると、まだ俳號はないといふから、然らば吐雲とするがよからうと、出鱈目ながら、和田垣に吐雲録といふ著があるから、それに思ひ付いていふと、和田垣は、流石に滑稽の才がある。言下に、それはよからう、俺は句も吐くからなと。和田垣これより吐雲を俳號となす。

雲華の妾

雲華は本願寺の學僧で、山陽の方外の友として知られてゐる。なかなかの艶福家で、隅に置けない坊さんであつた。京都の東山には一妾を蓄へ、一子迄擧げた。其妾の名はお露と云うた。山陽或る時外出の序に、その妾宅を見舞つてやつた。雲華はその時九州に歸つて居て不在であつたが、幼兒は母の傍らにスヤスヤと睡つてゐた。山陽は靜かにその寝顔を見やつて、父の風貌そつくりだと感じ、お露に筆硯を請うて即座に手紙を認め、お留守見舞に罷り出で、初めて君の愛兒の寝顔を見たが、君の相貌そつくりだ。睡りを驚かさないうやうにそつと、俺はお前さんの父爺の別懇

な友達だと云うたと例の趣致ある筆を弄して、雲華に寄せた手紙が如何にも人情味があるので、拙著「隨筆頼山陽」に收めて置いたが、此記事が機縁となつて川越の知る人より、雲華と同宗で交はりのあつた、江州の日野伏明師が、お露に寄せた詩を示された、その詩は左の如くである。

大舍老人(雲華)有愛妾。名露。老人去年

十月九日歿。因題寄其愛妾。

會是高僧掌中玉。空留春後牡丹枝。何知燕子樓頭意。七寶花臺不去隨。

これは白樂天が張尙書の歿後、その愛妾盼々に寄せた故事に基いた詩で、燕子樓は乃ち張

尙書の邸宅である。今左に白樂天と盼々の唱和の詩を筆の序に録して置く。

黄金不惜買蛾眉。揀得如花四五枝。歌舞及

成心力盡。一朝身去不相隨。樂天

自守空房斂恨眉。形同春後牡丹枝。舍人不

會人深意。訝道泉臺不去隨。盼々

將軍の御座船

石渡敏一博士の家はもと靈岸島にあつて、幕府のお船方をつとめ、向井將監の手に屬した目附であつた。祖父は石渡武右衛門といひ、父は、名を聞き漏らしたが長崎に赴き、洋風の船術を學んだといふ事である。その家に傳

はる船圖一卷には種々の船が書かれてゐる。概ね市中の川を經てお濱御殿に至る程度のもので、皆な小船である。將軍坐乗の船はさすがに立派で、幕の切を見ても華麗であるが、他は猪牙船のやうなものである。多分猪牙船もこの船の形に倣うて作つたものであらう。種々の船の中で御雪船といふのがある。これは雪隠を設けた船で、船の中央に厠の設備がある。將軍の用である事は申すまでもなからう。外に料理船といふのがある。膳部を整へたものである。船唄を録した一冊は約二十餘の歌が収めてあつた。これにもさすがに野卑な文句はない。秋花、八重菊、夏の夜など、い

ろいろの題が見えた。秋花の歌の冒頭に「ヤンレ秋花の夕まぐれこそたどならぬ」とあつて、雅趣のあるものだつた。當時は宴席などに戯れに唄ふを禁じ、唄ふ場合は、謡曲を唄ふ如く、莊重にやつたものだといふ。唄の數は随分澤山あつたものらしい。今はその節を知つてゐるものはトンとないといふ事だ。將軍がこの船に乗つて兩國橋下を通過する時などは、橋上、人の通行を禁じたのみならず、兩岸の人家の戸を閉さしめ、二階からも見る事を許さなかつたといふ。この船方は江戸に六組あつて、水上警察の任務をも執らせ、又流罪人をも取扱ひ、八丈島へ流謫の囚人など

もこの船方が扱かつたと云ふ。

邊に存するのである。

青山無去時

田中光顯伯はことし九十一歳の高齢であるが、なほ矍鑠として壯者を凌ぐの概がある。伯には木庵の書いた一行幅が愛藏されてゐて、よく出して人に示される。それには「青山無去時」の五字が條書してある。これは禪味の寓されてある語だが、伯は東京在住の時に青山に住された關係から、青山の號があるので、この幅はさながら伯の盡くるなき高壽を祝したかの如きもので、全くおあつらひに書かれてあるので、伯の喜びも、愛藏も、この

醫學博士の賭事

先頃親戚の新年宴會に招かれた時に、席上種々漫談が湧いた中に、醫學博士故青山胤通氏の逸事を聽いた。青山博士の晩年に、ある患者の病症について眞鍋博士と争うた。青山博士は飽くまで胃痛説を主張したが、眞鍋博士は然らずと主張し、果ては賭をする事になつた。ところが賭けた物の貧弱であるのには笑ひを催させる。それは何かといふと、負けた方が一椀の親子丼をおごるといふ約束であつた。然るところ青山博士の方が患者よりも

早く歿して、患者は案外に生き延びたが、これも到頭斃れたので、解剖して見ると、果して青山博士のいうた通り胃癌であつたので、眞鍋博士も初めて屈して、青山博士の銅像が出来ると、三十日つゞけて親子井を像に捧げて、約を履んだといふ。

池 永 道 雲

古く日本の印刻家として名高い、池永道雲の家は日本橋筋の薬舗で、今もこの營業を持続してゐる。震災で一刀萬象の印が亡びたと聞き、惜しいことに思つてゐたが、本店には倉庫があつたため、それに入れて置いたものが

却つて災に罹つたと聞かされ、痛惜の情をさらに深くする。そのうちでも惜しかつたのは一面の琵琶で、それには常信の繪があり、通村の和歌と銘もあり、道雲愛玩の名器として、その家では特に大切にされたものであつたが、これも亡びた。但だ幸ひとすべきは、道雲が苦心して著はした篆海外いく種かの著述の草稿が行李に入れてあつて、「非常持出」で、常に店員が心得てゐたために小僧に持ち運ばれ、烏有となる厄をまぬかれた一事である。この池永の別邸ともいふべきものが大井にある。それにも古くからのものがいくらか藏してあつた。それは幸ひに全部事なきを得た。

その中には道雲が愛玩した唐物の香箱や、二體の佛像もある。道雲は藥種屋だけに藥師如來の佛像などを珍重したともいふ。子孫に財産を頒つ遺言にも必ず佛像一軀を添へたといふから、かなり多く佛像を藏してゐたと見える。

井伊侯はそれを所望され、よぎなくこの佛像と交換する事になつたのだといふ。また今一體の佛像は、高さ三尺位のもので運慶時代の名作、或僧が池永に預けて、そのまゝになつたものださうで、これ等は幸ひに大井の宅にあつたため助かつた。

日本のウアン・ダイク

今存してゐる二體の佛は同家には大切なもので、一體は藥師如來の塗金の小像、キヤラ像だといはれてゐるが、これは家康が陣中にも離さなかつた大切なものを、功を賞して井伊に與へたのだといふ。それが何故この家にあるかといふに、池永は井伊家の出入のもので、道雲には非常に愛玩した端溪の研があつた、

平賀源内から洋畫を師承した、秋田の小野田直武(羽陽)と同じ頃に、北山寒巖といふ洋畫家があつて、近頃茅原元一郎氏が手に入れた、ローレンス・ヘステルの肖像に、寒巖の落款がケー・ウアン・ダイク、二四四九、ジヤパン

と書いてあるといふので、寒巖の碑文を調べて見ると、

屢々泰西人の館舎に會し、其國學と書畫とを究む。西人大に賞異し、相顧みて言つて曰く、吾州の俊傑に樊泥龜と云ふ者あり、君幾んど庶幾き乎。(原漢文)

とあつて、樊泥龜をウアン・ダイクと讀むべきを心付かず、支那人の名でもあるかと思つて過ぎたのを、茅原氏によつて説明された。とかく漢字の困る事にはこんな事が起る。寒巖は外國の名人の名を稱して、自からウアン・ダイクと云うたなどは餘りに遣り過ぎである。

食物の國際化

鯉を味はふ人の最もうましとするは、その鱗にある。あのやはらかな鱗は味噌に煮ても、なんにしても、いふべからざる風味がある。然るに近來往々にして鱗の堅いのがあつて甚だ風味がない。だんくゝ調べてみると、それは獨逸種で、日本種でない事がわかつた。獨逸種は早く太るから、その點で調法がられて輸入されてはゐるが、風味においては頗る劣等で、お話にならぬ。魚類などの國際化は誠に閉口である。かねてメキシコから海老の盛んに來る事や、滿洲の大豆で豆腐を製する事

が行はれ出した事などを聞いてゐるが、追々食物の國際化は、日本特色の美味をサンクゝに蹂躪しよう。

西郷の犬

東台の高陵に建つてゐる、西郷南洲、獵犬を曳くの銅像、日本の銅像の最も早き作であるが、その伴うてゐる犬は日本種の犬であるのは、何人も一見知るところである。然るに西郷の愛犬はセツターで、それには妙な來歴がある事が知れた。明治の初年、瑞西の公使館の書記官にパウルといふ人がゐた。この人は後に書記官を罷めて、横濱で鐵輸入のアゼン

トをやり、終に日本に歿した人である。が、その在官中、日本の大官に交つた中で特に西郷と親しみ、西郷が薩摩に歸り、十年の戦争となる前に、パウルと別るゝ時、自分は死に行くのだ、と暗に戦争の事を告げたほどの懇親の關係があつて、パウルも、委曲を辨じ兼ねながら何か常ならぬ大事のある事を豫想して、切に自愛を西郷に勧め、その際にセツターを贈つた。その犬が西郷の獵をする毎に伴はれたのだから、銅像にはこの種の犬を添へるべきである、と楠瀬日年氏は語つた。このパウルの娘は相當の教育があつて、大津繪に趣味を持ち、久しい間楠瀬氏に學び、近く

歸國して本國の圖案に何か貢獻を志してゐるとか聞くが、パウルと西郷の親交、それに犬の事は、このパウルの語り傳へたところである。

納札狂

我國の納札に興味を感じ、しばし日本に来て、納札の講中にも入つた、スタール博士は、到頭日本に歿した。納札は社寺參拜の紀念に自家の名刺を社寺の建造物に貼付する簡単な行事で、天愚孔平と云ふ學者が始めたと云ふが、段々に種々の講社が競うて、納札に意匠を凝らし、滅多に人の參詣の出来ない山

奥などの寺社に納札して、それを誇りとするやうなことが競争となつて、終には一種のスポーツのやうになつた觀があるが、今でもある方面に於てこれがしきりに行はれ、江戸趣味の一に數へられてゐる。

納札には斯道の通人の書いた「納札大史」と云ふがある。それは納札の珍品を多く藏する、金川しん馬(甲山)の著はす所で、納札に就て尤も委しいものと思はれる。昔しは納札を貼ることを禁じた佛閣神社があつた。この張り難い處へ貼つて見たい、と云うて「なだ万」と云ふ人は、安藝の宮嶋へ七回も出かけたが、いつも番人に咎められて果さず、八度目に始

めて成就したとある。又「天下一乃げん」と云ふ男は、芝の御靈屋へ紛れこみ、文照院殿の額縁へ自家の名のある札を張り、それまで成功しなかつた「なだ万」の鼻を明かしたはよかつたが、直ちに捕吏に捉へられて、遠嶋へ流された。其の出發の時、友人が多く送つたが、「乃げん」の云ふには、今度も誰れもなし得ない所へ俺れは札を張つて來ると云うたと云うが、如何さま、流人の外ゆかない所には誰れも札は貼れない筈だ。

尺八

外國は機械萬能で、音樂のやうなものでも機

械仕かけである。初め外國人が日本に來た時、三絃を聞いて大なる疑ひを發し、どうしても三線で律呂に協ふ音が出る筈はない、と主張したと云ふも無理のないことだ。日本の三絃は全く彈手の熟練に待つものである。これと同じやうに、尺八にしても決して機械的ではない。外國の樂器でやゝ尺八に似寄りの物と云へば、クラリオネット或はオーボエなどであらうが、此等の樂器には歌口に振動器が、クラリオネットには一枚、オーボエには二枚附いてゐる。即ち振動板は外國の豎形吹奏樂器の特徴であると云うてもよろしい。然るに尺八には絶対に振動板が無い。然らば何が振

動板の代理をするかと云ふと、唇頭から出る細い空氣の流れが尺八の歌口の尖端で二分され、一半は尺八の管外に逸し、一半は管中に入る、此の空氣の流れが振動板の代用するものであつて、此の空氣の分量は決して一定して居らぬ。人に依つて甚しく違ひ、吹手の巧拙に依つて異なる。要するに、流れる空氣の操縦緩急に因つて、僅か五孔でもつて二十孔を有するオーボエと同じ音を發するのである。上手な吹手になると、二音近くも同じ孔の押へ方で出すことが出来る。指と唇は頗る親密な關係があつて、両者が嚴密繊細の調節を保つことが必要であるが、それは訓練に待

つ外はないのである。尙ほこゝに付け加へたいのは、竹の特質から生ずる一種の音であつて、それが振動板に代用する自然の妙もあると云ひたい。

旅の想ひ出

無聊の折柄、種々記憶を辿り、順境外れの旅のことを追々追憶して見ると、左の如くである。

一、木曾の僻地細久手あたりを木屐で踏破し、日暮れて足疲れ、宿に投ずれば、酒は何故か出さぬ。隣室の客も吾等同様に困つて、酒を買ひに出かけるのに、吾も頼んで

僅かに疲れを慰した。(帝大にある時代、岡

山兼吉君と同行)

一、關ヶ原に虎疫の檢疫所あり、三日の滞在を命ずるといふを不當とし、郡役所を訪うて夜半まで論戦し、吾等は虎列刺地を踏まずと立證して、僅に滞在を免れた。

一、木曾の御嶽を踏破して福島に下り、旅舎に宿せんとしたが、何れの旅舎も満員で宿し得ぬ。初めて木賃宿にとまり、却つて贅澤な飲食で一夜を明かした。

一、養老瀧の千歳樓で料理の押賣に辟易したことがある。内務の大官林友幸氏の巡視待受けが外れ、その料理全部をあてがはれた

迷惑さに、そこには泊らず、夜をこめて關ヶ原に赴いた。

一、富士山に登る途中、姥ヶ湯と御殿場の間で道を失ひ、身を没する茅茨の叢中を歩すること二時間、漸く御殿場に達した。前夜姥ヶ湯の不潔の宿に蟲に責められ、一睡も得ざる疲れも出て、御殿場の茶屋に、前後も知らず熟睡した。

一、木曾街道より甲州街道に出る途中、廣漠たる野原があり、人馬の往來もなく、荒涼の景頗る物凄く、僅に一旅舎を得て投宿したが、貧しい百姓屋にて、十四五の客皆一室に雜居し、半夜馬の嘶く聲に睡眠を得ず、

不快不安を満喫した。

一、四十年程前、一兩度、寒中輕井澤を経て或る茶屋に入つたところ、護寒のために火燵が土間に出來てゐて、杯盤はその火燵の上に置く。凍えた足の中にさし入れて杯を舉ぐるのは一快であつた。多くは烏鍋などを供した。

一、妻を伴うて雪中越後へ歸る時、清水峠に道伴の出來たるを幸ひ、人足共は妻につけて先に發せしめたが、常の往還は雪の爲めに失せて、終に谿谷に踏み入り、非常の難儀を醸し、漸く救助を得たことがある。

一、高田の新聞に筆を執つてゐた頃、一日親

不知の地を探らんと出かけたるに、歸途姫川が溢れて涉ることが出來ない。川附近の宿に二日計り滞在を餘儀なくさせられた時のつらさ。

一、この旅中、越中堺の或る貧弱の茶店に、飯を食はんとして菜を求めたが何もないといふから、そこに乾しつゝある魚を與へよと言つた。すると店婆は、それは一人に供するには餘り大きいと言ふを、構はぬと云うてそれを食べ、價を聞けば餘りに廉なる故、いくらかの茶代を與へた處、過分なりとて受けぬ。やつと取らせた當時の淳朴さ。なほ姫川の上流を涉るとて人夫の背に擔はれ

た、その駄賃に定額の倍を與へたるに、受け難い、とあとを追うて來たなど、今想ひ出してもよい心地がする。

一、宗家の主人と北海道漫遊の時、海峡を夜半に渡つたが、風浪が甚だしく、殆んど佇立が出來ない程であつた。それでも兩人同じケビンに寝て、十二時には起きて麥酒を取寄せて見たが、臺の上のコツブが船の動搖で掃出される仕末に遂に飲を廢したが、ボーイは吾等の船の強さに驚いた。

一、支那より歸る時、朝鮮海峡で名物の濃霧に遭遇した。二十時間程咫尺を辨じない爲め停船をしたが、初めての經驗で頗る神經

をとがらした。他船が或はぶつかりはしないかとの恐れもあつた。各船は盛んにドラや汽笛を鳴らして、危険防止を型の如くやつてゐたは勿論ながら。

一、小野梓、砂川雄峻兩氏と房州へ演説に出かけた時、まだ鐵道はなく、山野を三日計り跋涉したが、始終騎馬であつた。騎馬の訓練の無い自分は馬に翻弄されて、種々笑資を作つた。

一、大阪に滞在中、月瀬の梅溪を訪うた歸途、或る高い土堤の上を仂車で通過の折、車夫が過つて足を失し、自分は車と共に數十尺の堤下に墜落した。幸ひに怪我はなかつた

が、衣類は汚れ、大阪へその夜歸る豫定が狂つて、伊賀の上野に宿泊した。

一、旅中盜難に遇つた唯一の例は、越後から父を伴うて上京の途次、彌彦の旅店に宿した時で、同宿の客に紙入を盗まれた。紙入は棄てゝあつたが、金は取られた。自分等が去つた後、この賊を捕へるに大騒ぎをやつた事を後に聞いた。

一、鐵道の無かつた頃、信越の道中に乗合馬車があつた。これは所謂ガタ馬車で、頗る乗心地のわるいもので、寒中は別して不愉快であつた。

一、箱根の舊道八里を、籃輿で雲助の歌を聞

きながら旅したことも、今は昔の夢である。

一、囚人としての旅行は感慨の深いものである。毎夜警察の留置所に泊る、その味は普通旅客の想像し能はざる所だ。

一、政治旅行は陽氣なものだが、有志家が旅宿へ詰めかけて深更迄邪魔をすることは、實に五月蠅いものである。

一、初めて東京へ上つた少年時代、同行は母方の祖父であつた。宇都宮の盛んな旅館に入つたが、老少連れ立つての客と見くびつて待遇がよく無かつたので、怒つて雀の宮迄歩して宿つたことがある。その頃旅館には娼婦がゐた。

こんな思ひ出はまだいろ／＼あるが、勝槩地の訪問の旅日記は他の隨筆に收めてあるから、すべてこゝには省く。

已上旅の思ひ出のヘツドを語つたが、更にいろいろの事を思ひ起したから、前述の續きを話さう。

一、九州から東京までブツ通しの汽車旅、一人旅で、歸心矢の如くであつたが、六七回も同じ食堂で同じ食物に食ひ飽き、語るに談敵なく、備さに無聊を感じた。一週間も乗り續ける外國の旅行を思ひ遣らざるを得なかつた。

一、旅中往々にして出遇ひ何人も迷惑をする

のは、隣室に猥客がゐて、無遠慮の所業ある事だ。

一、東海道の夜行汽車で攫徒に懷中時計を拘られた。その頃は寢臺の設備が無かつた。直江津の宿にも賊に金を取られたことがある。

一、伊勢松阪藤之棚に宿して二三日滞在した或る日、日中出先から歸ると、自分の室に蚊帳を釣つてあつて、男女が寝てゐるのに驚き、癢に障つて、その宿を飛出したこともあつた。

一、越後から東京に通ずる清水越の僻土に、時間の都合で峠の麓のバラツクに一泊した

事がある。戸もない家で、食物の茶と云へば名も知れない樹の實などで、山から流れ落ちる水が枕に響くので一夜を不眠で明かした。

一、旅中宿屋に不足を言ふが、人の家に宿することの窮屈を考へると、どんな宿でも優しだと感ずる。岡山梧堂君と書生時代の旅行に、掛川で岡山君の親族の家にとまり、種々歓待を受けたが、好きな酒を自から遠慮して三日の長きに涉つた。

一、越後から會津道中で上京するに、昔し古賀から兩國迄夜船があつた。和船であるから船詰め、坐睡で済ますのだが、半夜、船

に酒を載せて賣りにくるあたりは淀川の夜船と同様で、雑沓中の一杯もわるくなかつた。

一、岡山梧堂君と四十日に渉る徒歩旅行で頗る足が慣れ、歸途甲州路では一日十七里を歩し、小佛も笹子も談笑の間に通過して、疲れを覚えなかつた。東京への態飛脚が吾等の健脚に驚いた。

一、同上の旅に、東海道筋で何かの都合で夜明け前に宿を出たことがある。行人を絶つ静寂の境を歩したのはこれが初めて、又終りであらうが、案外足の軽さを覺えた。日漸く上つた時の快は言ふべからざるものが

あつた。

一、僧房に宿した經驗は兩度ある。共に高野山である。初度の登山は女人禁制時代であつた。僧院とは云へ何不自由もない所だが、雛僧が給仕に出で、すべて精進料理であるなどが僧房らしく、流石に静寂で雑念が頭を拂ひ、拂曉庭におりて、冷水浴をやつた時には爽快を覺えた。

一、山陰道の旅行に城の崎の温泉宿に泊つた。立派な旅館で、自分に供した室に不満もなかつたが、主人は宿帳で私の名を見て、是非に本座敷へ移れと言はれて移つたが、如何にも堂々たるもので愉快を覺えた。こ

の館主は校友であつた。

一、二十三年の選挙に鹿を逸して、やけの旅行をやつた時、氣に喰つた所なら、どこにでも泊る主義で、龜崎の望州樓と云ふ宿につくと、三州が海を隔て、咫尺の間に見える風致がうれしく、酒を呼び、妓を召したりすると、このへんは酒の醸造地で酒はよく、妓とコツブ酒を鬪はして終に酔倒せしめ、翌日一日留連したことを思ひ起す。

一、雪中の檣旅行も案外興味がある。満目一白の處を、坂でも谷でも無差別に曳くから、頗る快速で、怪我の懸念もない。檣に箱をつけた仿風もあるが、それは却つて氣分

の悪いものだ。この旅行の経験は廿歳代には數々あつたと追憶が深い。

一、自分が内地を離れて隣邦をおとづれたのは、外國に觸れた唯一の例で、朝鮮、滿洲を経て北京へ赴いた。奉天から北京行の汽車に乗ると全くの外國で、支那語の外には絶対に通ぜず。汽車の内部も日本の式と異り、ビールなども日本製のものはなく、垢染みたタオルをボーイが顔をふけと持ち來る、喫茶の椀には塵埃が溜る、茲に支那気分をつくづく、と味は、とされた。此汽車には露國の貴族のナレの果てが淫を賣る爲め十數人乗つてゐて、外國人とそれ等が淫らな

行體をなすのには、つくづく當てられた。

一、五日間燕京に滞在中、ペキン飯店に宿した。これは東洋一と稱せらるゝ大旅館、純佛國式で、如何にも壯麗。寢室の裝飾は行き届いて、些の遺憾は無かつた。西洋へ出かけた経験のない自分も、この宿に泊つて大いに西洋気分になり、滞在の短いのを遺憾に思つた。

一、高山に宿つた経験はあるが皆露宿ではない。富士山の七合目と中食場に二泊したが、皆岩窟式の宿舍があつた。御嶽に登つた時も同社連中が泊る爲めの大きな家があつた。何にしても高地だから原始的の味が漲

つてゐて、人寰にない味がある。富士では烈風に遇つたから、たゞならぬ心地がした。鑛山地では足尾にも北海道の夕張にも宿した。餘り高くはないが、鑛山気分があつて特別なものである。

一、旅の内で一種特別のものは大隈侯に隨伴しての旅行で、いつも自分が宰領をした。汽車などはいつも一車借り切りで、各驛から面會の爲め車中に入り來るものが多く、大陽氣な大名旅行で、洋服嫌ひの自分も洋服の着づめで、旅舎へつくと、いつも訪客の包圍を受けるものは自分であつた。侯に演説を頼んだりするものが吾先きと争ふの

で、如何にも雑沓を極めた。越後から越中へ行く時に、汽車の時刻が連絡しない爲めに越中巡回の日割が狂つて、非常の面倒を生じたことがある。この時も越中へ入ると有志者の包圍を受け、大隈侯まで顔を出して、やつと時間割を改め、爲めに侯は朝飯前に出かけて演説さるゝ所があつたりした。議會が解散され、侯が首相として各地を廻らるゝ時も、自分は大隈侯後援會の會長として隨行したが、この時は各驛で停車時間に演説されたから、全く類例のない繁劇の旅行であつて、追懷殊に深いものがある。

一、早大經營の爲め數次資金募集に關西その

他の地方に旅した。その月日を數ふれば十數月に渉る。一ヶ所に長く滞在して、一ヶ月二ヶ月同じ處に旅館生活をやつたことも、この思ひ出に漏らし難い。斯かる目的で旅することは無趣味で、日々同じことを繰返し、相手に喜ばれない無心沙汰があるから、困しいことは非常である。およそこれほど神経に障るものは無い。何日力めても要領を得無かつたりすると、夜も寝られぬこともあつた。募集の帳面を坪内逍遙君に示して、これこそ一字千金の余が大作の詩だ、と戯れたのも此頃の心意氣であつた。

一、初度讃岐に渡つたときはその舊藩主松平頼壽伯の客分としてであつて、同行したから、滞在十日許りは日々松平家から五六人乃至七八人の人が、各所へ案内をしてくれて、大名旅行であつた。その際いろ／＼の會があつて、東京から地位の高い色々の人が來讚したが、伯の催された宴席では自分が主賓であつた。如何にも丁寧な待遇で思ひ出しても愉快を感じる。

つてゐる趣味ある案内者を校友中に得て、毎日各所を案内してくれたので、隈なく歴訪するを得た。

一、京都の名所舊蹟探りは七八回に涉つて略々涉獵することを得た。京都行の旅で最も特徴あるのは、近く御大典のあつた後、

妻孥を携へての旅であつた。妻は老境に入つてゐるが、鎌倉の外に會て觀光に出かけたことがないので、特に連れ立つて、妻を本位として十日ばかり遊覽したことは、家庭のレコードに特記すべき事で、一種の愉快を覺えた。

一、別府の温泉に浴した時、男女の子を携へ

た。大阪より乗船したが、二人を容るゝ船室の外に餘室なく、兒女の間寝たが、食堂に自分の爲めの備へがないので困つたが、兒等は船暈のため食を厭ふので、自分が代食して濟んだ。別府に滞在中初めて耶馬溪を訪うた。

一、廣島の臨時議會に赴いた時は、往く時も歸る時も大雑沓で、同縣の同志議員が同車したから愉快であつた。さて協賛の用が果て、歸京の途に就かんとすると、日々汽車が満員で料理屋に二泊するに至つた。やつと汽車に乗つて夜に入り神戸に着すると、こゝも大混雑で、辛うじて旅舎に宿す

るを得た。京都では多くの人と落合つて、骨休めと號して宿屋で豪遊を試みた。近衛公を宿へ招待したのも此時である。

白石の俳句

新井白石は偉い學者だが、この人でも世の風潮に超越する事は出来かねたと見えて、俳聖芭蕉とは時代を同じうしたために、負けぬ氣の白石は、芭蕉と俳句でせり合つた事がある。白石の俳句や俳名などは今知つてゐるものは稀れであるが、桐陰がその俳號で、その得意の作といはれてゐるのは、鶏卵の句に、
ゆで玉子絲でひもとく水仙花

また炭の句に、

白炭や朝霜消えて馬の骨

とあるが、これ等はたゞ形容が巧みだといふまで、意味も淺く風情もない。白石も終に芭蕉の敵でない事を自覺したか、或る時「孟子」の幽谷より出で、喬木に遷るの意を詠み、翻然悟るところがあつて深く前非を悔い、學者は詩文をこそ工夫すべきなれと、それよりは俳句をピツタリ休めた。その頃著名な學者に梁田才右衛門蛻巖といふがあつた。この人も俳諧をやつたと見えて、白石これを聞き、蛻巖ほどの詩才を持ちながら俳諧をやるのは、喬木より出で、幽谷に入るものだ。多分

よい事はあるまいというたが、果してそれから逐電した、と室鳩巢に語つたとある。白石は蛻巖の人柄を卑しんだと見えるが、蛻巖も亦、白石の死後に、信西入道に覆輪をかけたる癖物である、と罵倒互に容さなかつた。この逸事は前田夏繁の寒槩瑣綴に出てゐる。

名僧の川柳

仙臺の瑞鳳寺の住職であつた、南山和尚古梁は有名な僧で、齋藤拙堂が天下を周游して後、交つた人を月旦し、西には玉澗、東には南山ありと稱したほどの傑僧である。この僧後に勅を受けて本山妙心寺に入つた事もある。儒

學に精しく、詩文書畫に通じ、一時交游天下に満ちた。偶々松浦侯の甲子夜話を讀み、この僧の逸事一則を得た。この僧は酒を嗜んで量があり、酒次口を衝いて川柳が出たが、流石に學者であるだけに、俗人はその川柳を解し兼ねたといふ。今二句をこゝに擧げる。

李太白荔枝の馬に蹴つまづき

郝隆がへらず口より暑に中り

前句は、楊貴妃が荔枝を嗜んで、數千里の長途より輸送せしめた事と、帝が李白の詩才を愛して官に就かせようとした時、楊貴妃は、あの様に高力士に靴を脱がせるやうな泥醉者はおよしなさい、と止めた事を合はせて詠じ

たのであり、後句は、郝隆といふ學者が、七月七日中に腹を出して仰ぎ臥してゐるのを、人何故かと問ふと、吾腹中の萬卷の書を曝すのだ、というた故事を詠み、暗に罵倒したのであつて、南山の洒脱の風格がほのめき、共に面白く感ぜらるゝ。この僧は一號山庵、別號南屏山人、芝坡などの號もあり、俗姓笹野氏、相摸高座郡大澤村の人で、天保十年八十七で歿してゐるが、著書には叢林、貫華集、法苑詩規、南屏燕語、南山外集などがあつて世に行はる。

睡 菜

佐久間象山が吾郷里越後の水原に來た時、漢方醫家三浦茶亭と詩の應酬をやつて懇意となり、一日相携へて散策中、茶亭は水中より一草を拾ひ上げて象山に示し、これぞ近頃發見された靈藥で、極めて效驗のある、睡菜と名けるものだと教へた。本艸に相當理解ある象山は、しきりに耳を傾け、其煎じ方や用法などを問うて、旅舎へ歸つてから寄せた長篇の詩が吾郷里に傳はつてゐる。その詩は象山の集にも收められてはあるが、左に録載する。さて此の藥は睡菜と云ふからには眠藥に相違ないが、詩に説く所の效能はひとり睡眠に效あるのみでなく、胸中の熱を去り、沈痾を忘

れ、憂愁を解くとあつて、婦人が服すれば若返りの劑ともなるとあるから、此上のない靈藥と思はれるが、その草の形状も分らず學名も知れないので、爰に録して本艸家の解答を乞ふ次第である。

謝三浦茶亭指示睡菜

越北由來多靈場。我貪勝覽此翱翔。忽逢異人二情相投。相得逍遙野水傍。舉手示我水中艸。花葉婆娑數寸長。因說此藥近出世。極有神效一名漸揚。聞之喜躍不能禁。素方修治煮作湯。取付患人二妙無極。何讓仙家白玉漿。一啜清盡胸中熱。二啜沈痾欲相忘。三啜離憂頓消釋。飄然飛到何有郷。

中山美酒已怪誕。邯鄲仙枕亦荒唐。何如靈藥出至近。應驗端的起膏肓。寄言天下窮廬士。不妨世路歎羊腸。寄言世間離居婦。從遣芳姿畏秋霜。肺乾肝涸心曲亂。便應爲君一探囊。堪笑希夷陳先生。多年杜修睡功方。

右は雜誌「本艸」に寄せたものだが、後同紙上に、一讀者から、睡菜といふのはミツガシハのことでは無からうかとの問に對して遲日園主の答があるから、次に記しておく。從來から學者の言ふ所では其睡菜はミツガシハと云ふ草のことです。これには尙ミツバオモダカ、ミツバカハホネ、ミヅハンダ

などの名があつて、其圖が草木圖説、本草圖譜、日本産物志などの書に出てゐる。支那の説では、其根を鹽漬として食ひ、食ふと睡りを催すとあるが、果して然るや否やは分つて居ない。若し試験して見て無害に人を睡らす效能が見付かれれば催眠薬ともなすことが出来、頗る面白いことと思ふ。又その睡り工合が陶然と酔うた氣持ちになつてウツラ／＼眠らるれば尙更愉快なことと思はる。これは藥草の一で、西洋でも使用してゐるが、此れにはメニアンチンと云ふ苦味成分が含まれ、それが同科植物のゲンチアナのそれに似てゐる。そしてこれは強

壯薬として使はるゝ外、又尙ほ下劑若くは吐劑ともなる。此苦味は地下莖にも葉にもあるが、通常は葉を用ゐてゐる。葉は乾かしても其苦味は去らない。此草は學名を *Menyanthes trifoliata* L. とし、ひ、リンドウ科に屬する。我邦では諸州に産するが、或は可なり高い山原にも見ることがある。今その草狀を述べれば左の通り。
宿根生ノ水草デ、冬ハ葉ガ枯レ、春ニ新葉ヲ萌出スル、根莖ハ長ク横走シ、粗大デ、多節ノ圓柱形ヲナシ、泥中ニ在レバ白色デアルガ、泥面或ハ水中ニ在レバ綠色ヲ呈スル、其末端カラ二三ノ根生葉ガ出テ、數寸

ノ長葉柄ヲ有シ、柄端ニ綠色橢圓形ノ三小葉ヲ着ケル、ソノ小葉ガ「かしは」葉ニ似テキルトイフノデ、三つ櫛ノ和名ガ生ジタ譯ダ、春末頃ニ葉本カラ一尺内外ノ一花莖ヲ抽テ直立シ、梢ニ多花ヲ着ケタ一總狀花穗ヲナシテキル、花ニハ小梗ガアリ、萼ハ綠色デ五片、花冠ハ直徑約一五分位モアツテ白色ヲ呈シ、外面ニ淡紅紫暈ガアル、深く五裂シ、内面ニハ白茸毛ガ密生シテキル、雄蕊ハ五本、雌蕊ハ一ツデ、一花柱ガ一子房上ニ立テキル、此植物ノ花ハ所謂二形的デ、一ハ長雄蕊短花柱花、一ハ短雄蕊長花柱花デ、ソレガ各別株ニ生ズル、此短花柱

ノモノハ雄性トナツテ實ヲ結バヌガ、長花柱ノモノハ雌性ヲナシテ花後ニ略ボ球形ノ蒴果ヲ結び、種子ヲ熟サセル
星 秋 水
自分の郷里に於て、而も吾家祖傳海翁の門人の内から、刀工の名人が出たことは、これまで一向知らなかつたが、昨年歸省の節、舊友の隨筆中に其の小傳を得た。原文は稍々長いから其の要略をしるす。
星氏、名は秀興、大作と稱し、秋水と號す。越後下條村の人なり。其父鍛冶を業とし、家甚だ貧なれども、大作學を好み、郷の富

豪市島岱海に就て經史の教を受け、學業大いに進む。其父家業を失はんことを恐れ、強ひて學業を廢せしむ。大作思へらく、齊しく鍛冶を業とすとせば、刀劍の鍛冶となるべしと。父母の許を得て、會津に赴き、劍工秀國の門に入る。秀國は當時の名工水心子正秀の高足にて、角氏大八と稱す。秀國藩命を受け薩に入り、鍛冶の研究を爲さんとするに當り、師正秀に江戸に會す。正秀云く、卿若し薩に於て獲る所あらば、予に教へよと。秀國薩の奥大和守元平の門に入り、數年にして業を卒へ、師の諱の一字を受け、名を元興と改めて歸國す。秀國大

いに藩侯の賞賛を博したれども、其の技術は何人にも傳ふるを欲せず。師正秀と約あれど、これにも傳へず。爲めに破門を受くるに至る。嗣子も亦其の祕法を知る能はず。唯ひとり秋水のみ其の祕法を知り得たるは、三年の長き、人靜まる後、祕密の工場を偷み見て自得したる也。秀國も秋水の熱心に感じて免狀を與ふ。秀國歿したる後、祕法會津に傳はらず。秋水は去つて郷里に在り。保科侯秋水を聘せんとすれども應ぜず。唯秀國の嗣子に祕法を授け、且つ一二自作の刀を獻ず。侯賞するに金拾枚を以てす。此の事のために相當に地位ある官人鎗

を立て、貧鍛冶の家を幾回か訪問したるに依り、郷黨初めて秋水の名工たることを知り、爾後畏敬することゝなりたり。然れども秋水の家赤貧洗ふが如く家計も困難なりしが、保科侯賜ふ所の金は一錢も費消せず、富豪市嶋家に託して兒の學費に給し、兒を江戸の龜田綾瀬の門に學ばしめたりしが、不幸夭折す。秋水は、天保年間、七十年輩にて歿しぬ。

私の家の回漕業

私の家の曾祖父時代、乃ち嘉永頃に回漕業を營んだことがある。案外大規模にやつたらし

いが、關係書類が何故か家に一紙も存してない。唯だ當時を語る記念物は新潟の白山社に献じた繪馬額のみである。此額には新潟の港灣に船舶の満ちてゐる圖が描かれ、雲を隔てて城郭が現れてゐるのは多分新發田の溝口氏の居城であらう。此額は幼少の時から毎度見るものであるが、近年歸省の時、友人に寫眞を撮ることを頼んだが、額が餘りに大きく、取り外しが困難だと言うて、掲げてあるまゝ撮影してくれた。其の折額の寸尺を取つて貰つたのを見ると、横一丈一尺、豎七尺とあるから、取外しの容易でないことを知つた。額縁の右側には、願主差配人市島次郎吉正光と刻

してある。乃ち私の曾祖父である。左側には宿、近江屋利左衛門、加宿、室屋文右衛門の名が刻されてゐて、其の上頭に嘉永五年六月上澁、畫工の名を文昌と刻してある。これが唯一の記念物で、火災の頻々とする新潟において、この額が社と共に無事に存してゐるは洵に喜ばしいことだ。

舊記の徴すべきものが無く、當時の事情の知れないのは遺憾であるが、先考が晩年妻に語られたのを聞くに、最も盛んにこの業を営んだ頃は、千石船四十艘の多きに及び、各船は種々の物貨を積んで諸方に回漕し、歸着の時は千兩箱一個を齎し來るのを通則としたと云

ふのである。四十艘全部が千兩を齎したかどうか疑はしいが、假にすべてが通則通りであったとすると、一年四萬兩の金を得たことになる。當時に於て決して少ない金ではない。前述の額を白山社に奉納の時の事に就き先考の談を聴くに、新潟の歌妓數十人に盛装せしめて額を載せた車を曳かせ、市中を練り歩いたので、満市時ならぬお祭り騒ぎを演じたところがあるが、奉納済んでのその夜、全市の妓を總揚げして盛宴を張つた豪奢振は、今日でも新潟で故老の言ひ傳へが残つてゐる。多分この額を奉納した頃が繁榮の絶頂に達した時であつたらう。その後何年であつたか、大颯風が

起つて、多くの船舶が覆没した事がある。私の家もその厄に罹つて、一年に廿七隻の船を失ひ、それが爲めに家運が傾いたと言はれてゐる。曾祖父は貨殖の才があつて、頗る持重家であつたが、家を繼ぐ嫡子が二十五才で歿したので、曾祖父の晩年は、その妾腹の子に才略があつた所から萬事をまかせたので、客氣に逸つて遣り損じもあつたか、曾祖父は子孫に遺命を傳へて、海運業を決して營んではならぬ、と戒めたのは事實である。私の家名が意外に廣く各地に知られたのは全く回漕業の爲めであつて、船頭などで巨利を博したのもあり、三十年前函館に遊んだ時には、私

方の船頭が營んだ貸座敷がまだ存在してゐた。その頃は既に營業も變じ持主も更つてゐたが、人に誘はれて行つて見ると、土藏造り三階建の堂々たるもので、二階三階にも庭があり、各扉には私の家の定紋横木瓜と私の家の徽號をあらはし、眞鍮の大火鉢にも亦同じく定紋と徽號が刻してあるのを見て、船頭が主家の許も得ず、かゝる事をなしたのは僭上だと思つたが、實はこれも一記念物であつたが、いつぞやの火災で焼失して跡方もない。

妙な乞食

江戸時代の暢氣な天地には、乞食までが食を

得る方法として種々の考案を練つた。ある友人から示されたものに、當時乞食が持ち廻つた「謎」の紙片があつた。或る乞食は相當の才があつて、毎日謎を紙片に書いて、戸々に置き、其の解を求めて歩く。其配付を受けた家では、面白半分にその謎を解き、中ることもあり、中らぬこともあつたが、乞食は次の日に解を聞きに歩き、そんなことから自然乞食と懇意になり、快よく僅かばかりの錢米を與へたと云ふことである。又或る乞食は各戸の菩提寺を取調べ、其寺に就て戸々の過去帳を寫し、某家の何がしの忌日になると、其家を訪うて、今日は貴家の誰れ〜の何年忌に

當りますと云ふので、うつかり忘れてゐる家は、教へられて漸く氣がつき、禮を云うて幾何の錢を與へることもあつたと云ふが、その乞兒の所持の過去帳寫しは、なか〜精細なもので、これは活計の綱であるから千兩でも譲られぬ、と豪語したと云ふ事實もある。

總選舉句評

昭和七年二月の總選舉終る日、戯れに著名の俳句を以て評した。但し季節に拘はらぬのは句集に富まないからである。

寒き日街頭に出投票得點を見る
花までは出惜しむ足を若菜かな

候補者の叩頭

しなはねばならぬ浮世や竹の雪

淨化を口にする干涉

蝨嚙んだ口で南無阿彌陀佛かな

干涉巡查の横行

鳥さしの邪魔に飛びり松の蟬

投票の數は散財に比例す

朝貌も錢だけ開く浮世かな

黨の運動費分配

初雁や山へ配れば野に足らず

田舎代議士

人里へ出れば清水で無りけり

應援の前座演説

鶏肋百談

虫鳴やわしらも口を持つたとて

革新黨

我菊やむきたい方へつんむいて

政府與黨勝利

慾面の朝貌たんと咲にけり

民政黨凋落

桐の木やてきはき散つてツント立つ

鮮人一人當選

大勢の中へ一本松魚かな

初當選

うぐひすの鹿相がましき初音哉

麥の秋聲どのことし初めてヂヤの

貴族院

こちとらは花は咲かうが咲まいが

暗殺井上前蔵相の死

人は武士君小粒でも唐がらし

世の中よでかい露から先おつる

油斷大敵、機敏の運動者

總選挙

蜻蛉の來ては蠅とる笠の中

露の世の露の中にて喧嘩かな

大臣の田舎立候補

陣笠政治家

鶯や田舎廻りがらくだんべい

さまざまに責られて咲く菊の花

當選

内閣句評

豪い人になつたそうなと夕涼み

齋藤内閣成立の時、句評左の如し。

老代議士

齋藤内閣成立

今のめるまで花さく老木哉

さし當り當もなければ月夜かな

投票の地盤あらし

首相宣言

朝貌やおのが蔓かと蔦に咲く

どたばたは婆々の砧と知られけり

農村救助

初真桑堅にや割かん輪にやせん

焚ほどは風がくれたる落葉かな

國際聯盟

政友會

我なして我つまづくや鳴子繩

一抱あれど柳は柳かな

多額議員改選

憲政黨

今の世は絲瓜の皮も賣れにけり

蔦枯て我宿恥る隣かな

貴族院

安達謙藏

むだな身に勿體なさの日永かな

枯れたりと思ふだにさて梅の花

支那

新黨加盟者

それがしが宿は藪蚊の名所かな

來かゝりて一分別の蛙かな

此やうに枯れてもさわぐ芒かな

革新黨

きかぬ氣の江戸の門にも柳かな

讀書感興

滿洲新國家

私は老來、圖書の外に親しむべきものがない。

日々購ふ圖書は大抵寢後これを開し、書窓客なき時亦讀む。必ずしも趣味に偏しない、また必ずしも奇書を専らともしない。これまでに格別感興を覚えなかつたもので、深く感ずるものも少なくない。よつて思ふ、書物は文字のみについて讀むべきではない。もし文字そのまゝに讀んで味を感ずるとすれば、苟くも字義文意を解する以上、青年の時も中年の時も味は同一であるべきだ。然るに老來特に味を感ずる所以は、別に仔細がなくて叶ふまい。元來書は豎にも、横にも、左右よりも、また紙背よりも讀まざるを得ざるもので、その方面によつて各々その風味を殊にすといは

ば、附會の説の如くであるが、事實さうである。讀者の頭腦に識見備はり、世故の經驗もあつて、そして書を讀まば、文字外の事を讀み得、書中の事に同感を生じ、種々の聯想を起して、書外に味を生ずるけれども、青年時、頭腦一空の時代には、そんな事のあり得べきでなく、世故經驗を積みたる後において初めて會得し得るのだ。これは老境に入らざれば能はざるところ歟。所謂豎よりも、横よりも、左右よりも、紙背よりも讀むべしといふはこの謂ひで、決して附會の説でない。老來書味深し、といふは必ずしも老境多感なるが故とのみならずからずだ。

假名新聞二種

新聞紙の創刊は早く幕末にある。明治となつては追々種々の新聞紙が出たが、全紙を假名文字で組んだ新聞は、自分の知るところでは二つより外になく、その二つ共に明治六年のほとんど同月即ち一月を以て東京に發行されてゐる。この二つの新聞は、今存するものが極めて少なく、知る人もはなはだ稀である。私は偶然二種共にポスターをも併せて所持してゐるから、こゝにその大略を掲げる。一つは、表題「四十八字新誌」とあつて、「四十八字」に「いろは」と訓じてある。紙の大

きさは小奉書大にて、横に三線を引いて四段となし、表題のところは二段抜きで、前掲の題號の上に官許の二字を冠し、右方に紀元二千五百三十三年と記し、左方に明治六年一月第一號と記してある。第一號には、首端に二段抜きのまへがき(序)があり、それよりおふれ(御觸れ)、げいしやとせいのものへきそく(藝者渡世の者へ規則)、五せつくおはいしのわけ(五節句廢止)、せけんばなし、とすべて啓蒙的に假名でしるしてゐる。板式は整版で、定價百十匁とある。各紙の末項には「なぞ」の一欄があつて、次號にその解を擧げるのを例としてをる。版元は東京本所區相生町五丁

目二十一番地新々社とあるのみで編者の名はない。ポスターには簡単に発行の趣旨を左の如く記してある。

しんぶんしは、いろは四十八字にて、よのなかのいまのありさま、まいにちくくのおふれ、そのほかめづらしきはなし、むづかしきことよしをいちくしるし、たれにもよみてたのしみになる、おもしろきしんぶんしなり。

自分の藏するものは、一號より五號に至る、五枚に過ぎない。或は五號限りで廢刊したのかも知れぬ。この新聞は日刊でなく月刊であるから幼稚のさまが見える。他の一は「ま

いにちひらがなしんぶん」といふもので、前

のに比すると、體裁は雜誌に近く、半紙二つ折、一號三枚六頁。すべて活字に印刷してあるが、振假名を讀み易からしめん用意から、特に扁平の文字を作り、萬朝紙が曾て試みた字の如く、また西洋のアルファベットを組んで一語となす如き趣きあらしめたるは如何にも行届いてゐる。これは東京相生橋通神田淡路町二丁目啓蒙社の發兌で、前と同じく編者の名を缺けども、前島密男が早く漢字廢止を主張した、その表現の一端とも見るべきもので、市川清流、平野榮、山田敬三等を記者として發行せしめたとは、曾て男より聞くと

大徳寺の焼香場

ところで、購讀者が甚だ少なかつたために、永く刊行を繼續する事が出来なかつた。私の手に存するのは第十號で、何號まで出したのか知り難い。或は十號が最後のものであつたかも知れない。内容記事は前者同様で、必ず末尾に郵便蒸氣會社の消息を掲げるを例としたのは、男が驛遞事務を管掌した時であるからだらう。ポスターをも併せて所持してゐる。これは日刊であつた。ポスターは丈五尺にも及ぶ堂々たるもので、商標として赤色の蛇の目の旗を附してある。今となつては二新聞共に既往を偲ぶ骨董である。

寺門靜軒の「頼肩瓦甕」は、靜軒京都游寓中、遍歴の名勝を詠じた詩集である。各詩に名勝の故事が附してあつて、その叙事は靜軒一流の筆で趣味がある。大徳寺の詩は、豊公、三法師を抱き、信雄、信孝を抑へて焼香の前後を争ふ、豊公得意の所である。靜軒は太閤記中尤も光彩あるこの一節を捉へ來つて叙してゐるが、さながら軍談を聴くの思ひがある。靜軒は當時の新派詩人と云ふべきである。別項に掲げた、八犬傳芳流閣上兩雄奮鬪の漢譯と共に傳ふべきで、這般の文は漢文そのまゝ

で讀まねば生氣がないから、故らに時文に書き直さない。

大徳寺

鏡磬交鳴。讀經既畢。住主笑嶺和尚。揖衆退。侍者報燒香。前田徳善院。捧序次冊。就位未唱。柴田勝家揖信雄曰。公先拜。瀧川一益揖信孝曰。公共拜。二人將起。帷中有聲喝曰。且待。帷捲。羽柴秀吉朝服戴冠。抱三法師而出。加藤氏等我服陪從。衆愕然矣。秀吉曰。嗣君在此。二公何先。勝家曰。二公攝政。何必不可。且汝無禮。曷妄冠服。秀吉曰。君雖幼穉。名不可不正也。且蒙

勅階三位。僕亦辱任四位。國家多事。勅未布耳。服稱位。何無禮之有。且夫明智氏之反。信雄在岐阜城。擁兵二萬。聞變逃清洲。信孝在浪華。亦率兵二萬。畏縮收手。俟我西還。並不發復讐之軍。可不謂不孝與。汝亦駐若州。不出兵。讓討賊。一益亦然。可不謂不忠與。何面仰靈位。況先拜。二公赧然。二氏不能復爭。秀吉乃使三法師拈香。時天正十年七月廿一日也。距今茲安政三年。凡二百七十五年。當日景恍在目矣。不無感也。

回頭世事片雲浮。山色依然歲月深。多少英

雄骨皆朽。磬聲唯聽法堂秋。

八犬傳の漢文譯

譯文といふものは往々原作の精神を失ふもので、特にその氣格風調を譯出する事は甚だ難い。然るに菊池三溪が、馬琴の八犬傳中から例の有名な芳流閣上の兩勇士組討の一齣を譯した漢文は、その文簡にして、しかも原文の持ち味を遺憾なく移し來り、人をして讀みながら汗を握らしめると共に、覺えず快哉を叫ばせるので、却つて譯文が原文の壘を摩するとさへ思はしめる。原文と較べて一讀すべし。見八徑揮鐵尺。躍從屋之左角登焉。信乃

側身。不許敵近。揮刀當之。一進一退。一虛一實。開而又合。散而更聚。鏖角吐火。刀尖生風。屋峻而瓦滑。往々失脚。欲墜姑止。迭占其地步。刀響鏗。與邪許叱咤之聲。呼應上下。正是兩虎鬪于深谷。颯然風生。一龍爭於青淵。沛然雲起。眺絳霞于春夕。望虹霓於夏時。爭生死于飛閣。決勝負於雲梯。洵曠世之顯揚。絕代之快舉。觀者凝矚屏息而羅列。當是時。見八腕甲鏗衣。寸斷見血。堅忍不拔。刀。信亦刀刃缺裂。宛然如鋸牙。而氣益壯。膽益張。縱橫揮擊。疾如風雨。見八左右。揮鐵尺挑之。一喝擊其額。信乃舉刀支

之。刀從其鏢下折。折而爲兩段。鏗然星飛。不知其所在。見八呼白。獲矣。躍入其左腋。拳與腕相接。牢弗可解。二人搏擊。輒轉而下。如圓石轉于懸崖。翻身墜于千尋閣下輕舸之中。絃傾而維絕。水勢駛激。舟下如矢。云云

渡邊華山の借用證書

別項インチキ陳列中にある、渡邊華山が菊池惺堂氏の先代澹雅氏に差入れた漢文の借用證書は、大震火に失せて、惜しや今天地間に存在しないが、借用證書としては、天下無類のものであつた。借金の動機は、澹雅愛藏の會

心記圖冊を購はん爲めであつて、立原杏所を證人として、百五十金の内、當座五十金差入れ、残る百圓は七月十二月兩度で清還すると云ふ約束であるが、無論拂はれずに了つた。併し此の借用證書は、百五十圓倍額以上の價のある珍品だが、今は只だ其の寫しが自分の手に存するのみである。

立票人渡邊伯登。有米氏之顛。賭法書妙繪。如餓虎逐獸。不獲不休。又如激水赴壑。不能挽回。會借覽佐野淡雅所愛藏會心記圖冊。把玩數月。不忍手釋。擬奪則傷於義。欲休則疚於心央。立原君杏所作中。強索之。淡雅笑許。卽償以銀百五十兩。今輸納五十兩。

剩銀百兩分。七月十二月埃限完納。不致有負。恐後無憑。書之爲證。

天保八年正月

立票人 渡邊 伯登
作中人 立原 任

高村光雲翁と語る

當代第一の佛師と云へば高村光雲翁を推さねばなるまい。自分は或る會合で時々出遇ふことがあるが、翁は近年炎上した高野山金剛峯寺の金堂に置く佛像製作を擔當して、既に出來上つたと聞いて居る。自分から種々佛像製作に就て質問した。彫刻の際一刀三禮などい

うてゐるが、事實そんなことがあるか。翁の云ふに、それは敬虔の態を形容したもので、事實そんなことをやつてゐては仕事が捗らない。製作に取り掛らうとする時には、出来る限りの敬禮をする。常に邪念を持たぬやうに心をひきしめることはやる。工場に香を焚いてゐると語つた。作者の落款は佛體のどこに彫るかと聞いて見た。翁の答に、佛體を犯すことをしない。大體は光背のある處に彫ると云うた。尙自分は問うた。彫像は常に一つに専らで、それが奏工しない内は他に取らな、大概二體位を互ひ々に彫刻する。これが大事である。

餘り一つに専らであると、無我夢中となることもあつて、遂に修正の出来ない遣り損ひをするから、氣を抜く爲め他の像に手を着けて氣を轉換する。よい積りでやつたのでも、あとから、殊に翌朝になつて靜かに見ると意に満たない處があるので、徐ろに工夫を凝らす。寢後考へることも頻繁にある。氣を轉換して靜思の餘地がなければならぬと云うた。翁云く、いつも製作を初めるに當つて、先づやらんとする、或る時代の佛像の巡禮に出かけます。例へば、弘仁式の佛像を見るには室生寺へ参りまして、多くの弘仁式佛像につけひたつて十分腹に入れます。併しいくら腹に入れ

ても、手が腹に背くことがあつて閉口します。時代と云ふものは争ひ難いものでして、どうしても明治の手法が混じます。但だ摸倣をこれ事とする摸造家は却つて似せませんが、自分はそれをやりたくありません。つまり作と摸倣とは別であると云うた。材料に就て一二問ひ質したが、小なる像、置物の類は櫻材を佳とする。福島、水戸あたりのものがよろしいのですが、櫻材は長く持たないものです。佛像の大きくないのは白檀で刻みます。印度産がよろしい。大佛像になると檜の外はありません。これが千年を経ても無事です。外部がいくら荒れても、削つて中を見ると少しも腐

朽はありません。佳材は木曾の御料の材が最上ですが、得難いものです。乾燥二十年位を経たものがよいのですから、材を擇び且つ貯へることは容易ではありません。翁は語る、随分いろいろ作をやりましたが、有體に申しますと、満足したことは一回もありません。仕上げて見ると、どこか意に満たない處が必ずある。さればとてそれをやり直すとすれば生計が立ちませんから、不満ながらそれで済ませます。

中林梧竹感心す

書家中林梧竹氏、九州に遊ぶの日、西依成齋氏の書幅を手にし、久しく諦視して居つたが、

敬服措かざるが如き面持であつた。それと知つて傍らの人が「先生この書がお氣に召したか」と梧竹氏に問うたところ、同氏答へて言ふに、如何にもこれは成齋自身の書だ。私は長い間書を學んで來たとはいへ、未だに摸倣の域を脱したとは言ひ難い。誠にこの書に對して赧然たらざるを得ぬ、と云うたと云ふが、成齋の書は、拙であるが確かに一家の書だ。摸倣を全然免かれた書は如何にも稀れなもので、梧竹の感じたのは無理もない。

池田有親のアラスカ紀行

小島烏水氏が某雜誌に「山岳文獻の小展望」

と云ふを書き、其内に池田有親の「アラスカ氷山紀行」を挙げ、日本人の氷河登攀記の最も古いものだと云うてゐるが、自分はその當時此書を読んで、其の行程の危険に戦慄を感じただけ、今其書名に接して懐かしみを感じる。池田は亡友肥田野畏三郎の女婿で、亞米加にゐた頃、アラスカに砂金が澤山にちらばつてゐると云ふ評判に動かされ、明治二十九年桑港を出發したのだが、途中船は岩礁に乗り上げ、人跡未到の地に上陸し、船を氷塊に繋いだ所、池田は過つて氷底に落ち、漸く救はれて、氷河を攀ちて行く。其間には風雪に捲かれ、或は地震に襲はれ、殆んど凍死せん

として、三十八日目始めて緑林を見、遂に遠征を断念し、アラスカの首都に引返す迄の記は、如何にも人をして慄然たらしむる危険の記で池田がある地點に達するに氷河を踏えねばならず、それを踏えるには先づ氷に段を刻んで足場を作らねばならず、食料其他を背負うて、幾回となく此段を上下したことなどは、今尙ほ記憶に新たであるが、我邦人の冒險紀行では、恐らくこれが最も早いものであらう。

アラビヤ横断

横断に四十日もかゝつたアラビヤの大沙漠

も、今は自動車で廿四時間で横断が出来る事

あらう。

刀畔の印刻

となつた。亡友志賀重昂君の話に、自分は廿六時間かゝつた。そのわけは、恰も月夜であつたので、車を止めて携帯の日本酒を温め、一行と觀月の宴を開いたために二時間後れたというてゐる。追々この時間が更に短縮される事は疑ひない。空では飛行機が短時間で横断する事は勿論である。いつぞや或る山師が飛行機と自動車の競争を企てた事がある。その飛行機に、ベルギー王とペタン元帥に請うて、乗つてもらはうと云ふ計畫を立てたが、途中危険な事があるといふ事からそれは中止された。恐らく後には沙漠も遊覽地となるで

朝鮮在住の加藤知良と云ふ人は相識でないが拙著隨筆を読んだと云うて、自刻の瓦印二三顆を寄せられたことがある。氏の號は刀畔と云ふから、多分利根川筋が氏の出貫地であらう。氏はなか／＼篆刻に妙を得て居る。自分は氏の寄せ來つた印を喜び、拙著を贈つて謝した所、氏からの來簡に、君の爲めに百印を刻して贈ると申越された。自分は其厚意を喜んで、しかし百印を刻することは容易でない。一面識もない人にかゝる勞をかけること

は氣の毒と思うと、直ちに斷つてやつたが、其手紙を出して間もなく、百顆の印が小包で到著した。自分は其の敏速なるに驚き、百顆の瓦印を取り出して見て喜んだのは、亡友坂口五峯が自分の爲め畢生の力を注いで賦した「鷄血石歌」の長篇を百顆に分刻したのであつた。實は此長篇は自分に大切の意味のある詩で、誰れかに分刻を頼んで印譜を作つて見たいと思つたこともあるのに、流石は印人の刀畔、自分の隨筆に此の詩の收めあるを見て、印に關係のある所から、勞を厭はず、種々の篆體で百顆を刻し、殊に其印譜まで添へて贈られたのは誠に望外の仕合せである。加藤氏

は篆刻に妙を得て居るのみならず、瓦印を作るにも、亦畫を作るにも長所がある。氏をして朝鮮に埋没せしめ置くは勿體ないと思ふ。一言して氏に謝意を表す。

松平冠山侯の觀音千寺巡禮記

松平冠山侯の自筆寫本「江戸府邊觀音千個寺巡禮記」二冊を得た。侯の自序に據ると、愛兒十數名を失つた供養の爲め、親しく江戸中の千個寺の觀音を拜し、納札し、且つ千首の歌を詠じたとあつて、寺の所在地と參拜の年月日と和歌が一首づゝ録してある。この心願は文化五年の陸月に始まり、十三年丙子の神

無月に至り、八ヶ年を費して漸く參拜千寺に満ちたので、淺草寺の僧を招き、滿願の回向を營んだとあるが、交通の不便であつた當時、勉めたりと云ふべきである。冠山に最も懇親であつた佐藤一齋は長文の墓誌を書いてゐるが、其中に冠山が當時倭佛の評判があつたと云うてゐる。多分八年間の此の參拜がかゝる評判を立てたのであらう。全體冠山には正室がなく九男十六女皆側出である。随分多産の人であつたと見える。冠山は華胄界の大文人で、寛政中諸侯の文學を以て著はるゝものは、佐伯侯毛利高標、仁正寺侯市橋長昭と冠山侯との三人であるが、就中冠山侯は詞翰に於て

尤も優れたと云はれ、三十餘種の著述があつて、文人とあれば何人にも禮を厚うして遇した。著書の内には淺草寺志十九卷があるが、此の千寺參拜記は一齋の撰文に漏れてゐる。冠山は諱定常、字君倫、源姓松平氏、因幡藩主の支封で、明和四年十月に生れ、六十七歳で歿した。

指頭畫

一老畫家訪ひ來つて、余の爲めに、席上、指頭畫を作つた。其畫は中林竹洞の筆致があり、樹木雲烟峯巒皆可なり。自分はこれを見て感ずらく、指頭を以て畫を作る、人或は奇とな

せども、實は奇とするに足らぬ。既に胸中に山あり、之れを畫するに、其筆の毛たると指たるを問はんや。但し毛筆は靈に遠き機械で、指頭は靈ある機械である。異なる所は是れのみ。想ふに靈なき機を藉るより靈ある機を用ゐるの優れるに若かず。今我國俗食を取るに箸若くは箸に似たるものを用ゐるが、或る民俗は一切箸を用ゐないで、指を以て食を取る。其言ふ所を聞けば曰く、食物は舌のみを以て味ふべきものでない。其の實體に就て硬軟澁滑を味ふは最も大切で、それには觸覺を藉らねばならぬ、箸を用ゐない所以であると。此言甚だ理あり。指頭の畫も恰かもこれと同じ

く、一滴一滴、靈感を以て墨を落して行く、寧ろ畫を作る本旨に適ふと云ふべき歟。予試みに畫家に此説を陳ぶ。畫家亦然りと答ふ。

雲華の書幅

雲華上人が藏書の五絶を書した一幅を得た。上人の蘭竹は珍らしからざれど、自家の文庫に題する詩であるだけ面白い。其詩に云く、
卜得藏書地。身安計不非。良朋曾有句。文庫障斜暉。

雲華七十七翁

文庫が日除けになると喜んでゐる、眞率味ふべし。誰れやらの句に「藏賣りて日當りもよ

し菊畑」といふがある。これは貧乏になつての負け惜みがほのめくが、上人の詩は其反對で、富饒の相が見えておもしろい。自分も夕日のさすは大嫌ひである。

萬物一馬

自分は大雅堂池霞樵が刻した「萬物一馬」の印を珍藏してゐるが、此の印文を、久しい間、禪語であらうと思つてゐたが、熱海に坪内逍遙翁を訪うた折、此の語の出典を質した所、翁にも確たる説が無かつたが、其後、出典は「莊子」だと云うて左の如き手紙に接した。
昨日ふと莊子を繙き候處、

天地一指也。萬物一馬也。

にぶつかり候、齊物篇に有之候、「馬」は「數」と讀ませあり、ツマリ、天地萬物、常識上よりは別てども、其實は差別なし、一本の指も、われの彼れのと別つは常人の爲す所、博奕で賽の目を投るも同じ、彼れのわれのと別てばこそ別の物となれど、大局より見る時は、畢竟同一といふ意味らしく候、要するに「馬」の字は動物のそれではないらしく候、御參考迄に申入候
この一簡に依り漸く諒解することを得た。馬を動物と考へるから、諒解し難いのであつた。

舊惡全書

郷國の書店の主人が坪内逍遙翁の舊著「該撒奇談」と「書生氣質」の初版を携へ來り、翁に署名を願ひたいと云ふから、依頼に及ぶと早速書かれた。自分はそれを讀んで絶倒すると共に、翁の諛諂に恐れ入つた。翁は常に此等の舊著を「舊惡全書」と云うて居らるゝので、識語は舊約全書に因んで、創世紀第一頁の譯文句調で、左の如く筆を走らしてゐる。
シーザル奇談の扉には、

舊惡全書の一

創作記

はじめにわれ此譯を試みたり。地はカブキでなく、淨瑠璃でなくして、暗雲の趣きあり。……是れ初めの筆なり。
壬申春日
老小羊
書生氣質の巻尾には

舊惡全書の二

創作記

われ神髓を綴りて、舊の小説の質と新の小説の質とをわきまへたり。……是れ二筆なり。われ思ひけるは、新の小説の質は雛形が示されて、さて好き作もあらはるべしと、即ちこんな變な物出來ぬ。……是三筆也。

老小羊

汚れた古本も、翁の此識語を得て、頗る珍本となつた。

合理の怪談

今時不思議物語りや、妖怪譚などいふ小説を書くに、大團圓はどうしても合理的でなければならぬ。その材料はいくらもあらうが、自分がフト氣の付いたのは、或る害蟲などは好材料として及第するものだが、まだ誰も小説に使つてゐないやうである。いつぞや臺灣在住の人から同地の白蟻が家屋の木材を侵蝕する事の恐るべき話を聞いた事がある。臺灣の白蟻は如何にも猛烈で木を噛む音がありあ

鷄肋百談

りと聞えるというてゐる。外部から見ても、ほとんど細孔すら見出し得ないのに、内部は全然洞になつて、柱でも棟木でもさながら紙で細工したものゝ如く、中は殻穴で、いつ何時崩壊しないともいへないほど甚だしい侵蝕をうける事がある。それに氣が附かなければ、風で倒るゝまでもなく、憑り掛つたゞけでも柱が折れ、それに支へられてゐる棟木が一時に崩壊するやうな危険があると聞いた。妖怪譚などには、よく深夜人定まると、奇怪な音がどこともなくするので、燭を秉つて探して見ても何も見當らない。毎夜々々靜かになるとこの音が眠りをさまして、氣味がわるくて

四三七

たまらないなどいふ事は極り文句であるが、白蟻のなすところはまさにその如くである。さてかゝる無氣味な折に靜かに柱に觸れるとその柱が率然搖ぎ出す事があつたら、どんなに人の畏怖心をそゝるであらうか。さらにまた何事も無いのに、遽に軒が傾き、天井が墜落する椿事が起つたら、どんなに人を驚かすであらうか。かゝる事は事實あり得べき事である。今一つは、船體を食ひちらす害蟲である。通例ふなくひむしというてゐるが、船員と同じく、水上生活をしてゐる蟲で、木造の船に食ひ入り、板を蜂の巢の如く食ひあらすものであるが、外部からはほとんど辨じ兼ね

るので、ウツカリすると、不意に破壊するやうな事が起る。實に危険なもので、水上の危害だから、白蟻の侵蝕よりも一段恐ろしい。勿論この蟲害は、船體ばかりでなく、棧橋や防波の杭などにも食ひこむから、外面何事も無いのに橋が突然落ちたり、船の舷側が忽然崩れたりする事が事實あり得るので、こは不思議物語りや妖怪譚の材料とするには屈竟のもので、脚色次第では優に人をおどかすに足る。例へば船を陸近く寄せて河杭に繋ぐとすれば、杭が忽ち折れる。船の舷側が僅かの壓力でめり／＼と崩れて、人は入水の難にかゝる。泳いで漸く橋に取りつかんとすると、

これもその刹那に水に落ちこむといふ如き、便りない事は、極端の例ではあるが、妖怪譚

以上に人を戰慄せしむる。そして理を外れた無稽の事ではない。心得のあるものにはわけがわかつて、否らざるものには驚異であらねばならぬ。諺に石橋を叩いて渡れといふのは用心の深い事をいふのである。實際木橋を渡るには叩いて試みねば危険の事がある。船の底でも、舷側でも、叩いてみなければならぬ事がある。古屋を購ふにも、柱など叩いて診察する必要があらう。蟲害は往々閑却される事だが、妖怪譚の材料となるほど危険の甚だしいものだ。

匂ひ

物にはさまざまの匂ひがある。それを最初に嗅ぐと強烈の香氣を感じるが、慣れると段々感じが薄らぎ、終には氣のつかんやうになる。自分などの青年時代、西洋人に就て語學を教はつた頃の事を追懐するに、吾等の鼻は餘程幼稚であつたと見えて、洋人に近づくと妙な異臭を感じた。而るに今日洋人に接しても當時の如き感じはない。恐らく喫烟、飲食などが西洋人のそれと同様になつたからであらう。日本の飲食物で毎日慣れてゐるものは格別香氣を感じず無意識に過すが、二三年も

外國あたりへ旅行して、日本の飲食物と疎遠になつて歸り、日本の糠味噌や醤油などの匂ひを嗅ぐと、その香氣の如何にも強烈なのにアツト驚歎するとは、洋行歸朝者のよく云ふ所である。絶対に喫烟の禁ぜられてゐる監獄に、誰か密かに禁を犯すものがあると、看守に直ぐかぎつけらるゝのも矢張り同じ道理である。

人間には分泌作用で體臭がある。兩性に依り多少の相違がある。殊に女性には粧飾用の膩粉が匂ひを添へるから、兩性の體臭に著しい差を感じる。敏感の婦人が良人の仇し女と接して知らぬ顔で歸つてくるのを、直ちに其祕

密を知るのも男性にあり得ない移り香が證據立てるからだ。男女兩性が持つ特異の匂ひが戀愛や性慾にどんな關係を持つか、其の匂ひに依つてその持主を思ふのは聯想であるが、匂ひと性慾の關係はそんな淡泊なものでなく頗る強烈であつて、これほど性慾をそゝるものはないと云はれてゐる。在監の女囚が愛人を思ふやるせなさに、愛人の體臭あるハンケチを鼻に當てゝ、あられない態度をなし、獄則違犯とされた例は、シヨワジ女史の獄中性愛記録にもものつてゐる。體臭は身體そのものと最も近いものであるから、それが情慾を刺激し興奮を生ずるのも當然の事であつて、

男女の當事者が最も相手の體臭を嗅ぎわけける筈である。随分或る人に忌まれ、或る民族に厭はれる體臭が、此上のない刺激として或る人或る民族に喜ばれることは周知の事實で、今更絮説を要すまい。

禽獸草木に於ても其の香氣は性慾を媒介するものとなつてゐる。麝香などが雄の陽器の邊に具つて、それが雌を曳き寄せる爲めだとされてゐる。花卉の香りなどは、人間の方では勝手に己れの方へ引きつけて、人間を喜ばせる爲めの香氣だとして居るけれども、これも蟲を引きつけて、其の媒介を藉り、雌雄が交接を達成する爲めとも云はれ、亦媒介を藉ら

ず直ちに交接を達成するものもあらう。誰れかの言つた詞に、花木は戀を語るも聲を持たぬ、その香りこそ互ひに戀をさゝやく無聲の機だと云うたが、至極同感である。

弄 痛

身體に苦痛を覺えると云うて、それが一概に疾患ではない。懷妊などは果して病患であらうか。時に苦痛もあり、圓滑に分娩が出来ないと、死を致すこともあるけれども、全體兩性交接の結果であつて、その受胎を誰れも病に罹つたと云ふものはない。見舞に来るものはお氣の毒とは云はず、お目出度いと祝す

るが常で、妊婦も分娩を樂みに嬉しい氣がいつも漲つてゐる。十ヶ月間の身重は苦勞でも敢て人に訴へないのはお目出度いからである。斯様に病に似て病にあらざるものゝ経過や症状には、普通疾患に就ていふのと別段の名があつてほしいのであるが、そこにゆくと支那は流石に巧者である。支那の女科百效全書に「十月不足、臨産腹痛、或止不定、名曰弄痛」とあるのを青木昆陽が搜し出して、弄痛とはよく名けたと云うてゐるが、如何にも臨産近くに胎兒が動き、シクシク痛むのを樂天的に又非病的に「弄」の字を撰んだ所に興味がある。事實妊婦の心地も苦痛を樂しむ

ながら味つてゐるのだから、弄の字が當つてゐるのだ。

昔の名高い産科醫の説に、子の生まるゝのは自然に生れるので、産むのではない。藥を以て大便を通ずるのは大いに異なるものがある。世俗によく云ふことだが、産は天道様にお任せすれば安産疑ひなしと、全く其通りである。臨月になると、直ぐに産婆を迎へて妊婦に侍せしめたり、少しく痛めば産婆が揉んだりするのは、手厚い用意のごとくであるが實は自然に悖る措置で、これが爲め却つて難産となることがある。まして分娩を速める爲めに胎兒を壓迫するときは危険の甚しいも

ので、産婆を餘り早く呼ぶことが實際に却つて危険を生ずる。産婆は豫め招き置くべきものでなく、愈々分娩が逼つて始めて招くべきものだ。産婆が來たと聞くと妊婦が早や分娩と心得て自然無理をすることもあつて、難産となることがあると云うてゐる。産婆を頼む資金もない貧家、産婆の居ない寒村に案外難産のないのは、自然に任かすからだと云ふのも一理あるやうに思ふ。

家 鴨

魚鳥其他の食物が昔し排斥されて、今美食として珍重されてゐるものがいくらかもある。江

戸兒が家財を典しても購はずては氣が濟まぬ鰹などは、昔しは下司下郎でも喰はなかつたものだが、それが今時貴人も賞玩するやうになつたとは、徒然草に書かれてある通りだ。家鴨などは今美食とされてゐるが、久しい間食はれなかつた。今日でもまだ喰はない地方がある。ツイ此頃薩摩の友人に尋ねたら、今でも喰はぬと聞いた。何故に、家鴨が食物として忌まれたかと云ふに、あれは各戸の流し尻に飼はれてゐるので、汚水と親しむ關係から其肉に臭氣があるのと、其の汚水から受けらる菌で、其肉を食ふと腫物が出來ると言ひ做されて、誰れも食ふ物にせなかつた。江戸

時代に深川に「あひる」と名づけた、いやしい娼妓があつた。それに接すれば腫物を發すと云ふので、此名があつたのである。唯だ此の鳥の玉子を舊曆の四月八日に喰へば中風に罹らぬと云ふ傳説があつて、玉子だけは食はれたが、家鴨の肉は顧みられなかつた。それがいつ頃から「あひ鴨」などと呼ばれて珍重されるやうになつたか、委しくは分らないが、江戸時代の末期に書かれた四壁庵茂蔦の「忘れ残り」と云ふ隨筆に、或る質金を所持するものが、十月十九日の傳馬町の腐市の混雑に乗じて、一羽の鴨と質金を換へて喜び歸つて其の鴨を検すると家鴨であつたので、人々に

ひやかされ、己れに出づるものは己れに返るは道理だ、質金で質鴨を買ひ當てたのに不思議はないと冷かされて、餘りの腹立しさに家鴨を家近き溝へ投げ棄てたとあるが、かゝることのあつたのは決して古いことでない。さて何の動機で、あれが取り上げられて珍味となつたか、實はあれほど脂肪に富んだ濃味のものはない。唯だ忌はしい臭氣は飼料に依つて取り去らるゝもので、兩國の有名な家鴨渡世鳥安などは此臭氣を除くに可なり苦心したと云ふ話を聞いたこともあるが、實は家鴨は食饌に歓迎を受くべきあらゆる素質を具備してゐるものである。それが今日珍重さるゝに

至つたのには不思議はない。

狸の擧丸

「狸の擧丸八疊敷」と云ふ俚言は古くから傳はつてゐるが、このものゝ擧丸は體軀の割合に大きいにしても八疊敷と云ふのは餘りに誇張に過ぎる。但だゴムのやうによく伸びる形容だと見ればそれで済むが、或る隨筆家から教へられて面白く感じたことは、金箔を伸ばす工場には狸の擧丸が無くてならぬもので、金を叩き伸ばすには必ずこのものゝ擧丸の皮で金を包むことゝなつてゐる。そしてそれを叩くには種々の作法があつて、緩急其度を過

つてはならないが、口づから「叩けば金箔八疊敷」と唱へつゝ打てばよく伸びるものとされてゐると。自分は最初これを聞いて一笑した。狸の擧丸はよく伸びるから、その皮を包料に用ゐ、叩くにも八疊敷を唱へるなど、皆一種のマジナヒに過ぎない、別に理窟のある譯であるまいと。然るに更に同じ隨筆家から教へられたことだが、西洋でも金箔を伸ばすには極緻密な牡牛の盲腸の外皮を包料とする」と云ふことだ。して見ると伸金の工程には皮を要することが同一で、唯だ其皮が狸の一物であると牛の盲腸であるとの差があるだけのことだ。自分は爰に於て狸の擧丸の皮を金の

包料に選んだことの意味あることを初めて悟つた。全體金箔は叩き伸ばせば九千分の一耗の厚さにまで薄くし得ると云ふから、八疊敷と云ふも強ち誇張でない。その八疊敷の伸張力ある皮を選んで、伸金の工程の用に供したのは誰れの創意に出たか知らないが、滑稽味の間理の存する所が一興だ。

茶

(一)

茶に就ての雑話を思ひ出づるまゝ漫りに書きしるす。宇治は茶處で、茶の名産地である。往年始めて該地に遊んだ時、四五の連れがあ

つた。晝時或る茶店へ入つて食事の注文をすると、茶料理もありますと云ふから、其の獻立も聞かずにそれがよからうと、皆々同意して配膳を待つてゐると、間もなく持ち運んできた。膳部のあるとあらあるものが皆茶であつた。向付けには茶の胡麻合、汁の實も茶、皿にも茶、飯は勿論葉茶を焚きこんだめしであるので、皆々一驚を喫したが、喫して見ると案外味がよいので、これは黄檗山の普茶料理以上だなど、褒め立て、貪り喰ふものもあつたが、茶の利目は的面で、食事を済して立去らんとすると、一行中の最老者は疝氣を起して腰が立たないので、笑つても居られず、

皆々介抱したことがあつた。

(二)

越後新潟に館柳灣の後を承け、館を姓とする老茶舗がある。自分が歸省した時、その家の主人が自分を旅宿に訪ねて來た。偶々新潟に競馬のあつた際だから、談は自然競馬の事に及んだ。館の云ふには、此度の競馬は景氣がわるい。自分は茶を商ふから、その賣れ方の少ないので之れを知ると云うた。自分は不審に思つて、茶と競馬は何か關係があるかと問ふと、其答に、馬の所持者は競馬に先立ち、必ず玉露の銘茶を粉末にし、之れをビールに和して馬に飲ませるのが通例で、馬はこれに

因つて忽ち昂奮し、疾驅平生に幾倍するものがある。玉露の多く賣れないのは乃ち競馬の景氣のわるい時だと語つた。自分は馬の酒を嗜むことは知つてもゐたが、茶をビールに和して興奮劑とすることは初耳であつた。

(三)

或る友人といろ／＼舊を語つた折、談は選舉の事に及んだ。自分の云ふには、自分は酒を好むけれども、選舉の酒には困つた。今は取締が嚴で、選舉人に酒を振舞ふことは絶対に出來ないが、自分の選舉を争うた頃は、事に託して宴會を催すこともあつたが、三四十人を會して一人残らず獻酬するのは大儀の事で

あつた。一人でも漏らすと不公平の怨訴を受けるから、是非一周せねばならんが、田舎酒のヒドイのを喉へ通すのはつらかつたと云ふを聞き、友人は俺れは茶で困つたと語る。此人の選挙區は名古屋市であるが、名古屋は今でも抹茶が流行して、較々目ぼしい家には大抵茶室があり、客に對して相當の待遇をなすには、茶室に案内することが常となつてゐる。

選挙運動で或る家を訪ひ、茶室に導かれるれば凡そ其家の主人は自分に同情があるものと卜し得らるゝから、喜んで茶室に伴はれるが、茶には法式があつて時間の潰れるので困るけれども、有力なる一人を味方に引入れ、ば近

隣の人も相和するから、時間潰しは辛抱も出来るが、勧めらるゝまゝに抹茶を啜つてゐては腸胃がたまらない。三四軒訪問して同じことに出會ふと、疝氣が發してどうにもならない。現にこれが爲め病を得たこともあると云うたが、如何さま、茶の流行の處には自分の想像外のことがあると思つた。

(四)

茶家が珍奇の器物を集めて客に誇るの風あるは風流界の陋習だが、支那も日本と同じことで、明末清初に毛晋汲古閣と云ふ學者があつて、十七史、十三經、其他多くの書物を刻して後世を益したが、此人の子孫で莫迦に煎茶

に凝つたものがあつた。其凝り方は常經を逸し、茶は何州のもの、水は何河のもの、と百里先きから取り寄せ、行爐、茗椀、急須等々何れも二つとない名器を取揃へたが、さて困つたのは薪炭であつた。これだけ名品が揃つて、薪炭が平凡であつてはならぬと、百考の後漸く思ひついたのは、父祖の刻した板木は家寶ではあるが、此場合割愛は已むを得ないと、某詩集の板木を取り出し、それを寸断して薪炭としたとあるが、好事もこゝに至つては人をして啞然たらしめる。

(五)

去年故郷へ歸省の節縁家を訪づれて、茶器に

就き一奇を感じ、一笑を發したことがある。此家の茶の間には古くから傳はる茶托がある。それは薄い板で作られ、長さは二尺五寸もあつて、手許はやゝ細く、頭部は少しく廣く、そこに圓形の穴が穿たれ、之れに茶碗の香臺をハメて客に供するのである。その形は笏の如くで、如何にも奇古で、説明を聞かねば茶托と思はれないものであるが、手廣ろの茶の間で、主客が大いに隔たつて坐してゐる場合、居ながら客に茶をすゝめるには、かゝる茶托で無ければ茶碗は客に達しないから、こんな工夫をしたと見える。自分は戯れに此器を棒式の茶托と名づけた。

酒

(一)

滿洲事變で毎日々々血腥い戦報に接到する昨年の今頃、銀座を散策して午頃になつたから資生堂裏の濱作に立寄つた。さて何を下物として酒を飲まうかと一寸考へた。出征の同胞

が鮮血を灑いで戦つてゐるのに、赤い血の出る魚族や貝類は避けたいと思つて、主婦に赤い血のない魚はあるまいかと問ふと、あはびもある、烏賊もある、蟹もある、海老もあると種々列挙するので、蟹と海老とを注文して一杯を傾けて居ると、端なく號外々々と叫ぶ

聲が戸外に喧しいので、亦何事が起つたかと買はせて見ると、三井の總務團琢磨氏が、刺客に銃殺されて即死したと云ふ凶報であつたので、折角血を避けてゐるのに、此の血腥い兇變は何たる事ぞと、遽かに興がさめて倉皇として立去つた。

(二)

又或る日の散策に、日本橋筋のさる骨董屋で二三の小品を購つて、それを懐中して白木屋脇の甚兵衛に入つて一杯を傾けた。自分はいつも散策には女兒を伴ふのが例であるのに、此日は伴はなかつた。此家はいつも可なり雑沓するのだが、此日は時刻が晝にはチト早か

つた爲めか、誰れも客は居らず、自分一人では何となく物足りないやうに感じ、フト考へたのは、先刻求めた小品の内に二つまで人形があることに気がつき、それを袂より取り出して卓上に置き、それを酒の相手とすることにした。これは自分の獨創ではなく昔しから似寄りのことをやつた例もあるが、偶然先蹤を逐うて試みると、なか／＼面白い。自分は

心の内に思つた。此の玩具は自分の童心を培ふ可憐のものである、今日自分の手に入つてこれから自分に養はるゝことになり、先づ自分の宴に侍したのであると考へ、酒をすゝめたり食を供したりして、漸く酒興を發し、こ

れはよい相手だと感じた。何を當てがつても不足を云はず、何事も自分まかせであることが大いに氣に喰つた。これが人間であれば、種々の欲望を持出すであらう。下戸などは、私に酒を戒めたりするであらうに、何と云ふおとなしい事であると、酒食が終ると人形を愛撫して懷ろに抱へて此家を去つた。

(三)

自分の若い頃に酒の乞食とも云ふべきものがあつた。乞食に見舞はれるなどは誰れしも厭なことであるが、自分は此乞食を愛した。それは酒を好むからではなく、錢の乞ひ方が如何にも淡泊であつたからである。いつも私方

へ来ると、先生にお目にかゝるには及ばない、一寸筆紙を貸してくれと云ふ。書生が筆紙を差出すと、「請ふ一杯の料を賜へ」と書くのが常例で、十錢より以上は決して無心を云はなかつた。此男は中島基と云ふ佛蘭西學者で、中江兆民の亞流である。學問は相當にあつたが、酒の爲めに放浪の身となつたのは惜しい事である。尾崎學堂君なども此男を愛したらしく、一杯の料を與へる代りに、交換的に延いて佛蘭西語を習つたと聞いたことがある。

(四)

自分の郷里の友人に酒を好んで、三食共必ず酒を飲むものがゐた。二三年前歸省した時、

自分の旅宿へ訪ねて来たから、不相變朝から酒を飲むかと尋ねたら、輕症ではあるが中風に罹つたので、朝酒は廢したと云ふ、自分は更に問を起し、それなら晚酌は幾らかやるかと聞くと、晚酌はやらんが晝酒を飲むと云うた。自分は妙なことと思ひ、晝酒は持ち越して愉快なものでないのに、何で晝酒を飲むかと聞いたら、晚酌をやると酔後眠るから甚だ勿體ない、少しばかりさへ飲まない酒だから酔心地を成るだけ持續したいので、特に晝酒としてゐると云うたが、如何さま酔心地の漂ふのは尤も晝にある、此人の如きは眞に酒の三昧に入つてゐると感じた。

(五)

葡萄の美酒、夜光の杯と詩人が謳ふのを聽くと、葡萄酒は王侯貴人で無ければ口にされない贅澤品と感ぜらるゝ。事實日本などでは、葡萄酒は可なり贅澤品となつてゐるが、葡萄酒を造る本家本元の佛蘭西では、農夫でも職工でも、食事の時には必ず幾杯かを傾ける習慣があつて、彼等が田園や工場へ出かける時には、必ず辨當の外に一瓶の葡萄酒を携へる。家庭から食物を父兄の働き先へ運ぶ場合にも決して一瓶を添へることを忘れない。吾れ吾れから見ると佛人は如何にも贅澤であるやうだが、これが事實である。一面から見ると、

佛人には全然下戸はないとも云へ得る。事實に於ても佛人に下戸は無いのであつて、あの國の習慣として女子でも小兒でも此の習慣に涵つてゐる。丁度われ／＼日本人が食事に味噌汁をかかすことが出来ないやうに、食事は必ず葡萄酒が附屬する。此酒は料理の一部であつて特に料金を取ることをしない。それを知らずに或る日本の貧書生が食事の注文をして葡萄酒が添はつてきたのに、ポケットの空乏を氣にかけ、正直に酒を飲まなかつたと云ふ珍談もある。佛國の葡萄酒の取扱ひは我國の番茶や味噌汁と同じやうなものだ。佛國は上戸の羨む國である。

(六)

蜀山人の姉の子に紀定丸と云ふ狂歌師がある。頗る豪酒で、べし、べからずの對句で、酒頌十則を作つてゐる中に、暇乞なしの非禮は時宜によるべし、長尻の譏をうくべからず、狸寝入はしばらく學ぶべし、満酌はいさぎよかるべし、天水桶と爲す可からず、酔てはすこし壯なるべし、其終を忘る可からず、卯の時酒(朝酒)は季節によるべし、晴天白日には用ふ可からずなどと云うてゐる。酒の頌は往々陳套の語に墮するが例であるが、これは流石に奇警である。文章の内に、精進物には袖べし、なまぐさにはからすみと洒落れて

ゐるのもおもしろい。

(七)

京都府選出の代議士で小松喜平治といふ人がつた。氏は曾て自分と共に議席に列し、同人中の酒豪として名があつたものだ。このころ彼れについて面白い事を聞いた。彼れが議會で地租増徴案に反對した時、明治大帝には侍從に、與太郎がまた反對したな、と仰せられた。侍從は與太郎の何ものたるかを伺うて始めてその小松なる事を知つたといふ事である。小松は中山邸の附近に住つてゐる豪族の子息で、大帝が御幼少で中山邸に在した時、小松もしばしば參候した。特に大帝と同年で

あるので、時には相撲の御相手などとした事がある。大帝はそんな關係から小松の事を御記憶ありて、曾ては御召の座蒲團を賜はつた事もある。小松は天恩の辱なさに感泣しつゝ、これを用ゐるは勿體ないと、恭しく床の間に飾つて置いたと聞いた。皇后様もかくと聞き召して御菓子を賜はつた事がある。また大帝から小松の酒好きな事を知りし召して御酒を賜はつた事もあるので、小松は吾輩の酔ふのは勅許の酔拂ひだといつてゐたものだ。

(八)

經濟學者山崎覺次郎博士は、静岡縣掛川の人で、先人は酒豪を以て知られた。松崎慊堂が

掛川の藩儒であつた關係から、博士の先人は慊堂を師とした。博士が「慊堂遺文」を刻して世に出したのも、實は先人の志を果したのだと聞いてゐる。ある時博士は自分を訪はれて、贈るに西京の竹泉が製した巨杯を以てせられた。博士の語るを聞けば、慊堂には酒を戒める杯の銘があつて、それが日誌に書かれてゐる。それを見て父は師の言に従はねばならぬと、この杯を多く作つて知友に頒つた。そしてこゝにある一箋を各杯に添へたといふから、その箋を見ると、「一飲限二盞。銘曰。卮思也。再斯可。慊堂」とあつて、慊堂の筆其儘が摸刻されてゐた。これはいふまでもな

く、酒は二杯に限るべし。杯といふ字の厄は
 思と同じく、再びするは可なりといふので、
 再思せよとの寓意もあるのだらう。酒豪の父
 翁も師の箴に従はんとしたに相違ないが、さ
 て一飲二杯に限ることは酒客の忍び難い處で
 そこで茶碗大の杯を作つた意味も知れた。自
 分は博士にいふには、自分にこれを下さるの
 は、自分が酒客であることを御存知の上から
 であらう。従つて節酒を諷する御意も解けた
 が、これほどの杯は普通の五杯にも匹敵する。
 貴下の先人はよく酒客の情を解して居らるゝ
 といつて謝した。

富士山の見える國に美人なし

昔しから言ふことだが富嶽の見える國には美
 人がないと。全體富士は十三州から仰ぎ見得
 る山である。如何にも麗しい山であるから、
 その山の見える限り、女性は逆も太刀打が出
 來ず、秀麗を山に譲つて其の占斷に委してゐ
 るのであらうか。日本には地理的におのづか
 ら美人系があつて、概して太平洋海岸には美
 人が乏しく、日本海々岸に美人が多いと云は
 れ、事實、富士の見える國には美人が少ない。
 これ抑々何の故であらうか。或は云く、これ
 風土の然らしむる所と。如何さま風土はその

原因であらう。併し唯だ漠然風土と云ふも誰
 れか首肯せん。或は之れを解して云く、我邦
 の氣候は四圍の潮流に支配せられてゐるが、
 雨濕の多いことも亦潮流の影響である。而し

不具の三文人

或は水の質に關係ありなど云ふ説もあれど、
 未だ定説を得ない。自分は且らく潮流説に左
 祖し陰の齋らす結果となさん歟。

て美人系諸國は、越後にせよ羽後にせよ山陰
 諸國にせよ、皆雨濕の國で、秋期を過ぎれば
 數月陰鬱の天氣續き、更に清朗の日なく、隨
 つて日射は微弱で、皮膚は常に濡うて居る。
 婦人の色の白いのも肌膚の滑かであるのも此
 故であると。女はもと陰性のものであるから
 潮流の齋らす陰鬱の天候は女人の性に適ひ、
 之れに幸ひすると云ふべきであらうか。或は
 アイヌ系なるが故に美なりとするものあり、

先頃歿した早大の教授山口剛氏は漢文にも和
 文にも深い趣味があつて、優れた頭腦の持主
 であつたが、春秋に富める身で早世したのは
 惜しいことである。私は此人の文を愛し、出
 版されたものは大抵一讀してゐる。嘗て俳客
 夏目成美の心境を論ぜんとして、上田秋成を
 客に假り來つて種々比較研究をやつた。如何
 にも此の對比は妙だと感じたのは、兩人共に

不具者である。乃ち秋成は痘瘡で指に悩みがあり、成美は脚疾があつて腰の立たない憂があつた。斯く不具の處は同じいが心境は全く相反し、秋成はヒネクレものなるに、成美の心境は朗かにして絶えて不平が無かつたと云うて、秋成に左袒せずして成美に左袒したのが山口教授であるが、自分は讀み了つて一笑した。實は山口教授も他の二人と同じく不具者で、耳をわづらひ聲は殆んど通ぜず全くの聾者であつたのに、自分の事は棚へあげ、二人の先輩不具者を捕へ彼れ是れ評を下し、一語も己れに及ばないのはをかしいと祕かに笑を洩した。

今

私は曾て「今」といふ一篇を隨筆に收めた。それは多くの中等教科書に採録されてゐるが、「今」に就て古人がいろ／＼言うて居るのを、其後追々注意して見ると、ゲーテは云く、今と云ふ瞬間は有力の神であると。又米國のハチントン云く、自分の尤も大切に思ふのは今日である、今日の價値を知らねばならぬ、それが自分の生涯の憲法であると。又二宮尊徳も其の農訓に「此秋は雨か嵐か知らねども今日の勤めの田草取るなり」と云うてゐる。爰に録して「今」の説を補ふ。

一閃のスパーク

閑に乗じ新古の川柳を翻讀すると、往々會心のものにぶつかると。低級の藝術だと云ふ者もあるが、一概にさげすむ譯にはゆかぬ。目前に見ることながら、多くの人が逃して仕舞ふのを掴むのが川柳子の伎倆である。眞に川柳はスパークの如きものだ。一瞬の閃きを捕へるのが川柳だ。皮肉もあり、諷刺もあり、冷笑もあり、嘲罵もあり、教訓もあり、描寫もある。人間の實生活をこれほど直寫したものは恐らく他に無からう。左に四五の句を摘出する。

わらんちを履くと二足踏んで見る
要りもせぬ物の値を聞く雨宿り
緋の衣着れば浮世が惜しくなり
人を皆盲目に替女の行水し
までといふ心の反りに不奉公
言ひにくいことは徳利の口を借り
寐てゐても團扇の動く親心
以上は皆有名な句だが、その材料は皆卑近の事で心無いものは皆看過し去るが、之れを掴めば詩を爲す。但だ掴んでも言ひ廻しの巧拙で、活かしたり殺したりする、そこに藝術がある。近頃の川柳に「裁縫嫌ひ髪の毛に鏝をあて」とあるが、痛罵骨に達するの妙を覚え

る。

那翁の母

世界の女傑傳の内での自分の感心したのはナポレオンの母である。流石あれだけの英雄を産んだ女性だけある。ナポレオンが追々立身したのを喜んだには相違ないが、尋常の母とは違つて、戦に勝つたからと云うて一概に喜ぶべきでない、負けることもある、一時勢ひがよいからと云うても衰へることもあると、チヤント達観してゐた。だからナポレオンが帝位に就く時などは、狂喜して其の式に列すべきであるのに、それを避けて式に臨まなんだ

と云はれてゐる。ナポレオンが帝位に就いた後は、生母は相當の尊敬と優遇を受け、豪華の宮殿に贅澤の生活を営むことゝなつたが、母は思ふ仔細があるかの如く、豪華の生活を排して、その定まつた年金や生活費を節して儉素に日を送つた。然るに榮枯盛衰は人事の常で、盈つれば缺くる數に漏れず、ナポレオンも遂に失脚して、孤島に流竄の身となつた。其の幽囚の際に孤島を訪問した珍客は誰れであらう。乃ち生母であつた。其の訪問は骨肉の愛からでもあるが、母堂は莫大の金を携へて此の孤囚の不自由を濟うた。此金こそ、母堂がかかることもあらんと豫ねてより節約貯

蓄したものであつた。

母と婦

母と婦の關係をいつか考へて見たことがある。兎角間柄がよくない。母とても曾ては婦なりしことあり、その昔しを考へれば婦に對して同情を寄すべきであるのに、却つて競争者たるが如く、家長權の幾分を侵害さるゝかのやうに、嫉妬でもするかのやうに、姑と婦との間合がよからず、娣と婦との間は琴瑟相和するものがあつても、離縁の不幸を見るやうなことが珍らしからぬことになつてゐる。これに就て、長谷川天溪氏が「藝術殿」に書

いてゐるのを見ると、左の如き一節がある。

神祕的同契の心理は、親と子とは特に強く動き、母親と子供との關係に於ては、一そう強いのが例だ。母たるものゝ無意識は、その子と自身とは永久に一つものだと思つてゐるから、子の生長する姿は自分の安全を保證するものだと思ふと同時に、子が自分から離れ去ることは、四肢を切り取られるやうに感ずるのだ。女性には何物にか縋りついて安心してゐたいといふ傾きがあつて、中年後の婦人に取つては、夫と子とが柱ともなり杖ともなるのだ。だから子が異性に引きつけられるゝ年頃となり、一方には

夫に別れるとか、あるひは夫の愛が死灰のやうになつてゐるとすれば、こゝに婦人生活に於ける第二の危機が発生するのだ。かやうな場合には、婦人の性格に變化があらはれて、利己的となり、迷信的となり、因業となり、拜金家となり、鐵面皮となり、夜叉となり、その他さまざまの性質が出て来る。云々

母の生んだ子が一女性の愛に赴き、母たる女性と離ることが母に非常の寂寞を感じしむることは事實あることであつて、野蠻時代から遺傳的にその血が流れてゐる。其失望の爲めに性格にまで變更を及ぼし、母をヒステリ

ツクに導くと云ふ解釋も一説であると思ふ。

女の節操

近頃風紀の頹廢が甚だしく、女子が開放されたに乗じて、貞操を輕んずること羽毛も管ならず、その疇をかへることの頻々たる、今日の良人は明日の路人と一般で、かゝる無貞操婦人の行動を飛石を以て評するものがあり、停車場に擬するものがあり、或は急行汽車中の寢臺を以て比するもある。

梵鐘の聲

佛教感化で邦人は梵鐘の聲を聞くと、なにと

なく哀れを感じる。新古今集にある「山寺の春の夕暮来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」と云ふ歌が人に哀れを感じしむる所以は、鐘聲に配するに散る花を以てしたからであつて、哀れを一層つよめた點にある。日本の佛教感化も久しいもので、鐘聲には諸行無常が潛んでゐるかの如く、聯想は人の血に滲みこんでゐる。西洋人などは鐘を聞くと、日本とは全く別で、寧ろ反對に陽氣で嬉しい感じを覺えると云ふが、それは鐘の音にも違ひがあり、打ち方に相違もあり、婚禮のやうな慶賀の場合に撞くなどで、そんな聯想からもきて居るであらうが、全體西洋人は「物の哀れ」と云

ふことを感得し得ない。物の哀れは人情の至微に屬する倫理的に尤も高いものだが、日本の此の感じは佛教の感化に餘程負ふ所があるやうに思ふ。或る人は、鐘聲を聞いて玄妙の味を感じ得ないものは佛教を研究しても分らない人だと云うたが、自分もこれに同感である。鐘聲を聞いて哀れを催すのは決して理窟でなく、避け難い感情である。自分は去年の春、山城の宇治に遊び、鳳凰堂を訪うて後、舟に棹し前岸の古刹興聖寺を訪うた時は、日は既に暮れんとし、櫻花亂れ咲き、さながら櫻樹のトンネルを潛つて寺前の坂を上り、漸く山門に達した刹那に、寺僧の打鳴らす鐘、殷々

と響き渡つて、新古今の歌そつくりの光景を現出し、いやが上に寂寥の感を與へて、吾等をして云ふ可からざる玄妙を味はしめた。これも畢竟吾等の血管に佛教感化が流れてゐるからであらう。

風景と人物

風景と人物は固と同じからず、然れども其致を一にするものが無いでもない。それ奇峯の崛起する、唯だ山容奇なるのみ、茲に雲烟起つて山頂を蔽ひ山腰を遮れば、一種の風趣を生ず。人も亦同じ。平時之れに接すれば敢て非凡を感じないが、事起り變生すれば爰に初

めて其人の凡ならざることがわかる。支那の詩人陸游は早く此事を道破してゐる。
白鹽赤甲天下雄。拔地突兀摩蒼穹。凜然猛士撫長劍。空有豪健無雍容。不令氣象少滄瀆。常恨天地無全功。今朝忽悟始歎息。妙處元在烟雨中。太陰殺氣橫慘澹。元化變態含空濛。正如奇材遇時見。平日乃與常人同。安得朱櫻高百尺。看此疾雨吹橫風。

萬年筆嫌ひ

自分の机案の上にはいろ／＼のインク・スタンドが竝べてあるが、それは外國歸りの友人に贈られたものなどで、机上の飾りとなつて

居るまで、どれにもインクは這入つて居らぬ。自分は絶対にペンと萬年筆を使はない。その實書生時代に自分ほどペンの操縦に熟したものは無かつた。自慢するではないが、どこの學校でも、洋習字にはいつも満點を得た。然るに段々ペンと疎遠になつた。何故にさうかと問ふ人もあるけれども、敢て主義や主張があるわけではなく、有體に云ふと、日本文字を書くにはペンは不適當で、日本紙には別して折合はん。ハガキなどはペンで書いてもよいが、ある種の手紙は相當字を大きく書く必要もあつて、自分の氣持をあらはすにはどうしても毛筆で無ければならぬことがあ

る。自分は書は拙だが、それでも時折幅や帖などを書くことを餘儀なくされることもあるので、兎角筆硯と絶縁しかねて、何百枚の洋箋原稿紙を書く時も毛筆を用ゐてゐる。内田魯庵などは、今時毛筆を動かすものは馬鹿の骨頂であるかのやうに云うてゐるが、一概に罵倒を許さぬ。人にはそれ／＼習慣があつて、毛筆を始終使ふものは、萬年筆を驅るよりも遙かに敏速である。兎角萬年筆で書いたものは、安ボクつて壯重を缺き、どんなに巧みに書いたものでも、保存する氣になれない。

墨

昨年春求めた、棋仙製の墨を日々磨して、
 前月漸く六七分許りのものとなつた。更に同
 製の墨を買ひ求めたが、なほ一寸に満たぬ磨
 餘の墨を惜んで棄てることなく、今日に至つ
 て初めて棄てた。是はなにも墨に吝なる爲め
 ではない。多少の感慨あるに由るからだ。一
 體墨を磨して一分を減ずるには數日を費し、
 一寸を減ずるには數月を費すものである。し
 てみれば、一分を減ずるは自分の數日老いる
 ことであり、一寸を減ずるは自分の數月老い
 ることであり、將又幾寸を磨し去るは自分の
 一年老いることである。自分の墨と共に時々
 刻々老い去るを思へば、甚だ以て感慨無量で

ある。予の磨餘の墨を惜んで容易に他と換へ
 るを欲せぬはこの故だ。

一茶の句漫涉

暑熱に困んで爲すこともなく、寐ころんで一
 茶の句集を漫涉し、しばらく暑を忘る。夏の
 句に云く、

暑き日やヒヤ／＼と算盤枕かな
 夕立を三日待せて三粒かな
 日が長い／＼とむだの此世かな
 日が長いなんのとのらり／＼かな
 七月の大べら坊に暑かな
 涼風も隣りの松のあまりかな

さんぶりと一雨浴て蟬の聲

世の人の錢にされけり苔清水
 晝過や石菖鉢と蚊いぶしと
 蚊いぶしも慰になるひとりかな
 夕立は是切とばらり／＼かな
 夕立や三文花もそれそよぐ
 我庵は蚊柱ばかり曲らぬぞ
 五十にして都の蚊にも喰はれけり

貧境を詠じた句の中に、

吹けば飛ぶ住居も春は櫻かな
 掃溜を山と見なして秋の月
 我門や此界限の雪捨場
 我門や水鶏も鳴かず屁もひらす

爐を開て見てもやつぱりひとり哉

豪放跌宕の調に諷刺ある句は、

きかぬ氣の江戸の門にも柳かな
 是程にけちな櫻も都かな
 笋も思ふ所へ出ざりけり
 此様に枯てもさわぐ芒かな
 直な世を何んの因果で庭の松
 今の世は絲瓜の皮もうれにけり

好んで俗語を遣つて、却つて句意を強めるは
 一茶獨特の技能で、うぶな俗語に活きた精神
 のあることを思はせる。一茶は自家の貧境遇
 をさらげ出すに一點斟酌がない。そこに天真
 流露の味があるが、一面又王侯も左右し難い

氣魄があつて、豪放跌宕の氣が漲つてゐる。自分の尤も愛する所は此點にある。

俳句川柳漫涉

又ある日のつれづれに俳句の集や川柳など、矢鱈取り出して讀む内に會心のものがある。去來が「應々といへどたゞくや雪の門」などは、雪中、人におとづれられた經驗のない人に會得し難い句である。雪に遮られては應と答へても聲はなかく、徹しないものである。大隈言道の和歌に「田の面より我門さして來る人の近づかぬまに誰れと知らばや」とあるが、これは田間に家居して尋ねくる人を見通

して誰れやらんと卜する實況を詠じたのでおもしろい着想である。小兒が人から菓子などを貰つてその人に親しみが起り、なれ／＼しく其人の膝に腰をかけることのあるのは家庭によく知れてゐることだが、さてこれを詠じたものはない。自分は僅かに之れを川柳に得た。「膝へ來て土産の禮に腰をかけ」は正しくそれである。可愛い兒に旅をさせよとは昔から云ふ名言だが、これを川柳に見るのは、「草鞋はかうめすものと涙ぐみ」とあるのがそれで、優しく家來に言はせる所に情味がある。川柳は卑猥のものゝみでないが、しかし「きぬ／＼のあとは身になる一寐入」などは

鄙猥を免かれない。一茶の句に「米時も罪ぞよ鶏が蹴合ふぞよ」とは川柳にありさうで氣韻が高い。鶏が食を争ふことを米時に歸した處に一茶の着想がある。尙一茶の「鬼灯の口つきを姉の指南かな」も川柳にありさうな句である。とかく捉へ所に一致點がある。

人を動かす和歌

人をうごかす歌は、眞情流露にあつて、必ずしも措辭の如何に拘はらぬ。萬葉の和歌は眞率で人を動かす力がある。古今集の歌は、措辭は巧みだが却つて感動を與へない。要は眞假にあるのだ。近頃の歌人の詠める歌とても

眞情の籠れる人を動かすに足る、必ずしも萬葉時代に溯るを要せぬ。平賀元義が父を思ふ歌に「上山は山風寒しちゝのみの父のみことの足冷ゆらむか」だの、小出繁の「わがために水汲む妹があさかげのやせたる姿見ればかなしも」などは、何の文飾があるでもないが、惻々人を動かすの妙がある。橘曙覧が貧生活を率直に言ひあらはしたる歌に「米の泉いづみなほ足らずけり歌をよみ文を作りて賣りありけども」とく／＼と垂りくる酒のなりひさご嬉しき音をさするものかな、此等は大概の人が率直に言ふことを憚るのを、有體に云ふ所に人を動かす力がある。酒の禮讚に、これ

ほどコキビのよいものはない。それも真率でザツクバランで體裁ぶらないからである。落合直文の「我が墓を訪ひこむ人は誰れ〜と寝られぬまゝに數へつるかな」とあるなども如何にも明け放して、大抵人は同じことを思うてゐても、それを言ひ出すを欲しないが、それを真率にあらはす處に妙がある。兎角意匠を凝したり奇警を求めたりすると却つて自然に戻ることがあり、敢て奇警を求めるでなく、自然を道破して其内に奇警の存することがある。良寛の「月讀のひかりを待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに」とある下の句はおもしろく覺えるが、これが山間の自然の景

で敢て奇警を弄したのでない。尙ほ大隈言道の兒童を詠じた歌に「中絶えてえも渡られぬ川橋を行かるゝまでに行く童かな」とあるのも、兒童の自然のハピットを直寫したに過ぎぬ。唯だ栗のいがと共に氣のつかぬことに氣がついた迄の事であつて、自然も描き方に依つては平凡を脱して、そこに妙を感ずるのだ。

醫は 稻 荷

醫は普通で昔しからさまざまに云うてゐる。そして中には、諷刺や滑稽味を帯びたのもある。今其の二三を擧げて見ると、醫は意なりとあるのは、病を治する法は多く醫師の意に

發するからであらう。或は云く、醫は衣なりと。衣服美ならざれば人は醫者を輕んずる。

芋 掘 坊 主

古來醫者はメカシ屋である。又云く、醫は威なりと。威儀は神經作用で病を制することがある。或は云く、醫は異なりと。人情は平凡を嫌つて新奇を喜ぶ、異言異體が往々歓迎されるも此謂ひである。或は云く、醫は夷なりと。動もすれば醫者は人を夷ソコナふからだ。昔し田宮仲宣と云ふ醫師が其隨筆「東牖子」に以上のごとくいろ〜云うて、最後に大切なことを逸したと、何を云ふかと思ふと、醫は稻荷だ、よく尾を出さず人を誑かすとは、諷刺骨に徹する。

庸醫を藪醫と云ふ様に、拙僧を芋掘坊主と云ふ譯を調べて見ると、中山三柳の「醍醐隨筆」に、山の芋を掘るに、冬分は枯れてゐるから見えない。無闇に掘り漁つても得られない。但だ芋の枯れた蔓を尋ねて、其の筋を辿れば掘り當てるものだ。無智無學の僧などは、佛性の性の字は女偏だと云うて、女色の工夫ばかりしてゐるが、よい師匠のあとを繼ぎ、其後任となると、先住の蔓に繋がると云うて、檀家も其の賢愚を問はず、敢て棄てない。芋掘坊主も蔓によるから仕合せ者である。

茗荷の冤

妙な言ひ習はしで植物が不當の醜名を負はされてゐる例は少からずあるが、茗荷なども迷惑してゐる一つである。此の植物は、釋迦の門弟の槃特の墓から初めて生え出したと言ひ傳へて、鈍根草の別名があるが、全體槃特は大の痴漢であつたので、その墓から生え出た草だから、それを喰へば物を忘れるとケチがついた。茗荷と云ふ名も、槃特が自分の名すら記憶し得なかつたので、名札を常に背に負うて歩いたから、茗荷もそれに縁んだ名だと云ふ俗説もあるが、これは全くの冤罪で、本艸

綱目に據ると、不祥の邪氣を去り、蟲毒を解き、瘡を治し、沙蟲の毒、蛇毒を解く等種々の效能が擧げてあつて、嘉艸の名すらある位だ。それが偶々痴漢の墓に生え出たとの言ひかけが累をなして、冤枉の不幸は今尙雪ぐに由ないが、五十年前滿目茗荷畑であつた早稻田に大なる學府が建てられ、盛んに偉材の輩出を見るに至つたことは、此不幸な植物のため冤を雪ぐに十分であらう。

蟹の冤

蟹が久しく山葵の敵だと云ふ醜名を負はされてゐた。山葵は、傾斜のある溪流で、絶間な

く清水が流れて停滯しない所で無ければ培はれない。而るにかゝる場所には必ず蟹がゐる。そして山葵が枯死すると、それは蟹の仕

が知れた。

舍利の正體

業であるとされて、蟹は長い間冤罪を受けてゐた。自分自身も山葵の枯死は蟹故と思ひ、蟹は流石に文人墨客に喜ばれるだけあつて、辛味のあるおつなものを愛し喰ふなど云うてゐたが、段々山葵枯死の原因を調べて見ると、蟹の仕業ではなく、肉眼に辨じ兼ねる程の微蟲が山葵の根に喰ひ込むことが眞因であると分つて、爰に蟹の冤枉が初めて伸びた。蟹は山葵同様動く清水を好むために山葵と同棲するので、山葵の根を愛食するものでないこと

佛者が舍利を尊むことは、考へて見ればをかしたことである。舍利は全體病癰の凝つて塊をなしたものに過ぎない。獸畜魚介にも多くあるもので、貝に眞珠のあることは誰れも知る通りである。人體に存するものは火に焚くから瑩白となるのだが、釋氏の舍利もこれに外ならない。舍利と云へば何となく貴いやうに聞こえるが、名は獸畜に依つていろ／＼異つてゐる。狗にあるのを狗寶と云ひ、猿にあるのを猿棘と云ひ、猪にあるのを猪鬣と云う

てゐる。中にも馬には最も多くあつて、其の大なるものになると毬鞠の如く、其形もいろいろである。「北山醫話」と云ふ書に、牛の黄ある、狗の寶ある、魚の鮮答ある、人の癖石ある、僧道の舍利ある、之れを病と云うて可也と、本艸家は早く其正體を道破してゐる。舍利貴むべしとすれば、膽石患者の排泄する石塊も貴むべき歟。馬の癖石は多く馬糞に混して發見せらる。全體餘り清潔のものでないのに舍利と云へば一概に奇瑞を言ひ立て、金銀珠玉の如く尊崇するのは笑ふべきである。舍利一様の病塊はよろしく玻璃瓶に納め、醫室に置いて參攷に資すべきである。鍍金の寶

塔に納めるなどは滑稽も甚しい。

樂屋に於ける團十郎

人間のハビットには想像外のことがある。樂屋に於ける名優團十郎などは其の一例である。優は香道の趣味があつたから、樂屋に於ても、多分立派に物が調ひ、奩具などはキチントしてゐたであらうと、吾等は想像したところがあるが、近頃或る人の書いたものに據ると、案外此の優は無頓着で、櫛其他の化粧道具をボールの明き箱に入れたり、其の嗜むだ無花果を樂屋で口にしたことも毎々あるが、喰ひ餘りの皮などは、鏡臺の抽子に入れてお

くやうな始末で、なか／＼の無性者であつたらしい。門人連が掃除でもすると、それを好まず、掃除のため物が亂れて、使用に不便を生ずると云うて、故ら亂雜に委し置くのが常であつたと云ふ。

廁の兩文人

李家氏の近著「廁考」に左の如き逸話が收めてある。

歸田錄に歐陽修の言が載せてある。それによると「余が平生作る所の文章は多く三上に在り」とあるが、三上と云ふのは馬上、枕上、廁上を云ふのだ。日本に於ても詩人

や文人は多く廁上で思構を鍊る。漢詩人國分青厓が飯田町に寓居した頃、隣は歌人落合直文の家で、兩家の便所が垣根一重を隔てて相對してゐる。屁の音も脱糞の音もよく聽える。青厓廁に上つて夢中に思構を鍊つてゐると、隣りの廁に聲がするのを、自分のと心得て用を足さずに出てきたと云ふなどは一笑に値する。

支那の犬

或る支那通の話に、支那の犬は大概瘦せてゐると云うた。何故かと問へば、食物經濟からだと云ふ。如何さま、支那人の料理は徹底的

に煮るので、棄りが出ない、随つて犬に喰はせるものが少ないから、犬も疲せる筈だ。いづぞや横濱で目撃したことだが、支那の乞兒が、各戸を訪うて臺所の棄り物を貰つて歩いてゐた。日本ではゴミ箱に棄てるやうなものばかり、腐敗しかゝつた残飯や喰ひ散らした魚の骨などの類で、迎も日本人の口に入り兼ねるものであつたが、それを喜んで貰つて行くのを見て、不審に思つた處、彼等はそれを其の儘喫するではなく、例の徹底的に煮て喰ふ譯だから、腐敗してゐても非衛生でない譯だ。右の次第であるから、支那では犬の食となるほどのものは人間の食となるから、畜犬

は別として無宿の犬は瘦せてゐる道理だ。

大量出版に對する戦慄

文化の進むに連れて製紙工業の盛んになるのは自然の勢ひであるが、日本固有の紙は別として、西洋紙製造には最初襤褸ポきれを材料としたこともあつたが、そんなものでは到底不十分で、終に木材を材料とすることになつた。最初鬱叢たる森林を一瞥した工業家は、これこそ無盡藏と思へたが、世界大戦以後紙の需用が激増すると共に、多くの森林は見る切り斃されて、今は内地では樺太の森林にまで手をつけねばならんやうになつた。植

林をやつても樹木の生長よりも伐採が急速であるから、今日の勢ひで森林を伐り斃したら、遠からず内地の山々は皆禿頭となるであらう。何人と雖も材木を伐り出す鐵道の驛頭に山と積む材木を見ては、これが皆製紙のために潰されるのかと、驚きを禁じ得ないであらう。かゝる山なす材木が毎日々々積み出されて尙ほ不足を感じ、植民地の山林まで伐らねばならぬ状態にあることを思ふと、吾等は、一方に於て製紙業の繁榮は文化の一徴として喜ぶと共に、森林が刻一刻頽廢に赴きつゝあるに想到し、戦慄を禁じ得ないものがある。亡國の山には無樹が其の特色であつて、實例

は近く朝鮮の山にあるが、製紙工業の繁榮は文化を致すに必要であつても、それが遂に亡國の山の如く禿然無樹たらしむることは無きか。これは心あるものゝ憂慮する所である。友人内ヶ崎作三郎氏は、大量出版の小説を見る毎に、アゝ恐ろしい、これ等は皆林を喰ひ荒らして日本を焦土とするものだ、と常に戦慄を覺えると云うて居るが、製紙工業が伐り潰す木材の多量である消息を知るものは氏と同歎を禁じ得ない。

麴包屋の演説

人種の異同が猜忌嫌惡を生じて、今の如く交

通縦横の世界でも尙ほ改らず。日本人の米國に在るものは、種々の點で、優越を示せば、示すほど米人の嫌惡する所となるとは、文明人の嫉妬も甚しいと云はざるを得ぬ。近頃まで歸朝してゐた、小林政助氏は三十年間米國に在つて、救世軍の布教をなす側ら、同胞の世話をなしつゝある人だが、自分は度々面晤して種々米國の事情を聞いた中に、某日本人が米人の集會に臨んで、創世記を譬喩的に談じて、聽衆米人を烟に捲いた話を聞き、尤も興味を覺えた。演壇に立ちたるは一介の麪包屋である。彼れは平然としてパンを焼く法を説いて云く、麥粉に鶏卵、砂糖、鹽を和して

水を加へ、かきまぜて厨爐に入れて焼く。最初四十五度の火度で焼いたものを出して見れば、火度が強きに過ぎ、パンが眞黒となつてゐる。演者は之れを説明して云く、これ人種に譬ふれば黒人種なり。更に前陳の同じ材料を厨爐に入れ、今度は溫度をひくめて火度二十度となして焼いて見ると、色は眞白なれども、半熟で食に堪へぬ。演者説明して云く、これ白人種に譬ふべしと。更に同じ材料を厨爐に入れ、今度は火度三十度を加へて焼き、出して見れば、至極の上出來で、食料と爲すに足る。但し其の色黒からず、白からず、火はよく徹して而かも焦すに至らず、色は黄ば

んでゐる。演者は説いて云く、是れ諸君が日常口にするのパンである。而して人種に譬ふればこれぞ黄色人種である。人種の起因はそもく斯の如しと説破す。其の言ふ所甚だ理あるを以て、聽者一同喝采し、其後演者をブレッドの名を以つて呼ぶに至つたといふ。

北澤樂天氏の漫畫

漫畫を以て名ある北澤樂天氏は、交つて見ると如何にも愉快な人で、酒席の話はさながら漫畫のごとくである。いつぞや紅葉館に初めて會した時、自分より敢て求めないのに座中に在つた團扇に咄嗟私の面貌の漫畫を作つて

くれたことがある。座中の人が、われもくと請ふのをサツ／＼とやつてのけたが、漫畫ながら各々の風手の特徴を捉へる妙は讚歎に値する。いつぞやの洋行中にも多く漫畫を作り、西洋人を驚かしたと云ふが、其の逸話の内に、同船の船客幾十人の漫畫を作つた時、或る洋人の云ふのに、投票で一番よく似たものを決し、其人より畫家へ謝儀を出すべしと提議した。それに對し樂天氏の云ふには、それは辭退する。全體自分の書く似顔は、人々の特徴を捉へてそれを寫すに過ぎない。若し寫しが成功したとすれば、其人の特徴が然らしめたのだから、賞は其人に與へらるべきだと

云うた。然る所投票は一婦人が第一であつた。が、其の婦人は當選を寧ろ喜ばず、何か不平を漏らしたと云ふことである。なるほど、よく考へると、漫畫は人に喜ばれるものでない。人の特徴を捉へることは必ずしも人の自讃の美點を捉へるのでないから、動もすると缺點が描かれ、そして滑稽化する氣味もあるから、笑資としてはよいものだが、餘りに顔の癖をよく似せられると、却つて興をさますことになる。外國婦人が當選したのを却つて不快としたのも此故であらう。むかし寫樂が役者の似顔を書いて役者の憤怒を招いたと傳へられるのも、同一軌の談であらう。

酒屋の招牌

酒屋の招牌に、杉の葉を束ねて軒頭に吊すことが昔しからの慣習となつてゐるが、それが何の意味であるか。考證家はいろいろ説けども、腑に落ちるやうな説がない。此頃或人の語るに、新酒には厭ふべき匂ひがあつて、酒客はそれを喜ばない。そのあしき匂ひを去るには、新しい杉の葉を酒の出口に装置し、酒を濾過すれば、其の匂ひが去ると云うた。現に加賀では、今も此法を用ゐ、新酒の時節となると、必ず新らしい杉の葉の束を造つて軒頭に掲げるが例となつてゐると聞いた。成

るほど、斯く聞くと杉の葉は酒に關係がある。新酒の出來た宣傳に杉の葉の束を吊すのも意味がある。多分其の宣傳が酒屋の看板になつたのであらうが、枯れて赤くなつて汚穢の甚しい杉の葉の束を、いつまでも改めずに吊しておくなどは、偶々酒を冒瀆して厭やな感じを與へる。是非青い、露滴らんとする、若い葉に取換へねばうそだ。

染物屋の好色

日本橋の樽正町クシマチに太田寶梅堂といふ染物屋があつた。江戸中の藥屋の引幕などは多く此の染物屋に注文したもので、家業も繁昌したと

云ふが、此家の主人は名高い豪酒家で、其事が將軍の上聞に達し、特に召されて家齊より酒仙の名と狷々尺杯居士の號を賜つた。木母寺に獨酌院狷々尺杯居士の墓のあるのは此人の遺蹟である。此の豪酒家の孫に亦酒を好むものがあり、常に六瓢を携へて外出し、自ら六瓢と號した。此人の還暦の年に木母寺内に一碑を建てた。それは日本橋の擬寶珠の遺材を應用し、凹んだ石の中に此の擬寶珠の石柱を装置し、さながら陽器を見るがごときをかしきものに好色院道樂寶梅居士と刻して、某年同好多く集まり、除幕の式を擧げた際、「都新聞」はその委細を書き立てたので、警視廳

では風俗を壞亂するものと認め、罪せんとしたが、其時太田の云ふには、自分の好色は染屋だから色を好むのも當然である、「我が色は世の色ならず文かすみ」と心事を告白したので許されたと云ふが、此人は昭和四年に歿した。

香魚

毎年、鮎の漁期になると、此の魚に就て多少の感なきを得ない。考へて見れば、此の可憐の魚はなさけない生涯を送つてゐる。彼等に年魚の名のあるやうに、壽命は僅かに一年に過ぎない。しかし彼等の經路を考へると、高

等動物を慙死せしむるものがある。彼等は幼弱の時には海で育つ。海に在る間は白魚などと伍をなしてゐる。漸く長ずると、早く青雲の志を起したかのごとく、白魚輩に別を告げて河流に溯る。これが彼等の修行でもあるやうに、容易ならぬ勞苦を敢てする。あの纖弱な體で、激湍を突破して一意上流に溯る。遮るものがあれば、身を挺して、跳ね飛んでも上へ上へと行く。彼等の望む所は水の清冽にある。彼等の食とするものは、主として人間の臭氣の無い石や巖に附着してゐる硅藻である。彼等と呼んで仙魚と云ふも敢て不可はない。彼等は上流に溯り得て、こゝに青雲の望

みを達すると、追々生殖期に入る。生殖の爲めには靜かに江を下る。雨のふる夜などには最も好機として下る。猛烈に急流を衝いて突破するとは全く態度が異つて、靜かに下る。そして小石の多い所に産卵をする。産卵を終つた後の鮎は見るかげもなく瘦せ衰へて、雌雄共にヒヨロ／＼と流るゝに任せて、

あつて、醜い生活をしてゐるものは無いやうに恥かしく感ぜられる。およそ淡泊な魚と云うたら鮎であらう。彼等の生涯は如何にも淡泊であるから、其の味ひも亦澹泊だと云ふことが言へるであらう。彼等の一生は人間に幾多教へる所があるかにも思はれる。

坊録數則

海に入つては鹹水魚族の餌となり、岸に打寄せられては鳥の餌食となる。何といふ哀れな運命であらう。しかし彼等はこれで天職を果したのであるから、遺憾はないのである。恐らく生きる執着もないであらうと考へると、高等動物ほど慾張りて、生に飽くまで執着が

柳亭種彦の「足薪翁記」に、俗語に何々坊といふのを一々考證して、皆嘲りの意を寓すとあるが、今三四の例を挙げると、誰でも知つてゐる言葉は左の如くである。
でくの坊 きかん坊

いやしん坊 立ん坊
 しわん坊 どろ坊
 けちん坊 つん坊
 べら坊 寝坊
 喰ひしん坊 うかれ坊
 見え坊 あつがり坊
 さむがり坊 おこりん坊

昔用ゐられた語で、諸書に散見するものに、
 往々解しかねるものがある。柳亭の摘出によ
 ると、

とられん坊(花柳界の通語)
 とりん坊(同上) つほろ坊
 とちめん坊(けちん坊と同じ)

やんちや坊 掃地坊(潔癖に過ぎたもの)
 つくねん坊(ぼんやりつくづく案ずる)
 とちめん坊(狼狽) あほうぼう
 せちめん坊(けちん坊)
 はだか坊(はだか蟲と云ふに同じ)
 さくれん坊

阿修羅坊(句に云く、切捨になるあじゆら
 坊)

長床坊 いたづら坊
 きたい坊

これ等の内には今通用しない語もあるが、今
 日俗間に勝手に坊の字を添へて用ゐてゐる言
 葉はすこぶる多い。じだらく坊は取締りのな

いものをいひ、のんき坊は物に拘らぬ氣儘の
 ものをいひ、やきもち坊、りんき坊は、共に
 嫉妬深い者を云ひ、やせつぽは瘦せた人をい
 ふ。ポは法師の略で、矢張坊の意である。赤
 ん坊はこの範圍のものでないが、黒ん坊は色
 くろきものを嘲る言葉。白んぼうは癩病系で
 尋常の白と異なるものを貶する言葉。やきや
 き坊、あせり坊は、共に焦慮して落ち着かぬ
 ものをいふ。意は同じいが、普通、坊に主を
 添へていふ、例へばなまくさ坊主、道楽坊主
 は皆破戒の僧をいひ、鼻たらし坊主、いたづ
 ら坊主は子供を貶するの言葉。三日坊主は物
 に飽きて永續せぬを嘲る言葉。強がり坊、或

は強がりん坊は虚勢を張るものを嘲るの言
 葉。のんだくれ坊は亂酔の酒徒、氣まぐれ坊
 主は放縦の徒、屁びり坊主は人前に放屁を憚
 らぬもの。この類を擧ぐれば尙多かるべし。

信書の秘密

信書の秘密は西洋人はやかましく説き、日本
 人もその説に聽いて、家族中も重んずるやう
 になつた。が、實は、日本ほど信書の秘密を
 重んずる國はない。偶々橘南谿の「西遊記」
 を讀んで見ると、唐人が日本の正しいの感
 服する事をいうてゐる中に、書狀の事に觸れ
 てゐる。

日本の正敷事は唐人などの不及事多し。日本の内にては、數百千里をへだてたる所の文通にも、いかなる秘密の事にも、又金銀を贈ることにも、紙一重の封じにて糊づけしたる鹿略のものにても、いさゝかの間違ひなく届く事を唐人聞くと、いと不審がりて驚くことゝぞ。日本には、いかなる横着無頼のわるものにも、馬かご船頭のごとき下賤のものにても、封じたる状をみだりに開くことは決してなき事也。金鐵にて錠をおろしたる器よりも、糊づけに封じたる状は堅きなり。是等の事常になり、心付ざればこそあれ、唐人などより見れば、驚

きて感心すべき事也。云々
われ等も心づかさざりしが、如何にもこの通り也。日本の郵便法は初めより正確に行はれ、その正確が持續されてゐるのは、初を慎みたる前島男の努力にも依るのだが、日本にこの貴むべき素質のある事も與つてゐると思はねばならぬ。

賣笑の媚術

邦の洒落本家は、擒縦法を相撲の四十八手に擬し、戀の四十八手など云ふ書があり、徳川期の太平時代には、その秘訣を書いた、さまざまのものがあつた。それは大體誰も知つてゐるが、婆羅門神學の「愛經」の第十編に、娼婦の客に對する秘訣がいろ／＼掲げてあることは、賣笑研究を事とする人で無ければ概ね知らない。この婆羅門經には娼婦を「愛の商」と云うてゐる。幾十條と掲げられてゐる秘訣が我邦のと餘り異つてゐない。日本に於て、この書が譯されたのはつい近年で、譯者は大隅爲三氏である。原書は、ダツカと云ふ人がバトナと云ふ女に書き與へたのを、戀愛

賣笑婦が嫖客を擒縦する媚術は、古今東西、何れの國に於ても、花柳の巷には研究され、どこも人情に格別の相違がないから、その秘訣とする所も自然その揆を一にしてゐる。我

作家として印度に名高い、ワツチャヤーナと云ふが多少の加筆をしたと傳へられてゐるが、この人は耶蘇紀元第一世紀から第五世紀までの人だと想像されてゐるから、頗る古い珍書である。

尖先生

支那では大妓を大先生、小妓を小先生と呼んでゐる。これもをかしく感ぜらるゝが、さらにをかしいのは「尖先生」と呼ぶ妓があることだ。こは表面は未通の處女即ち小先生であるが、その實大先生を兼ねてゐるので、尖は蓋し大小の合字であらう。

東西相觸れて

新渡戸博士の著書に「東西相觸れて」といふ
 のがある。これは東洋西洋交渉の事に關する
 内容をいひ現はしたものだ、或る支那人は
 此標題を見て絶倒した。支那の俗語では陽器
 を東西と云うてゐる。「相觸」の二字も附隨し
 てゐるので、彼れが笑ひを發した譯である。

銀座の柳

曾て銀座街頭に柳があつたことを思ひ起す連
 中が、柳にあこがれて、しきりに柳を街樹に
 したいと云ふ戀舊思想が妙に勝を制して、そ

れが實現された。此柳は東京朝日新聞社の寄
 贈に係るもので、先頃柳の復興祭の折、關係
 者が席上で演説した筆記が手に入つたので讀
 んで見ると、朝日新聞社も自社宣傳の爲め寄
 贈を目論んだが、なか／＼いろ／＼の経緯が
 あつた様子で、銀座の住民は、寄贈は有り難
 いが、何年も経たねば成木しない様な幼樹で
 は困ると言ひ立てる、市では折角植ゑてある
 公孫樹を抜き去るのは惜しいと云ふやうな工
 合で、漸く話が纏つても、さて柳を捜し出す
 と、案外得難いので、朝日では遠く捜査に人
 を派して辛うじて方々から集めたものが六百
 株、其内から二百九十本を選択して、春秋に富

める且つ街樹に適するのを選んだと云ふ。柳
 には五十の種類もあるもので、植ゑたのは六
 角堂、繭玉の二種だと云ふ。朝日の擔任者の
 云ふ所を聞くに、可なり骨が折れたらしい。
 全體柳は庭樹でないから、植木屋にはなく、
 且つ帝都の復興に樹木は何でもかんでも必要
 となつたので、そこらにあるほどの柳は既に
 買占められた後であつたので、殆んど東京に
 は一本も無かつたと云ふ仕末である。さて柳
 が果して銀座の如き連簷洋館のある所に調和
 するかどうかは疑問に屬するが、しかし人心
 が日に日に物質的になり、無趣味になり、利
 己的になつて、苛々してくる時に、それを緩

和する風致としては強ちわるくないかも知れ
 ぬ。既に植ゑ終つて見れば、そんな理窟をつ
 けて、成るべく保護するの外はあるまい。寄
 贈者朝日の副社長下村宏氏はしきりに川柳を
 引合に出し、「むつとして門を出づれば柳か
 な」だの、「むつとして歸れば門の柳かな」だ
 の、「氣に入らぬ風もあらうに柳かな」など言
 うて、ビジネス・ライキの銀座に一陣の春風
 を延いて、苛々した氣分を緩和するは柳であ
 ると説法してゐるが、どうか銀ブラ連も柳に
 學んで、餘りに小理窟を云はず、寛宏の氣分
 で世に處することにしたものだ。

黙 想

杉田梅里と自由

西洋には、戦死者などに對し、時間を定めて
 闔國黙禱するの慣習がある。曾て浮田和民博
 士が滯英中にも此事があつたと語られた。話
 によると、某日午後十一時の後二分間黙禱を
 したが、鐵道も電車も、あらゆる事業、あら
 ゆる階級、市中の歩行者までも、この二分間
 はあらゆる運動を停止して緘黙祈禱をした。
 此の二分間こそ、闔國闕として聲なく、如何
 にも壯嚴の感に打たれたと言はれた。これは
 耶蘇教の規儀に淵するものであるが、我邦で
 も學んで黙想の習慣を起すがよいと感じた。

「梅里遺稿」の小冊一本は大槻如電氏の編輯に
 よるものだが、梅里、名は信、蘭學の祖杉田
 玄伯の孫である。この人は蘭學に通ずる外獨
 乙書をも讀み且つ譯した。獨乙書中フリード
 ムの字を發見して、我邦に未だ「自由」の何
 たるか知られざる前、早くも自からこれを
 知つて、内心「自由」に傾倒した。然し當時
 は斯かる危険思想を口外することを許さぬの
 で、梅里は憂憤不快の時、常に酒を煽り、醉
 餘獨乙語を以て「自由」を連呼するを常とし
 た。しかして傍人はその何故なるかを知らな

かつたと言ふ。是は梅里の逸事の一つであ
 る。世人は杉田玄伯を知るも、梅里を知る者
 は稀だ。蘭獨の兵書、法書、政書の多くがこ
 の人に依つて譯出され、文明を裨補するところ
 少なくなかつた。

夫婦共稼ぎ

米國で、一少年の作に託した、お伽脚本とで
 もいふやうなものがある。その書名は忘れた
 が、その大略の筋をいふと、或る貧家の主人、
 妻を家に残して稼に出て、外にあること十年
 餘にも及んだ。漸く歸つて來て妻の無事を祝
 し、且つその稼溜めた金錢を取り出して與

へ、これ十年努力の結果だと妻を慰めると、
 妻は喜び且ついふには、あなたばかりに稼が
 せては濟まないと、お留守中、稼いだ結果は
 この通りだと、戸を開いて良人を引入れ、見
 せたのは枕を並べて寝てゐる三人の小兒で、
 皆良人の知らないものであつたとは、一笑に
 値するが、宛然今の世相を皮肉つてゐるやう
 にもあつて面白い。

世之助と孰れ

聯想と云ふものは妙に遠い過去のをかしたこ
 とにまで及ぶものだ。此頃西鶴の草紙を見て
 端なく想ひ出したことは、今より三十數年前、

「新潟新聞」を主宰してゐた時、三伏の暑候で、自分は假りに新聞社附近の旅舎に宿り、その二階にゐたことがあつた。此の二階の室は二間つづきで、一方の室には硝子戸があつたが、午後は日當りが激しいので、白布の幕が掛かつてゐた。或る日、自分は筆硯に倦んで、何の氣もなく、幕を少し明けて隣家を見ると、其家の臺所に添うて空地があつて、そこに大きな盥を据ゑて、色白な豐滿の體軀の婦人が水浴をやつて餘念のないのが、ハツキリと自分の眼界に這入つて來たので、一寸驚いた。しかし自分も多少好奇の心が起つて、敢て避けもせず、ジツト覗いてゐると、初めは自分の

方を背にしてゐたが、漸くにして自分に直面する位地に轉ずるため、立上つたので、其の面部は勿論、赤裸の五體、恥部まで現はし、どこまでも見る人がないと信じての振舞ひであつた。これを見ては、自分も却つて恐縮して、幕を掩うて引下つた。が、座に復してから、其頃始めて翻讀した、西鶴の一代男の、例の世之助が屋上から遠眼鏡で浴女を覗く圖を思ひ出して、窃かに一笑を洩した。其際に思へらく、一代男に於ける浴女は、好色少年に覗かれて如何に恥ぢたことであらう。女は、圖に兩手を合してゐるのでも分るごとく、進退を失うて立ちすくんだ窮態である。世之助

の悪戯は、遠眼鏡でおどかした爲め却つて目的を達せず、祕佛を拜し損つたのに、新潟のばあひは、吾れも女も共に無心であつた、無心であつたから、女も平氣で、吾れから需めるでもないのに自から全軀をあらはした。無心こそ自然の境地である、と妙な理窟をつけたこともあつたが、これも一場の夢と忘れ去つた今頃、西鶴の書を見るにつけて、當時を思ひ起して斯くなん。

野合

「水牛の櫛に鉛のかんざしを貫うてにせとちぎる麥畑」は宿屋飯盛の狂歌であるが、簡に

してよく農村の若い男女の情事を道破してゐる。彼等青春の男女は、何としても本能が抑へ切れず、夜深かに手を携へて森の中に戀をさゝやいたり、人無き小屋に入つて抱擁したり、藁ニホを假りのベッドとしたり、墓場や村社で失敬したり、盆踊りの混雜に紛れて一時的の逐電をやつたり、彼等ほど隨所にベッドをもつてゐるものはない。野合と云ふも土をベッドとすることを云ふので、土の子である村の青年少女が土を寢所とするのに不思議はない。彼等は彼等相應の戰術を心得てゐる。如何に父兄が嚴重に監督しても、その目を遁れるには頗る巧者である。田でも畑でも

森でも林でも藪でも、それが直ちにベッドとなるのであるから、互ひに相許す男女の交會を制せんとするも不可能である。彼等の結婚は、親の許す前に、人知れず既に當事者間に調印が済んで居る、腹がパンクするので、已むなく親が結婚させるまでのことである。自由結婚は早く此方面に行はれてゐる。偶々長塚節氏の小説「土」を讀んで見るに、若い男女の土地相應の戦術が左の如く書かれてあつて、一笑を發する。夜中、情人の家に入らんとするに、

歪んだ戸がギシ／＼鳴るのに、それが彼等の西瓜や瓜の畑を襲ふ頃であれば、道端の

草叢から響蟲を捕つて行つて雨戸の隙間から放つ。響蟲は暗へ中へ放たれれば、直ちに聲を揃へて鳴く。土地で其れが、一般にガシヤ／＼といふ名稱を與へられて居るだけ、喧かしく只ガシヤ／＼と鳴く。ガシヤ／＼が鳴き出せば、彼等は安んじて雨戸をこじるのである。それから又箱を轉がしたやうな、隔ての障子さへ無い、小さな家で、女が男を導くとて如何しても父母の枕頭を過ぎねばならぬ時は、踏めばぎし／＼と鳴る床板に二人の寢音を憚つて、女は闇に男を背負ふのである。其處には假令重量が加へられても、それは巧みに疲れて眠い

父母の耳を欺くのである。

夜這ひの戦術もこゝになると、泥棒と餘り違ひがない！

浪華市井の惡風習

大阪の町家では、女子を嫁するには、習慣として嫁具を家に陳列し、近隣の縦覽に供することゝなつてゐる。そこで不如意の家では其の資を得るために、あられもないことを近い將來の新婦にやらせて、端なく良人たるべき人の私娼遊びの相手として見參に入るやうな滑稽が起るとは、曾て聞いたことがあるが、かゝることがよもや自分の識つてゐる畑に起

らうとは思はなかつた。亡友小川簡堂は曾て學僕のため婦を迎へんとし、いろ／＼世話をやき、見合ひまで済んで結婚當日が逼ると、學僕は破談を懇請して已まないで、簡堂怒り出し、今に迫んで破談と云ふには何か仔細があらん、それを明白に云はねば、先方に斷ることが出来ない、理を説いても何としても事情を云はないのに簡堂も窮して、結局他の友人に依頼して密かに其事情を探らせると、新郎は先生に祕し或る夜私娼を買つた處、そこに現はれたのが、近日結婚すべき女であつたので、急に愛想をつかしたが、先生に對し私娼を買つたことを打明け兼ねたのである

と。かゝる悪風習は畢竟嫁具の美を衒ふから起ることであるが、知らず、此の習慣は今尙ほ存するや否やを。

鞆丸笑話

入澤達吉博士と同席した時に鞆丸の話が出た。左右兩丸に多少大小があるやうだが、といふと、入澤博士は諧謔を弄して、朝鮮人だけは左右ともに大小がない。鮮人に金玉均といふ人があるではないか、というて笑はせたものだ。

象の平内

自分が名家手簡のコレクションに没頭した頃、傍ら書簡に就ているのの傳説などを調べたこともあつたが、つい淺草の觀音境内にある、象の平内の像に關連した、手紙のエピソードのあることに気がつかなかつた。此の平内は人殺しをしたものだと言はれてゐるのに、いつしか縁結びの神のやうになつたのは、もとは人殺しだから「ふみつける」など、罵つた、侮蔑の意が、「文をつける」と轉訛したらしく、江戸時代には御殿女中から「平内様參る、御存知より」として届けた手紙だけでも大變の數で、自然此の手紙を扱ふ文茶屋といふが出来、初めは一軒であつたが後には他

に殖えた繁昌振りで、追々手紙の交換がこゝに行はれ、御殿女中などは其の返事の届くの待ち焦がれ、封を切つて讀んで見ると、いろ／＼の心意氣が書かれて、あなたを好くとか、好かぬとか、さながら辻うらのやうなものであつたと云ふが、此の月下氷人たる平内の相貌は如何にも醜男子であるのに、音の轉訛は妙な物を文の使者としたものだ。

嵐雪梅

印人服部耕石氏の話のうちに、俳人嵐雪の墓が千駄木あたりの某寺にあつたのを、前年他へ移した。その墓畔に古梅が一株あつて、元

祿あたりの古びがあつた。本幹は腐朽したが、傍らに出た芽生えが直径五寸もあつて、これもよほどの年數を経てゐる。墓を移すについてその梅を取拂ふ事になつたので、その材で印材を作り、「嵐雪梅」の烙印を材に捺して、俳人のために一時多くの印を彫つたことがあるといふを聞き、自分も一顆の刻を依頼した。そは友人井上關水氏が俳諧をやるから、それに贈らんがためであつた。嵐雪の子孫は今存在してをらぬ。只兄の子孫は今淡路にあつて、葉茶を嚙いでゐる。その嚙ぐ茶に「嵐雪」といふ銘もある。それがまた番茶であるといふのが更に面白い。

座敷八景

紀海音の兄の永田貞柳は名高い狂歌人であるが、その人曾て火事に遇うて土蔵住居をしてゐた折の狂歌に、

くら住居江戸を移して朝夕の烟りをふじと詠めくらしつ

生れたる時もそこらと聞なればやがて死んと又くらに入る

定家とは似てもつかぬ小倉住百人一首あるかないか

せもうても我住宅は都ぞやたゞみの數も九疊まである

この貞柳にまた座敷八景の詠歌がある。歌はともかくも八景の見立てがよろしい。

鏡臺秋月 扇子晴嵐 時計晚鐘 臺子夜雨
塗桶暮雪 琴柱落雁 行燈夕照 悅架歸帆
臺子には釜を置くが故に夜雨が利く。塗桶は綿を延ばす器なれば雪がきく。悅架は手拭掛けなり、帆に見立てるわけである。

露國人のヅボラ

露國人は「スラーヴ」氣質で、そのヅボラさは「アボシ、ネボシ、カクニブーシ」の三語でよく表白されてゐるとも言ひ得よう。この三語が「どうにかなるであらう」と云ふ意味

であることは、このだらしない言葉に籠つてゐるらしく、露語に通ぜぬものにまで容易に諒解されるであらう。かゝる露西亞人が往々

日本人に難癖をつけ、露領の森林に山火事などは曾つてあつたことがない、日本人が濫りに喫烟して火を慎まないからこの事があるのだと、日本人のヅボラを責めてゐる。ヅボラの本家本元からこの詰責を受ける日本も、露國に譲らぬヅボラの性を有する？

これでも自由國か

米國は何人も許して自由國としてゐる所だ。しかし果して自由國であらうか。こんな疑ひ

を發したら人は妙に思ふであらうが、自分などは米國は案外不自由の國だと思つてゐる。飲食など、人の私事に屬することは、米國でなくても人の自由に任せてある。然るに國の憲法で酒を禁じたなどは、漸く非を覺つて幾分の禁を解いたけれども、人の自由を束縛するものであるまいか。宗教などでは宗法で酒を禁じてゐるが、國家が人の私行に立入つて酒を禁ずるといふことは、自由國には有り得可からざることであるまいか。まだその外に人の思想の自由をも拘束してゐる。この頃浮田博士から聞いたことであるが、米國では進化論を學校で講ずることを禁じてゐる。こ

これは憲法で禁じてゐるのではない。十一州と云ふ、何れかと云へば田舎の州ではあるが、それが州法で州立學校に教鞭をとるものは決して進化論を主張してはならぬ、従はないものは直ちに罷免すると定められてゐると聞いたが、この科學時代に意外の事である。昔し羅馬法王がガリレオに地動説の撤回を強要したことを今日思ひ起さしめ、これほど時代錯誤はないが、それが事實だと云ふから驚かさるを得ない。勿論國人が賛成して禁酒の條項を憲法に定め、州人が賛成して進化論の禁を定めたとあれば、デモクラシーであらうけれども、人の私行を束縛し、人の思想を檢束す

ることは自由政治の大缺陷であつて、吾輩が米國を案外の不自由國だと云ふのはこの故である。日本は亞米利加よりも洋風の文化に於ては後進の國だが、ダーウキンの進化論も、スペンサーの進化論も、早くから導かれて、スペンサーの進化論は明治の初年に大歡迎を受け、餘りにその著書が日本に賣れるので著者も驚いたといふ説すらある。日本に於て進化論が講堂に講説さるゝのを誰も咎めないのに、自由國を以て誇る米國で特に法律を以て禁ずるとは、さてゞ、亞米利加の自由國もウハベ計りだといひたくなる。

英國の保守氣質

英國の國民性は保守的で、何事に就ても氣長に堅實にやる。例へば家を建築するにしても、初代は一階を作り、二代は二階、三代は三階と云ふやうに、代を累ねて積み重ねる風であるが、米人となると、五層でも十層でも一舉にやつてのけると云ふ相違がある。曾て米人は英國の芝生が滿地美事であるのを感じて、どうすればこんなになると園丁に問うたら、園丁の云ふには、何でもないと云ふ。時水をやつて延びれば刈り、時々ローラーをかけるだけだ。さうすれば、百年位も立てば

必ず立派になると云うたのには、米人が氣の長い話に一驚を喫したと云ふ。日本人も何れかと云ふと、近頃は亞米利加流で、兎角事功を急ぐの弊がある。

武士道の國

日本は武士道をもつて世界に誇る國柄であるのに、いざ喧嘩となると如何にも亂脈で、殴り合ふのに法式も何もない。どんな卑劣のことでも手段を擇ばぬ。相手が斃るれば必ず押しかゝつて喉をしめたりする。西洋あたりの市井の喧嘩は、目のあたり見た事はないが、活動寫眞などで毎々お目にかゝるのを見る

と、カーウ・ボーイの殴り合ひでも多少の法式があるかに見える。打倒された敵の弱味に乗じて押しかゝるやうな事はなく、必ず起き上るのを待つて更に闘ふことが例となつてゐる。かれ等は喧嘩の場合に拳闘の法則を用ゐるらしい。自分はこれに疑ひを存してゐた

が、米國歸りの人がいふところによると、全く喧嘩の場合でも人格を重んじて卑劣の事を戒め、飽くまで拳法に外れないやうにつとめると聽いて見ると、米人はむしろ武士道を守つてゐるかに思はれる。市井の闘争はとに角として、わが國の士君子の争ひはどうかといふに、廉恥も何もあつたものでなく、神聖な

る議政壇上ですら泥仕合ひを事とし、無警告に反對議員の頭を殴ぐる如き卑怯の事が、現に議會に實現されて、告發沙汰となつたことがある。これが武士道國の選良といはるゝものゝ殆んど常習であるとは驚き入つたことではないか。

かけ言葉

これも坪内翁との話であるが、翁の話に、言葉の上の洒落は、今の文學者甚だこれを卑み、終にかけ言葉までも無用として非難するけれども、歌にだけはかけ言葉は必要である。かけ言葉のために、文言が簡潔になり、味も加

はり、またリリカルにもなる。かけ言葉はわが國語の特徴であるから、一概に排斥すべきでない。西洋にもかけ言葉はあるけれども、日本の如くうまくゆかぬ。沙翁も頻々かけ言葉を用ゐたが甚だ妙でない。拙譯が原文以上と自負し得るところは、只かけ言葉の譯にあるのみと。

珊瑚

昔しは地中海に珊瑚の佳品を産した。日本で古渡りというて珍重するのはこれで、その特徴は、色彩が濃か^{コトナ}で、心まで同じ色が通つてゐる。日本の土佐の産などは赤色が薄く、外

部は赤くとも、心まで通つてゐない。随つて古渡りに較べると價にも可なり相違がある。この頃聞けば、地中海の産は地變のために一向採れなくなり、今日世界で多産といはれてゐるところは、わが小笠原島である。然るにそれが原産の儘七八分通り伊太利と支那に輸出され、かの地で加工さるゝことになつてゐる。何故、日本で加工されないのであるか。とかく日本では斯様な事を閉却し、看すゝ利益を奪はるゝは遺憾千萬である。

加賀友禪

西京の友禪と加賀友禪の相違があると、斯道

の通人楠瀬日年氏がいふから、その主たる相違の點を聞いて見ると、京のは色彩が濃淡二様になつてゐるのが特色である。例へば紅色を用ゐるとすれば、濃い色と、ぼかしたやうな薄い同じい色が重疊するのだが、加賀友禪は濃淡三色である事が相違で、兩者を鑑別するにはこの特徴を知らねばならぬというた。同じ友禪の工夫が處によつて異なるは何故であらうか。或は水などが關係するのであらうか。藍染などは、京に染めては色が裏面に徹しないのに、江戸だけは裏に徹するといふ。それが矢張水の關係によると、これも楠瀬氏の談である。紙の如きも水に非常の關係があ

る。土佐で奉書を漉いても硬くなつて、越前の如く、柔く、ふつくりしたものを漉き得ない。

字 眼

川柳にも俳句にも必ず字眼がある。僅に一字二字が全局を引立てる。高野竹隱が新潟に遊んだ時、人から百詩の評を頼まれ、各詩の字眼一字を摘記して評に易へたなどは、評の形式である。旅窓に百詩を一々評し得るものでない。かゝる場合における猾法ともいふべきだ。

貧 窮 組

維新の直ぐ前、幕末の亂脈時代に、江戸市中のあちらこちらに「貧窮組」と書いた蓆旗を押し立て、物貰ひが群をなして横行した事がある。軒別に訪うて組合に這入れと勧誘し、組合に入りたくなければ金を出せと強請するので、已むなく加入したものもあり、乞食と伍をなすのがいやだ、さりとて孤立では掠奪されるからといふので、懇意同志申合はせて貧窮組を組織したものもあり、だん／＼この組合があちこちに起つて跋扈したといふが、いつも綱紀が弛廢するとこんなものが起り、革

命の豫告をするものだ。今もこれに似たものがある。油斷大敵だ。

女子と柔術

柔術家加納治五郎氏と食卓を與にした時、柔術の近況について種々の話があつて、女子にも柔術が必要だといふ話も出た。如何にも今は薙刀などを女子の武器とする時代でない。さうかというて懐劍を潜めてゐるわけにもゆかぬ。矢張り護身のため或る程度まで柔術を心得てゐる必要があると思つた。加納氏のいふには、只一手だけでも女子が心得てをれば、難をまぬかれ得る。試みに私の手を捕へ

て見よと差出されたのを、それを堅く抑へると、その刹那に、するりと外されたのは驚いた。加納氏は笑つて先づこんなものだといはれた。なるほど、この外手が女子の護身に一番大切に相違ないと自分も笑つた。近來女子で入門するものもあるけれども、困る事には長く續かないさうだ。

ベルダン

佛國が幾百萬の生靈を犠牲にした、ベルダン戦場の入口には立札があつて、數行の文字が書かれてある。云く、此の一區の一砂片土と雖も我佛人の殉國の肝腦の化體であるから、

こゝに足を入るゝものは、肅然、容を正し、崇敬を拂はねばならぬと。實に敵國の攻撃の主力は茲に集注され、佛國の安危存亡は繫つて此の一區にあつたのだ。如何に獨逸の砲力が猛烈であつたかは、殆ど筆の形容し得る所でない。砲彈の落下する所は、あらゆる有形のものを粉齏して、全く無一物の荒廢地に化し去つた。現今存する道路は戦後に開いたもので、往々土中より發見するレールの破片は、戦時中敵前に架した輕便鐵道の名残りである。此地を防ぐ爲めには、幾萬の兵を犠牲にしても輕鐵を架して兵や物資を運搬せねばならなかつた。多數の工兵を犠牲にして架し

た輕鐵は其日の内に破壊された。それを日々繰返し々架設した。一日僅に二時間用立てればそれで可なりと云ふ打算から、毎日繰返し々敵前架設を強行したと云ふ。此の大戦中に砲力が大なる發達をなし、咄嗟幾百門の砲を一所に自在に集合することも出来れば、頗る遠距離から照準を過たず目的の地點に彈丸を送ることも出来た。勿論飛行機の偵察で照準を定め得たでもあらうが、兵器の進歩は實に驚くべきもので、機械のみで勝敗を決し得るものとすれば獨逸は勝つたとも云ひ得ようが、佛人の殉國的精神は殲滅的砲力に屈せず、肉を以て戦つた爲めに、此の地の占領を

免れ、結局防ぎ果せたのである。絶大の砲力が如何に威力を揮つて何物をも粉齏しても、その地を占領せねば「勝」の一字が許されない。此の點から考へると、今日の如く大遠距離より砲を放つことが出来ることゝなつては、昔接戦をやつた時とは事かかつて、占領は寧ろ困難である。防禦軍に護國の勇と精神とあれば、敵が占領するまでには防禦の餘地は存するのである。軍器が改良さればされるほど敵との距離が遠くなる。随つて戦鬪の規模は益々大きくなる。昔は戦場は或る區域に限られたが、世界大戦後の戦争の傾向は、國土の全部を戦場と

するやうになつた。と云ふのは、飛行機が遠慮會釋なく敵國の全土を威嚇するからである。何れの地も晏如たるを得ない。一朝戦争となれば、國土を擧げて戰場たるの心掛けを以て、閭國民擧つて護國に殉ずるの覺悟が無ければならぬやうになつた。飛行機は、今の處空中に停止が出来ぬ。随つて敵土の上空をおかして如何に威力を揮つても空を占領することも出来ず、降つて敵土を占領する能力も無い。今後の戦争は立體的だと云ふ譬喩もあるが、また考へやうによつては、飛行機も彈道の如きものとも云へる。空中に長く同じ位地を保ち兼ねる點は、銃砲の彈丸が空を飛んで或る地點に落ちると格別の相違はない。勿論飛行機は重大なる働きを爲すものである。併し今の處その働きは主として偵察である。又威嚇である。空中より爆彈を投じて地上の物を破壊し、若くは火災を起さしむるも其の働きではあるが、國民に決死的精神さへあれば、威嚇もさほどに效は無い。火災も防ぐ術がないでもない。愈々大戰となつて國民が血を湧かすとすれば、コレ式のこととは瑣々たることである。

何と云うても戦争の主力は大砲にある。世界の大戦前までは重砲を運ぶことが容易で無かつた。その重量の非常である爲めに、砲を分

解して運搬するより外無かつたが、世界大戦中には砲車に乗せたまゝ、どんな所へもズンズン運び得るまでに工夫された。佛國も矢張り工夫をやつたが、終に戰場に持ち出すに至ら

なかつた。こんな大威力を揮ふものを、機を過またず容易に運び得るだけでも非常の進歩で、兵器の革命は眞に豫想外のものがある。

附録

吹塵録

郷賢の沿革

自分の郷里新潟縣北蒲原郡水原は徳川時代天領であつて、代官として赴任した幕吏に學問のあるものが多かつた關係で、早く温故堂と稱する學問所が起り、種々の沿革があつて、維新後弘業館と改稱し、文學博士星野恒を迎へて其の學頭とし、郷黨の子弟を教授した。自分の如きも少少其の教を受けた一人である。此賢の沿革は今頗る不明で、僅かに斷片的に舊記の存するものは左の如きに過ぎない。

水原町教育沿革綱要

天保十三壬寅年、徳川幕府ノ家人小笠原信助、水原陣屋詰メ代官ヲ命ゼラル、ヤ、其ノ屬吏ニシテ元締役タル石川奎之助(大田蜀山ノ高弟ニシテ漢學ノ素養アリ、長者園ト號シ、狂歌ヲ巧ニシ、其ノ名高シ)、高尾駿介(吏務ニ長ジ、令名アリ、又俊助ト書スルアリ)兩人相議シ、小田島翠塙(越後野志ノ作者、經學詩賦ヲ善ス、通稱儀兵衛ト云フ)、三浦榮亭(醫家ノ名門東里ノ二男ニシテ、曾テ江州膳所ノ城主本多侯ノ侍醫タリシモ、兄鷗沙ノ歿スルヤ、辭シテ家ニ歸リ、家事ヲ督ス)ヲシテ、毎月三回陣屋内ニ經史ヲ講ジ、管内有志ヲシテ聽聞セシム。(榮亭ハ醫家タルヲ以テ姓ヲ稱シ刀ヲ帶ビタルモ、翠塙ハ商家タリシヲ以テ、講義ヲナス三日ニ限り、姓ヲ稱シ刀ヲ帶ブルヲ許サル、當時以テ榮譽トス)

嘉永三庚戌年ニ至リ、高尾駿介(此時石川奎之助江戸へ歸リテ在ラズ)、代官小笠原信助ニ請テ、陣屋ノ後ニ一室ヲ建テ教授ノ所ト爲シ、頼支峰、通稱復次郎、名ハ復、字ハ士剛ガ北遊ノ途次水原へ來リシヲ聘シテ講師トス。

支峰、此ノ學室ヲ溫故室ト名ヅク。此ノ時、管内ノ豪商、富商ニ諭シテ典籍ヲ獻ゼシム。村上、黒川、新發田、村松ノ各諸侯モ、此ノ學ヲ美トシテ書籍ヲ寄贈セラル。凡五十餘部。黒川、

新發田、村松侯ハ各一二部ノ寄贈ニシテ、他ハ皆村上侯ノ寄贈ナリ。嘉永七甲寅年八月、此年安政ト改元ス。

小笠原信助、水原ノ代官ヲ罷ルヤ、後任トシテ福田所左衛門、代官ヲ命ゼラル。頼支峰ハ此ノ前ニ水原ヲ去リ、三島郡石地村ノ素封内藤某ノ弟、同姓鐘山モ、水原陣屋ニ聘サレテ教授セシコトアリシモ、支峰ノ前後明ラカナラズ。

高橋克庵、水戸藩士ニテ、通稱騏一郎、名ハ格、水原へ漫遊シ、其ノ著ス所北遊紀行、大泉行アリ、櫻田十七士ノ一人關鐵之介、丁難日録ノ附録ニ、安政五戊午六月十五日、越ノ水原里ニ假寐シ、三人一ツ蚊帳へ入り云々ノ語アリ、此ノ三人ノ一ハ克庵ナリ。又同書ニ故郷ノ事ヲ思ヒテ高橋云々ノ語アリ、此ノ高橋ハ克庵ナリ。

明治十五年中、水戸ノ儒臣栗田寛、青山延壽、内藤耻叟ノ三氏ニ克庵ノ履歷ヲ尋ネシニ、三氏モ克庵ノ名ヲ知ラズ。曰ク、水藩ニ於テ、嘉永、安政ノ頃ハ、諸國へ二三名宛藩士ヲ出シ置キタリ。然レドモ皆變名ヲ用ヒタリ。越後ニ在リシ高橋克庵ハ何人ノ變名ナリシヤ、知ラズ。

(之ハ故小田島博愛氏ノ談ナリ)

克庵ノ去ルヤ、森樞堂(勢州桑名ノ人、名ハ靖、字ハ子夷、九華ト號ス)、柏崎桑名藩ノ陣屋ニ居リシヲ、代官ニ於テ招キシモノナリ。但シ福田所左衛門、安政戊午年水原ノ代官ヲ罷メ、其ノ後ノ代官ヲ里見源左衛門トス。樞堂ヲ招キシハ蓋シ源左衛門ナラント。樞堂ノ著、樞堂文抄、蓬窓日記ニアリト。

數年ニシテ樞堂去ル。當時尊王攘夷ノ說盛ニシテ國事多難、有志ハ筆硯ヲ投ジテ又學事ヲ省ミルモノ尠ク、溫故室亦大ニ衰微ス。慶應元年十二月、代官里見源左衛門歿シ、翌二年五月廿八日、篠本信之助、代官トナリ、大ニ學事ノ衰頹ヲ憂ヒ、書ヲ管内ヘ發シ、富豪ヲ説キ、字袖ノ葉ニ學校ヲ建設ス。

先年小笠原信助支配ノ節、手附手代ヲ始メ身元ノ者其ノ外爲教育、當陣屋内ヘ溫故室ト稱シ、學問所取立、儒生差置候ニ付、村上侯ヨリ若干ノ書籍モ被致寄附、身元ノ者ヨリ差出候書籍モ數多有之處、信助引拂後致廢業、申送り迄ニテ書籍ハ其ノ儘引繼相成、今以再興無之嘆息ニ付、今般陣屋ノ程近キ場所ヘ學校被建、手附手代ハ不及云、陣屋元身元ノ者始メ近在ノ者迄モ、追々教育致シ、遂ニハ小前末々迄モ、勸善懲惡ノ理ヲ聞傳ヘ、善者ハ彌々進ミ、

不良者ハ自ラ耻テ改進ノ念ヲ生ジ候様致シ度、左スレバ身元ノ者并庄屋共村方取締ノ一助ニモ相成リ、自然訴獄ハ薄ラギ、村靜カニ可相成候、就テハ右學校取立場所地代金家作其ノ他入費ノ儀ハ、小前迷惑不相成様、身元ノ者申合、永世ノ爲ヲ思ヒ、銘々相當出金致、成就致シ候様丹誠有之度候、經費豫算別記、

市島德次郎外四十一人ニ於テ金五百六十壹兩ヲ醸出シ、熊倉孝次郎、穴澤忠治、細山清七ニ於テ工事ヲ督シテ成功ス。

金四十五兩宛市島德次郎、白勢長兵衛、金三十兩佐藤伊左衛門、金拾四兩宛細山清七外廿三名、金七兩宛星野求五郎外十四名。建築掛、大庄屋熊倉孝次郎、穴澤忠治ヲ主任トシ、市島德次郎、佐藤伊左衛門、市島次郎吉、細山清七、芋川彦五郎、佐藤友右衛門、佐藤忠藏ヲ附添トシタリシモ、細山清七、專事ヲ執リテ熱心ナリシ。建築ノ地ハ袖ノ葉町稻荷神社ノ西隣ナリ。講堂ハ四十八疊、隔障シテ四區トシ、正面ニ床アリ、孔子ノ畫像ヲ安置ス。(谷文晁ノ高弟依田竹谷ガ、足利學校ニアル唐吳道子筆墨本ヲ臨寫セルモノニテ、小笠原信助ノ寄贈ナリ)

左右ノ閣ニ祭器ノ類ヲ置ク。堂後ノ一室ヲ書生寄宿ノ舍トス。亦閣アリ、書ヲ藏ス。小園ヲ

隔テ教師ノ屋室ヲ構フ。堂アリ室アリ房アリ厨アリ、頗ル具備ス。中間ニ廊ヲ架シ、講堂ニ通ズ。

中澤玄仲（水原下條ノ醫師ニシテ、經史ヲ龜田綾瀨、東條一堂ニ學ブ。春秋左氏傳、莊子ヲ以テ得意トシ、孟子、論語之レニ亞グ。明治廿八年六月廿八日、七十九才ニシテ歿ス。當時玄仲ニ匹敵スル漢學者、三浦榮亭ノ嗣少兵衛トス。少兵衛ハ詩作ニ巧ナリシモ、經學ハ玄仲優レタリト云フ）ヲ以テ講師トシ、市中ノ醫、神職、僧侶及其ノ他相當學識ヲ有スルモノヲ撰擇シテ句讀師トス。

其ノ開校式ニ、峰岡藩ノ儒臣新保正興（正水ト號ス）氏ヲ聘シ講義ヲ爲サシム。慶應四戊辰年三月（此年明治ト改元ス）篠本信之助代官ヲ罷メ、三月十日、會津城主松平肥後守容保、水原陣屋ヲ預ル。其ノ奉行菅野右兵衛（老職菅野權兵衛ノ末家ニシテ、幼ヨリ令聞アリ。水原へ來ルヤ、大ニ仁政ヲ施ス）來リテ政事ヲ司リ、大ニ學事ヲ獎勵ス。

軍事ハ、老職西郷賴母來リテ、市島徳次郎宅ニ在陣シ、越後路戰爭ノ總指揮ヲナス。七月廿七日、官軍ノ先鋒トシテ、少參謀高島勲之助等、兵ヲ率キテ水原ヲ陷レ（本陣小田島宅）、續テ

村松、津川ヲ陷ルヤ、民政局ヲ水原陣屋ニ設ケ、判事小笠原彌右衛門（長藩士ニテ愛隣ト云フ）政事ヲ司ル。此ノ時、學校ヲ同局ノ管理トシ、學事ヲ督ス。

翌明治二年二月八日、越後府ヲ水原ニ置ク。其ノ七月、星野恒太郎（名世恒、字ハ徳夫、豊城ト號ス。明治六年、恒ト改ム。天保十己亥年七月七日、中蒲原郡白根町ニ生ル。父ハ嘉之助、母ハ板谷氏、家世々農ヲ業トス。十二歳ノ時、僧環洞ニ師事シ、廿一才江戸ニ出テ、鹽谷甲藏ノ門ニ入り、居ルコト十餘年ニシテ、明治元年歸郷ス。經史文章ニ長ズ）ヲ以テ教師トス。（權大屬待遇）外ニ句讀師三人置ク。（二浦春作其ノ一人ナリ、後宗春ト改ム。二人不明）

越後府廢セラレ、水原縣ヲ置ク。縣學校トス。此ノ時、溫故堂ヲ廣業館ト改稱ス。明治三年三月、水原縣廢セラル、ト共ニ縣學校タルヲ止メ、每月金貳拾兩ヲ星野恒太郎ニ給シ、家塾ノ心得ヲ以テ生徒ヲ教授セシム。（星野ノ身分ハ従前ノ如ク權大屬タリ。其ノ身官吏ニ非ラズシテ此ノ待遇アリシヲ異數トス）

此ノ時句讀方ヲ廢シ、書生ヲ養ヒ、授業ヲ補助セシム。明治四年、水原局ヨリ、（廢縣ト同時）水原町ニ於テ學校ヲ維持スルコトヲ命ゼラル。依テ舊陣屋敷地及建物ヲ併テ官ニ拂下ヲ請ヒ、

陣屋ノ正廳ヲ修繕シ、其ノ十一月廿五日移轉ス。(移轉ノ後、舊袖ノ葉ノ學校ハ賣却ス。今ノ宮島新太郎、小菅要八ノ宅ノ一部ハ即チ是ナリ)

明治五年壬申七月、公立水原校ト改稱シ、更ニ新築ノエヲ起シ、別ニ生徒寄宿舎ヲ設ク。(工事、齋藤忠三郎管理ス) 其ノ學則十餘ヶ條アリ。大要、倫理ヲ重ンジ、徳誼ヲ崇ビ、古今ノ情勢ヲ通觀シ、舊ニ泥マズ、新ニ流レズ、獨立ノ精神ヲ養成センコトヲ期スルノ趣旨ヲ掲ゲタルモノニテ、漢學ニ偏倚セルモノ。此ノ時マデ、(明治五年七月改稱ノ時) 廣業館教授トシテ毎月金廿兩ヲ官ヨリ星野氏ニ支給アリシモ、改稱ト共ニ教授ヲ免ジ、職務勉勵ノ廉ニテ金五拾兩ヲ下賜セラル。

同師ハ引續キ水原校ノ教授トシテ在勤ス。俸給ハ官ノ支給ノ如ク廿兩ヲ給セラル。其ノ後、文部省ノ布告ニ因リ水原小學校ト改メ、學則等モ改正セラル。明治八年三月、星野教授辭任シ、村上ノ士族三好義雄(文部省直轄新潟師範卒業)、訓導トシテ赴任ス。(月俸十七圓) 此ノ敷地ハ、文和元壬辰年ヨリ、水原ノ領主大見伊勢守盛家ヨリ數代、慶長三年迄ノ城趾ナリ。盛家九代ノ裔ヲ水原常陸介親憲トス。上杉謙信、景勝二公ニ仕ヘテ其ノ名顯ハル。

明治元年、王政復古(復古ヲ後維新ト改メ稱ス) 民政局ヲ置キ、明治二年、越後府設立、幾モナク廢シテ水原縣及按察使府ヲ置キ、明治三年之ヲ廢シ、水原局トシ、明治四年又之ヲ廢シ、其ノ際幾多ノ變遷アリ、人心ニ影響ヲ及ボセシコト僅少ナラズ。從ツテ學校モ亦數次ノ變革、教師ノ異動亦屢ナリ。脇山星陵(村上藩ノ漢學者)、星兵吾ヲ經テ、以下悉ク師範學校ノ卒業者ヲ訓導トシテ教授ヲナス。

明治五年以來、學校持續ノ基礎稍々立チ、人心漸ク學術ノ缺クベカラザルヲ知り、子弟ノ觀ルベキモノモアリ。爾來鄉黨爲ス有ルノ士ハ、幼時此校ノ訓育ヲ受ケシモノ多シ。

- 一、陣屋内ニ温故堂ト稱スル學校ヲ置キシハ 嘉永三年 月 日不詳
- 一、袖ノ葉ニ廣業館ヲ建テシハ 慶應二年 月 日不詳
- 一、越後府ニ星野恒太郎氏ヲ招キ講義ヲセシハ 明治二年七月 日不詳
- 一、袖ノ葉ノ廣業館ヲ舊陣屋内ヘ轉ゼシハ 明治四年十一月廿五日
- 一、公立水原學校ト改稱セシハ 明治五年七月 日不詳
- 一、文部省令ニ依リ水原小學校ト改稱セシハ 明治八年 月 日不詳

他日水原小學校ノ創立記念日ヲ制定セラル、場合ニハ、前記ノ中ヨリ選擇スルヲ可トス。

一、水原學校ノ當時ノ關係者

- 戸 長熊倉孝次郎
- 同 飯村修治
- 同 齋藤忠三郎
- 用 掛穴澤忠治
- 學區取締 笠原重信
- 學校世話掛 佐藤友右衛門
- 佐藤 一郎
- 細山清七
- 芋川才次郎
- 佐藤忠藏

字袖ノ葉ヘ建築セシ經費概算

岡 耕十郎

- 一、唐紙 緣黒塗 拾六間 此金八兩三分
- 一、障子 緣春慶塗 廿五間半 此金拾八兩
- 一、板戸 三間 此金二兩二分
- 一、雪隠板戸 五本 此金一兩二分
- 一、窓 四間 此金一兩
- 一、袋戸 廿間半 此金拾五兩
- 一、疊 四十六枚 此金拾四兩二分
- 一、材木 此金百八十兩
- 一、大工作料 此金九拾兩
- 一、釘 此金廿五兩
- 一、家根 此金卅五兩

吹塵録

- 一、人足 此金廿三兩
 - 一、石 此金三兩
 - 一、同地覆 此金二兩二分
 - 一、壁 左官手間料外一式 此金廿一兩二分
 - 一、地形 此金七兩二分
 - 一、地代金見込 此金五拾兩
 - 一、湯殿流シ戸桶小道具一式用度 此金五拾兩
- 合計 金五百四十八兩三分也

新潟學校時代

はし が き

明治五六年頃、同じく新潟の學校に机を共にして初めて西洋の學問をした頃の同窓は今極めて少ない。兎もすると、その同窓が會して語り合つて見るといろ／＼面白いこともあつて、今から考へれば殆んど隔世の感がある。自分は其頃十三四歳の少年であり、且つ在學の間が僅かに二、三年位の短期に過ぎなかつた爲めに、覚えてゐることも甚だ少なく、且つ少年の觀察であるから、その觀察も誠に覺束ない。幸ひにして當時同學の先輩が二、三人在京であつた頃、いろ／＼と前後の事を聞き糺したりなどしてみると、いろ／＼の事が分つて來て、一通り其當時の事が話せるやうに思ふ。併しながら越後の最近の文明といふものは、此幼稚な學校が紀元をなしてゐるのである。其點より考へると、越後の文明史を他日編まんとするには、どうしても其時代の教育の有様を缺いてはならぬ。然るに此時代のことは多く忘れられて今は語る人なく、若し二三十年を経過したならば、遂に其時代の事實は全く湮滅に歸して、此文明紀元の材料が越後の歴史なり若くは教育の歴史なりに、全く缺ける虞れがあるであらうと思ふので、自分是不束ながら、燕雜な談話ではあるが取調べただけの事を書き現はして、教育史などを書く人の他日の參考に供したいと思ふ。返す／＼も思ひ出づる儘を粗略に語るに過ぎないのだから

當時同學の人、若くはその頃學校に關係した人の眼に此の記事が觸れたなら、自分と志を同じうする人は、願はくは材料を供給して自分の足らざる處、誤れる處を補正して貰ひたい。

新潟に於ける英學の端緒

新潟が幕府の末路に開港場となつて、五港の一に數へられた結果、早くも維新以前、新潟には特に外國人に接する係員が置かれた。それは農學界の先輩として知られた津田仙氏の如き、その頃は外國係として新潟に来てゐたこともある。新潟は五港の一に數へられたが、實はあまり開港場たる用を爲さなかつた。併し五港の一たる格として外國人に對する設備を要したのである。此津田氏が新潟在住の頃、早く英學の端緒を開いて、津田氏を師として五、六の人々は英學の研究を始めた。

斯様な譯だから大政維新となつては、無論英學の機運は此處に發せざるを得なかつた、自分の知つてゐる處に依れば、平松時厚といふ人が知事に任ぜられたのは明治三年六月十九日であると思ふが、此頃よりして英學が先づ知事の考へを以て計畫せられた様に思ふ。

知事の事をいふに就て序でながら府縣の沿革を言はんに、今の新潟縣には、自分の郷里北蒲原郡の水原に越後府が置かれ(明治元年六月)、同年九月新潟府となり、更に二年二月に再び越後府が置かれ、更に同年二月二十二日に新潟縣が置かれ、更に同年七月二十七日に水原縣が置かれたといふ様に、いろいろ沿革もあるが、明治三年六月十九日に今の新潟縣が置かれて、その時の知事に任ぜられた人が平松時厚氏で、氏は元宮内省の權大丞であつた。

平松氏の考へを以て初めてブラウンといふ人を新潟へ聘した。是が新潟に英學の起る紀元とも謂ふべきものであらう。此ブラウンは其時分流布した英文典の著者で、所謂ブラウンの文典といふものはその當時盛んに用ゐられ、その爲めにブラウンといふ名を人が知つてゐる様なものであつた。斯の人は一人の娘を伴ひ來つて、その娘もいくらか英語教授の手傳ひをした。

楠本縣令の激勵

此時分の學校の組織は如何なるものであつたか詳しく分らんが、何にしてもその時分の學校といふものは、都にこそ相當のものがあつたが、地方には唯だ各所に家塾がいくつかあつた位

なこと、所謂寺子屋跋扈の時代であつたから、此新たに起つた學校といふものも、先づ家塾の少しく纏つた位のものゝ觀てよからう。無論何々學校といふ様な立派な名稱もなかつた。何處で英學を教へたか、その場所も自分は知らない位である。無論維新の當時に於ては英學を主にした譯でもなく、之に伴うて漢學並に皇學などの學科も並立せられた譯である。是等は皆場所を異にして、殆んど同時に三學校が開かれたといふ有様である。

漢學の方にはどんな人が教師であつたか分らぬが、皇學の方は慥か加茂の小池内廣がその教頭らしい位置にゐた様である。英學の方では、ブラウンの外に、當時新潟縣の一等譯官で中石得高といふ人が助教授といふ様な格で、譯讀などは此人が受持つた様に聞いてゐる。

其時分學生の數ほどの位あつたか、之も詳しくは分らんが、何にしても兵亂の擧句で人心も定まらぬ時代であるから、學校が開けたというても誰も來り學ぶ者はない。殊に新潟は商人の多い所であるので學問などに志す者は少なく、土地の者で入學したものは幾何もなかつた。そこで知事は據ろなく縣廳の役人の子弟などを勧誘し、是等の學科を修めしめた。だから、その數は二、三十人位に過ぎなかつた。此ブラウンの新潟にゐた間は二、三年位でもあつたらうか、

實は折角外國人まで聘しながら、唯だ僅かに英學の萌芽を發したといふ位の事で、此人は去つてしまつた。が併し、新潟の英學は此時より始まつたというてよろしい。

平松に代つて縣令となつた楠本正隆は誰も知つてゐる他日の衆議院議長で、大村藩士である。楠本は外務大丞より轉じて明治五年に新潟へ縣令となつて來たので、新潟縣の改革は全く斯の人の赴任後であるというてよろしい。楠本は晩年は頗る不得要領の人と評せられたが、此時分は年も若く、中々元氣壯んな時代で、赴任匆々あらゆる方面に大革新を試みた。例へば、斷髮令は出ても誰も結髪であつたのを、髮を切らせると共に、不馴れな帽子を戴かせるといふ様な勢ひで、僅かの間に社會の各方面に激烈な變化を與へた。勿論英學の如きは此人に依りて非常な革新が圖られた。

是までは學校の組織も陸に纏つてゐなかつたものを、楠本に至りて大に規模を擴張して、初めて學校らしいものとなつた。その頃の學校の組織は主として慶應義塾に則つたと思はる。校名は英學校と呼び、學長には二橋元長を擧げ、外人にはキングを聘し、教頭とも言ふべき位置には、縣廳の一等書記官であつた土取忠良といふ人を用ゐた。序でにいふが、その時分には、

新潟の如き開港場には外國人と交渉がある所から、官制に於て譯官といふものを置いた。それが一等より數等あつて、無論英學に通じた相當の人が來た譯である。斯様な人は置かれたが縣廳には格別仕事がないので、いつもこれを學校の教授に充てた。そこで前述の如く平松時代には學校はあつても僅かに二、三十名の生徒であつたのに顧みて、楠本は猛然起つて管内の巡回を試み、盛んに就學の奨勵をした。管内到る處大地主を集め、時勢を論じて新學を學ぶの必要を説いた。楠本縣令は大地主に向つて「お前等は子供を生んでも、之を教育することを知らん、そんな事では禽獸と選ぶ所がない」といふ様な激語を發して盛んに勧誘した。

その當時は未だ官尊民卑の習風の残つてゐた頃であるから、縣令様御自身の御巡回御勧誘といふので、富豪の輩は恐縮して子弟を出すことを諾した。斯くいふ自分もその時の勧誘で新潟へ出る事になつたのである。又その時の勧誘に依つて斷髮せしめられた。自分は斷髮の厲行だけは喜んで受けた。此頃油をつけて、すき櫛にすかれて結髮することは日々の一大苦惱であつた。それを免るゝ譯であるから喜んで應じたけれども、英學を學ぶため新潟へ赴くことは躊躇した。と云ふのは、その頃自分は漢學塾にあつて聊か漢學の趣味を感じた頃であつた。今日と

違ひ、その時分の少年は、十二、三歳位でも無點の漢文を読み、或は詩を作り、漢文を作るといふ位な程度であつたから、今日より見れば非常に進んだものである。自分は漸くにして漢學趣味を感じ、これから相當の力の付くことが眼に見えてゐる時であるのに、時勢の必要とは言へ、茲で廢めてしまふことは生涯の損と考へて、餘り氣も進まなかつたが、何しても縣令は目星を打つて出せといふし、親も強ひて勧めるので、實は不本意ながら新潟へ赴いた様な譯である。

楠本縣令の勇斷と學校の隆盛

以上は當時の自分一個の所懐であるが、さて縣令は新潟縣の極端たる岩船の村上まで赴いて、その時に一、二の人を村上に得た。それは今故人となつた、工學博士近藤虎五郎氏の父近藤金彌といふ人、並に竹内政武の兩人である。此二人は共に村上藩の士族であつたが、縣令は此二人を選抜して學校の事務掛にと新潟へ伴ひ來つた。慥か近藤氏が前で、續いて竹内氏が來た様である。

此二人の役目は何というたか忘れたが、今いふ幹事といふ様な役目で、之が久しく學校の事

務に従事した。斯様な事で一巡知事は勧誘を試みて幾何か學生も來たが、併し未だ數が少かつた。そこで知事は、こんな事では十分な教育は出來兼ねると更に一大勇斷を試みた。それは私費で學生をとるといふ事では、唯だ富豪の子弟の來り學ぶ外、殆んど學生を得ることは出來ないから、學資なくして篤學のものを得るには、別な方法に據らねばならぬといふことよりして、その當時新潟縣の行政區劃が二十數大區に分れてゐたが、各區に命令を傳へて、必ず區費を以て若干の學生を是非新潟へ出せといふ訓令を出した。是に於て各區とも若干の學生を選抜して新潟へ送ることとなり、此強制手段で初めて相當の學生數を得ることとなつた。嘗て早稻田中學の教頭をした今井鐵太郎氏の如きは其一人である。斯様なことで、結局隆盛の時代には學生の數は四五百人位に達した。

是より先きブラウン已に去り、更に教師を得る必要が起つたので、その時に聘せられた人は首藤陸三氏である。氏は早稻田大隈邸に早く英學を開講した尺振八門下の人で、國民黨代議士として、長く仙臺より擧げられた人である。その首藤氏は當時は中々立派な好男子で、能く黄八丈の羽織を着て學校へ出席するのを吾々は子供心に記憶してゐる。此人に就ての奇談は、初

め新潟へ着すると秋田屋といふ旅館へ泊つた。そこで縣廳から召狀の來たのを見ると、何日何時特で出頭せよといふ事であつた。勿論英學者の事であるから袴の備へなどない。據るなく宿屋の主人に計ると、幸ひに義太夫語りが來てゐるから、取敢へず其袴を借りてあげようといふと、先生無造作に、それでよいといふので、出頭の時刻は迫るし、之を着けることになつた。是は天鷲絨で造つて、金糸で大きな紋の附いてゐる、所謂藝人の袴である。それを無造作に着けて出頭したので一笑を博した滑稽もある。も一つ記憶されてゐる話は、先生の學校に臨んだ時、第一の講義は、その時分頗る新しい普佛戰爭の事を萬國史から抜いて講じた。然るに先生は仙臺辯であるので、ナマリが餘り甚しく、流石に熱心な講義も誰一人分らなかつたさうである。扱て又新たに開かれた學校の位地は最初は奉行所の官舎で、今現在警察署のある邊りかと思ふが、之が南二番といふ官舎であつた。それが間もなく狹隘を告げて、南八番といふ官舎へ移轉した。それは今の農工銀行の建つてゐる邊りである。此南八番も追々狭くなつて、遂には新町の町會所へ移轉した。それは今の稅務所のあたりである。何しても學校のために特に設けた場所でないから、間取りなどもをかしなものであつた。勿論疊を敷いた上にテーブルや腰かけを

置くといふ譯であつた。又そこに集つた學生も、初めの頃は佩刀をして來るものもあるといふ様な譯で、年輩なども極めて不同で、老いたるあり、子供もあるといふ様な不揃ひのものであつた。遠方から來てゐる學生も少なからずあつたから、寄宿舎の設備もあつた。それ等の事は後に詳しく言ふ折もあるが、兎に角普通の日本座敷に、室の大小に従つて五人、十人雜居した。

變則よりも正則

首藤時代の教育方針は謂はゞ變則流であつて、譯讀が主であつた。唯だ書物さへ理解すればよいといふ風で、正則に音を正すといふことは二の次であつた。勿論首藤は教頭の地位であるから、多數の學生を此人が教へた譯でなく、多數の學生を教へる教師を寧ろ教へたのである。その一般學生を教へる教師は、學生の優等生から擧げて句讀師といふものを作つた。

句讀師といふものは漢學塾の流れを汲んだ名前であるので、今日の人は一寸妙に思ふ名前であるが、一時斯様な名前が付いてゐたものが十人位あつたと思ふ。此句讀師が首藤先生の教へを受けて、一般の學生には句讀師が教へるといふ譯である。而して句讀師は何を教はつたかと

いふに、當時は極めて程度の低いものであつて、グードリツチの英國史などが最もむづかしいものうちであつた。無論此上級の學生といふものは、新潟の學校で育つたといふよりも、寧ろ外で相當の程度まで學んで、然る後新潟學校へ來た連中である。首藤が新潟學校へ留つたのは二年許りであつたらうか、確か其後外國教師を聘した様に思ふ。而してそれは英國人のキングといふ人であつた。

此の人の素性は能く分らぬが、如何にも人格の低い人で、又教へ方も餘り上手でなく、隨つて怒りつぼくて學生を叱りつけたりなどした所から、甚だ生徒の人望なく、久しく留る事が出來なかつた。此人に就て語るべき一珍事がある。或夜刺客がキングの家を襲うたといふので大騒ぎになつたことがある。だんく調べて見ると、抜刀でキングの寢室へ行つて、布團の上から切りつけたといふキング自身の話で、成程着てゐる布團には刀で切り付けた跡が存してゐる。そこで大騒ぎとなつて、縣廳でも、外人を刺殺するなどといふ事は大變の事で、それが爲めに、兎もすると巨大な償金をとらるゝ事もあつた譯であるから、一時犯人を大に搜索した。誠に今から考へて見ると馬鹿々々しいと思ふのは、犯人搜索のため新潟全市の市民に二、三日間禁足

を命じたことである。此調べのつかぬ間は一步も外へ足を踏み出すことが出来ぬといふのは、今は一笑を催す様のことであるが、之が爲め市民は迷惑を感じた。然るに犯人は出ぬ、何でもその時の評判では、キングが償金を食うため自分で芝居をしたらうといふので、遂には償金を出さず、有耶無耶の間に済み、間もなくキングを解備して事は落着した。

キングに次いで聘せられた外人は米人のエドワード・ゼームス・モスといふ人であつた。之が長く新潟に居り、此人の來た時代には學校は最も繁榮を極めた。此モスといふ人は横濱の新聞記者をした人で、學力は格別なかつたかも知れんが、教へ方は上手な人であつた。此モスが學校に聘せられて以來、學校も初めて正則の面目を保つて來た。

モスの新潟へ聘せられた時分、新潟縣廳へ一等書記官として來たのは梅浦精一といふ人で、學校へ教鞭を執ることになつたが、無論教頭とも言ふべき位置で、最高級の學生は皆此人に教はつたのである。その後にも同じく縣廳の六等譯官を勤めた高野爲隆といふ人も來て、教授を助けた。併し之は餘程後の事である。

モスの新潟へ來たのは慥か明治六年の頃であつたと思ふ。その譯は、此頃丁度金星が太陽を横斷して日蝕を生じた時であることを記憶するが、モスが初めて日蝕を見るにはガラスに鍋墨を塗つて見れば、あり／＼と見えるといふことを教へて、皆々競うて日蝕を見た事がある。今日では誰でもその位の事は知つてゐるが、當時は甚だ珍しく感じたのである。丁度此時分學校に充てられた町會所が市中の火事の類焼に罹つた爲め、假りに何れかへ移轉することになつて、暫時廣小路上の勝樂寺へ移つた。此移つてゐた間が半年位のものであつたらうか、もう學校も大分大きくなつて來た譯で、茲に初めて學校新築の議が起つて、白山浦に元米廩の多く列んでゐる處を選び、その米廩を潰して茲に初めて新築をやつた。その落成までは此勝樂寺にゐたのである。

本校の建築と分校の設置其他

今その勝樂寺時代の事を一つ二つ話して見ると、先づ本堂が寄宿生の讀書室でもあり、寢室でもあると云ふ鹽梅で、薄暗い廣い處に、四、五十の學生が机を列ねてゐたものである。そこで夜具の置き場は本堂の一段高い所、即ち佛壇の下に、日中は累々として積まれてゐるといふ

有様で、その本堂と背中合せに屏風を立て廻して、そこに幹事室や事務室が置かれて、他の各室が講堂に充てられ、庫裡が食堂に充てられ、賄所は本堂の昇り口の片側に假にバラック様のものを作つて、其處で炊事をやつた。まるで戦ひにでも行つたやうな鹽梅で、頗る雑踏を極めた。併し斯様な雑踏の間にも教授は常の如く進行してゐた。斯様にしてゐるうちに白山浦の新築も出来上つたのでそこへ移つたが、此の學校が出来てから、初めて新潟學校といふ名稱を付けたのである。

今までは町會所や或は奉行の官舎などを學校に應用した譯であるのに、此度は特に手廣の建築をした譯であるから、茲に初めて堂々たる學校の面目を現はして、前に比ぶれば實に月鼈の差を生じた。此時分に學校の徽章も定まり、旗にも學生の帽子にも鷲ペンを交叉したものが付いた。その時分の知事は楠本正隆で、學長は二橋元長、その下に校監といふもひが置かれ、それが橋口正弘といふ人で、此人は楠本と同藩で矢張り大村藩の人であつた。幹事としては前にいうた近藤、竹内などが事務を執つたのである。そこで教頭には梅浦精一といふ人があり、他の教師としては、此時分縣官の出身地の関係より大村藩から數多來てゐた。又松平正直といふ

人が福井の人で、縣廳の樞要の地位にゐた關係から、福井の人が澤山教員に來てゐた。其他會津の人で來てゐた教員もあるが、それ等の名は後でいふ折もあるであらうが、兎に角學校はその時分無比の繁榮を來たし、學生の數が四五百にも達した。

是に於て新潟縣の二、三個所に分校を起すの議があつて、場所は新發田、長岡、柏崎に定められ、新潟に來り學ぶ能はざるものは、皆此分校に學ぶことゝなつた。

分校の事に就ては詳しく知らぬが、併し幾何かの事は後にいふ事にして、新潟學校(本校)のその頃の教へ方などに就て少しく御話するが、いふまでもなく、此時分の教育の組織といふものは丁度中學程度といふ形のものであつて、無論専門の學科を主とするものでなかつた。中學程度といふのであるから、専ら英語を主として傍ら洋算に力を込めたものである。

その組織は今日の我邦の中學校とは違つて、何れかと言へば、西洋の中學校をその儘日本へ持つて來たといふ風であつた。モスの時代となつては盛んに正則の獎勵をしたので、斯の人の教へ方は極めて實際的であつて、日用の事柄を主に立て、書物を読むに音を正すといふ事は勿論、綴字などには非常に重きを置いて、書取りの時間が多くあつた。又地理などを教へるの

にも餘程實際的で、書物に就て學ばせる外に、講堂の壁に懸けてある世界地圖に就て、學生をそのまはりに集めて、一週何時間といふものは必ず學生に地名を指點する様に努めた。

モスといふ人は書が中々巧みであつて、筆跡が極めて美事であつた。随つて習字にも重きを置いた。習字に附帶して或る上級には必ず手紙を練習させた。手紙は主に商用の手紙であつて、その奨勵の結果としては、中々今日の中學よりも遙かによく歐文の手紙を書く事になつた。此人の教へぶりをいふと、書取りなどの外は、總べて自分のまはりに學生を立たせて置いて、綴字なり或は地圖の地名などを指點せしむるのであつた。その方法は、立たせて名を呼んで順番に問ふのであるが、先づ第一番にをるものよりかけて、それが答へないと順番に次へくと及び、答へたものが、直ぐに go up (上へ上れ) というて、答へることの出来なかつたものゝ上へ進むのである。斯様の方法で問はれるのであるから學生は皆勵むのである。而して一時間の終りにその日の席順が定まる譯で、教師はそれを出席簿に控へ、それが學期終りの點數になるのである。

教師に關するいろく

以上は主に正則の方面の事であるが、前述の教頭の位置にある梅浦といふ人は、専ら上級の學生竝に教頭以下の教師を二、三の組に分けて譯讀を授けた。それは輪講の方法で教へたのである。その時分どんなものを輪講の書物としたかといふと、今では廢つたが、ウェラントの倫理書、經濟書などが、その時分流行で、是等が最高級の本であつた。尙ほその外にギゾーの文史、ミルの經濟書、クワツケンボスの究理書などもあつた。梅浦教頭は、論講の外に、自ら文章を書いて(時文)、それを英文に譯させる事などもやり、或は又外國の新聞の或る部分を分割して、之を各々に翻譯させるといふ事を努めた。而してその各々から出した翻譯を纏めて書き直す人がその級にあつた。それは實に實業界に入つた萩原源太郎氏が書を能く書き、又達者に書くといふ處から、此人が清書を擔當した。

生徒の譯文を梅浦教頭が筆を入れた、扱て又それが纏つて何うなるかといふと、當時の新聞は小型の未だ幼稚の域にあつたが、之に寄稿することが例であつた。それが爲めに自分などの

譯したものが月に二度や三度新聞に現はるゝといふ譯で、ひどく奨励になつた様に思ふ。今日に於ては、新聞に文章を載せるといふ事は誰でもやる事で、餘り名譽とも思はない事であるが、その時分は自分の筆になつたものが新聞に載るといふことは、學生として大いに面目に思つたものである。随つてそれに載せるといふ事が奨励にもなり、又新聞社の爲めにもなつたものである。又梅浦教頭の書いた文章を英文に翻譯するのは、餘程上級者中の少數者のやつた事である。今でも覚えてゐるが、或時の文章は「民選議院設置の議」といふ長文が課題に出た事を記憶してゐる。

で、その時分の月謝、寄宿舎費は幾何であつたかといふに、是も多少の變遷はあつたかも知れぬが、今記憶してゐるのは、何でも南八番時代の月謝が金一朱即ち十二錢五厘であつて、寄宿舎費は二圓五十錢であつたやうに思ふ。十二錢五厘などと言へば大層安いやうだが、實は今日の五倍と見れば矢張り相當のものであつたに違ひない。そこで町會所、南八番時代には前述の句讀師といふものが置かれて幾何かの俸給を受けたものである。例へば十圓位の俸給を受くべきものが、自分が教はるといふ方から三圓許りを引いて、七圓位の俸給を受けて居るといふ

様なものであつた。何でも新潟學校となる以前の教頭以下の句讀師などは、俸給の最も高いもので十圓位のものに過ぎなかつた様である。新潟學校と改るに及んでは、句讀師の名も廢せられて、何といふ名が付いてゐたか忘れたが、謂はゞ今日の教員といふ様な名義で、諸方から多くの人達が聘せられて、十數人の教員が備はつた。是等は矢張り二、三の取除けの外は、皆教頭に就て一面には教へを受けた。その取除けといふのは、例へば數學の教師の如きは、唯自分は教師を務めるといふだけで、教へを受けなかつたのである。

教師にはどんな人が來たかといふに、前にも言つた通り、知事が大村藩であるといふ關係から、大村から土屋廣次といふ人が來てゐた。それからその時分の縣の知事の次の人で、松平正直といふ人が來てゐた關係から、その人は福井であるところから、松平正秀、松平誠、津田東、松原某などいふ人も來てゐた。それから會津の人で萩一雄、それから福井から武藤鳳六、それから之も確か福井の人であつたと思ふが、數學の教師が高橋貫一、それから長岡からは佐野洪藏などいふ人が來てゐた。遡つて新潟學校となる以前の所謂句讀師といふものはどんな人であつたかといふに、中川忠太郎、石澤兵吾、長谷川寛治等の人々であつて、是等の中には、新潟

學校となつても尙ほ繼續して、所謂助教といふ様な格で教務に與つた人もある。

久保氏の談話

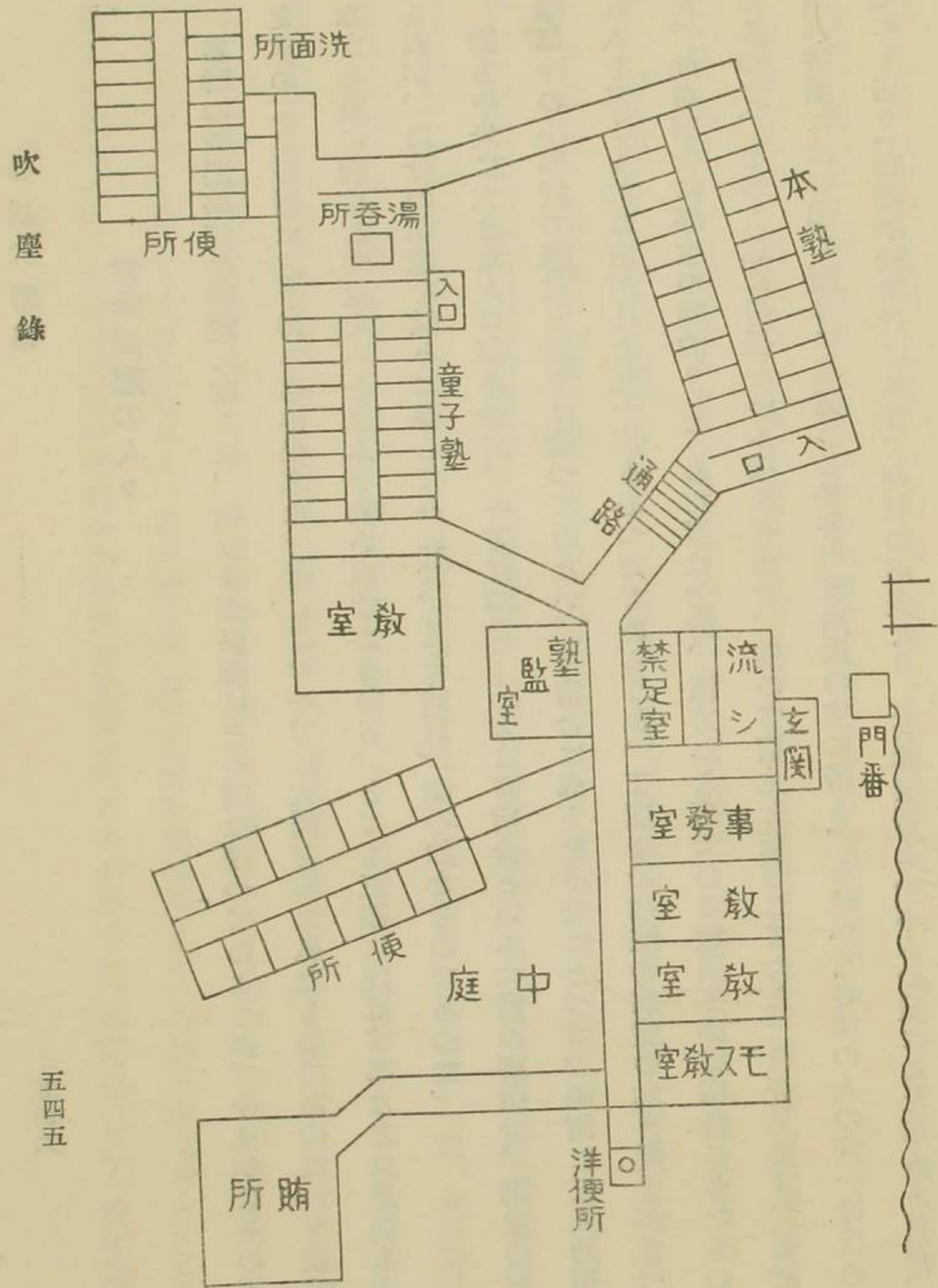
それから分校では新發田に久保扶桑氏、長岡、柏崎に小島銑三郎、藤井三郎、此人々が教頭になつて來たのであるが、後の二人の中孰れが柏崎であり、孰れが長岡であるといふ事は、一寸自分には覺えがない。兎に角是等の人々が聘せられて來たのである。

そこで長岡から出た上級生として知られてゐるのは、故人となつた波多野傳三郎氏、盲啞學校長であつた小西信八氏などである。

久保氏が新發田へ來て教頭になつた頃の事に就て、いつぞや久保氏に面會した折に直接聞いて見ると、久保氏は次の如き興味ある話をした。「自分は、實は、東京にゐて、北海道へ出懸けて何か一つ事業をやりたいと云ふ考へで、自分の後の事は皆岡山兼吉氏に託して、僅か許りの旅費を以て北海道を志して東京を發した。その時分北海道へ行くには越後を経て行く方が近道であつたので、先づ越後を志して東京を發すると、前橋に着き、圖らず病氣に罹つて、多くも

ない旅費が殆んど盡くるに垂んとして、病氣が癒つてやつとの事に新潟へ着した時は、囊中僅かに金一朱を餘すのみであつた。その時分新潟の師範學校に平井と云ふ友人があつて、それを便つて相談をしようと訪ねて見ると、生憎その日は不在であつた。據らなく何處かに旅宿を求め、懐にある全部の金を茶代として抛り出してしまつた。處で全く無一物となつてしまつたが、幸ひに翌日平井に會つて見ると、平井の云ふには、北海道へ行くなら敢て止める譯ではないが、兎も角出懸けるに就ては少しは金を持つて行かねばなるまいから、先づ基礎を作る爲め、暫く越後に足を止めては何うかといふ。そしてその積りなら、新潟學校へ世話をするといふので、自分も已むを得ずその氣になつて、梅浦の世話で新發田の分校の教頭になる事となつた。その時分、自分は役人といふ資格でなく、所謂御用掛りといふ役で、縣廳との條約の如きは、宛かも外國人を備ふ場合と同じ様な約束のとりかはせをして、そこで新發田分校の教務に與つた。新發田には二年許りも足を止めたであらうと思ふ。さうすると楠本が東京へ去つて、その後永山盛輝といふ人が縣令になつて來てから、自分は縣廳へ呼出されて、出頭して見ると、永山は脇差などを脇挟んで、奉書に書いた辭令書を、芝居などにある様に雙手が高く捧げて、恭し

く自分に渡したのを即座に開いて見ると、是は自分を役人扱ひにする事に改めて、いくら俵給を増して、柏崎の分校へ轉任せしむる辭令であつた。全體自分は役人になるつもりではないので、初めもそれが爲め外人と同じ様な條約をとりかはした譯であるのに、豫め相談もなく、突然役人扱ひにする事に對して癪に障つたから、辭令書を見ると直ぐに異議を稱へて、斯んな事は御免を蒙ると言ひ出したら、脇に坐してゐた田沼が、まア〜兎に角御受けなさいと言つて頻りに宥めた。併し自分はそこから厭になつて遂に辭することに決心した。新發田を辭するに當つて、その時分自分が世話した學生の中に自分の宗家の子弟(佐藤伊左衛門、須貝四平)や白勢家の子弟(白勢和一郎)もあつて、此兩富豪が私に向つて、どうか私共で貴方を世話するから長く越後に止つて貰ひたいといふ勸告もあり、自分も一時はその氣になつたが、東京の友人連が歸京を勧めるので、遂に引上げる事になつた。」斯様な話で幾何かその當時の様も察せらるゝ。(此項は本篇群像片影中のものと重複する嫌あれども亦自ら廣略の差もあれば敢て省かず存することゝなしつ)



當時同窓の人々

當時の新潟學校の構造に就ては、何れ新潟縣廳にその圖は残つてゐようが、今は他にその圖を求めても絶對に之を得る事が出来ぬ。併し話の序で大體どんな風なものであつたかを粗雑ながら茲に現はして見たいと思ふ。舊い事であるから、とても正確に現はす事などは思ひも寄らぬが、自分の記憶を試みに現してみれば、凡そ前頁の圖の如きものであつた。

即ち中央に大きな入口があつて、一方は講堂、一方は寄宿舍といふ大體の構造で、講堂の有様は今の小學校の講堂と趣きは變つてゐない。寄宿舍は廊下を中央にとつて、兩側に三人乃至五人を容るゝ位な室が凡そ五十位もあつたであらうか、丁度今の病院の病室の如き趣きがあつた。此寄宿舍に學生の寢泊りしてゐた事は勿論、遠方から來てゐる教員も亦寄宿舍にゐたものであつて、その人達は房長といふ様な有様で、他の寄宿舍を監督してゐた。自分兄弟は、まだ南八番頃には新潟の醫界に名聲ある長谷川寛治氏の室に居り、それから會津の人の萩一雄氏の室にも居り、新潟學校時代には曾て刈羽の郡長たりし石澤兵吾といふ人の室にゐた事もあるが、

是等の人々は年配も學問も先輩であり、單に房長として監督したといふのみでなく、頗る親切に學問其他の事に就て指導してくれたのを自分は感謝せざるを得ない。

新潟學校時代に如何なる人が就學せるかを考へるも今に於て興味ある事であるが、唯遺憾な事には、其時分の名簿が殆んどなくなつてゐる爲めに、記憶してゐる人々の名が甚だ少ない。唯思出づる儘に人々の名を擧げて見ると、理學博士藤澤利喜太郎氏なども學校の創始時代にゐたのであるが、是はずつと舊いので自分はその頃の事は知らない。自分の競争者として今猶記憶してゐるのは、宮内省の侍醫たりし桂秀馬、それから横場の筆工の子である古田鎮三、此兩人は極めて秀才であつて、常に自分と首席を争うた人々である。それから大竹貫一氏、高橋邦三氏、小林善四郎氏、内藤久寛氏、廣瀬吉彌氏、是等の人々も矢張りその時代にゐた。新潟市の實業家中には、鍵富徳次郎、栗林貞吉、荒川才二、小山長作、是等の人々も矢張り同時にゐたのであるが、勿論級は皆それ〴〵異つてゐた。まだ幾人か記憶してゐるが、どうも今となつては、姓を覚えてゐても名を忘れたり、名を覚えてゐても姓を忘れたりして、茲に申述べることが甚だ困難である。曾て東京にその時分の同窓會を催したことがあつた、それは已に十數年前

の既往になつたが、その頃内務省技師であつた近藤虎五郎君の嚴父、金彌老人(當時の幹事)の
出京せられたのを機として、今の楠本男爵や梅浦精一氏などを招いて、二十人許りの人々が會
合したことがあつた。何にしても三十年振りで、殆んど始めて出逢ふ様な譯であるから、昔は
互に知り合つてゐる面々も、互に出逢つてみると、殆んど互に相知らぬといふ有様であつて、
自分は比較的此等の人々と度々會つてゐる様な事から紹介者となつて、是は誰、是は誰といつ
て紹介して見ても、その引合せられた人々は、殆んど呆然として暫く顔を諦視して、漸くにし
て理解が付き、成程それに違ひないといふ有様で、甚だ奇觀を呈した。何うも此時分の人達は、
多く集合するといふ事は、今日に於ては甚だ困難である。その集會の席にいろ／＼な懷舊談が
出て甚だ興味を感じたが、考へて見ると随分舊いことであつて、近藤博士などは吾々よりも遙
かに年配若く、その時分は未だ毎晩寄宿舎に嚴父の近藤老人に抱かれて寝てゐた小兒であつた
など云ふ舊夢談も起つて、皆一度は近藤老人に叱られた面々であるから、それ等の失敗談を口
口に語り出で、打興じた事がある。

その後の新潟學校

明治八年に至つて楠本縣令は東京府知事に轉じ、梅浦教頭は内務省の勸業寮に轉じた。唯だ
外國人モスは九年頃まで止つてゐた様である。梅浦の去つた後は會津人で阪井正義といふ人が
來たが、此人は學殖足らざる爲め、間もなく排斥されて去り、それに代り、縣廳に一等譯官と
なつて來て、學校の教頭を兼ねた人は工藤助作といふ人で、之は確か弘前の人であつた。無論
永山縣令の時代である。之より先き確か明治六年と思ふが、全國に文部省が英語學校を起すと
いふ事となつて、全國を六大學區に分ち、六ヶ所に英語學校を置かれたが、新潟にも置かれた。
是に於て二つの學校が竝立する事となつて、新潟學校からも幾何の學生が英語學校の方へ轉じ
た。併し新潟學校は依然として成立してゐたのである。唯だ新潟學校が追々年を経るに従つて
多少の變化を生じた譯は、當時遊學してゐた連中の中に、子供計りでなく大分年配の進んでゐ
た人々も多かつたので、學問の方針に關して一時議論が沸騰した。その要領は如何といふに、
唯だ西洋の語學許り研究してゐるのでは、身を立てるの方法としては不完全である。何等か職

業を得る學問をするに非ざれば、將來活路を得るに困難だから、宜しく學校に一、二の専門の學科を置くべしと云ふ議論が起り、之に對して、専門の學科は各志す所に依つて東京に至りて學ぶべし、此學校は専門の學科を修むる階梯にして置けば可なりといふ、斯う二種の議論があつて、互に闘つた結果、學校でも考へ、結局兩方の議論を折衷して、茲に二つの學科を分けて置く事になつた。それは在來の専ら語學を教へる學科を講習科と名づけ、専門の學科の方面は、百工化學といふものを起した。これが學校の一大變革であつて、此百工化學を起す爲め、經營上人を聘したが、其人は美濃の出身で村橋次郎といふ人が來た。此人は經營が一通り終ると東京に去り、後中川謙次郎氏が來て、その教頭といふ位置にゐた様である。講習科の方面には、最初大石某といふ人が來たやうである。それと殆んど同時に、故人文學博士三宅米吉氏も講習科の教員に來てゐた事がある。斯様な學科を改めて以來の事は自分は殆んど知らぬ。自分は明治八年に新潟學校を辭して上京した譯であるから、其後の事は一切知らんが、何でも一年位後に、學校は遂に英語學校と合併せられたかと思ふ。新潟學校の前後に關する自分の知る所は此の如きに過ぎない。誤謬もあらん、不備な所もあらんと思ふ。

新潟學校規則を讀む

以上の小誌を草し終つた後、新潟學校當時の規則書を得た。其得た際に所感を録したものがあつた。それには小誌に書いたことゝ多少重複することもあるが、其儘爰に附載する。差當り新潟學校規則を讀んだ所感をいうてみたい。この規則書は明治六年七月出版された、二十枚ほどの木版半紙本で、今は容易に得られないものだ。此規則は活版ではなく整版である、多分大江海門か其子の萬里が彫つた物であらう。自分はこれを手にして思ひを在學當時に馳せると實に感慨無量である。

第一この規則書を展讀して妙に感ずる事は、當時備入れた外國教師で、われ／＼が教を受けた、米人エドワード・ゼームス・モスとの條約書の全文が規則書の末に載せられてある事だ。斯様なものを學生にまで公示するのは奇抜というてよろしい。また規則にこんなものを添へてゐるのも珍とすべきである。さてこれによると、モスは二百圓の月給で聘に應じたものだが、當時の二百圓は今の二千圓にも當るから、新潟縣も奮發したものである。條約中には教師の勤惰

の事にまで立入つて、嚴重に規定されてある。多分前にキングといふずるい外人を備うた事のあるのに懲りて、かくも嚴密に規定したものであらう。當時この條約を規定した人は新潟の戸長鈴木長藏氏で、すなはち「新潟新聞社」の舊社長であるが、東京に傭聘のためわざと出張したものでなく、東京において條約を締結したとある。

學校の職員の一部を見ると、學長、校監、校掌とあつて、學長の名の早くこの時にあるのもおもしろい。しかしこの頃の學長は飾りもので、實際の校務は校監が見たのである。校掌は今の幹事と見るべきものだ。早稻田大學あたりで校長の次に學監を置き、事實上學監は校長の職を行つた事がある。新潟學校の學長と校監の關係とよく似てゐる。新潟學校の學長は、縣官中の要職にあるものがその位置をつたが、實は名のみであつて、卒業式に出て來たに過ぎず、たいていは校監に一任してをつたやうに思ふ。早稻田大學に往年學監といふ職名を設けた時、自分は新潟學校に校監の職名のあつた事を思ひ出し、自分が學監の名を選んだ、それがそもそもの初めで、他の私立の有力なる學校でもこれに倣つて學監を置いてゐるが、實は元祖は新潟學校にありといはざるを得ぬ。さて教務の方には教師、助教、句讀師というて三段になつてゐる。

句讀師といふのは、その職制を見ると「學生を分てこれを教授し、その殿最を監して教師に告げ、及房長となり、房中を檢束し、且交番當直生徒の勤怠簿を記するを掌る」とある。すなはち助教の下役で、いはゞ助教見習と見るべきものである。これは多く書生中の先輩から拔擢し、一面下級の書生の教授も司り、また自らも書生となつて教授を受けた。而して寄宿舎に於ては童子塾などの房長をもつとめた。妙な「句讀師」などの名を命じたのは漢學風の名残りである。職制中、級の首尾といはずして「殿最」など、いうてをるのも、矢張り漢學趣味から來た語である事はいふまでもない。過渡期の味は數行の文字のうちにも窺はるゝ。

また當時の學費は束脩金一圓（地方のものは一圓五十錢）、月謝三十七錢五厘（地方のものは七十五錢）、月俸一圓廿五錢とある。こゝに注意すべきは地方の學生に幾許多く課した事であるが、何故か一寸譯がわからぬ。新潟學校は管内の學校で、新潟一區で建てた學校でない事は後段にいふが、管内は遠近を論ぜず同一賦課であるべきに、遠方のものに多く取るのは、通信往復その他事ある時に事務費が多くかゝるとでもいふところから來たものか、とにかく一特徴と見るべきものだ。また出納の部を七種に分つてをる。その中に、「定額月金二十圓」と金額を明

示してをるものがある。これは学校の雑費（炭油筆墨紙茶蠟その他）を擧げたもので、月給の外に二十圓だけあれば月費が賄はれたと見える。

さてまた職制の部に、多くもあらぬ職員の内にも門掌、小使までが麗々と掲げてあるのも異様に感ぜらるゝ。門掌は門番である。門戸は風紀の源と見たものらしい。恰も鐵道におけるポイントメンの如くに考へれば大切でもある。當時門掌には貧生の學生が勤めてゐた。小使といへども貧生を用ゐた事もあつた。この邊は西洋風でもあり、漢學塾の遺風でもあるやうに思はる。この規則書のうちに「學校揭示」といふが掲げてあつて、その第一項に、

此學は管内公同の有にして、管内の人民就き學ぶ所、今之を第一大區に置くは土地の便宜に従ふ也、故に之を新潟學校と號く

とある。すなはち縣費によつて出來た學校の性質がこれでわかる。當時行政區を大小區に劃した時分であるから、區の目があるのだ。また末尾に教則が載つてゐる。それによると、建學の趣旨が正則にある事が明記してある。しかし純粹に正則のみでは或は生徒勝へざるものあらんを慮り、變則をも設けるけれども併立ではないと斷つて、建學の本旨はどこまでも正則である

事をいうてゐる。當時來學者の年輩は不同で、老幼紛々としてゐたから、勢ひ正則一點張りといふわけに行かなかつたのだ。併し正則を建學の本旨としたところに維新勿々革新氣分の漲つてゐるところがほのめいてゐる。學課は三年に分つてあつた。當時未だ中學といふ名稱はなかつた。新潟學校に中學課を設けたのは數年後の事である。

郷國に於ける政爭時代 附 記者時代

自由黨とその人物

新潟縣に先づ起つた政黨は自由黨であつた。頸城、西蒲原、新發田、柏崎、中魚沼あたりから相呼應して人物が輩出し、黨勢に一張一弛はあつたが兎に角熱心に活動した。當時政府に反抗したのは第一に自由黨であつたが、尤も其頃多少の志しあるものは實際悉く政府の爲す所を快しとしてゐなかつた矢先に、自由黨が起つて其急先鋒となつたので、自然人物が此傘下に集まつたといふ形勢を成した。併し其發達には必ず中樞人物があつて、それを中心として同志が

集つたといふ譯で、上越では鈴木昌司、八木原繁祉、加藤貞盟の人々、刈羽では松村文次郎、西蒲原方面では山際七司、萩野左門といふ工合であつたが、併し主として上中越に勢力があつて、下越は其大勢に推されて、其采配の下に根據を据ゑたといふ形であつた。

領袖は鈴木氏

こんな次第で、當時自由黨の幹部は名門で、資産もあり人物も相當なものばかりで、同志を率ゐるにも十分の力があつた。特に鈴木昌司君は潤達豪放で寛容の豪傑肌があつたので、資産を犠牲にして奮闘した。又此人々と殆んど同時に魚沼で島田茂、桑原重正諸氏の自由民權を唱ふるあり、岩船の佐藤伊助君も一時は自由黨員であつた。大勢此の如く滔々として非政府思想に傾き、自由民權、藩閥打破を叫ぶの聲は日に高まり、越後で相當の教育あるものは何れも之に趨いたのであるから、壯士輩の空騒ぎなどは全然違つたものであつた。そこで一時越後の天地は即ち自由黨の天地たるの觀があつた。唯だ自由黨が此相當の實力ある人々によつて率ゐられたに拘はらず、一つの大なる缺陷は少しも言論機關を有してゐなかつたことで、其頃新聞

はあつても其の力甚だ微弱で、到底今日の如く輿論を喚起するなどは望まれなかつた。これは獨り越後の自由黨のみならず、日本全國の自由黨が概して其機關が乏しい憾みのあつたのは、一つは同黨が實際の運動にのみ重きを置いて、是等の權威を輕視したからでもあつたと思ふ。

改進黨興る

楮之に對して縣下で劈頭に起つた對抗的運動は頸城に於ける改進黨であつた。即ち室孝次郎君を頭首として大井茂作、中川源造の諸君崛起し、相當の所まで發達した。

斯の如く越後の政戦は上越に始まり、それから中下越に及んだので、之より先き福島事件で自由黨の投獄事件があつたが、これは決して時の縣令三島通庸の暴政に反抗するのが本意で無ゝ。一官吏三島の如きは問題でなくて、畢竟藩閥政治に對する不滿の爆發と見るべきである。此事件が當時天下を聳動したので、政府も容易ならぬ事として警戒した。實を言へば、事件は評判の大きい割合に小事件であつたのだが、其頃は何處でも何事か起らずんば止まざるやうな氣運が伏在してゐたのであつた。そこで高田自由黨の陰謀として有名な例の高田事件なども、

譬へば大鹽平八郎の亂に次いで柏崎にも生田萬の事件が起つたと同じ譯で、即ち福島事件の影響で起つただけの事。敢て纏まつた趣旨理由があつたといふ程ではないが、當時此事件が目的を遂げずして發覺し、一の疑獄と語はれたのも、一つは官邊の神經質が然らしめた氣味がある。併し乍ら其外觀は相當に大袈裟なもので、數十人づゝ捕へられて行く光景などは人目を駭かすに餘りあるものであつた。

第一の犠牲者

「高田新聞」は今申したやうな時代に生れたものであるが、尙ほ其頃の事を御話すると、さらぬだに嚴重の新聞紙條例が改正によつて更に苛辣を加へて來た。實に此時は日本の言論史に類例のない大壓迫が行はれたので、一例を申せば、これまでは罪ある時は其主任者が負ふことであつたから、各社共に至つて詰らぬものを採用して署名人とし、主筆の書いたものにまでも其署名を用ゐてゐたのが、其改正の結果、幹部凡べて共犯で論ぜられることになり、編輯長は勿論、社長、社主、皆連坐して投獄の身となるのだから、苛酷も亦極まつたもので、東京の各社

は、主筆人物は悉く名を憚り、他の者の名義に代へてしまつたが、「高田新聞」は創業日淺く、隨つて其主宰者の名前で賣り込む必要上、自分は敢て危険を知らぬではなかつたが、自分も竹村君も名義を其儘にして置いた。然るに之が爲め種々の事件起る毎に一々訊問を受ける譯で、僅か三四ヶ月間にして忽ち幾多の入獄者を見た。而も自分は此條例改正の第一の犠牲者であつた。

隔世の感あり

之を御話することは殆んど自分の不明不敏を告白するやうなもので、洵に恥入る次第だが、當時の法がいかに峻嚴を通り越して馬鹿々々しきものであつたか、それを説く爲めに自分の罪狀も語らねばならぬ。實は甚だ子供じみた事で、前に申した高田事件の關係者が時の高田署長から喚問を受けた時、署長は威儀儼然として「漫りに干戈を動かさんとし」云々といふべき所を「干サイを動かし」とやつたので、被告人から反問された滑稽を面白半分に「高田新聞」に書いて、其無識を揶揄したといふに過ぎぬ。然るにそれが官吏侮辱で、自分を始め忽ち七人の

社員が連坐し、爲めに新聞社は一時人無しといふ有様を呈した。元來文筆で罪を得るのは當時に在つて寧ろ志士の誇りとする所であつたが、國務の大綱に就て論じたといふ譯でもなし、今申したやうな兒戯に類する事の爲めに大切な身を獄裡に費したのは馬鹿らしい譯で、畢竟年少氣鋭に馳せて用意の足りなかつた過ちであつた。此時は一同悉く有罪で、社長と雖も悉く免れなかつたが、今から思へば眞に隔世の感がある。

何でも此時分は中央政治家の來越したものは自由黨に多く、改進黨は殆んど來なかつたやうである。恰も此筆禍事件當時に於ても馬城將軍大井憲太郎が來たので、元來此災禍が自由黨の高田事件に同情した結果として起つたのだから、反對黨と雖も同情はあらうといふ考へで、此事件を大井君に鑑定を乞ふべく、旗亭に招待したことなどもあつたが、何分當時兩黨の軋轢甚しかつた時とて、大井君は其招待の席から自由黨員集合の別席に移ると、忽ち改進黨や我々の事を盛んに毒罵するといふ狀況であつた。

又其時代の司法部の峻嚴であつたことを今少し追加すると、或時自分が病氣の爲めに召喚に應ずることが出來ぬと斷ると、斷じて許さないと來る。許さないと云つて病氣では出られぬと

突き放すと、突然檢診と稱して醫者を新聞社に差向けた。ソラ來たと狼狽して急いで筆を投じ、自分の室に飛込んで頭から布團を冠つて寝てゐるといふ次第、折よく其醫者が常から懇意な顔であつた爲め、其場は萬事都合よく濟ましてくれたこともある。

高田新聞成る

何でも高田事件當時は監獄などが土地になかつたものらしく、一時に捕へた數十人は、寺か何かに收容したと覺えてゐる。此中に赤井景昭などいふ人は所謂逸り男の危険性を帯びてゐたので、尙更ら事實よりも騒ぎの方が大きくなつた傾きがある。丁度此頃は自由黨の全盛期で、斯うした事件が益々時代人心を惹きつけて、自由黨の勢力を助長したやうに思ふ。

併し又一方には、識者間で餘りに自由黨の過激なるを喜ばず、恰も室君等の盡力で高田に改進黨の機關として「高田新聞」を起し、自由黨に當るべく、主として中川君等の發企で自分が其創立者に迎へられた。これは主筆としてのみならず、新聞を作ることから一切を託されたので、東京から越後へ歸つた。之より先き東京では「内外政黨事情」といふ小新聞を出してゐた

経験もあつたので、「高田新聞」には創刊當時から關係し、社長の名義は中川君、印刷長は竹村良貞君で、其發刊は恰も高田事件のまだ收まらぬ時であつた。當時改進黨は無論自由黨に反抗の態度を執つてゐたが、併し高田事件には幾分か同情同感を表してゐた。

尤も此時代は、何れの政黨にせよ、藩閥打破といふ點では一致して政府に反對した譯、隨つて之が爲めに活動する人々なる以上は、自由黨員と雖も改進黨は同情したので、即ち高田事件に對し「高田新聞」は辯疏的にも或は煽動的にも執筆したものであつた。其時分の「高田新聞」は至つて貧弱なものであつて、汽車のない時代だから、雪中などは紙が切れると止むを得ず日本紙二枚を中央から繼いで印刷し、讀者も之を珍として、後に役に立つから却つて日本紙が結構といふ有様。紙面も狭かつたもので、全紙面只一人で十分書き終せる位であつた。一寸一例を挙げれば、自分は或時五智へ遊びに行き、暫らくして歸つて來て見ると、社員等は茫然手を明けて一同が遊んでゐる。それを見ると大に憤慨し、そんな用の足せぬものは不必要だと即座に放逐して、自分一人で夜になつてから新聞を纏めて見た事もあつた。

言論壓迫甚し

今日から見れば、其頃の「高田新聞」などはホンの新聞の眞似のやうなものであつた。而も當時は此新聞の刺戟が餘程地方官憲には響いたもので、新潟にこそは新聞もあれ、高田は自由黨には機關紙なきに反し、唯一つの改進黨の機關紙が高田事件を庇護して官憲に當るので、政府當局が之を厄介視したのも至極尤もな譯で、其頃中央政府でも國民の言論を壓迫する苛酷なことは實に今日夢想も及ばぬ位であつて、尙ほ政府の事を論議するもの、特に皇室に關することは、其内容如何に拘はらず強ひて嚴格の解釋を執り、又官吏侮辱の如きは苛烈極まつたもので、今日では、内閣の各相を攻撃しても其記述によつては敢て罪とならぬが、苟くも官界に立つものは、如何なる小官吏に對しても少しく不穩當な文句を用ゐれば直ちに之を罪に問ふ。特に皇室に關しては、歴史家が學者的に記述したものや書物に書かれてゐる事を引證したのでもドシ／＼不敬罪の名の下に羅致する。佐渡相川の才人故有田新平君が「新潟日々新聞」に皇室論一編を寄せて直ちに獄に投ぜられ、遂に獄死する運命となつたなども其顯著なる事例である。

又司法の手續上極めて煩瑣な條例があつて、豫審に渉るものは一初新聞に出されない。これは斷獄の必要上一理あるが、其頃はソレが至つて嚴密で、一向妨害にもならぬ事まで一々罪にせねば氣が濟まぬといふ體裁であつた。其上發行停止の厄ありで、一新聞に罪すべき事があれば其者が罰せられるのは當然としても、罪三族に及ぶの格で、一枚の新聞の爲めに何ヶ月間か其後の新聞も續けて出す事が出来なかつた。其停止の原因といふのも、纔に痛切な文句が二三行あつたといふ位なもの、それが元で大袈裟な騒ぎを起すのが常であつた。

檢事憎まる

實に當時の司法官、警察官の横暴抑壓は、今も申したやうに苛虐言語に絶したもので、檢事などは職務を逸する働きまでした。無暗に人民を告發するのみならず、自ら其被告人の平生を偵察する迄に至つた。一例を言へば、自分に對しても、檢事堀某の如きは、自分等の宴席に於ける動靜を探る爲めに同じ旗亭の隣室に潜伏してゐたといふ程で、後に此檢事は土地の憎まれ者となり、高田の天地は男女を擧げて其の肉を啖ふも慊らずといふ叫びによつて満たされた。

改進黨の遊説

緒話しは當時の縣下の政界に立戻るが、自分などが罪を獲て控訴中に、改進黨の先輩小野梓君が、其後「新潟新聞」に主筆となつた、故吉田熹六君を伴うて縣下に政治的遊説を試みた。相當の人物が改進黨から來たといふのは之が嚆矢で、此一行は中下越の遊説を終つてから高田に來て、同じく政治演説をやつた。自由黨に在つては、明治十四年、板垣伯、馬場辰猪の人々が一二度も來て、既に勢力を收めた後だから、小野君が得意の慷慨悲憤的演説も幾許かの感化はあつたが、到底久しく培養された、自由黨の勢力を一朝にして動かすといふことは出来なかつた。此時小野君は改進黨掌事といふ資格で來たやうに思ふ。之より先き其頃の大隈伯は廟堂にあつて國會開設の議を提唱し、説容れられずして野に退くと共に、自由黨に對抗する一大政黨を作つた、それが即ち改進黨であつた。

此改進黨に小野君は掌事として重用されたものだが、此時代、政府反對者は大部分既に自由黨の人となつた後ではあつたけれども、唯同黨の遣り口が佛國革命黨を理想として、兎角國體

までも共和的に導かんとする傾きがあり、徒らに過激なる言動に馳せて、政治の改善にも手段を擇ばずして猪突するの疾があつた。之に對して起つた改進黨は全然趣きを異にして、大目的は同一であつても、政治の向上を計るには順序次第を経ねばならぬ、即ち秩序的進歩を必要とし、随つて其手段を擇ばねばならぬといふのが其主張で、自由黨の佛國政黨を標準とするに對して改進黨は英國政黨の型で立つた。

縣民の政黨觀

そこで心ある人々は最早自由黨の餘りに狂熱的なのに呆れ、今少し思慮分別のあるものをもと望むやうになつて來たのと、今一つは其黨の人々が産を破り身を傷け慘憺たる悲境に沈む末路を見たので、そろ／＼忌氣と怖氣を起した結果、自然改進黨に心を寄せるやうになつたが、本縣の如きも、改進黨の起ると共に此趨勢からいへば一時に人心之に傾くべき筈であるのに、事實は必ずしもさうではなかつた。それには又理由がある。即ち急進の徒は既に自由黨に奔つて、自然的に愛黨心を有するに至つたが、初めから之に加はらなかつた人は、何れも退嬰主義、御

無理御尤も主義の人ばかりであるから、熱血の士は夙に自由黨中に網羅せられたからである。いかに大隈前參議の勢望でも徹底した勢力はさう一朝にして收め得るものではない。縣下の改進黨が俄に盛んなるべくして事實は漸進的に幾多の變化推移を経て、一步々と勢力を占め來つたのに敢て不思議はない筈である。

斯くして後には越後には改進黨も亦驚くべき多數となつたが、始め容易に振はなかつたのは、やはり政黨を談ずるものは悉く自由黨に屬したのが一原因と、二つには自由黨の危激に呆れて他に異なる政黨が出來ても皆こんなものと速斷して、其實よりも其形を忌み且つ憚かつたからでもあつた。

新潟新聞と自分

元來本縣下には「新潟新聞」を中心として政治的人物―改進黨系の―が多く來た。尾崎、箕浦、吉田諸君の如きは、自由黨の勢力隆々たる時代に來つて之に對抗したことは寔に多とすべきであるが、併し尾崎時代には、まだ改進黨が興らなかつた時だから随つて改進黨主義を唱へ

る筈もなく、唯だ長岡の「北越新聞」に主筆をしてゐた、草間時福君が自由系の人で、頗る能文善論の士であつたので、同時代の尾崎君亦これを好敵手として常に反對の才筆を揮つてゐた位なもの、敢て越後の改進黨に對して働いたといふやうな事はなかつた。然るに其後間もなく改進黨起り、箕浦、吉田の相次いで來た頃には、勿論改進黨を宣傳したに相違ない。而も其頃は社長が萬事圓滿主義の鈴木長藏君であつたから、自然色彩鮮明の主張を許さぬ氣味もあつて、自由黨の機先を制するやうなことは固より想ひも及ばなかつたものと思ふ。

處が自分は既に話した官吏侮辱で禁錮八ヶ月の重刑に處せられ、竹村君と共に高田監獄に繋がるゝ身となり、尋で新潟監獄に移され、控訴、上告などの爲めに長野にも移されたが、八ヶ月の後出獄し、「高田新聞」を辭して再び東京に出てゐた。それが幾許もなく明治十九年に新潟新聞社に迎へられ、重ねて操觚界の人たるに至つた。來任當時は改進黨の勢力尙ほ未だ徹底せず、自由黨も漸く穩健な人々に忌まれて黨勢始めの如くではないとは言へ、併しまだく悔り難い氣勢を示してゐたのである。唯頸城の改進黨のみは其後いくらか發達して、稍自由黨にも對抗しつゝあつたのだが、其當時、中央の改進黨は、一方黨勢不振の結果内輪揉めが起つたのと、

一方では政府の壓迫から名簿問題といふことが始まり、有力者は全く黨を去るといふ騒ぎが起り、こゝに又一頓挫を來すやうになつた。自分の來社したのは恰も此時代である。

當時の潛勢力

新聞に就て話すに先つて、縣下の改進黨に最も有力な背景となつた、早稻田系統の活動を紹介しなければならぬ。當時に在つては格別これぞといふ目立つた事もなかつたが、冥々の間に縣下の早稻田出身者が改進黨の爲めに働いた効果は實に偉大なものであつた。話が混淆する恐があるから先づ専ら此一派に就て説くと、自分が「新潟新聞」に入つた十九年の頃から二十一年の間に於て、最も多く此一派は縣民の政治思想開拓に盡した。いふ迄もないが此一派とは即ち今の早稻田大學の前身たる東京専門學校の縣下出身者で、同校は御承知の通り大隈侯が主、小野梓、高田早苗、山田一郎、山田喜之助、岡山兼吉、天野爲之の諸君が幹部、自分も間接に其創立には關係してゐたが、邦語で政治學や法律學を教授するといふ學校で、世間からも改進黨學校だと言はれてゐた。當時の生徒は好んで政治を論議したもので、改進黨最負の生徒もあ

れば自由黨好きの生徒もあつたが、兎に角此校に學んだ當時の學生は政治學の新知識と歌はれ、みづからも亦高く止まつて、大政治家氣取りをしたものであつた。楮之から此一派の縣下に於ける貢獻の一斑を話さう。

早稻田系活躍

明治十八年、十九年の交に東京専門學校を卒業した本縣政治界の新知識は、中越に川上淳一郎、廣井一、土田元郎の諸君あり、下越に大澤邦太郎、上野喜永治諸君あり、佐渡には嶋倉祐次郎君あり、是等の諸君は相前後して十八九年頃から郷里に歸り、地方の開拓に従事することになつた。市町村制や憲法の發布以前に於て其地方に小團體を作り、隱然政治思想の啓發に力を致したことは決して閑却してはならぬ。後日下越に於て改進黨の大團體たる同好會が起つたといふのも、一つは此早稻田系の人々の力と、自分で言ふのはをかしいが自分の試みた自治講演が其因を爲したと信ずる。此講演の事は後に譲つて今少しく早稻田系の活躍に説き進まう。實際同好會の基礎は、下越に於て大澤邦太郎君などが早くから改進黨を鼓吹してゐた爲め

である。中越地方に、自分等が殆んど手を下さずして一舉にして有力者を此會に網羅し得たのは、實に川上淳一郎、廣井一、土田元郎諸君の、東京専門學校直傳の政治學を應用して早くから陰然改進黨の唱道に怠りなく、機會あれかしと待ち構へてゐたからで、茲に期せずして呼吸の合つた結果である。

本縣の政黨派が他縣に比して鞏固なる地盤を有し、政治論によつて其進退を決するといふ高潔なる政治道徳を有した所以は、最初其生ひ立ちの時に新知識と資産家とを網羅したる、純潔なる政治團體から發生した賜である。東京専門學校が、本縣政治思想の開發には、其初期から與つて力あつたことは敢て茲に傳へて置くべき一事である。

龜田協會の功

話は又自分の事に立戻るが、自分の「新潟新聞」に入社したのは恰も明治十九年の頃で、任期は一年といふことであつた。此一年間は、自分もやはり前任者の如く自由の働きを許されず、隨つて主義の爲めに十分貢獻するなどいふことは出来なかつた。併し此間一事のいふべきは、

龜田地方に於ける自分の交友が自分を中心として龜田協會を起したことで、これは中蒲原郡内有力者の集會で、其目的には政治的意味なく、自分は唯だ時々行つて時世の話や政治上の評論や、又近く實施さるべき自治制度の講義をするだけのことであつた。處が何ぞ知らん、之が後日大切な意義を新潟縣下に貽したのである。

偕此一部有志の團體が何故將來縣政の上に重大な關係をも有つたかといふに、第一は、自分の任期一年が満ちた時、自分の後援となつて「新潟新聞」を鈴木社長の手より引取り、全く自分をして任意に「新潟新聞」を政治機關に用ゐさせた發端を爲したのは即ち此一團の有力者であつた。其後全縣を風靡した同好會の起つたのも、亦此龜田協會の力や、専門學校系統の人々の力で、共に特筆大書すべきものと思ふ。

尤も龜田協會は、將來に於てこそ縣政界の大關係を有つたが、當時は少數の地方人の集まりであつた。そこで自分は政治的運動を始めたものゝ、一面中央改進黨は甚だ振はず、縣下の名門豪族は多く保守的で、政治を怖るゝ傾向があつた。依て之を導くには自分も苟に苦心をした。斯くて此人ならばと見て先づ勸説を試みたのは即ち故山口權三郎君であつた。

山口君起つ

當時山口權三郎君は縣會議長として聲望一縣に高く、常に中越の同志を統率したのみならず、實に全縣下を率ゐるに足る人物であつた。自分は如何にもして改進黨鼓吹の大團體を作りたといと兼々心懸けてゐた結果、山口君こそ最も之が中心人物たるべきものと信じたので、或時自分分は山口君に對し、頻りに政治的團結の必要なる所以を説いた。無論之は政黨を起すといふ意味ではなくて、貴下の如くに平生殖産興業に熱心な人々には、政治を離れて其目的を達することが出来ぬことを悟らねばならぬ、實際産業の隆否は政治の善惡に依るといふを理由として、着々勸説を試みたのであつた。

山口君は見識のある且つ剛愎の人であつたが、常に深く酒に親しみ、自分も亦大に行ける方であつたから、酒間屢々此論を唱へた結果、漸く會得されたので、先づ殖産を主とし、之に多少の政治を加味した會合を作り、山口君を頭目として、其勢力圈内なる中越のあらゆる名門豪族を網羅することに着手した。斯くて久保田右作、西脇國三郎、目黒徳松、牧口義方、久須

美秀三郎、遠藤龜太郎、岸宇吉、内藤久寛、澁谷初次郎、田口十一郎、飯塚彌一郎、野本恭八郎の諸君、及び下越では本間新作、佐々木松坪、玉井貞太郎の諸君、何でも三十人計りで、自分も亦之に加はり、先づ規約を定めた。大要は殖産開發の爲めで、それには一面政治の改良を要すると言ふ工合に政治の事を臆ろげに加へたもので、一つの會合を作つたのである。之は實に其當時に在つて甚だ至難であつたことを實現し得たもので、殖産協會と名け、新潟、三條、寺泊、柏崎、長岡といふやうに、場所を變へて隨時開いた。山口君が領袖なので自然多數の出席を見たが、何れも豪族連中だから集まる毎に必ず盛んなる宴會を開き、問題の討論よりは或は宴會の爲めに此會が持續されたのではあるまいかと疑はれる程である。此會の大目的たる殖産といふことを實にするため、内藤君が發企で、後に大なる日本石油會社も生れたといふ譯で、此集會は、經濟的には日本石油を實現し、政治的には中下越全部の名流を包括した、大團體同好會の前身となつた。

大同團結の運動

同好會の出來たのは明治二十一年と思ふが、之に對しては多大の基礎を成したのは前にも話した龜田協會の人々であつた。尤も此中間に一つ大問題ともいふべきは、井上侯の條約改正に對して世論囂々之に反對し、侯は爲めに失脚して退いた。此頃の改進黨は委靡不振其極に達して、何とかして一新生面を開きたいと苦心中であつたが、党内一部の政治家が自由黨系の後藤象二郎伯を擁して局面展開を策した結果、時局多事、小黨分立を許さずといふ理由の下に大同團結を組織させたが、一面には、自由黨中氣宇宏潤を以て稱せられてゐた、大石正己を中心として此策が成つたといふ形でもあつた。改進黨で自分等と友人關係の深い岡山兼吉や吉田熹六の諸君も、其性格が策士肌であるだけに、黨勢挽回を計るには進んで後藤伯の懐に入るも亦一妙計なりとして、進んで之に加はつた。

後藤伯の遊説

其時分本縣の事情は、既に今話した山口君を中心とした殖産協會などで同志の政治思想を鼓吹し改進黨の歩を進めつゝある大切な場合である。然るに此際後藤伯が大石君を率ゐて來越

するといふことは正に改進黨の危機であると自分は信じた。併し吉田熹六君等は京地より特に自分に書を寄せて、大いに天下の大勢を説き、進んで大同團結を助けよ、是れ時代に應ずるの策として且つ改進黨を窮地より救ふの途なりと、勸告頗る努めたのであつた。

間もなく後藤伯、大石君の一行は來越したが、自分の信念では、大同團結は到底不成立に終らう、兎も角自由黨對改進黨の政戦が既に猛烈を極めて、犬猿も啻ならぬ間柄に在る時、到底兩黨の調和が圓滿に行くものでもなく、殊に大同團結中には自由黨系が多いから、其名稱や目的は立派でも事實に於て公平は期せられぬと、斯う確信すると共に、縣下の改進黨員が之に參加しては自由黨に吞まれて了ふと感じたから、自分は猶豫なく大同團結反對の準備をした。

進んで反對標榜

そこで後藤伯の新潟へ來た時は、自分に於ても開戦準備の既に整つた時であつた。先づ其一端としては、伯が來港に先ち長岡へ着すると共に火蓋を切つた。即ち自分は特に反對意見を叙して、之を當時の「越佐新聞」主宰者たる廣井一君に寄せ、其發表を依頼した處、恰も廣井君

亦同一意見なので、直ちにこれを其社説欄に掲げた。當時「越佐新聞」は故大橋佐平君の經營で、其色彩も至つて不鮮明であつたのに、たま／＼廣井君が主筆として常に進歩的の議論を唱へてゐる矢先きの事として、常に同論の自分の原稿を、よくも調べずに其儘出した譯であるが、出して見ると、それが當時の大問題として随分多數人心を動かしてゐる大同團結に反對の論であるから、大橋君頗る驚いて、中立の新聞になぜ公然と改進黨の議論を載せたかと、不平たら／＼の手紙を廣井君に寄せたといふ話しも聞いた。

兎に角斯うして長岡に於て第一弾を見舞つた自分は、伯が新潟に入るを待つて、連日の紙上に反對意見を載せた譯だが、之より先き自由黨は大舉して伯の來港を迎へたに反し、改進黨者で之を迎へたものは一人もなかつた。と言ふのは、自分から前以て檄を飛ばして一人も同志の士は伯を迎ふる勿れと勸めた結果である。然るに同主義ながら商買敵の地位に在つた「新潟日々新聞」の佐瀬精一君は之を以て陋劣と罵り、元勳功臣を迎ふるは紳士の禮だと頗る人氣取りの攻撃を試み、全社員を率ゐて歓迎した。

有力なる加勢

處が折柄縣下大地主の集會があつた。各地の富豪は皆之に集まつて居て、中に三菱を代表した濱政弘といふ人もゐた。此人が土佐出身で、後藤伯とも大石君とも同郷の關係があつたに拘らず、大同團結には心切かに反對で、殊に自由黨の政略に乗せられて得意然としてやつて來たのを甚だしく不快に思つたらしく、此點から頗る自分に同感した。當時自分の苦心したのは、後藤伯一行が妄りに素封家、有力者を引きずり出して、之を弄びはしまいかといふ點であつたが、幸ひ濱君の加勢を得たので、自分の力で先づ自由黨と會見以前、伯を開會中の大地主會に同伴し、其最も不得意な財政演説をさせた上、着實周到なる實業家に呆れさせるやうな策略を執つた。

敵の機先を制す

そこで濱君は直ちに後藤伯を訪問した。此時幸ひにも自由黨の領袖連がまだ一人も逢つて居

らぬ際に乗じて、濱君は「今日は閣下も別段御用は有りますまい」と問ふと、伯は「大して用事もない」との答に「それでは恰も今日縣下の素封家連が集まつて居るから其席へ御招待致したい」と申込んで、先づ自由黨の御客様を此方に奪ひ、行形亭に招いて、自由黨側で催す歡迎會を妨げたのであつた。

行形亭では大地主連幾十人かゝり集まつてゐる、其處へ後藤伯を引張つて來て一場の演説を乞うた處、伯は元來政治演説に馴れない人なので、大同團結の趣旨其ものよりも、佛蘭西革命の如き事例を盛んに説くので、重厚なる大地主連は何れも其過激なるに呆れ返つた上に、伯は更に最も其不得意なる財政演説に移つた處、果して其粗放なる論旨は新潟の銀行者側に著しく輕侮の念を起させた。即ち自分等の策は茲に全く成功したといふ結果であつた。

次に同行の大石君は主として自分を説き落すといふ使命を帯びて來たもので、越後へ行つたら市嶋さへ屈伏させれば自然と他は治まつて了ふと、東京の友人から紹介を経て來ただけに、着後早々先づ名刺をよこして置いて、其後から直ぐに自分を訪問して來た。仍つて直ちに伴うて某酒樓に登ると、大石君から少しばかり大同團結の話が出た。自分は之に對して、越後は君

等の説は行はれぬ、既に自分等一派の同志は之に参加せぬと決した今日、もう駄目だから、そんな堅い話しは止めて、どうせ美人國たる新潟へ来た以上は、まア飲まずんばある可からずだと好い加減に切り上げて、互に痛飲を試みたが、聞けば三日滞在の豫定だといふ。そこで其三日間を茲處にぶツ續けに流連して大石君を自由黨に渡すまいと決心した。

擒にされた大石君

それといふのも、後藤伯の茫漠粗大な演説ぐらゐでは到底縣下の民心を風靡する効果はないが、大石の智辯は悔る可からず、随つて伯よりも寧ろ此人を出さないに限ると考へた結果であつて、遂に三日間同君を此方のものにして了つた。自分は後年此時の大石君に就て、其の性格につくづく變つた所のある面白い男だと感じたのは、自分が引留めるに任せて如何にも暢氣の流連を共にし、其の間最初の一度限りで再び大同團結に關する交渉も勸説も出ないで済んだ。殆んど何をしに態々越後迄やつて來たのか分らぬ位で、悠揚として自分のいふ通りに飲み續けたに至つては、何處やら常人には見られぬ一種の大きい所があつた。之は今でも自分の感じて

ゐる所である。

尤も留連すると言つても、深更には必ず歸宿して翌日又來たもので、泊つたがよいではないかと聞くと、イヤ後藤は非常の嫉妬家だから吾輩ばかり泊るのは氣の毒だといふ。斯うして寐る所は宿だが又飲みに来て夜まで籠城といふ體裁、之を喧ましく言はなかつた後藤伯も、用事を其方のけにして三日飲み續けの大石君も、兩々相對して今日には見られぬ型の人ではないか。

策遂に成功

大石君牽制運動で自分は酒樓に陣取りながらも實は大戦を開いてゐるに齊しい始末。同志の小崎懋君は留守中の新聞社を一人で引受けての大活動、自分は醉中に筆を揮つて、恰も自由黨が後藤伯に向つて自己吹聴に急なるの時、散々自由黨の罪惡を書き立てるといふ次第で、且つ飲み且つ戦ふ。イヤ頗る多事であつたが、それでも三日間計畫通りに大石君を引留めて敵黨の手に渡さなかつたのは、今尙ほ追想して愉快を禁じないところである。

勿論自分は其時自由黨から甚だしく反感を買つた。先方の大切な賓客を三日間も引附けて監

禁したといふ騒ぎで、彼れ市嶋は濱政弘と結託し、熊と伯を實業家、素封家に逢はせたのも政略であつたと、壯士連中の憤り方は甚だしかつたらしく、果ては濱君と自分とを殺せといふまでに立至つた。斯うなると危険は日一日と身邊に迫る。併し當時は一身の危きを顧みるよりも、恰も縣下に改進黨の將に萌さんとする大切な場合だから、實際一身の安固を計るに暇がなく、畢生の力を以て此事に當つたので、遂に後藤伯は何物をも獲ずして歸つた。之で大同團結は越後に於ては大敗に終つた。

此時分「東北日報」に後藤伯の乾兒で吉田正春といふ人が主筆として來てゐたので、盛んに大同團結の鼓吹を試みたが、之に對して自分は非大同團結論と題して、其攻撃を連日の「新潟新聞」紙上に載せ、其後之を冊子にして世に公けにした。之は明治二十一年頃かと思ふが、自分の反對論に就て新聞紙上囂々たる是非の論あり、世上又之に應じて大分評判となつたが、後には反對新聞が餘りに下らぬ野卑千萬の反駁をするので、却つて識者は自分に賛成するやうになり、殖産協會、龜田協會の如き味方も各所に起つやうな譯で、是に於て一步進んだ政治的會合を作り、同志の勢力を集中するの必要を愈々切に感じて來た。

同好會の組織

明治二十二年のころは全國政界を通じて最も繁劇の時代であつた。勿論本縣も亦之に漏れなかつたが、先づ二十三年に帝國議會開會の先驅として自治制の發布があり、井上外務大臣の條約改正失敗がある。此後を承けて一度び掛冠以來久しく現はれなかつた大隈伯が其難局に立つことゝなつた。斯ういふ形勢と、一つは大同團結反對の餘勢にも乗じた氣味で、縣下同志の抱擁力を大にして政治的色彩を明かにする爲め、我々が率先して愈々同好會といふ大團體を作つた。此同好會こそは縣政史上特筆して以て傳ふべき團結で、其名には政治の政の字も着けないうが、之ぞ縣下我黨同志の最も記憶すべき意味ある會合であつた譯で、殖産協會の人々は直ちに擧げて之に投じた。

盛なりし同好會

此同好會組織の時は、縣下の有力者を十日許りの間に網羅する爲めに實に大努力をした。第

一回の集會の時に早く既に二三百人の參加勸誘とまで運び得たが、最も困難と認められた、北蒲原の豪族市島徳次郎、佐藤伊左衛門、長岡の三島億次郎の諸氏の加入も容易に實現した。之は無論殖産協會中の比較的若い友人の力にもよるが、就中大なる原因は、舊龜田協會の人々——特に玉井貞太郎、畠山嘉三、大澤邦太郎などの人々が奔走盡力によつたもので、尙ほ長岡方面は廣井、川上の諸君の努力が多かつたと思ふ。斯くして時運とはいひながら縣下の上越を除いて中下越のあらゆる有志有力者を短時日に包括し得たといふのは眞に奇蹟と稱してもよい。其發會式は、今に残つてゐる榎谷小路角の四階即ち元の新潟商會で擧げたものだが、眞に人を以て埋め盡す程の盛況であつた。

自治制の講義

自治制の發布は議會開會の準備として日本に於ては未曾有の法律で、中々一般に分りにくい。殊に地方では尙更諒解に苦しむ點が多い。併し市町村自らがどうしても此法律によつて動かねばならぬもので、實に地方の大利害の關係があるので、先づ既設の龜田協會が自分の講義を聞

くこととなり、覺束ないながらも此點では稍一日の長もある所から之に應じて演り始めると、到る處の大部落でも之に倣ひ、追々と實力ある人が集まるやうになつて來た。

之は主に中、北、西蒲原あたりで一時は自分の講義を聴く團體が十七八も各地に起り、自分は爲めに甲の町から乙の村へと社を空にして歩き廻つた。講義といつてもホンの大體を説くのみだから、三回位で畢るやうにしたものだが、斯うして歩くといふことが實は大切な働きで、地方有力の人々に親しんだのは後日著しく効果があつた。即ち自治制の知識でも得ようと、いふ人は何れ一郷屈指の人物で、之が他日同好會に加入した譯であるから、今日縣下の非政友派の地盤は既に此時に決したというてよろしい。唯自分の遺憾なのは、當時自分を招聘に來てもさう一々は應じ切れぬので、中には斷つた部分もあつたが、其地方が即ち同志の地盤たるに至らなかつた所である。當時隈なく廻つたら恐らく今日以上の効果を同好會諸君の手に歸せしめ得たであらうと思ふ。

更に此時分一方反對派に在つても、自分が講義で着々同志を得つゝあるを見て焦燥の念に耐へざる餘り、慶應出身の長岡人城泉太郎といふ人を雇ひ來り、亦各地に同じ事をやつて自然競

争の姿となり、殆んど政黨と同じやうな働きをするやうになつた。併し反對派は何分後れ馳せであるから、それだけ一般に印象を與へることは少なかつたのも無理は無い。

自分がこんな事で頗る多忙を極めてゐる最中に圖らずも意外の大事事件が突發した。それは大隈外務大臣の遭難、即ち彼の爆裂彈事件であつた。

井上侯の失敗

之から話しが例の全國を騒がせた大隈侯の條約改正案の事に及ぶが、其前に井上侯（當時の伯）が之で散々に失敗した概略と、縣下の輿論とに就て一應説いて置く必要がある。井上侯の條約といふものに對しては全國到る處反對の聲に満ちた。侯はポアソナードの立案したもの其まゝを直ちに日本に實施せんとしたもので、自由、改進黨は固より、國論一時に沸騰し、擧げて反對を表明するやうになつた。

そこで此際本縣はどうであつたかといふと、自由、改進黨は此時始めて兩々手を携へて活動した。而も自分が長文の中止建議書を書いたもので、今でも覚えてゐる、其場所は新發田町

の高橋館。其際は自由黨の連中も大分自分を尊敬したものであつた。然し警察の探偵は盛んなもので、どうも蒼蠅くて仕方がない、そこで態々新發田に集まつたといふ次第で、後から考へれば、他日自分等を危くする、敵黨の連中が此時の擁護者になつて警察の密偵を防いでくれた譯である。

さて出來上つた建議書は西潟爲藏、富田精策、長谷川萬壽彌といつたやうな自由黨側の人の手によつて提出されることになり、此人々は上京委員として出發した。此時分は天下到る處から中央に向つて中止運動に押し懸けたもので、縣下に在つては、中越でも長岡、刈羽、三嶋、古志、さては南蒲原、三魚沼と、何れも有志相會して協議を凝らし、大竹貫一、清水治吉、齋藤捨三の諸君が主となつて、井上案破棄の建議書を議し、廣井一君が之を携帯上京して、活動怠なかつたものである。

隈侯愈々出づ

此勢ひで反對の火の手は天地を焼き盡すばかりなので、流石の強情の井上侯も遂に支へ切れ

ずして掛冠隱退といふことになり、其後の難局に耐へ得る後任はと詮議の結果、大隈侯を煩さずば他に人なしと決り、遂に侯が新たに外務大臣として此始末をつけねばならぬ事となつた。そこで侯は前任者失敗の後を受けて條約改正に手を付け、井上案に比して遙に進歩した改正案を作つたのであるが、何分永い間の慣習同然であつた、對外關係を一舉にして改廢するといふことは、其當時の國力が之を許さぬ。仍つて司法方面に或讓歩の必要が起つた。之が反對者から賣國的行爲のやうに罵られ、殆んど國賊呼ばりを受けた點で、今から思ふと、其當時憤慨した人々も、定めて自ら顧みて其輕舉なりしことを感ずるであらう。何故といへば、其時代の日本としては、到底當時國民全體を満足せしむるやうな立案は之を實行することが出来ぬといふことは、進歩した考察力を有つ今日の國民にはよく會得の行く問題であるから。

反對の火の手

勿論公平に評すれば、大隈侯の條約改正案と雖も決して完全とは評せられたかつた。而も井上案に比しては、遙かに進んだ、又遙かに有利なるものであつた。唯だ或點には外國に讓歩せ

ねばならぬ事情のあつたことは、當時の國情に照して識者は之を察してゐた所で、空理空論の批評家は、周圍の事情に頓着なく勝手な理想論を振り舞はし得るが、實際局に當る外務大臣としては、少くとも此時代に在つては大隈案以上のものが得らるべき筈はなかつた。

併し之を會得し諒解し同情するには、其當時の國民はあまりに固陋でもあり又幼稚でもあつた。尤も中には衷心此事情を察してゐた者もないではなかつたが、悲しいかな、さういふ人々は黨派の關係や種々の情實で心ならずも反對の立場に在らねばならなかつた。まして感情を以て最初から侯竝に改進黨に反抗してゐた連中に於ては奇貨措くべしとして、時代の未だ幼稚なるに乗じ、例の自由黨一流の粗笨な議論で事實を誇張して妨害を始め、大隈案にして實行されるか、帝國は忽ち外人の足下に蹂躪さるゝが如くに説き廻り、全國之に雷同するもの少からず、反對の氣勢は斯くして潮の如くになつた。

壯士に要撃せらる

此時に際して中央の改進黨は隈侯の爲めに條約改正斷行を提唱し、孤軍頗る善く闘つた。新

瀧縣下に於ても、侯と同主義者たる自分等一派は之れに賛成の立場になり、曩には井上侯の改正案に反対して中止建議書まで起草した自分が率先斷行論者にならねばならぬ場合となつて、當時の立場は實に苦しいものであつた。

大隈案の眞價如何は今も話した通りであるが、何をいふにも誤まれる反對論が憂國慨世の假面の下に全國民を欺きつゝあるのだから、斷行論は人氣に投ぜぬこと夥だしく、随つて中止論者に當るには頗る困難を極めたもので、當時新發田の自由黨は、自分が井上案に反対しながら大隈案には突然賛成して説を變へたのは不都合だとあつて、自分の同地に在るに乘じ、密かに彼等は清水谷の清水亭に會合して自分を威嚇する協議を凝らし、結局肥田野才之丞といふ人の僞筆の手紙で自分を誘ひ出し、途中或劍客をして自分を要し、車から引摺り下して堀の中へ投げ込むといふやうな暴行を加へて、頗る愉快がつてゐたものである。

かういふ殺伐の風雲中にも同志の運動は決して怠らず、小崎懋君は斷行建白書を懷にして上京活動の任に當り、縣下には演說會を開いて大いに反對黨に當るのみか、新聞紙上に斷行論を連載して氣勢を添へた。

危地に入る

此時分の中央に於ける改進黨の惡戰苦闘は、當時大隈侯の近側を離れなかつた、矢野文雄君から時々刻々のことを詳らかに書いて自分に送つて居たもので、今も其書狀を一纏めにして危機一髮録と題し、自分の記念に残してある。

條約改正問題で斷行派として演說の爲めに、中央から越後へ來たのは加藤政之助君であつたが、自分は之に同行して新發田へ向うた。一寸話しは逆戻りをするが、先刻話した自分に暴行を加へた其加害者が、此時は捕へられた後の事で、暴漢は今井某といふ有名な劍客及び其門弟と分つたが、逮捕服罪の際の罪は、歐打よりも他の文書を僞造して自分を誘ひ出した私書僞造の方に重きを置かれた。處が加藤君と共に再び自分が同地に行くといふことが分つたので、師匠の入獄で憤慨してゐた劍客の門弟等は、今度こそ市嶋が來れば報復を加へると盛んに聲言してゐる最中、兼て此事は自分の耳にも入つてゐたので、行つては危険だと知りつゝも、さりとて行かぬも卑怯と心得、斷然同地に出向つたのである。

會場は北辰館で、警察官が周囲を取り巻き、時に予の身邊は十幾人かの警官が保護するといふ大袈裟な騒ぎになつたので、反對に彼等一派を憎伏せしめ、遂に無事に引揚ぐるを得た。併し此際の本縣政界は實に殺伐險惡を極めたもので、自分等は全く一身を抛つて反對派に當つたが、獨り自分等のみならず、此時代に於て條約改正斷行論者が如何に孤軍奮闘の苦を嘗めたか、それは殆んど想像の外で、あんな事は將來の政界にもう斷じてあるまいと思ふ。

忘れぬ痛恨

此間に同好會は益々發展向上し、山口權三郎君の力に據つて寺裏通りに同好會の會堂が出来た(今の盲啞學校の在る所)。之を山口君から會が借受けるといふ譯で、一日其開堂式を擧げる爲め會員全部を招集し、自由黨に對する一種の示威運動を試みた。然るに日もあらうに、其當日、不幸にも又偶然にも突如として我々を驚かしめ悲しましむべき一の電報が舞込んだ。これぞ即ち大隈外相が來嶋恒喜なる自由黨の壯士の爲めに爆烈彈で重傷を負うたといふ報道で、一同忽ち悄然としてゐる所へ、反對派の機關紙は之を號外に刷り出し、其號外を一括して包んだ

上に態々水引を懸け、三寶に載せ、自分等の擧げんとする開堂式の祝典の席へ人をして持たせてよこして、之をどうぞ市嶋さんへといふ皮肉な惡戯。之には一同殘念でならなかつたが今更如何ともする由なく、天を仰いで萬事休すと叫んだのみ。其時の痛恨は今以て忘れ得ざる所である。

選舉競争の嚆矢

大隈侯蹉跌の後の政海に就て言ふべきことが少からずあれども、地方としては黨争が益々激烈となり、改進黨、自由兩黨の分野が段々ハッキリとなつて來た、それだけ改進黨の勢力は増進したのである。此頃新潟縣會議員の選舉があつた。

一體此十數年來こそは議員選舉が非常に激烈にもなつて來たものゝ、縣下の選舉史に特筆して置きたいのは其競争を始めて縣民が經驗した時のことだ。それは自分が入社してから一年目(明治十七八年頃)あたりと覺えるが、新潟市選出の縣會議員に缺員を生じた。で、懇意の者が自分に遣つてはどうかといふ。自分も決心して出馬すると、敵黨からは辯護士長野昌秀君が現は

れた。新聞記者に辯護士といふ顔觸れは其時分としては非常に風變りの候補者だから、選挙の状態も自然従来とは違つて來たのであつた。

こゝで少し其時分の選挙に就て言つて置きたい。何分選挙法がシツカリとして居ない頃の事でもあり、殊に市の選挙などは亂雜極まるものであつて、今とは反對に頼んで歩いても議員にならうといふ人が無い。随つて一般に選挙を怠る事勿論で、何でも一町内に一人づゝ年番があつて、此年番が投票を集めて歩いて選挙の世話をしたものだ。處がどうせ不熱心の連中、萬事然るべくといふ調子で、今のやうな實印を要する規定もないから、誰れを選ぶといふ事まで年番の思の儘に任せて了ふ。

かういふ時代に自分と長野君と戦つたのであるが、候補者の毛色が著しく變つて居るので俄に選挙人の氣込みが違つて來て、追々と激烈な有様になつた。當時故荒川太二君が、自分の爲めに味方の名簿を作りなどして、熱心に奔走した結果、反對派も手配り怠り無く、遂に未だ會て經驗しない大競争を生じたのである。

選挙の結果はどうかといふと、自分の方が二三票不足であつた。そこで調べて見ると、敵側

の投票に大分違法なものがある。一例を挙げると、故鍵富卯一郎君の如きは、自分に投票する筋の人だが、其自署調印した札が全然違つた筆蹟である。さういふ點から故障を持ち出して、つまり選挙は全部無効となつて了つた。併し之が縣下に於ける選挙競争の嚆矢で、恐らくは又全國でも當時こんな激しいのは稀れであつたらうと思ふ。

北越學館と汗の力

これも丁度其頃の事。後に女子大學の校長になつた成瀬仁藏君が加藤勝彌君杯と共に學校を立てたいといふ話があつて、自分も發起人の一人になつた。——イヤ黨派の別などはないので、萩野左門君も矢張り發起人であつた。——處が幸ひに方々から寄附があつて、愈々北越學館と名けて開校といふ事になつた。其後位置を移したが、此頃は東仲通りの吉勘の近邊で開校式を挙げたので、其日自分は席上で戯れに斯う言つて威張つたものだ。曰く、此學校にはお互に随分骨を折つたが、中で最も努力したものは即ち吾輩であると。そこでこれには面白い理由があるから聞きたまへ。

自分は其以前、「高田新聞」に従事した事がある。其時警官を侮辱したといふので入監して、新潟本監へ護送されて来て見ると、運もわるく自分等に侮辱されたといふ警官が典獄になつて来て居るではないか。遺恨骨髓に徹する當の敵が罪人になつて来たのだから、イヤ非常な虐待で、態々外役に出したものだ。自分は共犯者の竹村良貞君と一緒に、外役中土運びを仰付かつたが、師範附近の砂山から北越學館の立つた場所へ運んで来るので、自分も竹村君も、とても耐つたもので無い。マゴ／＼すると調子が狂ふ。愚圖々々すれば殴られる。第一苦しいのは肩がミリ／＼いふほど痛む。即ち斯ういふ苦役をして土を運んで来た結果、地形が出来た場所であるから、取りも直さず此北越學館は、大部分自分の幾百點かの汗の力で出来たものとしてもよからう。そこで今日の開校式上、功を論ずれば吾輩第一ではないか、と言つて大に笑つた事もあつた。

地方遊説

尙ほ新潟縣の政争の一端を示すために地方遊説の記事を左に掲げる。

同好會の勃興と大同派との激争に就て自分の想起す所を擧げて見ると、自分の考へでは競争の最も激甚であつた處は中越殊に刈羽地方であつたやうに思ふ。自分は同志と屢々此の地方に出張して、敵黨と戦つた事があるが、其の時分宿屋は勿論車夫に至つても各々黨を立て、此の宿は同好派、此の宿は大同派と云ふやうに、はつきり區別があり、車夫の如きは、同好、大同の二字を提灯に染め抜いて區別を立て、居ると云ふやうな状態であつた。各村落などでも、甲の村は全村同好派で、乙の村は全村大同派と云ふやうな譯で、屋並に一派の會員があつたものだ。斯様な譯で随分滑稽な事も時々起つた。或時夜中數村を経て吾々一行が或る會に赴いた事がある。例の同好派の銘を打つた提灯を付けて横行して居たのだが、車夫が或村に入ると、申し合せた様に提灯を吹消した。そこで怪んで何故だと云つて尋ねると、茲は敵村で劍呑であるからと云ふので、吾々も噴出した事があるが、然し當時の狀況は全く車夫が危む程の狀況であつたのである。

刈羽邊の政治思想の普及したのに就ては、確かに其土地の先輩が取つた手段が其の原因を成して居るやうに思ふ。假令何處でも、演説會を開けば續いて懇親會を催すといふ段取になつて

居るが、多くは懇親會場を別に設け、會費も相當に取る仕組であるから、何時も演説會は盛んでも懇親會になると五十人か多くて百人に満たん。處が此の地方に於ては中々うまい仕組があつて、演説會が濟むと直ぐ其の席で咄嗟に懇親會を開く。そこで會費が僅か五錢か十錢であるから、演説を聞きに來たものは直ちに懇親會に出席するといふ事になつて、なか／＼大規模の懇親會が各處に開かれた。さて五錢十錢の會費を取つてどうして懇親會が開けるかと云ふに、無論發起人たる土地の富豪が酒代位は出すのである。肴も勿論丁寧な譯のものでなく、百姓相應の物菜を供し、杯盤も無論間に合ふ筈がないから、竹の皮を小皿に代用して其處へ酒肴を盛るといふやうな、恰も陣中の酒宴と云ふやうな姿であつた。何百人寄つても咄嗟に辯じ得るので、之が非常に會衆に愉快的感情を與へて何時も成功したが、席上では、平生頭の上らない大地主の上席に坐つて、大地主からお世辭を言はれ、大地主からお酌をやつて貰ひ、酒は飲み放題、夫で會費が五錢乃至十錢であるから彼等が愉快に感ずるのも無理はない。斯様な席を利用して政治的思想を鼓吹した譯だから、此の方面に於て迅速に政治思想の普及したのも無理はない。前に言つた一村屋並で一黨一派に屬して居ると云ふが如き現象は、全く是等の策略から胚

胎したものである。

此邊の政治思想の普及に就て面白い實例がある。或時自分は鹽入太輔氏（此人は東京の辯護士で、其の當時應援の爲め新潟へ來て居つた人である）と共に、椎谷より二里許り山手へ入つた、或る寒村に演説會を開いた事がある。會場は山寺で、突然の會でもなかつたが色々行き違つて大分時刻が後れた爲めに、自分の演説をする頃は日が暮れて燈火の用意が無い。何分寒村で會場が村から離れて居るやうな譯から、急に燈火の設備が附かない。そこで無燈で闇中に一場の演説をやつた事があるが、自分の演説の了る前に鹽入氏は既に歸つて了つて、車もきかない不案内の道を自分獨り歸るわけに行かぬので、有志者が駄馬の心配をしてくれて、自分の靴を馬夫が背負ひ、自分は馬に跨つて坂路を行く途すがら、馬夫から色々話が出た。第一の話は、今日の御演説を承つたが全體どうすれば演説はうまく出来るものであるかと問ひ、それから市町村制の話などが出て、色々な質問が起り、遂には其の時分未だ發布にならない帝國憲法の話も出で、上下兩院制の得失問題なども出るので、自分は馬夫として不似合な話が起るのみならず、其の言ふ所を聞けば相當に考へもあるやうに見える處から、お前は全體何を村でして

居ると聞いて見たところ、同好會に屬する村會議員であると云ふ事を確め得て頗る妙に感じ、自分は其より態度を改め、君も同好會員なれば吾も實は同じ會員である、そのみならず自分は實は會の發起者であるから會の趣意を一應お話をしようといふので、馬上で二十分許り演説を試み、馬夫は謹聽しながら馬を牽いて歩いて、間も無く椎谷驛に達した。始めは唯だ普通の馬夫と思ひ、後に村會議員なる事を知り、遂に同じ味方に屬する會員である事を知つたので、自分の馬夫に對する態度竝に言語は追々に改まり、椎谷驛で馬より下り、互に別るゝ際は、馬夫は菅笠を脱ぎ、吾は帽子を脱いで、對等に挨拶をして別れた事があるが、此時の事が深く自分の腦裡に印して、今でも忘れられない趣がある。

春城代醉錄終

跋

市島謙吉先生を繞りて最も親近なる緣故者の一團が春城會を形成してゐる。毎年二月十七日春城先生の誕辰を期して相會し盃を擧げて先生の健康を祝し、感謝と歡語の團樂をなすのである。會するものは老いたるより若きに至るまで、官吏あり、文人あり、實業家あり、政治家あり、醫師あり、商人あり、銀行家あり、新聞記者あり、多種複雑なること恰も主翁春城先生の御性格を反影したるが如くである。今年春の例會に一會員より次の提言があつた。

我が市島先生の隨筆界に於ける名聲は當代の大家として既に天下に定評あり。
さきこそ著書として公にせられたものは左の數種である。

大正十年二月 大隈侯一言一行

大正十年十二月 蟹の泡

大正十一年四月 藝苑一夕話

跋

大正十四年三月 隨筆頼山陽

昭和元年十二月 春城隨筆

昭和二年八月 隨筆春城六種

昭和三年八月 春城筆語

昭和四年十二月 春城漫筆

昭和六年十月 春城漫談

近年は一年一著書の例が休みの態となつてゐる。從來春城會は詩酒角逐するのみで事業らしい事業に着手した事がないから、今年は先生に乞うて春城會の事業として先生の隨筆を出版しては奈何と。

即ち議は一決して、今や先生の玉稿を與へられ、また中央公論社の快諾を得てこれを遍く廣く世に問ふ事が出來た。會員一同の衷心より欣喜にたへないところである。

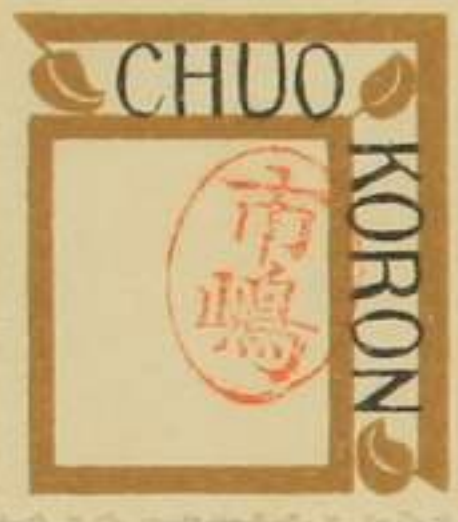
昭和八年十一月

春城會

二

14628

昭和八年十一月廿八日印刷
昭和八年十二月三日發行



春城代醉錄

定價一圓八十錢

著者 市嶋謙吉

東京市牛込區東五軒町卅五番地

發行者 木田開

東京市麹町區丸ノ内二丁目二ノ一

印刷者 堀修造

東京市牛込區櫻町七番地

發行所

東京市麹町區丸ノ内二丁目
内ノ内ビルディング五九二區

中央公論社

振替口座東京三四番
電話丸ノ内五三五―五三七番

日清印刷株式會社

書の遠永る誇に界世・品神の苑藝

隨筆	梯の	蒂坪内逍遙著	平福百穂裝幀 菊判三二〇頁 定價二圓半錢 送料十四錢
隨筆	荷風隨筆	永井荷風著	著者自裝 四六判四九〇頁 定價一圓十錢 送料十四錢
隨筆	青春物語	谷崎潤一郎著	木下李太郎裝幀 四六判二四〇頁 定價一圓七錢 送料十四錢
評論	文壇人物評論	正宗白鳥著	出版部裝幀 四六判四八〇頁 定價一圓半錢 送料十四錢
小說	寢園	横光利一著	佐野繁次郎裝幀 四六判四一八頁 定價一圓十錢 送料十四錢
小說	つゆのあとさき	永井荷風著	著者自裝 四六判四五六頁 定價一圓半錢 送料十四錢
小說	盲目物語	谷崎潤一郎著	著者自裝 四六倍判和綴 定價一圓七錢 送料十四錢
小說	女の一生	山本有三著	中村研一裝幀 四六判七八二頁 定價一圓十錢 送料十四錢

部版出社論公央中

寶至の本讀民國本日

現代人物評論	馬場恒吾著	四六判五〇〇頁 定價一・五〇〇・二四
政界人物風景	馬場恒吾著	四六判五〇〇頁 定價一・五〇〇・二四
議會政治論	馬場恒吾著	四六判五〇〇頁 定價一・五〇〇・二四
唯物辨證法讀本	大森義太郎著	四六判三五〇頁 定價一・二〇〇・二二
金の經濟學	猪俣津南雄著	四六判一〇〇〇頁 定價一・五〇〇・二四
レコード音樂讀本	野村光一著	近刊
日本合戰譚	菊池寛著	鈴木朱雀裝幀 四六判五二二頁 定價一・五〇〇・二四
武藏野から大東京へ	白石實二著	池田永一治裝幀 四六判四二〇頁 定價一・四〇〇・二四

部版出社論公央中

重版たまたまの藝術的大衆小説

小説	沈丁	花久米 正雄著	津田青楓裝幀	四六判 五〇〇頁	定價一圓五十錢
モテル	結婚街道	菊池 寛著	出版部裝幀	四六判 三八二頁	定價一圓二十錢
モテル	男裝の麗人	村松 梢風著	岩田專太郎裝幀	四六判 三五七頁	定價一圓三十錢
モテル	眞理の春	細田 民樹著	玉村善之助裝幀	四六判 四〇〇頁	定價一圓四十錢
小説	この太陽	牧逸 馬著	中川一政裝幀	四六判 七〇〇頁	定價一圓七十錢
小説	七つの海	牧逸 馬著	和田三造裝幀	四六判 八七〇頁	定價一圓七十錢
小説	暴風	帶下村 千秋著	山六郎裝幀	四六判 五八〇頁	定價一圓五十錢
小説	限りなき	鋪道北村 小松著	岩田專太郎裝幀	四六判 六三〇頁	定價一圓六十錢
小説	光・罪と共に	直木三十五著	裕伊之助裝幀	四六判 六五〇頁	定價一圓五十錢
小説	日本の戦慄	直木三十五著	武藤夜舟裝幀	四六判 四五〇頁	定價一圓五十錢
小説	楠木正成	直木三十五著	鈴木朱雀挿畫	岩田專太郎裝幀	四六判 五〇〇頁
小説	濡れ闇の男	長谷川 伸著	岩田專太郎裝幀	四六判 五〇〇頁	定價一圓二十錢

中央公論社出版部

新聞生活二十年

新聞生活二十年	伊藤 正徳著	四六判 五百五十頁	定價一圓五〇〇錢
科學隨想	西村 眞琴著	四六判 三百六十頁	定價一圓四〇〇錢
廢帝前後	黒田 禮二著	四六判 六百五十頁	定價一圓八〇〇錢
ソヴェート・ロシア風土記	前田河廣一郎譯	四六判 三百五十頁	定價一圓〇〇〇錢
僕の旅行	高瀬 毅譯	四六判 二〇〇頁	定價〇圓八〇〇錢
娼妓解放哀話	沖野岩三郎著	四六判 四〇〇頁	定價一圓二〇〇錢
踊る地平線	谷 讓次著	四六判 七〇〇頁	定價二圓五〇〇錢

中央公論社出版部

新修・完訳 決定期版

スクウェアピヤ全集

坪内逍遙博士譯・文化日本の至寶!

この新修シエークスピヤ全集の版權は早大出版部の秘寶でありしものを、満五ヶ年の期間付きを以てわれらの委囑されたものにして、右期間を経過せば、小社は本全集の残本一部たりとも残さず焼却すべき約の下にある。而も豫約メ切後は二冊一圓四十錢、全額一時拂二十五圓の定價に復すべく、分賣亦不可能である。(豫約期間中に限り特價一冊五十錢)

白熱の裡に豫約配本中!! 極讚全國を蓋ふ!

(第一回配本) ハムレット、以尺報尺! 品切れ
 (第二回配本) ロミオとジュリエット、十二夜 大増刷
 (第三回配本) エニスの商人、タイタス・アンドロニカス

是は目下(昭和八年十一月廿五日)大量印刷中! 以下續々と楽しみは一年有半つづく。げに讀者にとつては月に二度見る大芝居!

この作、この譯、この廉價、そして、この清麗な豪華版!!

略規

全四十巻 會員(豫約申込者)にのみ頒ちます。申込金一圓(これは最終の會費に充當します)を豫約第一回の會費に添へて直接本社又は最寄りの書店へお申込願ひます。一時拂は申込金不要(但し一旦お拂はしたしませんが)に會費は御返し配本期間(昭和八年十月より昭和九年五月まで)二十ヶ月間毎月一回二冊配本。菊判半截形。九體裁組方等 菊判本。九ボイイント新活字、總ルビ(假名)つき、輪廓つき。特製各巻緒言、解説つき。特組コバルト色総クローズ装。天金仕立。口繪に原色版或は寫眞版各一枚挿入。挿入畫平均二宛枚挿入。

送本料

毎月拂金一圓(及び左記送本料)

市内 〇・〇六
 地方 〇・一四
 臺灣、滿洲、朝鮮、東州 〇・二四
 外國 〇・三〇

一時拂 一・二〇
 二・八〇
 四・八〇
 六・〇〇

中央公論社出版部

學界・論壇の最高峰

農業經濟學

カウツキ 逸郎 著

菊判 七三〇頁
 定價一・八〇〇・三三

支那經濟論

嚴靈峰、任曙、亦如等著
 田中忠夫 譯

菊判 六三〇頁
 定價一・五〇〇・三三

藝術論

藏原惟人 著

四六判 五〇〇頁
 定價一・五〇〇・二四

日本藝術運動史上不滅の金字塔!! 世界に於ける輝かしき左翼理論家の一人、藏原が、日本のプロレタリア文學、藝術運動の指導者として終始巨大なる星であつたことは周知の事實だ。本書は彼の國際的頭腦が生み出した最優秀な理論、駁論、批判、研究、隨筆の全部を網羅し得た名著。

解體過程に於ける支那の經濟と社會(上)ウイットフォーゲル著(菊判各五〇〇頁)
 世界學界に於ける最も野心的な著作であり、頭腦日本に於ける最も野心的な翻譯である! 蓋し我が學界を驚倒せしむべき太陽篇!

中央公論社出版部

目錄

一	卷一	...
二	卷二	...
三	卷三	...
四	卷四	...
五	卷五	...
六	卷六	...
七	卷七	...
八	卷八	...
九	卷九	...
十	卷十	...

